栃木県埋蔵文化財調査報告書　第23集

薬師寺南遺跡

(本文編)

昭和54年３月

栃木県教育委員会

薬師寺南遺跡

（本文編）

序

昭和44年度建設省より一般国道４号線バイパスの計画が提示されるとともに、当委員会では当該路線に係る埋蔵文化財の保護について建設省関東地方建設局、宇都宮国道工事事務所を通じて再三協議を実施しているところであります。

協議の結果に基き、河内郡南河内町地内、国指定史跡、下野薬師寺に南隣する「薬師寺南遺跡」を昭和49年度より三次にわたり発掘調査を実施し、古墳時代・奈良・平安時代の一端を窺い知ることができました。本調査は、新４号国道関連では、最初の調査事例であり再三の調査延長に快諾された建設省に謝意を表するとともに、今後の調査への大きな教訓ともなりました。

今般、整理作業が全て完了し、報告書として公刊する運びとなりました。不十分なものではありますが、関係各方面におかれまして御活用いただければ望外の喜びであります。

最後に、調査に際して御協力いただいた宇都宮国道工事事務所、南河内町教育委員会、地元有志に深甚なる謝意を表するとともに、調査、報告書作成に御指導、御援助いただいた諸先生に厚く御礼申しあげます。

昭和54年３月

栃木県教育委員会

教育長　渡辺幹雄

例　言

1．本書は、栃木県教育委員会が、新４号国道建設に伴い建設省関東地方建設局より委託を受け、昭和48年度より三次に亘り発掘調査を実施した河内郡南河内町所在の薬師寺南遺跡の発掘調査報告書（本文編）である。

なお当初二分冊の予定であったが、種々の事情により、本文編、図版編、挿図編(昭和52年度刊行）の三分冊となった。

2．調査は、第１次調査は、橋本澄朗、川原由典、山ノ井清人（現作新学院教諭)、第２次、第３次調査は橋本、川原が担当し、宇都宮大学、国学院大学、立正大学の学生諸氏に御援助いただいた。また調査に際しては、建設省宇都宮国道工事事務所、南河内町教育委員会に御協力いただいた。

3．本書の執筆者は文末記載のとおりであるが、第Ⅰ章、検出された遺構と遺物については、遺構を川原が、遺物を橋本が分担して執筆した。また、土器一覧表は、橋本と梁木誠が協議して作成したものである。

4．本書の編集は、川原、梁木の協力を受けて橋本が担当した。

5．発掘調査、報告書作成に際しては、多くの人々の御指導、御協力を受けた。御芳名を記し、謝意を表したい。

国士館大学教授大川清、宇都宮大学助教授久保哲三、作新学院教諭塙静夫、宇都宮農業高等学校教諭常川秀夫、作新学院教諭山ノ井清人、氏家高等学校教諭岩上照朗、静和小教諭石橋知明、小山市史編さん室福田定信、田熊信之、管千代子、橋本順子、貝塚依子、藤田悦男、文化課文化財調査係、海老原郁雄、大金宣亮、八巻一夫、田熊清彦、中山晋（敬称略）

薬師寺南遺跡発掘調査報告書（本文編）目次

第Ⅰ章　調査の概要

1．発掘調査にいたる経過…… 1

2．調査の方法…… 3

3．発掘日誌抄…… 3

4．薬師寺南遺跡の環境…… 7

(1) 地理的環境

(2) 歴史的環境

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物

住居跡と出土遺物…… 10

特殊遺構と出土遺物…… 98

井戸跡と出土遺物…… 104

円形遺構と出土遺物…… 106

掘立柱建物跡…… 109

墓壙と出土遺物…… 110

方形周溝墓と出土遺物…… 112

縄文、弥生土器について…… 113

石器について…… 113

土器一覧表…… 114

第Ⅲ章　問題点の整理と考察

遺構

1．住居跡について…… 167

2．カマドについて…… 169

3．特殊遺構について…… 170

4．円形遺構について…… 172

遺物

1．古墳時代前期の土器について…… 173

2．歴史時代土器の編集…… 176

3．墨書土器について…… 219

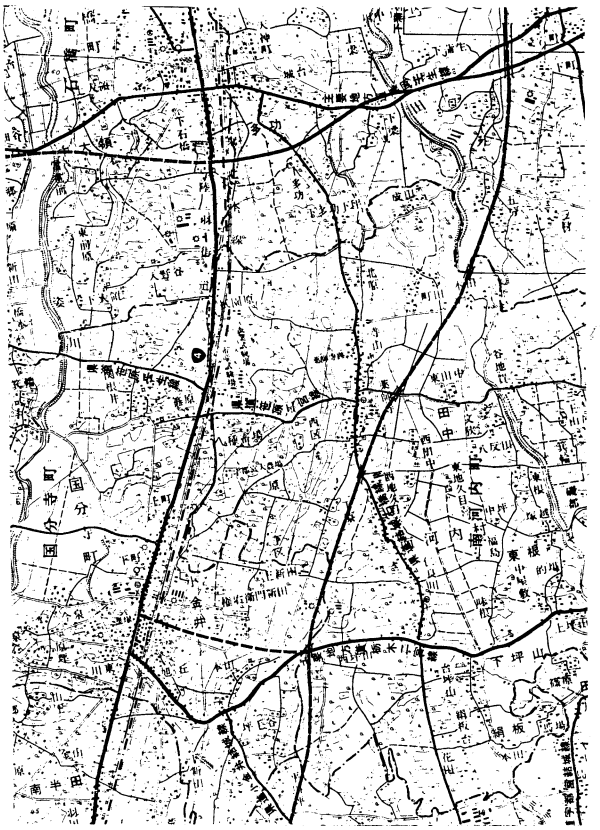
第Ⅳ章　結語　―薬師寺南遺跡について―…… 225

第１章　調査の概要

１．発掘調査に至る経過

昭和44年７月７日、建設省宇都宮工事事務所より一般国道４号線のバイパスとして「新４号国道」の計画が提示され、当該路線上の埋蔵文化財の有無について、更にその取り扱いについて照会があった。

当教育委員会では、建設省宇都宮工事事務所と連絡をとり、昭和44年７月から８月にかけて道路建設予定地の分布調査を実施した。調査の結果、宇都宮市さるやま町所在さるやま遺跡、久部台古墳群、南河内町所在薬師寺南遺跡、小山市所在遺跡、　中久喜遺跡、長谷遺跡、宿尻遺跡、西浦遺跡、東野田遺跡、鷹の巣前遺跡、本郷前遺跡、向野原遺跡、八幡根東遺跡、横倉・宮の内遺跡、谷中島遺跡、六軒遺跡の都合15遺跡の所在が確認された。



また新４号国道は宇都宮以北からは一般国道 119号線のバイパス「宇都宮・日光道路」に接続し、直接に東北自動車道への乗り入れが計画されているが、宇都宮以北については栃木県土木部が直接工事を施行することになっており、当該地にも多数の遺跡の所在が確認されている。栃木県土木部とについては別個に協議中である。

建設省関係の15遺跡の取り扱いに関しては、建設省と協議の結果、小山市所在遺跡と小山市以北とに分けて調査を実施することとした。これは、南河内町―宇都宮間の工事を建設省としては先行させたいとの要望もあ

り、また建設予定地の買収も当区間については交渉中であり、早急に交渉の目的が達成でき買収がなされるとの旨が示された。

このため当委員会では昭和48年度に薬師寺南遺跡の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は昭和49年１月に20日間の予定のもとに着手したが、検出される遺構が多数あり、また遺跡の広がりが当初の想定より大きくなることが考えられた。調査終了後ただちに未調査部分の遺跡の取り扱いについて再度協議を重ねた結果、49年度に未調査部分の発掘をすることとなった。これにより、48年度調査を第１次、49年度調査を第２次と呼称することにした。

第２次調査は昭和49年10月21日から12月25日までの期間約50日をもって実施した。しかし第第２次調査をもってしても遺構数の多さ、表土の深さ等があり調査が終了せず、再度未調査区について協議を重ねた。その結果第３次調査として昭和50年に未調査区の発掘を実施することになった。調査は昭和50年７月15日から10月25日までの期間約60日をもって実施した。第３次調査をもって薬師寺南遺跡の発掘調査を完了することができた。

当初計画よりも大幅に作業が遅れ、計画変更がたび重さなってしまい、このため遺物整理、報告書作成も遅れる結果となってしまった。

以下第１次から第３次の調査体制を示すと、下記のとおりである。

第１次調査体制

事務局

吉羽和郎文化課長（現地方労働委員会事務局長）

冨祐次文化課長補佐（現博物館建設準備班学芸嘱託員）

渡辺享文化課主事（現教育委員会総務課主査）

発掘調査担当

文化課　大和久震平（現県立高根沢商業高校教諭）

橋本澄朗

川原由典

山ノ井清人（現作新学院教諭）

第２次調査体制

事務局

鹿目文雄文化課長（現栃木県社会福祉協議会事務局長）

冨祐次文化課長補佐（現博物館建設準備班学芸嘱託員）

増山寛文化財調査係長（現歯科技術専門学院院長補佐）

渡辺享文化課主事（現教育委員会総務課主査）

発掘調査担当

文化課　橋本澄朗

川原由典

第３次調査体制

事務局

鹿目文雄文化課長（現栃木県社会福祉協議会事務局長）

冨祐次文化課長補佐（現博物館建設準備班学芸嘱託員）

池田進一文化課副主幹兼文化財調査係長

渡辺享文化課主事（現教育委員会総務課主査）

発掘調査担当

文化課　橋本澄朗

川原由典

２．調査の方法

当初は薬師寺南遺跡そのものは、少範囲の遺物散布が認められるのみであり、第３次調査まで考えにいれておらず、さらに表土も30～40cmと浅いことが確認されていたために、グリットとトレンチを併用する方式を採用したが、遺跡の広範囲になると同時に表土が１ｍから 1.5ｍと厚くなり、排土位置も遠隔地となったためブルドーザーによる表土の除去もおこなった。

主に第１次調査はグリット調査を、第２次調査はトレンチ調査とブルドーザーによる遺構確認面までの表土層の除去、第３次調査は当初よりブルドーザーによる排土を遺構確認面まで実施した。当初の計画であったグリット・トレンチ調査を第３次調査まで継続して実施したい希望を持っていたが、たび重さなる調査の延長があり、工事進行にも重大な支障をきたす結果となってしまった。

グリット・トレンチによる調査方法を断念し、重機の投入をせざるを得なかったことは担当者として自戒の念に堪えない。また遺跡範囲の認定に対して甘さがあったことを素直に改正点として銘記するとともに今後の調査にこの苦い経験を生したいと念じている。（橋本、川原）

３．発掘調査日誌抄

昭和49年（第１次調査）

1月8日　AM9：00現地集合。作業員に諸注意ののちに、調査予定地内の雑草の刈払い。同時にグリット設定。

1月9日～10日　雑草刈払いとグリットの設定。

1月10日～14日　設定したグリットを市松模様に粗掘りを行なう。遺構が検出されないグリットは排土場所としてゆく。

1月16日～20日　毎日寒さがきびしく、表土の凍結があり、作業が困難である。10数ヶ所の落ち込みを確認する。確認した順序に遺構番号をつける。内部検出作業も同時に進行する。

1月21日～24日　完掘の終了した遺構から写真撮影、1/20による実測を行なう。遺跡は当初考えていたよりもかなり広範囲になると考えられた。7号、8号の遺構は溝状のもので連続することが判明した。

1月25日～28日　溝状の遺構を集中的に精査する。方形周溝墓となる。県内では調査例が少なく、調査担当者一同おどろく。完掘終了後遺構の写真撮影、1/20による実測を行なう。全体図作成。現場の作業は28日をもって終了する。

薬師寺南遺跡は当初の想定よりも、かなり大きなものとなることが考えられ、実際に第1次調査では遺構を確認したのみで、精査をおこなえないものもあり、第2次調査の必要性を考え、今後の建設省との交渉について考える。第1次調査の遺構確認数・住居跡40軒（完掘は13軒）、方形周溝墓1基である。

昭和49年（第2次調査）

10月21日　AM8：30現地集合。作業員は主に第1次調査に参加していただいた方を中心としているために、かんたんな諸注意ののちに雑草の伐採から作業を開始。

10月22日～25日　雑草の伐採継続。1月に確認した遺構の再確認と、トレンチの設定を行なう。遺構番号を第1次調査からの通し番号とする。

10月26日～30日　15号遺構から順に調査を開始し26号遺構まで完掘する。比較的小型の遺構のため調査は順調に進む。併行して表土の深い地区に関してのみ、遺構確認面までブルドーザーによる排土を行なう。

10月31日～11月4日　完掘の終了した遺構の写真撮影、1/20による平面図作製と1/10によるカマドの切開を行なう。27号から33号遺構の内部精査を行なう。28号と29号は重複している。33号からは須恵器の甑が完形で出土。

11月5日～8日　30～33号遺構の精査作業継続。新しく34号～37号遺構の精査に入る。写真撮影、1/20平面実測、カマドの断ち割り。

11月９日～13日　34号～37号遺構の完掘、清掃ののち写真撮影。38～39号遺構に入り完掘する。34号～39号遺構は大型の平面プランであり、精査に時間を費す。38～39号写真撮影。

11月14日～18日　県道石橋一結城線の西側地区に移動し、トレンチにより遺構確認作業と全体プラン検出作業を行なう。34号～39号遺構の1/20による平面実測。カマド断ち割り、1/20による実測。

11月19日～22日　全体プランを検出した40号～50号遺構の精査作業に入る。42号は住居跡ではなく、井戸跡であることが判明。40～45号はプランが小型のため精査終了と同時に写真撮影を行なう。同時に1/20による平面実測。

11月23日～25日　46号～50号の精査終了。写真撮影。47号遺構のカマドには下野薬師寺跡に使用されている鐙瓦が芯として利用されていた。46～50号の遺構はそれぞれが連綿と重複しており、新旧関係把握に全力を注ぐ。

11月26日～30日　51号～55号遺構の精査終了、写真撮影。今まで完掘した遺構を1/20により平面実測。カマド断ち割り。

12月２日～４日　56号～61号遺構の精査を行なう。56号～59号は小溝により連結する特殊遺構であることが判明し、番号からＡ～Ｅ号遺構とアルファベットとする。この特殊遺構については現在までその報告例を見聞していないものである。

12月５日～10日　60～61号遺構の精査、完掘し写真撮影を行なう。トレンチで落ち込みを確認した遺構62号～67号の全体プランの検出を行なう。

12日11日～15日　62号～67号遺構の精査作業。写真撮影の終了した遺構の平面実測。薬師寺南遺跡のほぼ南については限界を認めるも、北についてはほとんど手つかずの部分がかなりあり、第３次調査も考えなければならなくなってきた。

12月16日～20日　62号～67号の精査作業を終了し、写真撮影を行なう。現場にて作業員とともの調査は20日をもって終了したが、担当者はまだ実測図作製のため数日間現場に通うことになる。

12月21日～25日　1/20による平面実測、カマド断ち割り、補足調査、全体図作製をおこなう。３ヶ月にもなる発掘調査を終了すると１週間後は昭和50年１月１日の元旦を向えるまでに暮れもおしつまっていた。

第２次調査をもってしても薬師寺南遺跡はまだ手つかずの未調査区をかかえてしまった。南の限界については明確になったが、まだ北に延びることが確実であり、第３次調査についての交渉もしなければならなくなった。

昭和50年（第３次調査）

７月15日～20日　第１次調査からかなりの延期をおこなっており、建設省では早期に調査を終了してほしい旨の要望もあり、今回からは、未調査の表土はブルドーザーにより排土を行なうこととした。ブルドーザーによる排土。

７月21日～28日　ブルドーザーにより表土を除去した部分より、遺構の検出、確認作業を行なう。真夏の太陽が毎日ジリジリと照りつけて暑い日が続く。

７月29日～８月２日　69号～75号遺構の精査を行ない完掘する。写真撮影済のものから1/20による平面実測、カマド断ち割りを行なう。

８月３日～７日　76号～80号遺構の精査。いずれも住居跡であり、特に目新しいものの遺構は検出されていない。

８月８日～12日　81号～88号遺構の精査。76号～80号遺構の写真撮影。

８月13日～17日　現在までに精査の終了した各遺構の平面実測、カマド断ち割りを集中的におこなう。全体図作成のための杭打ち作業。各遺構の補足調査と遺物取りあげ。

８月18日～24日　89号～ 100号遺構の精査。96号は特殊な円形遺構であることが判明する。２～３の遺構は完掘し、写真撮影を行なう。

８月25日～30日　新しく 101号から 105号遺構に入る。 102号は墓壙であることが判明した。遺構内埋土より多数の小玉が検出された。写真撮影の済んだものより、実測を継続して実施する。今夏は下野名物の夕立も少なく、猛烈な暑さであった。

９月１日～５日　連日の暑さで遺構確認面のいたみがはげしいため、スプリンクラーによる散水を行なう。 106号～ 110号遺構の精査。写真撮影。平面図作成。

９月６日～10日　111～ 115号遺構の精査。 106～ 110号までの精査を継続し、発掘したものから順に写真撮影。 106号遺構と切り合う特殊な土壙が検出された。

９月11日～15日　116号～ 120号遺構に新しく入る。この期間までに前述した遺構の精査を終了し、重点的に写真撮影を行なう。同時に1/20による遺構の平面図作成。カマド断ち割り。

９月16～20日　この期間は毎日の晴天のため、遺構のくずれが著しいために、1/20による平面図作成とカマドの断ち割りを行なう。カマドの残存は非常にわるい。

９月21日～25日　平面図作成とカマドの断ち割りを引き続き実施する。新しく 111号～ 125号に入る。 119号～ 122号は複雑な重複を呈していた。

９月26日～30日　126号から 130号の遺構に入る。当該遺構は２基の井戸と、３軒の住居跡の切り合いであることが判明する。井戸の調査は、湧水に悩まされ、側壁の崩壊もあり、危険防止のため途中で中止する。毎日この時節になっても残暑がきびしい。

10月１日～５日　126号～ 130号遺構の精査を継続し、完掘順に写真撮影を行なう。

10月６日～10日　131号～ 140号遺構に入る。 135号～ 139号遺構にかけて複雑な切り合いを見せている。慎重に精査を行なう。あまり出土遺物は多くない。

10月11日～15日　140号～ 151号遺構に新しく入る。 145号は右墳となった。当初は考えなかった遺構でありまったく墳丘の認められなかったものである。

10月16日～25日　遺構精査の済んでいなかったものを重点的に行なう。また写真撮影、平面図作成、全体図作成、カマドの断ち割りを行なう。

10月25日に薬師寺南遺跡の３次にわたる調査がひとまず終了した。延長、延長の連続であったが、文化財保護の意を了解していただいた建設省関係の方には心より謝意をあらためて述べたい。又、当教育委員会の見通しのあまさも今後の反省点としてゆきたい。

後日の空中写真撮影を残して現場を引きあげる。長い期間にわたる調査であった。

（川原由典）

４．薬師寺南遺跡の環境

(1) 地理的環境

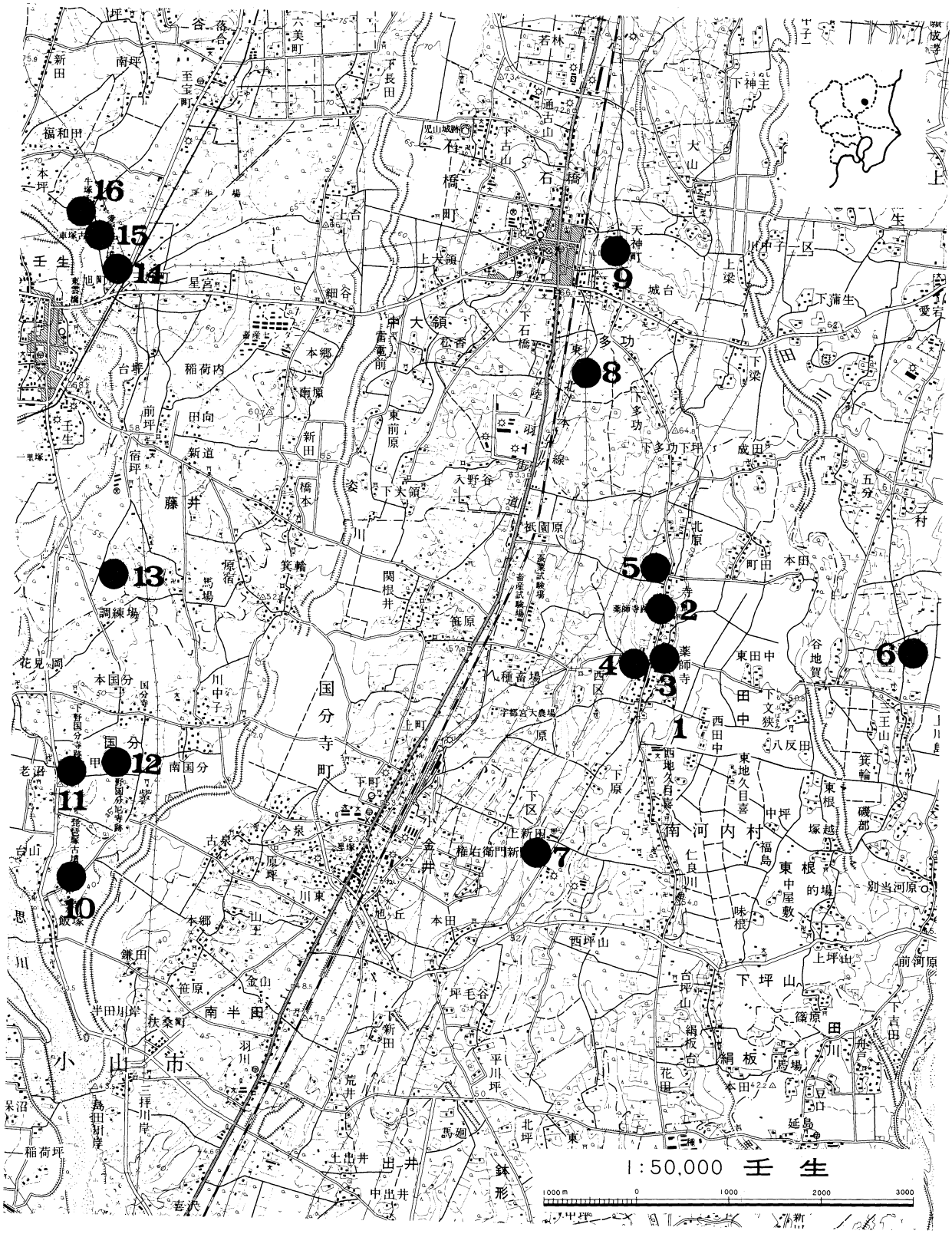
薬師寺南遺跡の位置は、行政区では河内郡南河内町薬師寺に所在する。国鉄東北線石橋駅の南東４kmにあり、遺跡からは白亜の殿堂である自治医科大学が西方約２kmにその姿を望見できる。また遺跡中央を県道石橋一結城線が南北に縦断している。

遺跡は、栃木県を北から南に流れる鬼怒川と、支流である田川が東に、姿川が西に流れ、この流れによって形成された段丘崖に狭さまれ、南北に延びる洪積台地上に位置する。この洪積台地には浅い浸蝕谷が無数に入り込み、比高２～４ｍのアップダウンをくり返えしている。この洪積台地には多数の遺跡が存在し、県下でも遺跡密集度の非常に高い地域である。薬師寺南遺跡はこの洪積台地の東斜面に位置する。間に西および北西へ浸蝕台が浅く入り込む。標高は60ｍを測り、水田面からの比高は４～５ｍである。

今回の調査は道路建設予定地という線の調査であり遺跡すべての調査ではない。このため遺跡はさらに北から西に延びる可能性は十分に考えられる。

(2) 歴史的環境

古代においては薬師寺南遺跡一帯は下野国における文化の中心地として盛行したところである。特に仏教文化の華が咲きほこり、北に約 600ｍの至近距離に、日本三戒壇のひとつである下野薬師寺が建立されている。さらに北方約４kmには多功廃寺跡、約７kmには上神主廃寺跡、西南には約６kmで下野国分僧寺跡、下野国分尼寺跡、約 7.5kmには下野の政治の中心であった


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
1:50,000 壬生
1000m 0 1000 2000 3000

下野国府跡も知られている。

以下主な遺跡について概略してみると、

1．薬師寺南遺跡

2．下野薬師寺跡（昭和41年から６次にわたり栃木県教育委員会により発掘調査が実施され、南大門跡、中門跡、金堂跡、塔跡、回廊跡、講堂跡や多数の建物跡が検出されている。）

3．道鏡塚（下野薬師寺別院の竜興寺境内にあり、道鏡の墳墓と考えられている。）

4．二月堂観音古墳（方墳と考えられ、１辺の長さが20m、高さが４mである。）

5．御鷲山古墳（下野薬師寺の北に隣接する前方後円墳。全長約67m、後円部直径約30m、同高さ 4.5m、前方部幅約23m、同高さ４m で、内部主体は前方部にあり南面して横穴式石室が作られている。）

6．三王山古墳（基壇を有する前方後円墳で、ほぼ南西に面して築造されており、全長52.3m、後円部径25m、後円部、前方部とも高さ４mを測る。また附近には帆立貝式古墳２基、小円墳２基が認められる。これらは三王山古墳の陪塚と考えられる。）

7．芝工業団地内遺跡（昭和51年の３月から４月にかけて県教委が調査を実施した。弥生時代再葬墓５基前後、奈良・平安時代の住居跡15軒前後が検出されている。）

8．多功南原遺跡（昭和49年に調査が実施され、奈良・平安時代にかけて約 300軒の住居跡が検出されている。）

9．多功廃寺跡（大部分が天神社の境内となっている。古くから古瓦が出土することが知られており、軒平瓦には結城廃寺・薬師寺の系統を引く均整唐草文が知られている。）

10. 琵琶塚古墳（西北に面して築造された前方後円墳である。墳丘の全長 124m、後円部径75m、同高さ11.8m、前方部幅61.8m、同高さ 9.4m を測る。中期型の古墳である。）

11. 下野国分僧寺跡（東大寺式伽藍配置をとる。推定伽藍地は東西 142m、南北82mと考えられる。南大門跡、四至南限の土塁跡、塔跡、金堂跡、講堂跡、鐘楼跡が地脹れとなっている。未調査である。）

12. 下野国分尼寺跡（昭和39年から４次にわたり、栃木県教育委員会によって調査が実施された。伽藍配置は東大寺式をとるが、塔はない。現在史跡公園となっている。）

13. 吾妻岩屋古墳（南面する前方後円墳で、全長90m、後円部の直径、前方部幅が等しく45m、高さも８mと等しい。）

14. 愛宕古墳（国指定の前方後円墳。二段築造されており、墳全長76.5m、後円部径47m、同高７m、前方部幅58m、同高さ 7.3m で葺石がよく残っている。）

15. 車塚古墳（深く大きな周溝をもつ円墳で、三段に築造されている。基底での直径60m、

総高８ｍで墳頂部は截頭円錐形を呈し、内部主体が南面して開口している。横穴式石室である。）

16. 中塚古墳（帆立貝式前方後円墳で、墳丘の全長52.6m、後円部径33.2m、同高さ５m、前方部幅27.2mで、後円部から前方部に向けてだらだら下りになっている。）

以上がこの近隣に所在する著名な遺跡であり、国指定、県指定となっているものが大部分である。この他附近には縄文時代から連綿とした遺跡の所在が知られる。またこの近辺は最近では東京のベットタウンとしての通勤圏にあり、住宅公団による大きな開発が予定されている地区もあり、分布調査でも、かなりの遺跡の存在が指摘されており、今後とも注目すべき地域といえる。（川原由典）

第Ⅱ章　検出された遺構と遺物

以下、薬師寺南遺跡（挿図編）に記載された遺構、遺物の図面番号順に従い、その概要を記述する。

従って、住居跡、特殊遺構、井戸跡、円形遺構、掘立柱建物跡、墓壙、土壙、古墳、方形周溝墓、さらには縄文・弥生土器、石器と順次概述する。なお、出土土器の詳細に関しては、本文では特徴的な様相を記述するにとどめて、本章末に掲載した土器一覧表を参照されたい。

１号住居跡と出土遺物

住居跡（第３図・図版７）

西壁が県道石橋一結城線の線下となり、未調査部分がある。

平面形一東西 5.3m 以上、南北 3.7m の長方形を呈し、カマドは東壁中央から南壁に沿った位置に構築されている。

壁一床面より垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高40cmを測る。

周溝一幅10～15cm、深さ10cmの周溝が壁下を周回している。

床面一全体に貼り床がなされているが、平担で遺存がよい。

柱穴一検出できず。

カマド

壁を「U」字状に切り込み、煙道はなだらかな傾斜をもって火床より立ちあがっている。残

存はよく、天井部はくずれてしまっているが、両袖は粘土で構築され、検出することができた。内部には焼土がかなり認められている。

遺物（第158図・図版 112）

遺物の出土量は少く、図示しえたのは土師器椀形土器1点のみである。碗形土器は比較的大形なものであり、体部外面はヘラミガキされている。床面より出土している。

2号住居跡と出土遺物

住居跡（第4図・図版8、9）

平面形ー東西 4.5m、南北 4.7m のほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に位置して構築されている。また、南壁中央より左によった位置に、ローム層を固めた二段となる階段状のものが構築されている。性格については明確にできなかったが、あるいは住居跡に伴う入口部の施設は考慮してもよいのではと思う。

壁ー床面からほぼ垂直に立ちあがり、壁高60cm前後を測る。

周溝ー幅10cm、深さ5cmのものが壁下を周回している。

床面ー貼り床がなされているが平担であり遺存はよい。

柱穴ー検出できず。

カマド

残存が悪く、天井部、袖部とも明確にできなかったが、煙道部は壁を切り込んで作られている。床面より傾斜をもって立ちあがる。右袖に河原石が認められた。芯に利用されたと考えられる。

遺物（第185図、第256図・図版 112）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器1点、椀形土器1点、坏形土器1点、盤形土器1点、須恵器高台付坏形土器1点であり、個体数は少いが、器種に富む。坏形土器、椀形土器は床面よりの出土である。

図3は稜をもたずに偏平な半球形状を呈する坏形土器であり、4は内面を丹念にヘラミガキにより調整された盤形土器、比較的器高のある須恵器高台付坏形土器が共伴している。さらに本住居跡よりは土製紡錘車が出土しているが、細片で形状は不明。

3号住居跡と出土遺物

住居跡（第5図・図版9、10）

平面形一東西 6.1m、南北 5.3m のほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央と中央よりやや東壁側によった位置に２基構築された。溝がプラン内を一部貫通している。

壁一残存壁高20～30cmを測る。立ちあがりはしっかりした状態を示す。

周溝一一部途切れる個所も認められるが、西壁では幅50cm、その他では幅25cmのものが深さ10cm前後で壁下を周回している。

床面一硬くしまっており、パリパリの状態を示す。平担となっている。

柱穴一住居跡の対角線上に４本掘り込まれている。掘り方はしっかりしており、深さ70cmを測る。

カマド（図版９）

並列して２基構築されている。中央に構築されたものをＡカマド、東壁よりに構築されたものをＢカマドとする。新旧関係はＡカマド右袖とＢカマド左袖が重複しており、セクションからの観察からするにＡカマド→Ｂカマドへの変化が考えられる。いずれも残存は明瞭ではないが、新しいカマド構築の時点でも旧いカマドはそのまま残存させており、破壊されたことは伺えない。Ｂカマド内からは補強材として利用された土師器甕の出土が認められた。

遺物（第 185図・図版 112）

図示しえたのは土師器坏形土器２点のみであり、２点とも体部外面に稜を有する坏形土器であり、図１は平底に近い底部である。２点とも床面よりの出土である。

４号住居跡と出土遺物

住居跡（第６図・図版10）

平面形一東西、南北ともに 4.9m の正方形を呈する。南北に貫通する溝により、プランの⅓弱が切られている。カマドは北壁中央より東壁側に構築されている。

壁一良好な立ちあがりを示し、壁高30cm前後を測る。

周溝一検出できなかった。

床面一良存し、平担である。

柱穴一住居跡の対角線上に位置し、４本分掘り込まれている。深さ50cm前後を測る。

カマド

壁を切り込んで床面より斜行させ煙道部を作り出しているも、残存はよくない。一部に両袖に粘土の残存が認められたのみであった。

遺物（第 185図、第 248図・図版 112）

図示しえたのは、土師器坏形土器２点、須恵器１点およびカマドより出土の女瓦の細片であ

る。図１の土師器坏形土器は床面より出土している。

土師器坏形土器は外面に稜を有する小形なものであり、須恵器坏形土器は糸切りにより底部が切り離されている。

５号住居跡と出土遺物

住居跡（第７図・図版11）

平面形一一辺４ｍの不整方形を呈する。カマドは東壁中央より南壁側に位置し、構築されている。南北に溝が貫通し、プランが切られている。

壁一残存壁高40～50㎝を測る。

周溝一幅20㎝前後、深さ10㎝のものが壁下を全周している。

床面一遺存はよく平担である。

柱穴一検出できず。

カマド

壁を約50㎝程、床面より傾斜をもたせながら切り込んでいる。火床、煙道、天井、袖部とも残存がよく、特に天井部は落下しているも袖部と同様に明瞭な粘土の残存が認められた。火床は10～15㎝の深さに掘り込まれ凹部となっている。

遺物（第185図・図版112）

図示しえたのは土師器坏形土器２点のみと出土量は少い。２点とも体部外面に稜を有する坏形土器であるが、図１は大形であり、器高も深かい。

６号住居跡と出土遺物

住居跡（第８図・図版11）

平面形一東西4.85ｍ、南北4.35ｍのほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央より東壁側に位置して構築されている。

壁一残存壁高60～70㎝を測る。立ちあがりは良好な状態である。

周溝一幅15㎝、深さ５～10㎝のものが壁下を全周している。

床面一一部に貼り床もなされているが、全体的に平担で硬く、遺存はよい。

柱穴一住居跡の対角線上に位置し掘り込まれている。３本分のみ検出できたが、北東コーナ附近に検出されるべきものが検出できなかった。

カマド

壁は70cm程度切り込み構築している。残存はよくない。火床、煙道部が明瞭に残存しているのみであり、粘土、焼土などもあまり認められなかった。煙道部より小型甕（土師）の出土があった。貫通する溝により半分が切られてしまっている。

遺物（第186図）

出土遺物は少量であり、図示しえたのはカマドより出土した土師器甕形土器１点のみである。小形な甕形土器であり、やや丸味をもつ胴部より口縁部が「く」の字に外反する。

７号住居跡と出土遺物

住居跡（第９図・図版12）

平面形一溝が南北に貫通している。東西 3.4m、南北 2.8m のほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央より東壁沿いに構築されているも貫流する溝によって半分は削平されている。

壁一残存壁高40cm前後を測り、ほぼ垂直に立ちあがる。

周溝・柱穴一検出できなかった。

床面一貼り床であるが、平担であり、良好な状態を示す。

カマド

壁を切り込んで構築しているも残存がよくなく、かつ半分は溝により削平されている。火床、煙道部に一部焼土が検出されているにとどまっている。

遺物（第186図 ・図版 112）

遺物の出土量は微量であり、図示しえたのは土師器盤形土器１点のみである。盤形土器としては小形であるが、内外面とも赤彩され、内面は丹念にヘラミガキが施されている。

10－Ａ号住居跡と出土遺物

住居跡（第10図・図版12）

落ち込み確認の段階で、二軒の住居跡が重複することが認められた。慎重に調査を実施した結果、10－Ａ号住居跡が新しいことが判明した。これにより旧るい住居跡を10－Ｂ号住居跡と呼称した。

平面形一東西4.2m、南北3.3mの長方形を呈する。カマドは北壁中央に構築されている。

壁一10－Ｂ号に包括される壁は残存壁高10cm前後である。最高残存壁高60cmを測り、立ちあがりもしっかりしている。

周溝－一部についてのみ検出されているが明確にできなかった。

床面－良存し、平担となっている。

柱穴－検出できず。

カマド

壁を切り込んで構築しているも大部分が重複した位置に構築されているため残存は良くない。袖部と焼土が若干残存しているのみであった。

10－B号住居跡と出土遺物

住居跡（第10図・図版12）

10－A号住居跡と新旧関係にある。当該住居跡が旧るいことが慎重なる調査の結果判明した。

平面形－1辺4mの正方を呈する。カマドが北壁中央より東壁沿いに構築されている。

壁－残存壁高50cmを測り、緩傾斜をもって立ちあがっている。

周溝－一部に残存が認められるだけであった。

床面－10－A号構築の時点でぬかれており、残存するものからは遺存を明確になし得なかった。

柱穴－検出できず。

カマド

壁を切り込んで構築しているも、新しい住居跡構築の時点で削平もあり、残存はよくなく、粘土、焼土の検出が少量認められているにすぎない。

遺物（第186図）

10－A、10－B号住居跡とした2軒の住居跡の切りありであるが、出土遺物が少く、図示した土器も1点のみ、しかも覆土中よりの出土であったため10－A、10－B号住居跡のどちらに伴うか明確には示しえない。ここでは一応10号住居跡出土土器として図示した。

図示したのは土師器甑形土器であり、甑としては器高が低く、浅鉢状に開くが、平担な底部に約4cmの円孔を有する。

11号住居跡と出土遺物

住居跡（第11図・図版13、14）

10－A・B号住居跡、1号土壙と重複して確認された。新旧関係は、10－A・B号住居跡とでは旧いことが遺物からも明瞭に認められたが、1号土壙とについては新旧を明確にすること

ができなかった。

平面形－１辺が約 4.4mの隅丸形を呈する。炉跡が検出されている。

壁－残存壁高15～20cmと低く、良好な立ちあがりとは認められない。

周溝・柱穴－検出できず。

床面－軟弱であり、凹凸がかなり著しく認められる。

炉跡－床面を約10cm程度掘りくぼめてあり、この部分に長辺70cm、短辺40cmの範囲に焼土が認められた。

遺物（第187図・図版112～114）

遺物が多量に出土した住居跡であり、図示しえたのは19点、住居跡南西コーナー周辺より集中的に出土している。

遺物は土師器のみであり、壺形土器１点、坩形土器３点、甑形土器１点、椀形土器４点、高坏形土器４点、器台形土器６点である。甕形土器が欠落している点を除けば器種も多く、注目すべき土器群である。

図１は胴部を欠くが、折り返し口縁の壺形土器であり、５は２、３とは異り、小形で粗雑な坩形土器であり、６も器形よりは椀形土器よりは坩形土器に近い感じである。

４の甑形土器は小形なものであり、７、８、９の椀形土器は手づくねによるもので、粗雑な造りではあるが、特徴的なものである。

10の坏部に台形状の円窓を有する高坏形土器はバランスの良い優品であり、11、12、13は脚部の小さい高坏形土器である。器台形土器は６点と出土量が多く、比較的小形たのもが多く、器受部が小さいことも特徴的。

12号住居跡と出土遺物

住居跡（第12図・図版15）

西壁の一部が調査区外となっており、全体を明確にできなかったが、南西コーナーは検出することができた。

平面形－南北 6.5m、東西６mほぼ方形を呈する大型プランであり、カマドは東壁中央より南よりに構築されている。

壁－良好な状態で立ちあがり、残存壁高50～60cmと高い。

周溝－幅10～15cm、深さ５～10cmのものが壁下を全体に周回している。

床面－貼り床であるが、全体によく踏み固められ硬くなっている。特にカマド前面からプラン中央部にかけてその傾向が著しい。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して掘り込まれ、深さ50～70cmを測る。掘り方はしっかりと掘り込まれている。

カマド

残存は比較的よい。壁を「V」字状に掘り込み、火床よりなだらかな傾斜をもって立ちあがり、煙道部を作り出している。火床は掘り凹められ、焼土がかなり認められた。袖部のものと考えられる粘土も多量に検出されている。

遺物（186図・図版 114）

図示しえたのは、土師器甕形土器１点、土師器坏形土器２点であり、３点とも床面よりの出土である。図１は肩部に若干張りをもち、最大径を有する口縁が外湾する甕形土器であり、２、３は外面に稜を持つ丸底比較的大形の坏形土器である。

13号住居跡と出土遺物

住居跡（第13図・図版16）

平面形ー東西 6.7m、南北 6.1m の方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。

壁ー残存壁高20～40cmを測る。床面より良好な状態をもって立ちあがる。

周溝ー幅15cm、深さ10cm前後のものが壁下を全周する。

床面ー平担でありよく踏み固められている。とくにカマド前面からプラン中央部にかけてその傾向が著しい。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して深さ80cm前後に掘り込まれている。しっかりした掘り方である。

カマド

壁を逆「V」字状に 1.2m掘り込みがなされ、床面よりなだらかな傾斜をもって煙道部が作り出されている。火床は若干掘り凹められ、両袖は粘土によりかなり強固に構築されているも、天井部は落下してしまっている。残存は良好である。

遺物（第186図、255図・図版 114・150）

出土遺物は、土師器および砥石であり、図示したのは甕形土器１点、坏形土器４点、砥石１点であり、186図１、２、４は床面よりの出土である。

図１は胴下半部のみの甕形土器であり、坏形土器は小形なものであり、体部外面の稜が退化し、平底を呈する傾向が看取される。

砥石は小形なものであり、一部を欠くがほぼ完形であり、材質は砂岩。使用痕が著しい。

14号住居跡と出土遺物

住居跡（第14図・図版17）

全体の⅔が県道石橋一結城線下となっており、未調査部分がある。

平面形一東壁のすべてと、北壁を 1.3m、南壁を２m検出できたのみである。カマドは検出できた北壁で粘土のながれを一部認めたにすぎない。

壁一良好な立ちあがりを示し、壁高15～20cmを測る。

周溝一検出できず。

床面一平担で良好しているが、軟弱化している。

柱穴一２本分の検出だけであるが、住居跡の対角線上に４本掘り込まれたものと考えられる。深さ40～60cmを測る。

カマド

検出できなかったが、北壁に存すると考えられる。

遺物（第188図・図版 114）

調査範囲が住居跡の⅓であるため、図示しえた遺物は須恵器坏形土器１点のみである。体部が直線的にたちあがる坏形土器であり、ロクロ目が明瞭で、底部は全面回転ヘラケズリ調整である。

15号住居跡と出土遺物

住居跡（第15図・図版19）

平面形一東西 4.9m、南北 3.9m の東西に１m程長い方形を呈し、カマドが北壁中央に構築されている。

壁一ほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高40cmを測る。

周溝一検出できなかった。

床面一東壁沿いが高く、西壁へかけて傾斜している。

柱穴一東西を３等分、南北を２等分した位置に掘り込まれている。２本柱と考えられる。掘り方はしっかりしており、深さ50～80cmを測る。

カマド（第16図）

壁を半卵形に切り込み、火床は楕円形に若干掘られている。遺存はよくない。火床にあたる部分より少量の焼土の検出が認められたのみである。

遺物（第188図）

遺物の出土量は僅かであり、図示しえたのは須恵器坏形土器１点のみである。底部のみの遺存であり、ヘラ切りにより底部は切り離されている。

16号住居跡と出土遺物

住居跡（第18図・図版19）

平面形ー長辺 4.4ｍ、短辺 3.6ｍのほぼ方形に近いプランを呈する。カマドは北壁中央に構築されている。

壁ー良好な状態を保ち、ほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高45cmを測る。

周溝・柱穴ー検出することはできず。

床面ーカマド前面においては硬く良存していたが、壁沿いについては軟弱であった。

カマド（第17図）

残存は悪く、明瞭に検出することはできなかった。壁を切り込み構築されている。

遺物（第188図・図版115）

図示しえたのは、土師器盤形土器１点、須恵器坏形土器１点のみである。盤形土器は比較的小形であり、内外面とも赤彩されており、外面は体部端までヘラケズリ、内面はヘラミガキにより調整されている。図２は器高が浅く、底部が広い坏形土器であり、切り離し技法はヘラ切りである。

17号住居跡と出土遺物

住居跡（第19図・図版20、21）

平面形ー長辺 6.7ｍ、短辺 6.4ｍの不整方形を呈する。炉跡がプラン中央より北東コーナによった位置に認められた。

壁ー床面よりほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高20～25cm前後を測る。

周溝・柱穴は検出できなかった。しかし浅いピットが数ヶ所において検出されるも、性格については不明である。

床面ー凹凸が著しいもよく踏み固められている。

炉跡ー床面を若干掘り込み、河原石を一部使用していることが認められた。

遺物（第189図、190図、255図・図版115・116、150）

焼失家屋と考えられ、大形な甕形土器などを中心に遺物が比較的多量に出土しており、土器

以外に砥石が出土しており注目される。

出土土器はすべて土師器であり、図示したのは、甕形土器4点、壺形土器1点、坩形土器1点、椀形土器3点、高坏形土器3点、器台形土器1点であり、バラェティーに富む土器群である。

甕形土器4点であるが、図1以外は台付である。1は球形の胴部に直立する口縁部であり、大形の甕形土器である。2は球形の胴部に「く」の字に外反する口縁部を有する大形な台付甕形土器であり、3は偏球形を呈する小形台付甕形土器、4は台部のみの残存。

5は大形な壺形土器であり、球形の胴部より口縁が「く」の字に大きく外反するバランスの良い土器である。胴部にはタテ位にヘラミガキが認められる。7～9は椀形土器であり、9は手づくねによるミニチャー土器。

10～12は高坏形土器であり、10、11は裾部が大きく開く点が特徴的である。器台形土器は1点のみの出土である。

砥石は1点のみの出土であり、半分を欠損する。材質は砂岩である。五領期よりの砥石の出土例は少く、注目したい。

18号住居跡と出土遺物

住居跡（第20図・図版21）

平面形－1辺 4.1mのほぼ正方形を呈する。カマドは北壁中央に構築されている。

壁－西壁の一部がイモ穴で削平されているが、残存壁高60cmを測り、垂直に立あがっている。

周溝・柱穴－検出できず。

床面－貼り床のため軟弱であるが、凹凸は少ない。

カマド

壁を「U」字状に掘り込んで構築されているも、残存はよくなく、煙道、火床に多少の粘土、焼土が残存していたにとどまっている。

遺物（第256図・図版151）

出土遺物は少く、土器では図示しえなかったが、辛じて紡錘車片が一点出土している。紡錘車は石製であり、全体の約⅓の残存にすぎない。

19号住居跡と出土遺物

住居跡（第21図・図版22・23）

平面形－1辺 4.7mの隅丸方形を呈し、古式土師器を出土し、炉跡を持つプランである。南西コーナーに不整形の掘り込みが見られる。

壁－全体的になだらかな傾斜を持つも、東壁はほぼ垂直に立ちあがり、壁高35～50cmを測る。

周溝－幅15cm、深さ10cm前後のものが西壁を除いて周回している。

床面－軟弱であるが、凹凸も少なく、平担であった。

炉跡－床面を掘り込んだ痕跡は認められなかったが、北西コーナーにて薄く焼土が堆積しており、あるいはこれが炉跡となるかもしれない。

遺物（第190、191図・図版116・117）

出土遺物は土師器のみであるが、住居跡北西コーナー周辺で甕形土器を中心に比較的多量に出土している。図示しえた土器は、甕形土器6点、甑形土器1点、坩形土器1点、椀形土器1点、器台形土器1点、坏形土器1点である。

図1～6の甕形土器のうち1～3は「く」の字に外反するものであり、4は僅かに断面S字状を呈するものである。5は台部のみの残存であるが、大形な甕形土器と推定され、6は長胴な台付甕形土器である。

10の器台形土器は器受部が非常に小さく、裾部が開く特徴的な器形である。11は19号住居跡に伴うとは考えられない坏形土器である。

20号住居跡と出土遺物

住居跡（第22図・図版24）

1号円形遺構と重複関係にあるも、新旧関係については明確になし得なかった。

平面形－長辺 6.7m、短辺 5.7mの長方形の大きなプランであり、カマドが東壁中央からかなり南壁によって構築されている。

壁－立ちあがりはほぼ垂直となっているが、残存壁高15～20cmと低い。

周溝・柱穴－検出できなかった。

床面－貼り床がなされており、軟弱であったが、平担に遺存していた。

カマド

壁を切り込んで構築しているも、残存はよくなく、粘土ブロックと焼土が少量認められたにすぎない。

遺物（第188・第255図・図版117・150）

出土遺物は土器と砥石と瓦であるが、出土土器で図示しえたのは、土師器坏形土器1点、土師器蓋形土器1点、須恵器坏形土器1点、須恵器高台付坏形土器1点である。

図１の坏形土器は内外面とも赤彩されており、調整技法では盤形土器と共通する。２の蓋形土器は技法等より本住居跡とは共伴するとは考え難く、五領期の所産と考えられるが、類例の少い器種である。３、４は共に糸切りにより切り離されている。

砥石は小形なものであり、端に円孔を有することにより携提用として使用されたと考えられる。材質は砂岩である。

瓦は細片であり、女瓦の一部である。

21号住居跡と出土遺物

住居跡（第23図・図版25）

平面形ー長辺 5.5ｍ、短辺５ｍのほぼ方形を呈し、各コーナーは隅丸となっている。

２ヶ所に炉跡が検出されたが、新旧があるのか、同時使用かは明らかにならなかった。南西コーナーが方形に掘り込まれている。貯蔵穴と思われる。

壁ー崩壊が著しく、緩傾斜を持って立ちあがり、残存壁高25cmを測る。

周溝ー西壁と北壁の一部にかけて幅18～20cm、深さ５cmのものが検出された。

床面ー軟弱であり、遺存はよくなかった。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して掘り込まれたものが５本分検出され、他に北東コーナーに１本の都合６本分が掘り込まれている。いずれも掘り方はしっかりしたものである。

炉跡ー床面上に２ヶ所の焼土が充満し、焼けた状態の、浅く掘り込まれたものが検出されているも、前後関係であるのか、同時使用なのかは不明であった。

遺物（第188図・図版117）

出土した土器は土師器のみであり、図示しえたのは甕形土器２点、高坏形土器２点、器台形土器４点である。

図１胴下半を欠くが、口縁部が「く」の字に外反する比較的大形な甕形土器であり、２は小形な甕形土器である。３は坏部のみ、４は脚部のみ残存する高坏形土器である。

５～８と器台形土器が４点出土しており、５は裾部が大きく開く土器である。

22号住居跡と出土遺物

住居跡（第24図・図版26）

23号住居跡と重複しており、新旧関係である。22号住居跡のカマドが23号住居跡内に入り込んで構築されていることが判明し、新旧は23号→22号住居跡であった。カマドは北壁中央より

東壁沿いに構築されている。

平面形－東西 4.3m、南北 4.2m の方形を呈し、カマドは北壁中央より東壁沿いに構築されている。

壁－重複する部分では、黒色土とローム ブロックを混入したものを固くつき壁としている。

残存壁高30～45cmを測る。

周溝・柱穴－検出することはできず。

床面－貼り床がなされており、軟弱であったが、凹凸は少ない。

カマド

23号住居跡内に構築されており、直接ローム層を掘り込み煙道等が作り出されているものでないために、遺存がわるく、焼土を検出したにとどまっている。

遺物（第191図）

遺物は少く、図示しえたのは土師器のみで、甕形土器１点、坏形土器２点である。

図１は肩部の張る小形な甕形土器であり、２、３は平底に近い坏形土器であり、２は外面に僅かに稜を有し、３はより平底化した土器である。なお、３はカマドより出土している。

23号住居跡と出土遺物

住居跡（第25図・図版26）

落ち込みを確認した段階で22号、26号住居跡との重複が考えられた。新旧関係は26号→23号→22号住居跡の順である。

平面形－東西7.05m、南北6.87m の方形を呈する大型の住居跡プランである。カマドは東壁中央より南壁沿いに構築されている。

壁－残存する壁高は35～65cmを測る。22号と重複する部分にては壁は認められない。周構のみ存在する。

周溝－幅15～30cm、深さ８cmのものが壁下を周回している。22号住居跡と重複する部分はつき固められていた。

床面－平担に遺存するも軟弱である。

柱穴－住居跡の対角線上に位置し、いずれもしっかりした方形の掘り方であり、３ヶ所からは径15～20cmを測る柱痕が検出された。

カマド（27図・図版27）

非常に遺存の良好なカマドである。壁を50cm掘り込み、掘り込みも二段となり煙道部と火床の部分を区分している。両袖には凝灰岩の切石を立石し、芯として使用している。右袖のもの

は、長さ40cm、幅20cm、厚15～20cm、左袖のは、長さ20cm、幅26cm、厚さ12cmの立方体のものをそれぞれ使用し、この上に粘土を貼りつけて構築している。天井部も落下せず残存し、内部には焼土とともに草灰が層をなして検出できた。

遺物

大形住居跡にもかかわらず、細片のみで図示しえる遺物は出土しなかった。

24号住居跡と出土遺物

住居跡（第26図・図版28）

平面形ー東西 5.9m、南北 5.8m の方形を呈する大型プランの住居跡である。カマドは東壁中央よりやや南壁沿いに構築されている。

壁ー壁高45～50cmを測る。ほぼ垂直に立ちあがっている。

周溝ー検出できなかった。

床面ー良存しているも軟弱である。貼り床がなされている。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置し、いずれもしっかりした掘り込みであり、中位に段をつけている。深さは１～ 1.2m を測る。すべての掘り込みの中に径20cm前後の柱痕が認められた。

カマド

壁を半楕円状に80cm切り込んで煙道を形成している。遺存が悪く、粘土、焼土ともあまり認められなかった。

遺物（第192・193・194・195図・図版118・119・120・121）

本遺跡住居跡の中では、27号住居跡とともに最も遺物出土量の多い住居跡であり、器種も多種多様である。出土層位は、覆土のみであり、住居跡廃棄後、一括投げ捨てられたと考えられるような出土状態である。

図示しえたのは、86点と多量であり、土師器甕形土器14点、土師器椀形土器４点、土師器盤形土器20点、土師器坏形土器16点、土師器蓋形土器１点、須恵器蓋形土器14点、須恵器高台付坏形土器13点、須恵器坏形土器３点、須恵器土製円版１点、瓦製不明製品１点である。

甕形土器は14点と多量に出土したが、器形全体が判明するものはない。図１は「く」の字に外反する大形な土器であり、８は口縁が外湾気味に開く土器である。10、11は小形な土器であり、14は台部のみであるが、比較的大形な台付甕形土器と考えられる。

椀形土器は４点であるが、14は半球形状を呈する大形な土器であり、内外面とも赤彩され、内面は丹念にヘラミガキされている。類例の少い、特徴的な優品である。

盤形土器は19点と多量であるが、19～21は内外面ともヨコナデ、22～24は内外面ともヘラミ

ガキにより調整されており、22、23は内外面とも赤彩されている。19～24は大形な盤形土器のグループである。

さらにもう一つは、25～37のグループであり、半球形状を呈する小形な盤形土器であり、25、27、36はヘラミガキされており、25は内外面とも赤彩されている。それ以外は坏形土器と考えても良いが、器形より盤形土器として扱かった。

坏形土器は16点であるが、共通性が強く、体部外面に稜を有し、底部はヘラケズリされ、口縁部および内面はヨコナデ調整されており、やや大形なものが多い。稜は退化し、体部下位に有するものが多くなる傾向が認められる。48は稜が退化し、内外面とも段を呈する。

54の蓋形土器は、焼成などより須恵器とは考え難いが、内面に返りをもつ特徴的な土器である。

須恵器蓋形土器は14点と多量に出土しており、高台付坏形土器とともに須恵器の大多数を占める。55は返りをもち、天井部が偏平な土器であり、64は外面に○のヘラ描きを有する。概して、蓋形土器は大形なものが多い。

高台付坏形土器は14点出土しており、大形なものが多い。体部がやや外上方に大きく開き、八の字形に高台が付くものが一般的である。底面は回転ヘラケズリ調整されている。78は端部が丸く、低い高台が特徴的であり、79の高台は外に鋭い稜と凹面を有する独特なものである。81は厳密には高台付皿形土器であり、口縁端部が鋭くたちあがる。

坏形土器は３点と少量であり、83は回転ヘラケズリであるが、他はヘラ切り痕を有す。

85は底部を故意に打ちかいた土製円盤であり、86は瓦を再利用したものと考えるが、使用目的は不明。

以上86点の大量の土器群には、大きな時間差を指摘し難く、ある時期しかも住居廃棄からさほどの時間差を持たずに一括投棄されたと考えられる。

25号住居跡と出土遺物

住居跡（第29図・図版29）

平面形－東西4.65m、南北3.6mを測り、 方形に近いプランを呈す。カマドが北壁中央やや東壁よりに構築されている。

壁－垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高45～55cmを測る。

周溝－幅10～20cm、深さ10cm前後のものが、壁下を全周している。

床面－東壁から西壁に傾斜しているが、凹凸も少なく、遺存はよい。

柱穴－検出できず。

カマド（第28図）

壁を大きく切り込み煙道を作り出し、構築されている。火床は長方形に深く掘り込まれ構築する時点で埋め戻されている。つぶれた状態で検出されており、袖部は粘土の検出を明瞭になし得ないも、天井部は粘土がかなりの広範囲に認められた。この下の火床と考えられる部分には焼土が多量に存在している。

遺物（第196図・図版121）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器１点、須恵器坏形土器１点である。

甕形土器は、くの字に外反する口縁部のみの残存であり、坏形土器は、底部および体部端部を手持ちによりヘラケズリ調整されている。

26号住居跡と出土遺物

住居跡（第25図・図版26）

落ち込み確認の段階で23号住居跡との重複が認められた。新旧関係については、埋土内から26号住居跡からは古式土師器の出土を見ており、26号→23号住居跡構築である。全体の⅓弱の残存と考えられる。

平面形－北壁 5.2ｍ、東壁 1.5ｍ以上で、方形を呈すると考えられる。

壁－残存壁高10～15㎝と低く、立ちあがりはなだらかな傾斜をもっている。

周溝・柱穴－検出できなかった。

床面－貼り床がなされており、軟弱である。

炉跡－住居跡中央より北壁に近く位置すると考えられる。半分は切られている。径40㎝、深さ４㎝を測る。

遺物（第196図・図版121）

住居跡の⅔は、23号住居構築により破壊を受けているため、五領期の住居跡としては、比較的出土遺物は少い。

図示しえたのは、土師器のみであり、甕形土器１点、高坏形土器１点、器台形土器１点、鉢形土器１点である。

図１は、甕形土器の台部のみの残存であり、２は脚部を欠くが、直線的に開く坏部を持つ大形な高坏形土器であり、３は器受部を欠くが、器台形としては大形である。４は手づくねによるミニュチャー土器であり、器形より鉢形土器として扱かった。

27号住居跡と出土遺物

住居跡（第31図・図版29・30）

平面形一東西7.55m、南北6.88mのほぼ方形を呈する大型の住居跡である。カマドは北壁中央に構築されている。

壁一残存壁高は60～75cmを測る。立ちあがりはほぼ垂直ぎみである。

周溝一幅20cm、深さ15cmと平均したものが周回している。

床面一凹凸少なく平坦であり、遺存もよく、よく踏み固められている。その傾向は住居跡中央部ほど著しい。

柱穴一住居跡の対角線上に位置し、掘り方もしっかりしている。南壁沿いの2本は掘り変えがなされている。深さ80～90cmを測る。

カマド（第30図）

袖部、天井部などの粘土の残存は悪いが、焼土が多量検出された。壁を1.4m程度切り込み、細長くし、二段の掘り込みとなし、煙道部と火床とを区分している。火床は楕円形に大きく一度掘り込み、再度埋め戻してからカマド全体を構築している。火床は貼り床となっている。

遺物（第197、198、199図・図版121、122）

24号住居跡と同様、遺物を多量に出土した住居跡であり、出土状態もカマド出土の1点以外の56点は、覆土中であり、住居跡廃棄後一括投棄されたと考えられる。

図示しえた遺物は、土師器甕形土器10点、盤形土器23点、椀形土器2点、坏形土器13点、須恵器蓋形土器3点、高台付坏形土器6点である。

甕形土器は10点であるが、口縁部に最大径を有し、「く」の字に外反し、肩部がやや張るものが一般的である。図1はカマド出土、6は胴部が直線的である。9は調整技法より五領期の所産であり、10は台部のみである。

盤形土器23点と多量であり、24号住居跡同様11～21、22～33と法量より大小に二分できる。11は大形な土器であり、内外面ともナデ調整。13は内外面ともヘラミガキされた優品である。15の内面は放射状にヘラミガキされており、19は体部外面に鋭い稜を有する。

22～23は小形な盤形土器であるが、27、29など内外面を丹念にヘラミガキされており、内面は放射状にミガキが施されている。30～32は体部外面端部までヘラケズリされており、小形な盤形土器は調整技法の変化に富む。

坏形土器は13点であるが、体部に僅かに稜を持ち、内面がナデ調整されているのが多い。稜の退化は著しく、底部も平底化しており、内面に段を有するものが多くなる。48はロクロ使用土器であり、内面黒色処理されており、後出的な土器である。椀形土器2点はヘラケズリによ

よる小形な土器。

須恵器は24号住居跡に比し、少量であり、蓋形土器３点、高台付坏形土器６点であり、坏形土器は全く認められない。51は比較的蓋形土器である。底部が凸面を呈し、やや低い高台を付す高台付坏形土器であり、55は小形な土器である。

28号住居跡と出土遺物

住居跡（第32図・図版30）

落ち込みを確認した段階で29号住居跡との重複が考えられた。新旧関係は29号住居跡内に28号住居跡のカマドが残存しており、新旧関係は29号→28号住居跡である。住居跡の中央を溝が貫通している。

平面形－東西4.05m、南北３.8mの方形を呈する。北壁中央にカマドが構築されている。

壁－残存する位置では壁高30cmを測る。立ちあがりはほぼ垂直である。

周溝－幅15～20cm、深さ10～15cmのものが周回しており、カマドの下にも掘られている。

床面－貼り床がなされており軟弱である。特に周溝のまわりが著しい。

柱穴－検出できなかった。

カマド

29号住居跡の埋土内に構築されてたため、遺存が悪く、若干の焼土が認められたのみである。舌状に40cm程壁を切り込んでおり、その痕跡が床面上に認められただけである。

遺物（第196図・図版122・123）

図示しえたのは、土師器坏形土器２点、須恵器坏形土器２点、須恵器蓋形土器１点である。

図１、２は、体部外面に稜を有し、内面に段を呈する土師器坏形土器であり、３、４は須恵器坏形土器であり、３はヘラ切り、４は糸切り痕を底部に残す。なお、４は床面よりの出土。５は宝珠形のつまみを有する小形な蓋形土器である。

29号住居跡と出土遺物

住居跡（第32図・図版31）

28号住居跡と重複関係にある。新旧関係は29号→28号住居跡である。カマドは北壁中央と西壁中央より北壁沿いに構築されている。

平面形－東西6.15m、南北6.15mの正方形を呈する大形住居跡である。

壁－ほぼ垂直に立ちあがり、壁高50cmを測るが、南壁の⅔強は残存していない。

周溝－幅25cm、深さ10cmの一定したものが周回しているも、28号と重複する部分は削平されている。

床面－平担で硬く踏み固められている。住居跡中央はパリパリの状態であった。

柱穴－住居跡の対角線上に位置する。掘り方は大きく、柱痕の認められるものもある。深さ50～75cmを測る。一部には掘り変えもなされている。

カマド（第33図）

北壁と西壁に構築されているが、２基同時に使用されたのではなく、新旧があり、西壁から北壁に移動している。西壁のものは煙道が残存しているのみで、1.15m程壁を浅く切り込んでいる。北壁に構築の時点で破壊されたものと考える。北壁のカマドは、遺存状態が不良であり、袖部、天井部も明瞭になし得ず、焼土が帯状に検出できたにとどまった。壁は他のカマド構築と同様に壁を掘り込んでいる。

遺物（第196図）

図示しえた遺物は土師器のみ２点であり、鉢形土器１点、坏形土器１点である。

図１は、口縁が大きく外湾する比較的厚手の鉢形土器であり、類例の少い土器である。２は体部外面に稜を持つ小形な坏形土器である。

30号住居跡と出土遺物

住居跡（第34図・図版31・32・33）

落ち込み確認の段階では重複するとは考えていなかったが、調査進行中に、31号住居跡の中央にカマドが構築されていることが認められ、重複していることが判明した。新旧関係は、31号住居跡内に30号住居跡のカマドが構築されていることより、新が30号住居跡、旧が31号住居跡である。

平面形－東西 4.9m、南北 3.3m の長方形を呈し、北壁中央やや東壁よりにカマドが構築されている。

壁－緩傾斜をもって立ちあがり、残存壁高45cmを測るが、一部であり、その他は痕跡を指摘できるのみである。

周溝－幅15cm、深さ５cmのものが、一部を除いて周回していた。

床面－31号住居跡の床面と同レベルであり再度利用している。硬くしまり、遺存はよい。

柱穴－検出できず。

カマド（第35図・図版32）

調査過程で２軒の重複であることが認められなかったため、袖部をたち切ってしまった。煙

道は壁を切り込みただらかな傾斜をもって立ちあがらせている。火床は若干の凹みがつけられている。火床から煙道にかけては、かなりの量の焼土が充満していた。

遺物（第199図・図版124）

遺物は比較的多量に出土しており、図示しえた遺物は、土師器甕形土器1点、椀形土器1点、坏形土器3点、須恵器壺形土器1点、台付皿形土器1点、坏形土器4点である。

図3、4、7は床面より出土。1は球形を呈する胴部よりやや外傾してたつ小形な甕形土器であり、2は外湾して小さくたつ小形な椀形土器である。

3、4は底部が平底化しつつある土器であり、5は外面に稜を残す坏形土器である。

6は須恵器壺形土器の胴下半部の残存であり、外面に釉が付着している。7は蓋のように図示したが、器高の浅い台付皿形土器である。8～11は坏形土器であり、8はヘラ切り、9、10は手もちのヘラケズリ調整である。

31号住居跡と出土遺物

住居跡（第43図・図版31・32）

30号住居跡と32号住居跡との重複関係にある。新旧は30号と32号住居跡に記したが、三軒の前後関係を検討すると、31号住居跡が一番古い時期に構築されたものとすることができる。

平面形ー東西6.5m、南北6.5mの方形を呈する大型プランである。北壁の中央にカマドが構築されている。

壁ーほぼ垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高45cmを測る。遺存はよい。

周溝ー西壁の一部を除いて、幅15cm、深さ5～10cmのものが検出され、壁下を周回している。

床面ー凹凸少なく、遺存もよく、硬く踏み固められている。しかし、30号住居跡の周溝が掘り込まれている。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して掘り込まれており、深さ40～50cmを測る。掘り方はしっかりしている。

カマド（第35図・図版33・34）

32号住居跡に煙道の一部が削平されてしまっている。壁を切り込み、煙道を作り出し、火床を掘り凹めて構築している。遺存はよくなかったが、火床から煙道にかけては、焼土がかなりの堆積状態を示していた。

遺物（第199図）

図示しえた遺物は、土師器椀形土器1点、坏形土器2点、須恵器坏形土器1点である。

図1はやや外湾気味に開く椀形土器であり、外面にヘラミガキが認められる。2、3は体部

外面の稜を下位に有する坏形土器であり、4は底部の比較的大きい坏形土器である。底部切り離し痕は、ヘラ切り後、全面を手もちヘラケズリ調整である。

32号住居跡と出土遺物

住居跡（第36図・図版31）

31号住居跡のカマド煙道部と南壁の1部が重複している。新旧関係は精査した結果、31号住居跡カマド煙道部が中途で消滅しており、この部分より、32号住居跡の南壁となることが認められ、新旧の新が32号住居跡、旧が31号住居跡である。

平面形－1辺 5.8mの正方形を呈し、カマドが北壁中央に構築されている。

壁－ほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高70～80cmと高い。

周溝－幅15～20cm、深さ10cmの周溝が壁下を全周している。南壁中央直下で小ピットに連結しているが、あるいは水溜め的なものも考えられる。

床面－多少の凹凸が認められるも、遺存はよく、硬く踏み固められている。

柱穴－住居跡の対角線上に位置して掘り込まれており、深さ1m前後と深い。掘り方はしっかりしたものである。

カマド（第38図）

壁を切り込み、火床を掘り凹め、なだらかな傾斜をもたせて煙道部を立ちあがらせている。遺存は良好であり、天井部、袖部とも構築時に近い状態で検出できた。内部にはかなりの焼土も認められ、右袖に接して小形台付甕が出土している。

遺物（第200・249・256図・図版124・151）

出土遺物は土器の他に、瓦、紡錘車と多様な内容である。土器で図示しえたのは、土師器甕形土器1点、坏形土器2点、須恵器坏形土器4点である。

図1は球形な胴部に外湾気味に開く口縁部を有する薄手の甕形土器であり、口縁部下に横位に特徴的なヘラケズリが施されている。甕形土器は一般に遺存が悪いが、本土器は台部の一部を欠くのみである。カマドより出土。

2、3は坏形土器であり、体部に稜を持たずに直線的に開き、底部が平担化する。外面はヘラケズリされており、内面は2はヘラミガキ後赤彩され、3は全面ヨコナデである。2は床面出土。ロクロ使用坏形土器移行前の土器相を考えるうえで好資料である。

4～7は須恵器坏形土器であり、口径に比し、底径の大きい点が共通している。4はヘラ切り、6は糸切り後、周縁を手持ちヘラケズリ調整であり、7は大形品。

瓦は女瓦片のみであるが、多量に出土しており、10点図示している。1はカマドより出土。

比較的格子の細かい（13×？）型押文が認められ、3には模骨痕が明瞭に観察できる。水道山瓦窯出土瓦と共通性が多い。

紡錘車は2点出土しており、ともに石製紡錘車である。3は完形、やや小形であり、4は半欠品である。

33号住居跡と出土遺物

住居跡（37図・図版34・35）

平面形ー東西5.45m、南北5.55mの方形を呈する。カマドが北壁中央と東壁中央よりやや南壁沿いの2ヶ所に構築された。

壁ー残存する壁高は65～80cmを測る。立ちあがりはほぼ垂直である。

周溝ー一部途切れる個所もあるが、幅15～25cm、深さ8cm前後のものが壁下を周回している。

床面ー全体に平担であり、住居跡中央部はかなりよく硬く踏み固められている。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置し、70～100cmの深さを測る。

カマド（第39・40図・図版35）

北壁と東壁に構築されているが、新旧関係については明瞭にすることはできなかったが、遺存状態よりすれば、北カマドの方が新しく構築されたものと考えるのが妥当と思われる。現に住居跡プラン検出の段階でも東カマド煙道部をピットと誤認したほどであった。

東カマドー遺存はよくなく、焼土がうすく堆積しているのみであった。壁は「凸」状に掘り込まれている。

北カマドー壁を約30cm掘り込んで煙道部が作り出され、この掘り込み内に粘土により構築された袖部のみが良好に残存している。天井部は検出できなかった。焼土の堆積も多量にとまでは言い難い。

遺物（第200、201図・図版125）

遺物は比較的多量に出土しており、図示しえたのは、土師器甕形土器7点、鉢形土器1点、盤形土器2点、坏形土器2点、須恵器高台付坏形土器1点、坏形土器1点、甑形土器1点と器種も多様である。

甕形土器は7点と多量に出土しており、図2、5は北カマドより、3、7は東カマドより出土している。口縁部は仔細にはバラェティーを有するが、口縁部に最大径を有し、外反ないしは外湾する点は共通しており、6は端部が鋭くたつ独特の断面形を示す。7は胴下半のみの残存である。

8は口縁が大きく外反し、内面に稜を有する口径の大きい鉢形土器であり、9は内外面とも

赤彩され、口縁部が屈曲気味に外湾する大形な盤形土器である。内面は丹念なヘラミガキ、外面はヨコナデ、下半はヘラケズリされており、バランスの良い優品である。

10、11は坏形土器であり、11は体部が球形を呈し、11は僅かに体部下位に稜を有する土器で、床面より出土している。

12は須恵器高台付坏形土器であり、体部が直線的にたちあがり、低い高台が付された小形品である。12は底部にヘラ切り痕を残す坏形土器。

14は住居壁近くの床面より直立の状態で出土した完形の須恵器甑形土器である。深鉢状を呈し、胴部中程に把手が2個つけられており、底部中央に円孔を有し、それより放射状に台形状を呈する7個の孔が穿たれている。さらに胴部下端には四方向より小孔が穿たれている。また胴部には沈線および波状文が装飾されており、焼成も良好である。該期の什器としては類例の少い優品であり、県内の窯跡から生産されたとは考え難く、搬入品の可能性が強い。

34号住居跡と出土遺物

住居跡（第41図・図版36）

平面形ー東西4.13m、南北3.93mの方形を呈する。北、西壁は彎曲している。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。

壁ー残存壁高15～30cmを測り、ゆるやかな傾斜をもって立ちあがっている。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー多少の波曲凹凸もあるも良存している。

カマド

壁への掘り込みはなされておらず、残存も悪く、粘土、焼土が少量出土するのをもってその位置を推定したものである。

遺物（第200、248、255図・図版150）

出土遺物は、土器は1点と微量であるが、瓦と砥石が出土している

図示しえた土器は、体部上位を欠く須恵器坏形土器1点のみであり、底部にヘラ切り痕を残す。

瓦は女瓦の細片であり、表面に僅かに模骨痕が認められる。

砥石はやや幅広の比較的小形な完形品である。材質は砂岩。

35号住居跡と出土遺物

住居跡（第42図・図版36・37）

平面形－東西 4.1ｍ、南北 3.8ｍの方形を呈する。各コーナー若干丸味をもつ。カマドは北壁中央より東壁沿いに構築されている。

壁－残存壁高40～55㎝で、なだらかな傾斜をもって立ちあがる。

周溝－一部を除いて幅15～20㎝、深さ５㎝前後のものが壁下を周回している。

床面－プラン中央部が若干凹むも良存し、よく踏み固められている。

柱－住居跡の対角線上に掘り込まれている。掘り方はしっかりしており深さ45㎝。

カマド

壁を90㎝前後掘り込んで、火床よりなだらかな傾斜をもたせて立ちあがり、煙道部としている。残存は良好と言いがたく、焼土、粘土について少量の検出をみたにとどまっている。

遺物（第202・248・255・256図・図版124・125・150・151）

本住居跡よりは、土器、瓦、砥石、紡錘車と多様な遺物が出土しており、本遺跡の中でも注目すべき住居跡の１つである。

図示しえた土器は、土師器甕形土器１点、坏形土器２点、須恵器甕形土器１点、壺形土器１点、高台付坏形土器１点、坏形土器７点である。須恵器坏形土器７点と多量に出土している点は注目しておきたい。なお図４、８、９、10は床面より出土している。

１は口唇部が外面に稜を有して直立する独特の断面形を呈する甕形土器であり、胴下半の縦位のヘラミガキは特徴的であり、「下野型」と称される土器である。２は内面を黒色処理された坏形土器であり、手もちヘラケズリ調整された底部に「市木」と墨書されている。３は内面は赤彩された坏形土器。

４は大形の須恵器甕形土器であり、胴部下位は横方向のヘラケズリ調整。胴部やや下位に小円孔を有する。５は肩部に自然釉が付着した壺形土器であり、６は比較的大形の高台付坏形土器である。

７～13は坏形土器であり、７～９はヘラ切り、10～13は糸切り痕を底部に残す。10は紐積みにより成形し、ロクロ調整したと考えられる。坏形土器で糸切りが主体を占めていることも技法上注目したい。

瓦は図示しえたのは、２点であり、共に細片である。

砥石は、図７、８の２点が出土している。７は大形な砥石であり、かなり使用されたと思われ、磨耗が著しく、断面が弓形を呈している。８はやや小形な幅狭な砥石であり、やはり使用痕が著しい。共に材質は砂岩。

紡錘車も図４、５の２点出土している。４は大形な紡錘車であり、厚みもある。５も大形な紡錘車であるが、４に比しやや厚みがない。共に材質は石製である。

以上本住居跡出土遺物は多彩であり、内容的にも興味深かい様相を呈する。

36号住居跡と出土遺物

住居跡（第43図・図版38）

平面形一東西 4.8ｍ、南北4.85ｍの方形を呈し、東壁中央から南壁よりにカマドが構築されている、プランのしっかりした住居跡である。

壁一しっかりとした立ちあがりで、残存壁高40～50cmを測る。

周溝一幅20cm前後、深さ10cmのものが壁下を全周している。

床面一ローム層を掘り込み、硬く、よく踏み固められ良好な状態を示す。

柱穴一住居跡の対角線上に位置して掘られており、掘り方もしっかりしており、深さ60～70cmを測る。

カマド（第44図）

壁を半卵形に約70cm程に切り込み、火床も掘り込まれて構築されている。遺存はよく、つぶれた状態で検出された。右袖には土器を倒立させて芯として補強されている。両袖、天井部にはさまれた中間には焼土、灰が煙道部まで検出することができた。

遺物（第203図）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器３点、甑形土器１点、坏形土器１点、須恵器壺形土器１点である。図１、４はカマドより出土している。

１、２は「く」の字に外反し、胴部が直線的になる甕形土器であり、３は肩部の張る小形な甕形土器である。４、５としたが、実は同一個体であり、類例の少い大形な甑形土器である。最大径を測る口縁部は外反し、緩やかな弧状を呈して底面にいたる。内面はヘラミガキにより調整されている点が特徴的である。

６は体部下位に稜を有する坏形土器であり、７は高台の付く須恵器壺形土器である。

37号住居跡と出土遺物

住居跡（第45図・図版38）

平面形一１辺 3.4ｍの不整方形を呈し、カマドの構築された痕跡は認められなかった。また炉跡と考えられるものも検出できず。

壁一遺存よく立ちあがり、残存壁高35～50cmを測る。

周溝一東壁沿いに幅15cm、深さ10cm前後のものが検出できたのみである。

床面ー軟弱であり、凹凸も著しく、遺存はよくない。

柱穴ー検出できなかったが、ピットと長径95cm、短径55cmの長方形の掘り方が認められる。

遺物（第203・248図・図版125・126）

土器および瓦の細片が出土しており、図示しえた土器は、土師器甕形土器1点、坏形土器1点、須恵器壺形土器1点である。

図1は比較的大形な甕形土器であり、2は体部に辛じて稜を呈する坏形土器である。3は底部近くの残存であるが高台付の須恵器壺形土器であり、底面は回転ヘラケズリ調整。

瓦は細片の1点のみであり、多くは語れない。

38号住居跡と出土遺物

住居跡（第46図・図版39）

平面形ー東西4.5m、南北3.2mの長方形を呈し、北壁中央から西壁によった位置に構築されている。

壁ー残存壁高45～50cmを測り、良好な立ちあがりを示す。

周溝ー一部に検出されているも、確定的なものでない。

床面ー遺存よく、凹凸少なく、硬く踏み固められている。

柱穴ー検出できず。

カマド

壁を切り込み構築されている。残存はよくなく、焼土、粘土とも少量検出されたにとどまっている。煙道部はなだらかな傾斜をもって火床より立ちあがる様に掘られている

遺物（第204・255図・図版126・150）

出土遺物は土器と砥石があり、図示しえた土器は土師器甕形土器1点、盤形土器1点のみである。

図1は底部近くの残存であるが、大形な甕形土器と考えられる。底部に木葉痕を残し、胎土に雲母を多量に含み、胴下半にヘラミガキがある等「下野型」の甕の条件を具備した土器である。2は内外面を赤彩された盤形土器であり、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキにより調整されている。

砥石は小形品であり、断面は三角形を呈する。材質は砂岩である。

39号住居跡と出土遺物

住居跡（第47図・図版39）

平面形ー東西 4.8m、東壁長3.15m、西壁長 3.9m を測る。東、西壁長が著しくちがう。このため南壁は真直ぐに延びず、「⌐」字状に屈曲する。このためプランは「⌐」字状となり、張り出し部を有する特異なプランとなっている。カマドは北壁中央より東壁沿いに構築されている。

壁ー良好な立ちあがりを示し、壁高40cmを測る。

周溝ー一部で途切れるも幅10～15cm、深さ 5 ～10cmのものが壁下を周回している。

床面ー遺存はよく、硬く踏み固められているも張り出し部は軟弱である。

柱穴ー検出できず。

カマド（第49図）

壁を掘り込み、火床よりレンズ状のカーブをもって立ちあがらせている。天井部、袖部の粘土などは明瞭に検出できないが、火床から煙道部にかけてはかなりの焼土がつまっていた。残存は不良である。

遺物

出土遺物は微量であり、図示できる遺物はない。

40号住居跡と出土遺物

住居跡（第48図・図版40）

落ち込みを確認した段階で、数軒の住居跡が複雑に切り合っていることが認められた。最終的には 2 ～ 3 軒づつの切り合うものが、連綿としてプランが続いていた。それらは、40号47号、48号、46号、43号、50号の都合六軒となり、新旧関係について明瞭にすることはほとんどできなかった。40号住居跡と直接に切り合うのは47号住居跡である。

平面形ー東西3.25m、南北 2.5m 以上のプランで、北壁中央から東壁よりにカマドが構築されている。

壁ー立ちあがりはしっかりしており、残存壁高50cm前後を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー凹凸が著しく、かつ軟弱であり、遺存はよくない。

カマド

壁を幅35cm前後、長さ 1.4m と細長く掘り込み、煙道を形成しているが、全体の遺存はよくなく、かろうじて煙道内に焼土が少量検出できたにとどまっている。

遺物（第204図・図版126）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器２点、須恵器１点のみであり、図１はカマドより出土している。

１は短く外反し、ややつぼまり気味に底部にいたる甕形土器であり、口縁部下に僅かな稜を呈する。２は球形な胴部を呈する甕形土器であり、口縁部は独特な断面形を呈す。３はヘラ切り痕を残す須恵器坏形土器である。

41号住居跡と出土遺物

住居跡（50図・図版42）

２号掘立柱建物跡の掘り方と東壁が重複している。新旧関係については明確になし得なかった。

平面形－東西 4.1ｍ、南北3.78ｍのほぼ方形を呈し、北壁中央にカマドが構築されている。

壁－残存壁高30cmを測る。立ちあがりもしっかりしている。

周溝・柱穴－検出できなかった。

床面－平担に遺存しているが、軟弱化の傾向である。

カマド（第51図）

壁を70cm前後切り込み構築されており、切り込みは火床からなだらかな傾斜をもって立ちあがらせ、煙道としている。残存はよく、袖部からブリッヂ状に天井部が架設されていることが判明している。内部には焼土が充満していた。

遺物（第204図）

遺物は少量であり、図示しえたのは土師器甕形土器１点、坏形土器１点である。

図１は球形を呈する胴下半部のみを残存する甕形土器であり、器形、調整技法より古式な土器である。２は体部外面に軽い稜を残す坏形土器である。

43号住居跡と出土遺物

住居跡（第52図・図版40・43）

47号住居跡の南東コーナーと若干の切り合い関係にあるも、新旧関係については明確にできなかった。

平面形－東西 3.6ｍ、南北2.85ｍの方形に近いプランを呈するが、東壁は曲折している。カマドは北壁中央よりやや東に位置して構築されている。

壁－立ちあがりはしっかりしており、残存壁高20～30cmを測る。

周溝・柱穴－検出できず。

床面－凹凸はなく平担であるが、軟弱となっている。

カマド

壁を若干切り込み、火床より急角度をもって立ちあがらせ煙道部を作り出している。遺存はよく、つぶれた状態であったが、天井部、袖部とも明瞭に認められた。焼土は若干検出したにとどまっている。

遺物（第204図・図版126）

出土遺物は少く、須恵器坏形土器２点を図示しえたのみである。なお、資料編 204図42号住居跡は欠番であり、43号住居跡と訂正する。

図１は器高のある底部の大きい坏形土器であり、回転ヘラ切り後、手もちで体部下半をヘラケズリ調整している。２は器高の浅い大形な底部の坏形土器であり、底部は手もちにより全面ヘラケズリ調整されている。

44号住居跡と出土遺物

住居跡（第54図・図版43）

平面形－東西3.95m、南北 2.9m の小型で長方形を呈し、カマドは北壁中央より東壁とのコーナー近くに構築されている。

壁－良好な遺存を示し、残存壁高40～50cmを測る。

周溝－幅15cm、深さ５cm前後のものが、南壁中央から西、北壁沿いに認められる。

床面－貼り床であるが、凹凸も少なく遺存はよい。

柱穴－検出できなかったが、北西コーナープラン外のピットが柱穴となる可能性はある。

カマド（第55図）

袖部、天井部とも明瞭に認められるが、天井部は落下し、両袖間に狭さまれる状態を示し、内部に焼土、炭化物が多量に認められた。煙道は、壁を若干切り込んだだけで、火床より急激な角度をもって立ちあがっている。

遺物（第205図・図版126）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器１点、坏形土器２点、須恵器坏形土器２点である。図２はカマド、３、４は床面より出土。

１は小形な甕形土器であり、口縁部下は横位にヘラケズリ調整。２、３は体部の稜がなくなり、平底を呈する坏形土器である。４、５は比較的器高の浅い、底部の大きい須恵器坏形土器

であり、底部にヘラ切り痕を残す。

46号住居跡と出土遺物

住居跡（第56図・図版40）

48号住居跡と重複するも、新旧関係については明瞭にすることはできなかった。

平面形ー東西 5.1ｍ、南北3.75ｍの長方形に近いプランを呈し、北壁中央にカマドが構築されている。

壁ー残存する壁は、良好な立ちあがりを示し、壁高50～60㎝を測る。

周溝ー幅20㎝前後、深さ５～10㎝のものが、南壁を除く壁下を周回している。

床面ー住居跡中央部が盛りあがる状態を呈し、かなりよく踏み固められている。遺存はよい。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して４本分が掘られ、なおさらに、南壁に斜位に２本分掘り込まれている。いずれもしっかりとした掘り方である。

カマド

壁を掘り込んで構築されたものであるが、遺存がよくなく、焼土、粘土を少量検出したにとどまっている。火床は楕円形状に５～10㎝の深さに掘り凹められている。

遺物（第205図・図版126）

図示しえた遺物は、土師器甑形土器１点のみである。大形単孔の甑形土器であり、外面には丹念なヘラミガキにより調整されている。

47号住居跡と出土遺物

住居跡（第48図・図版40）

40号、48号、43号、50号住居跡の４軒と重複するも、新旧関係については、いずれのものとも明瞭にできなかった。

平面形ー東西 3.9ｍ、南北 3.1ｍのほぼ方形を呈し、カマドは北壁中央から東壁によった位置に構築されている。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高40㎝を測る。

周溝・柱穴ー検出できなかったが、西壁にピットが斜行して掘られている。あるいは柱穴と考えられるかもしれない。

床面ー軟弱であり、凹凸も認められる。

カマド（図版41）

壁を約60cm前後「V」字状に掘り込み、構築されているが、全体的に遺存はよくなかった。しかし、瓦を両袖の芯として使用している。右袖に鐙瓦、左袖に男瓦を使用している。構築時にはしっかりとした作りであったと考えられる。最終的に両袖に使用された瓦は一個体となった。

遺物（第205、248図・図版126、127）

出土遺物は土器および瓦であり、瓦はカマドの袖に利用されている。図示しえた土器は、土師器甕形土器1点、坏形土器1点、須恵器蓋形土器1点、坏形土器1点である。図3は床面より出土している。

1は肩部に張りをもち、口唇部が直立する甕形土器であり、2は内面を内黒処理した坏形土器である。底部は糸切り痕を残し、底部外面に墨書されているが、判読不可能である。3はツマミを欠く須恵器蓋形土器であり、4は底部および体部下端を手もちヘラクズリ調整された坏形土器である。

瓦は2点図示しており、共にカマドより出土している。図7は鐙瓦であり、下野薬師寺102Aと同笵である。文様面の残存は一部であるが、外区に面違い鋸歯文を配する八葉複弁蓮華文である。8は平瓦の細片である。

48号住居跡と出土遺物

住居跡（第48図・図版40）

46号、50号住居跡と重複関係にある。46号住居跡との新旧関係は不明であるが、50号住居跡との新旧については、48号住居跡のカマドが、50号住居跡の北西コーナーを利用して構築されていることが認められており、新旧については新が48号住居跡、旧が50号住居跡となる。

平面形ー東西4.2m、南北3m以上を呈するプランで、北壁のほぼ中央にカマドが構築されている。

壁ー立ちあがりは垂直ぎみであり、残存壁高40cm前後を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー軟弱であるが平担であった。

カマド（第57図・図版42）

50号住居跡の西壁が左袖に、北壁が煙道の一部として切り込まれており、遺存はよい。両袖、天井とも明瞭に残っており、これらの中間には焼土が多量に認められた。火床は卵形に掘り凹められている。

遺物（第207図）

図示しえた遺物は、土師器のみであり、甕形土器１点、埦形土器１点、坏形土器２点である。４点とも全てカマドより出土している。

図１は底部のみの甕形土器であり、２は内面がヘラミガキされた大形の埦形土器である。３、４は体部外面の稜が退化した比較的大形の坏形土器である。

49号住居跡と出土遺物

住居跡（第58図・図版43）

平面形一東西５ｍ、南北3.65ｍの不整長方形を呈し、カマドが北壁中央より東壁によった位置に構築されている。

壁一垂直ぎみに立ちあがり、良存し、残存壁高15～40cmを測るが高低差がある。

周溝一幅、深さ15cmのものが壁下を全周している。

床面一遺存良好であり、プラン中央部が盛りあがり、周囲（壁に向って）にゆくにつれて低くなり、傾斜を持っている。

柱穴一西壁中央と東壁中央に掘られたものが柱穴と考えられる。深さ40cm前後である。

カマド（第59図）

壁を楕円形に掘り込み、煙道部を形成し、火床は掘り凹められている。天井部は認められないが、広範囲に粘土が残存しており遺存はよい。火床から煙道への立ちあがりはなだらかな傾斜をもっている。

遺物（第206図・図版127）

本住居跡よりは多量な土器が出土しており、図示しえた遺物は、土師器甕形土器４点、坏形土器６点、須恵器蓋形土器１点、坏形土器５点である。図２、３、４はカマドより出土している。

１、２は口唇部が直立するやや大形の甕形土器であり、３はやや外湾気味に口縁部がたちあがる薄手の甕形土器である。４は外面がヘラケズリされた厚手の土器であり、底部のみの残存である。

５～８は内面黒色処理された坏形土器であり、６は小形品である。８は底部の大きな土器であり、底部は糸切り後、回転ヘラケズリ調整。９、10は外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキされており、10の底部外面に「運」の墨書がある。

11はツマミを欠く小形の蓋形土器である。12、13、14は底部全面および体部下端を手もちにによりヘラケズリ調整された坏形土器であり、15、16は底部に糸切り痕を残す。

50号住居跡と出土遺物

住居跡（第48図・図版40）

47号、48号住居跡と重複している。48号との新旧は前述した様に明確であるが、47号との新旧については明確でないが、カマドを有する住居跡であるならば、47号が新しい可能性があるが明確にできなかった。

平面形ー東壁長 2.3m、南壁長 1.8m と北西コーナーの一部を検出しただけであり、平面形等についても不明の点が多い。

壁ー垂直に立ちあがり、残存壁高40cmを測る。

周溝ー幅25cm、深さ10cmのものが検出されている。

床面ーよく踏まれ、硬くしまっている。

柱穴ー検出できず。

カマド

削平されたのか、構築されなかったのか、不明である。

遺物

細片のみであり、図示できる遺物はない。

51号住居跡と出土遺物

住居跡（第60図・図版44）

平面形ー東西3.15m、南北 3 mの方形を呈する小型プランである。カマドは北壁と東壁に構築されていた。東西に溝が貫通している。

壁ー良好な立ちあがりを示し、残存壁高35cmを測る。

周溝ー南壁の一部と東壁を除いて、幅15cm、深さ 5 cmのものが周回している。

床面ー平担となっているが軟弱である。

柱穴ー検出できず。

カマド（61図）

東壁に構築されたものは、貫通する溝により大部分が破壊されており、焼土と壁の切り込みが認められたのみである。北壁のものも右袖が削平され、かつまた遺存はよくない。壁を「U」字状に大きく切り込み構築されている。袖部、天井部等を明確に指摘できなかった。新旧関係も明らかでない。

遺物（第207・249図）

出土遺物は土器が少量であるが、瓦は多量に出土している。図示しえた土器は須恵器坏形土器１点のみであり、やや小形な土器で底部に糸切り痕を残す。

図示した瓦は８点であり、図３、４は男瓦である以外は全て女瓦片である。２の外面は撚糸文であり、表面には模骨痕が認められる。７の裏面には格子目の大きい型押文が押捺されている。

53号住居跡と出土遺物

住居跡（第62図・図版44）

平面形－東西3.23m、南北3.15mの方形を呈する小形住居跡である。カマドは東壁中央より南壁沿いに構築されている。

壁－床面より良好な立ちあがりを示し、壁高30～35cmを測る。

周溝－南壁下から西壁下中途まで幅20cm前後、深さ７cm前後のものが検出された。

床面－良存するも軟弱である。

柱穴－検出できず。

カマド（第63図）

残存は悪く、粘土の広がりも的確には検出できなかった。壁を60cm切り込みなだらかな傾斜をもって立ちあがらせ、煙道部を形成している。火床は一度掘り込まれてから再度張り床とされている。右袖にあたる位置に袖部の芯として利用された河原石が見られた。

遺物

出土遺物は微量であり、図示可能な遺物は認められない。

54号住居跡と出土遺物

住居跡（第64図・図版45）

平面形－東西4.27m、南北4.14mで、西壁長よりも東壁長の長い不整方形である。カマドは北壁中央より著しく東壁沿いに偏在し、右袖がコーナーに接して構築されている。

壁－壁高40～50cmを測り、緩傾斜をもって立ちあがっている。

周溝－東壁中途で切れ、幅35cmと広くなるが、おおむね幅15～20cm、深さ５cm。

床面－西に傾斜ぎみであるが遺存状態は良好である。

柱穴－検出できなかった。

カマド（第65図）

壁が若干掘り込まれ、右袖の位置が東壁に接してしまう北東コーナーに構築された。残存はは比較的良好であり、袖部、天井部とも確認することができた。粘土に囲まれる内部には焼土が充満していた。火床は若干掘り凹められている。

遺物（第204図・図版127・128）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器１点、須恵器蓋形土器１点、坏形土器４点であり、図５はカマドより出土している。

１は球形を呈し、最大径を胴部央に有する甕形土器であり、胴部上位は横位に下位は縦位にヘラケズリされている。２は器高の浅いツマミを欠く蓋形土器である。

３～６は坏形土器であり、３、４はヘラ切り、５は糸切り痕を底部に残し、６は底部全面から体部下端にかけて手持ちによるヘラケズリ調整されている。なお４の体部体面には重ね焼きの際生じる「火ダスキ」が認められる。ヘラ切り、糸切り、手持ちのヘラケズリの三技法の坏形土器が共伴している点興味深かい。

55号住居跡と出土遺物

住居跡（第66図・図版44・45）

平面形ー東西 3.4ｍ、南北３ｍのほぼ方形を呈し、東壁の南東コーナーにカマドが構築されている。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高30cmを測る。

周溝ー幅15cm、深さ５～10cmのものが壁下を全周している。

床面ー平担であるが、踏み固めがなされておらず、軟弱である。

柱穴ー検出できず。

カマド

遺存はよくなく、焼土、粘土とも少量検出されたにすぎず、煙道も壁を切り込んでは構築されていない。

遺物（第207図・図版128）

出土遺物は少量であり、図示しえたのは、須恵器坏形土器１点のみである。器高のやや深い坏形土器である。底部はヘラ切り後、全面手もちヘラケズリ調整しており、胎土に雲母、長石などを含む土器である。

60号住居跡と出土遺物

住居跡（第68図・図版46）

両壁が調査区域外となっている。しかし若干の未確認部分を残すのみと考えられる。

平面形ー東西 4.1ｍ、南北3.45ｍの東西にやや長い形のものである。カマドは北壁中央やや東壁よりに偏在して構築されている。

壁ー残存壁高55㎝を測る。立ちあがりはほぼ垂直である。

周溝・柱穴ー検出できなかった。

床面ーよく踏み固められており、パリパリの状態を示す。

カマド（第69図）

壁を半円形状に掘り込み構築されているも残存不良で、焼土、粘土とも少量検出されたにすぎない。火床は一度掘られカマド構築の時点で埋めもどされ、なだらかな煙道に続く。

遺物（第208図・図版128）

図示しえた遺物は土師器のみであり、甕形土器１点、坏形土器２点である。

図１は、最大径を有する大きく外反する口縁部よりほとんど膨らみをもたず底部にいたる甕形土器である。胴部は縦位ヘラケズリされており、ヨコナデされた口縁部下の接点に僅かな稜を有する。

２、３は坏形土器であり、２は体部が半球形状を呈し、３は体部外面下位に稜を有し、内面が段を呈する土器である。

61号住居跡と出土遺物

住居跡（第70図・図版46・47）

北西コーナーが調査区域外となっている。当該住居跡は火災にあったものと思われ、炭化材列が著しく検出されている。

平面形ー東西 4.1ｍ、南北 4.3ｍのほぼ方形を呈する。西壁は若干内彎する。

壁ーゆるやかな傾斜をもって立ちあがり、壁高35㎝前後を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー良存している。

炉跡ープラン中央部床面を若干掘り凹めてあり、少量の焼土が認められた。

遺物（第209図・図版128、129）

床面より炭化物が認められることより焼失家屋と考えられ、住居跡南東コーナー周辺および

西壁沿いに土器が比較的多量に出土している。

図示しえた遺物は、土師器のみであり、甕形土器２点、甑形土器１点、壺形土器１点、坩形土器１点、器台形土器３点である。図５、６、９は床面出土。

図１は口縁部のみ、２は胴下半部のみ残存する甕形土器である。２は球形を呈する大形の土器である。

３はやや長胴な球形を呈する胴部より小さく口縁部が外反する土器であり、焼成後、底部を穿孔して甑形土器として使用したと考えられる。

４は最大径を胴部に有し、口縁部が鋭く外反し、内面に稜を呈する壺形土器である。５、６はやや偏平な感じの坩形土器であり、５は椀形土器に近い器形を呈し、６は内外面とも丁寧にヘラミガキされている。

７、８、９は脚部がラッパ状に開き、裾部が大きく開く器台形土器であり、ヘラミガキされた器受部と相俟ってバランスの良い土器である。３点とも焼成は良好である。

63号住居跡と出土遺物

住居跡（第71図・図版48）

落ち込み確認の段階で二軒の住居跡が重複することが判明した。このため土層観察ベルトを残存させ調査した結果、新旧関係は67号住居が新、63号住居跡が旧となることが判明した。

平面形－東西は推定５ｍ、南北 3.7ｍの長方形を呈し、北壁のほぼ中央にカマドが構築されている。

壁－床面より垂直に立ちあがり、残存壁高70㎝を測る。

周溝－幅15㎝、深さ８㎝のものが壁下を周回している。

床面－遺存よく、凹凸は少ない。

柱穴－検出できず。しかし、プラン中央に掘られているピットが確当するかもしれない。

カマド

壁を切り込み構築し、なだらかな傾斜をもたせて煙道部を作り出しているも残存は悪い。右袖の一部が残っているのみであり、焼土はあまり検出できなかった。

遺物（第208図）

図示しえた遺物は、土師器坏形土器１点、須恵器坏形土器１点と少量である。

図１は内面を黒色処理した坏形土器であり、底部に糸切り痕が認められる。２は底部に僅かにヘラ切り痕を残す須恵器坏形土器の小片である。

64号住居跡と出土遺物

住居跡（第73図・図版48）

平面形－東西4.57m、南北4mの方形を呈し、東壁は他壁に比して短かい。カマドは北壁中央よりやや東壁沿いに構築されている。

壁－良好な立ちあがりで、壁高55～60cmを測る。

周溝－幅20～25cm、深さ5cm前後のものが壁下を周回している。

床面－凹凸も少なく、良存し、よく踏み固められている。

柱穴－検出できず。

カマド（第75図）

壁を切り込み構築し、ゆるやかな立ちあがりを持たせている。袖部、天井部とも粘土の残存が良好である。また、粘土に囲まれる内部には焼土が多量に残存しており、かなり長期にわたり使用されたことが知れる。

遺物（第208・255図・図版129・150）

図示しえた遺物は、土師器坏形土器2点、須恵器蓋形土器1点と砥石1点である。

図1は、体部外面に稜をなし、対応する内面にも稜を呈する大形の坏形土器であり、2は体部外面に稜を内面に段を呈する坏形土器である。

3は端部が内傾し、宝珠形のツマミを付された大形の蓋形土器である。

砥石は、小形の完形品であり、端部に円孔があることより携提用として使用されたと考えられ、表面は、使用痕が著しい。材質は砂岩である。（図10）

65号住居跡と出土遺物

住居跡（第74図・図版49）

平面形－東西4.45m、南北3.75mの方形を呈する。西壁が短かくなっている。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。

壁－なだらかな傾斜をもって立ちあがり、壁高55～60cmを測る。

周溝－一部で途切れるも幅10～20cm、深さ5cm前後のものが壁下を周回している。

床面－よく良存しており、特にプラン中央部は硬く、パリパリの状態を示す。

柱穴－検出できず。

カマド（第66図）

壁外に30cm程の切り込みをいれている。立ちあがりは急角度をもつ。残存は悪いが、火床が

10cm程度掘り凹められ、再度貼り床状にされた上部に焼土が多量に認められた。

遺物（第208図）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器１点、須恵器蓋形土器１点であり、甕形土器はカマドより出土している。

図１は、最大径を「く」の字に外反する口縁部に有する甕形土器であり、胴部は僅かに膨みをもつようである。

２は、端部を欠く蓋形土器であり、偏平な宝球形ツマミが付されている。

66号住居跡と出土遺物

住居跡（第77図・図版49・50）

平面形－東西5.27m、南北4.72mのほぼ方形を呈する。各コーナーは隅丸となっている。

壁－しっかりした立ちあがりではあるが、壁高15～20cmと低い。

周溝・柱穴・炉跡－検出できず。

床面－平垣ではあるが軟弱である。

遺物（第209・210図・図版129・130）

本住居跡よりは、土師器のみではあるが、比較的多量に土器が出土している。図示しえた土器は、甕形土器４点、椀形土器１点、器台形土器３点であり、図３、７は床面より出土している。

１は胴部やや下位に最大径を有し、口縁部がくの字に外する大形の甕形土器である。３、４は球形の胴部より口縁部が短く直立気味に外反する小形の甕形土器である。

５は、口縁部が屈曲して端部が垂直にたつ独特の器形を呈する椀形土器である。折り返し口縁であり、内外面とも丹念にヘラミガキされた類例の少い土器である。

６、７、８は３点とも器台形土器であるが、６は裾部が大きく開きバランスの良い比較的大形な土器である。７、８は器受部、脚部とも直線的であり、小形な土器である。

67号住居跡と出土遺物

住居跡（第71図・図版48）

63号住居跡と新旧関係にある。新旧は63号住居跡が旧く、67号住居跡が新しい。

平面形－東西３m、南北3.2mのほぼ方形を呈し、カマドが北壁中央より東壁よりに構築されている。

壁一重複部分を除いて遺存はよく、残存壁高50cm前後を測る。

周溝・柱穴一検出できず。

床面一多少の凹凸は認められるが、良存している。

カマド（第79図）

壁を「V」字状に切り込み構築されているが、押しつぶされた状態で検出されている。床面を掘り凹め、天井、袖部によって囲まれた内部には焼土が充満していた。煙道はなだらかな傾斜をもって立ちあがっている。

遺物

63号住居跡と重複関係にあり、63号同様遺物は少く、図示可能な遺物は認められない。

68号住居跡と出土遺物

住居跡（第78図・図版50）

平面形一東西4.9m、南北4.95mの方形を呈する。各コーナーは隅丸となる。カマドは北壁中央より若干東壁よりに構築されている。

壁一ほぼ垂直に立ちあがり、壁高60～65cmを測る。

周溝一幅10～20cm、深さ5cmのものが壁下を周回している。

床面一良存している。

柱穴一住居跡の対角線上に位置してしっかりと掘り込まれている。しかし、南東コーナー上に位置する1本分については検出できなかった。

カマド（第80図）

よく残っており、袖部の立ちあがりは、プランの下端と同位置となっており、壁を大きく切り込み、切り込んだ部分から袖部を形成してきている。煙道部の立ちあがりはなだらかな傾斜を持たせている。天井部については土層でも明確に検出することができなかった。

遺物（第210・256図・図版130・151）

出土した遺物は土器および紡錘車であり、図示しえた遺物は、土師器甕形土器1点、盤形土器1点、須恵器坏形土器1点、高台付坏形土器2点、蓋形土器1点、紡錘車1点である。

図1は、口縁部が短く外反する小形の甕形土器である。2は内外面とも赤彩され内面および外面下半がヘラミガキされた大形の盤形土器である。

3は底部の小さく、体部が直線的にたちあがる坏形土器であり、底面にはヘラ切り痕を残す。4は低く、大きく外傾する高台を持つ小形の高台付坏形土器であり、高台は削り出されたものか。高台のあり方に特徴のある土器である。5は高台を欠く大形の土器。6は偏平な宝球形ツ

マミの付された蓋形土器であり、口縁端部を欠く。

紡錘車は小形の完形品であり、材質は石製である。（図７）

69号住居跡と出土遺物

住居跡（第81図・図版52）

プランの⅓弱が調査区域外に、また74号住居跡と重複している。新旧関係については明確にすることはできなかった。

平面形ー東西 5.5ｍ以上、南北6.02ｍを呈する。カマドは北壁の中央よりやや右よりに構築されていたと考えられる。

壁ー良存し、床面より垂直に立ちあがり、壁高60cmを測る。壁上端のくずれが認められる。

周溝ー西壁と南壁沿いに幅20cm、深さ10cmのものが検出された。

床面ーよく踏み固められており、遺存状態はよい。

柱穴ー位居跡の対角線上に位置して掘り込まれたと考えられる。検出できたものは３本分である。掘り方はしっかりしており、深さ50～70cmを測る。

カマド（第82図）

壁を40cm程掘り込まれ構築されている。天井部については明瞭にできなかったが、袖部には粘土が残存し、中間にはかなりの焼土が充満している。煙道は若干掘り凹められた火床よりゆるやかな傾斜のもとに立ちあがっている。残存は良好であった。

遺物（第210図）

図示しえた遺物は、土師器盤形土器１点、須恵器蓋形土器１点のみと少量である。

図１は、内外面とも赤彩された大形の盤形土器である。内面は全面ヨコナデ後、螺線状に暗文が施されており、盤形土器の暗文は、本遺跡では唯一であり、特筆しておきたい。

２はツマミを欠く比較的大形の蓋形土器。

70号住居跡と出土遺物

住居跡（第83図・図版53）

平面形ー東西 4.4ｍ、南北2.55ｍの長方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。

壁ー残存のよい位置で28cm前後を測るが、全体的には崩壊が著しい。

周溝ー一部についてのみ検出できただけである。

床面ー全体が貼り床となっており、遺存は悪かった。

柱穴ー検出できなかったが、小ピットが数個床面に掘られており、あるいはこれが該当するかもしれない。

カマド（第84図）

壁を若干掘り込み構築されているも、遺存不良で、構築材としての粘土も、焼土なども少量検出できたのみである。

遺物（第210図・図版130）

図示しえた遺物は、土師器坏形土器２点のみであり、図２は床面より出土している。

１は体部外面に稜を有する坏形土器であり、２は１に比し稜は退化しており、口縁部が僅かに外湾気味に開く。

71号住居跡と出土遺物

住居跡（第85図・図版53）

Ｐ－１、Ｐ－２と重複している。新旧は、住居跡を切って、Ｐ－１、Ｐ－２が掘り込まれている。

平面形ー東西3.95m、南北 2.7ｍの長方形を呈する。カマドは、北壁中央から東壁側に構築されている。

壁ーほぼ垂直に床面より立ちあがり、壁高40～45cmを測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ープラン中央部では硬く踏み固められているが、周辺部にては凹凸があり軟弱化している。

カマド（第86図）

壁を25cmと浅く切り込んで構築されたが、遺存は不良で、火床に位置する個所に焼土がかなり検出できたのみである。煙道部の立ちあがりはかなり急激である。

遺物（第211、257図・図版130）

図示しえた遺物は、土師器坏形土器１点、須恵器坏形土器１点、鉄製品刀子１点である。土師器坏形土器は、カマドより出土している。

図１は、体位外面下位に僅かに稜を呈する坏形土器であり、２は底部の小さい体部が直線的にたちあがる坏形土器である。底部および体部下端まで手もちのヘラケズリによって調整しており、ロクロ目が明瞭な体部外面には「日」と墨書されている。須恵器に墨書されている事例は少く、注目したい。

鉄製品は刀子１点であり、遺存状態が悪い。平棟造りの小形な刀子であり、鋒、茎の一部は欠損しており、関も不明瞭である。

72号住居跡と出土遺物

住居跡（第89図・図版54）

北西コーナーが１部調査区域外となり、全体プランは検出することはできなかった。

平面形ー東西6.55m、南北 6.5m の方形を呈する大型住居跡である。カマドは北壁中央に構築されている。

壁ー垂直に立ちあがり、残存壁高70cm前後を測り、高い。

周溝ー幅20cm、深さ10cmのものが、北東コーナーを除いて壁下を全周している。

床面ー硬く踏み固められており、なおかつ平担であり、遺存は非常によい。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して掘り込まれている。掘り方はしっかりしており、深さ70～80cmを測る。

カマド（図版54）

遺存よく、粘土で構築された、天井部、袖部とも構築時に近い形で残存し、内部には焼土等が多量に充満していた。また煙道部は壁を切り込んで、火床よりなだらかな傾斜をもって立ちあがらせている。両袖が壁と接する位置の右左に小ピットが掘られており、カマドに付随する施設に利用されたものではないかと考えられる。

遺物（第211・257図・図版130）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器２点、坏形土器２点、須恵器壺形土器１点、鉄製品刀子１点である。図１、２の甕形土器は同一個体と考えられ、４の坏形土器と共にカマドより出土している。

１、２は、最大径を有し、大きく外反する口縁部より直線的に下がり、胴下半部でや収縮気味に木葉痕を残す底部にいたる甕形土器である。胴部外面は、縦位のヘラケズリ、内面はヘラナデによる調整。３は口縁部が外湾する甕形土器であり、１に比しやや胴部が張る。

４は体部外面に稜を有し、底部が丸底気味になる比較的大形の坏形土器であり、５は半球形状を呈する小形な坏形土器である。６は球形な胴部に「八」の字形を呈する高台が付された須恵器壺形土器である。

鉄製品は刀子が１点出土しており、茎の端部が欠損している以外、ほぼ完形に近い。平棟造りの刀子であり、身は12cmを測る。関は不明瞭であり、鋒はやや丸味を帯びる。

73号住居跡と出土遺物

住居跡（第87図・図版55）

平面形ー東西４ｍ、南北 2.8ｍ（東壁）、 3.3ｍ（西壁）と長さが異なりのある不整方形を呈する。カマドは北壁中央よりやや東壁沿いに偏在して構築されている。

壁ー良好な立ちあがりで、残存壁高35㎝前後を測る。

周溝ー幅15㎝、深さ５㎝前後のものが、東壁から南、西壁にかけて検出されている。

床面ー遺存はよく、硬く踏み固められている。

柱穴ー検出できなかったが、南壁、西壁が一部切られて浅い掘り込みが認められるも、柱穴とするには疑問ののこるものである。

カマド（第88図）

壁を70㎝程度掘り込み構築されている。特異な構築法が認められている。つまり、住居跡構築の段階で、左袖に位置する部分のローム層を意識的に残し、そのまま左袖として利用している点である。残存は不良であったが、火床にあたる部分より前面にかけてかなりの数の土器（土師器が主体）が出土している。

遺物（第211・212・251図・図版130）

図示しえたのは、土師器甕形土器２点、須恵器壺形土器１点、須恵器土製円板１点であり、甕形土器２点および男瓦片２点は、カマドより出土している。

図１は、口縁部が「コ」の字状を呈し、肩部に張りをもち、胴部やや上位に最大径を有し、小形な底部にむかってすぼまる薄手の甕形土器である。この系統の土器の中では大形の土器である。胴部上位は横位に、それ以下は斜位ないし縦位にヘラケズリされている。２も１とほぼ同様な甕形土器であるが、口縁部がより明確に「コ」の字状を呈する。

３は胴下半のみの残存であるが、厚手の須恵器壺形土器であり、４は須恵器坏形土器の底部を利用した土製円板と思われる。

瓦は、２点ともカマドよりの出土であり、図２は裏面に13×？の型押が観察される。

74号住居跡と出土遺物

住居跡（第81図・図版52）

69号住居跡と新旧関係にある。新旧については明確にできなかった。カマドの位置についても不明である。

確認されたのは北壁60㎝、西壁 2.3ｍであり、全体のプランを伺い知ることはできない。床

面は一部では比較的良好な遺存状態を示している。

遺物（第212図）

調査した範囲が一部であり、図示しえた遺物は土師器坏形土器１点のみである。

図１は、胴部下位に僅かに稜を有する坏形土器であり、器高が浅く、底部はかなり平底気味となる。

75号住居跡と出土遺物

住居跡（第91図・図版55）

一部北東コーナーが調査区域外となり、未調査部分がある。

平面形－東西4.56m、南北5.85mの方形を呈する。カマドは東壁中央より南壁沿いに構築されている。

壁－残存壁高40cmであり、ほぼ垂直に立ちあがる。

周溝－幅10～15cm、深さ10cmのものが、壁下を周回している。

床面－良存しており、よく踏み固められ、一部プラン中央ではパリパリの状態である。

柱穴－検出できないが、小ピットが３ヶ程認められるが性格については不明。

カマド（第92図）

崩壊した状態であったが、袖部、天井部も明瞭に検出することができた。煙道部の一部がピットによって切られているが、幅50cm前後、長さ60cm以上にわたり壁を掘り込んでいる。煙道部が細長くなっている。火床は平担である。

遺物（第212図・図版130）

図示しえた遺物は、土師器坏形土器２点、須恵器蓋形土器１点であり、坏形土器は２点とも床面よりの出土である。

図１は、体部外面に稜を有し、体部が内湾気味にたちあがり、端部がやや肥厚する坏形土器である。

２は、平底を呈するやや大形な底部より体部が、直線的にたちあがる坏形土器である。体部外面は端部近くまで底部もヘラケズリされている。内面は全面ヨコナデ後、体部に斜格子状の、底面に螺線状の暗文が施されている。坏形土器の製作技法上も留意すべき土器であるが、さらに暗文が施されており、暗文は本遺跡出土坏形土器では唯一の例であり、稀有な土器として注目しておきたい。

３は口縁端部を欠く、偏平な宝球形のツマミを有する須恵器蓋形土器である。

76号住居跡と出土遺物

住居跡（第93図・図版56）

平面形－東西3.55m、南北2.65mの長方形に近い小型の住居跡である。カマドは北壁中央よりやや東壁沿いに構築されている。

壁－立ちあがりは良好な状態を示し、壁高35～45cmを測る。

周溝・柱穴－検出できなかった。

床面－プラン中央部が凹んでいるが、良存している。

カマド（第94図）

壁が50cmにわたって切り込まれて、若干掘り凹められた火床よりなだらかに立ちあがっている。遺存は不良であり、若干の粘土と焼土の出土が認められただけである。

遺物（第212図・図版130）

図示しえたのは、須恵器坏形土器1点のみのと少量である。

体部が直線的にたちあがり、端部が僅かに外反する坏形土器である。体部外面には火ダスキが認められ、底部はヘラ切り後、全面手もちのヘラケズリ調整されている。

77号住居跡と出土遺物

住居跡（第96図・図版50）

平面形－東西5.3m、南北5.7mの方形を呈する。大型の住居跡である。カマドは北壁中央より東壁沿いと東壁中央よりやや南壁沿いの2ヶ所に構築された。

壁－残存壁高50～70cmを測る。立ちあがりは垂直な位置と傾斜の位置があるものの良好な立ちあがりを示す。

周溝－幅20cm、深さ5～10cmのものが壁下を周回している。

床面－良存しており、プラン中央部はよく踏み固められている。

柱穴－住居跡の対角線上にしっかりとした掘り込みがなされている。深さ50～75cmである。南壁中央直下に小ピットあるも性格については不明。

カマド（第95図・図版57・58）

壁を「凸」字状に90cm程掘り込み、また火床も若干の凹みを作りその上に粘土を厚く貼りつけている。この粘土の張りつけはカマドの全面に貼りつけられていた。遺構はつぶれた状態で検出されており、焼土についてはあまり認められず、火床中央から甕が倒立して出土しており、支脚に利用されていた。東壁にも構築されていたが、北にカマドを移動させた時点で、破壊さ

れたものと考えられる。若干の焼土が認められたのと、煙道が存在するのみであった。

遺物（第212図・図版131）

図示しえた遺物は、すべて土師器であり、甕形土器３点、盤形土器１点である。図１、２はカマド、３は床面よりの出土である。

１は、口縁部が「く」の字に外反し、胴部中位にやや膨らみを有する甕形土器である。胴部上位は指ナデ、それ以下は粗いヘラケズリにより調整されている。

２、３は口縁部が外湾する甕形土器であり、３で明瞭なようにクシ状具により胴部が調整されている。４は、半球形状を呈する小形な盤形土器であり、内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリ後、粗いヘラミガキにより調整されている。

78号住居跡と出土遺物

住居跡（第98図・図版58）

平面形－東西4.53m、南北4.58mの方形を呈する。各コーナーは若干隅丸ぎみとなる。カマドはほぼ北壁中央に構築されている。

壁－垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高55～65cmを測る。

周溝－幅13～20cm、深さ５～８cmのものが壁下を周回している。南壁下中央からプラン内にに約80cm程張り出す。

床面－硬く踏み固められ、パリパリの状態で遺存していた。

柱穴－住居跡の対角線上に位置して深さ35～55cm程に掘り込まれている。掘り方はしっかりしている。プランの大きさに比して柱間距離が狭まい。

カマド

壁を80cm前後「U」字状に掘り込み、なだらかな傾斜をもって火床より立ちあがらせているも、天井部、袖部や焼土の検出もあまりなく、残存がよくないカマドである。

遺物（第213・258図）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器１点、鉄製品２点であり、甕形土器はカマドより出土している。

図１は、口縁部が直線的に外反し、胴部が垂直にさがる小形な甕形土器である。

鉄製品は２点とも断片であり、鉄鏃の篦被、茎の一部であり、断面は四角形を呈する。図６は、篦被、茎が残存しており、棘状突起が認められる。（図５、６）

79号住居跡と出土遺物

住居跡（第99図・図版59）

平面形ー東西5.15m、南北4.5mの方形を呈する。各コーナーは若干隅丸となる。カマドは北壁中央に構築されている。

壁ー垂直ぎみに立ちあがり、壁高55～65cmを測る。

周溝ー北壁下の一部を除いて幅10～30cm、深さ5cmのものが周回している。

床面ー遺存は非常に良好であり、よく踏み固められ、パリパリの状態である。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して掘り込まれている。掘り方はしっかりしており、深さ60～75cmを測る。

カマド（第100図）

天井部が落下した状態であり、残存はよくない。壁を切り込んで火床面よりなだらかな傾斜をもたせて立ちあがらせ、煙道部としている。火床には焼土が薄い層をなして検出された。

遺物（第213図・図版131）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器1点、椀形土器1点、坏形土器3点、須恵器坏形土器1点、蓋形土器1点と比較的多種な器種が認められる。図1、2はカマドより、7は床面より出土している。

1は、口縁部が大きく外湾し、端部が垂直に立つ断面形を呈し、胴部は球形を呈すると考えられる大形の甕形土器である。

2は、体部が内湾気味にたちあがる器高のある椀形土器であり、体部外面は横位のヘラミガキ調整。3は半球状を呈する小形な坏形土器であり、外面はヘラミガキ調整。4、5は僅かに体部外面下位に稜を残す坏形土器である。

6は、やや大きめの底部より直線的に体部がたちあがる坏形土器。底面および体部下端は回転ヘラケズリ調整である。体部外面にヘラ記号が認められる。「中」か？

7は蓋形土器であり、ツマミは著しく偏平化している。

80号住居跡と出土遺物

住居跡（第101図・図版59）

平面形ー東西3.83m、南北3.45mの不整方形を呈する。北西コーナーは著しく隅丸となる。カマドは北壁中央より北東コーナーに近い位置に構築されている。

壁ー残存壁高40～45cmを測り、若干傾斜ぎみに立ちあがる。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ーほぼ平担に良存している。

カマド（第103図）

壁を20cm程切り込み、火床より垂直に立あがらせている。残存は悪く、両袖部に使用された粘土ブロックと、その中間（火床）に焼土が検出されたのみである。天井部は明瞭にすることはできなかった。

遺物（第213図・図版131）

図示しえた遺物は、土師器盤形土器１点、坏形土器１点、須恵器坏形土器１点であり、盤形土器はカマドより出土している。

図１は、偏平な半球形状を呈する盤形土器である。内面は丹念なヘラミガキ、外面はヘラケズリにより調整されている。２は体部外面下位に辛じて稜を呈する坏形土器であり、底部は平底に近い。

３は、器高の浅い、底部の大きな坏形土器であり、底部はヘラ切り後、回転ヘラケズリ調整。

81号住居跡と出土遺物

住居跡（第102図・図版60）

平面形ー東西 5.7ｍ、南北5.55ｍの方形を呈し、カマドは北壁中央に構築されている。

壁ー斜角度をもって立ちあがり、残存壁高50～60cmで良存している。

周溝ー幅20cm、深さ10cmのものが、壁下を周回している。

床面ー遺存がよく、固く踏み固められている。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置しており、掘り込みもしっかりしている。１ヶ所の掘り方に柱痕が認められており、柱痕は直経10cmを測る。

カマド（第104図）

遺存はあまりよくない。壁を「U」字状に30cm程度切り込み、床面よりほぼ垂直に立ちあがらせ煙道部を作り出している。火床にあたる部分には焼土がぎっしりと詰まった状態で認められる。天井部、袖部に粘土が多く使用された痕跡は認められず、黄褐色土、茶褐色土を主に使用している。火床は若干掘り凹められている。

遺物（第214・255・261図・図版131・150）

出土遺物は、多様であり土器以外に砥石、貨幣が出土している。図示しえた土器は、土師器甕形土器１点、盤形土器１点、坏形土器４点であり、図１、４はカマドより、２は床面より出土している。

1は、やや外傾してたちあがる口縁部と球形を呈する胴部よりなる厚手の甕形土器である。2は、半球形状を呈し、内外面とも赤彩されたやや大形の盤形土器であり、外面ヘラケズリ、内面はヘラミガキにより調整されている。

3～6は坏形土器であり、3は体部外面の稜がほとんどなくなり、平底を呈し、4は体部外面が稜、内面が段を呈する土器である。5、6は器高の浅い、小形な土器であり、カワラケに類似する。6の底部には糸切り痕を残す。

砥石は1点出土しており、小形品である。かなり使用されたと考えられ、磨耗が著しい。材質は砂岩である。（図11）

貨幣は3点出土しており、和同開宝の範となった開元通宝（唐高祖、621）2点、皇宋通宝（宋仁宗、1039）1点が出土している。住居跡出土の貨幣は住居跡構築の上限年代を知る好資料であるが、本住居跡の場合貨幣は覆土より出土しており、皇宋通宝の示す年代と土器では大きな差異が認められる。

82号住居跡と出土遺物

住居跡（第105図・図版60・61）

落ち込みを確認した段階で、重複関係にあることが判明した。重複は83号住居跡との間でなされており、新旧関係は、82号住居跡内に83号住居跡のカマドが構築されていることが判明し、明確になった。新旧は82号→83号住居跡である。

平面形ー東西5.73m、南北5.58mのほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。

壁ー残存壁高50cmを測り、立ちあがりもしっかりしている。

周溝ー検出できず。

床面ー遺存はよく、平担となっている。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して掘り込まれている。掘り方はしっかりしている。

カマド（第106図）

83号住居跡構築の時点で、左袖が切られていると同時に、残存は比較的良好である。壁を25cmと短かく掘り込み、火床から急角度をもって煙道部が作り出されている。焼土の検出量は少なかったが、右袖の粘土は残存が非常によかった。

遺物（第214図・図版131・132）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器2点、盤形土器1点、坏形土器2点、須恵器鉢形土器1点、蓋形土器1点、高台付坏形土器2点である。図4、7、8は床面より、6はカマドよりの

出土である。

1は、胴下半部の残存であり、胎土に雲母を含み、縦位のヘラミガキが施された特徴的な甕形土器である。2は、厚手の台付甕形土器である。

3は、体部外面に僅かな稜を残す大形の盤形土器であり、底部内面はヘラミガキされている。4、5は、坏形土器であり、5は外面の稜は、認められず、平底気味となる。

6は、口縁端部が肥厚する鉢形土器であり、胴部外面にタタキ目が認められる。7は小形の蓋形土器。外面にヘラ記号が記されている。8、9は、高台が低く、断面形が三角形を呈する特徴的な高台付坏形土器である。

83号住居跡と出土遺物

住居跡（第105図・図版62）

82号住居跡と重複している。新旧関係は82号→83号住居跡の順である。詳細は前述してある。

平面形ー東西3m以上、南北3.2mのほぼ方形を呈すると考えられる小型の住居跡である。カマドは東壁のほぼ中央に構築されたものと思われる。

壁ー残存壁高20cmを測る。

周溝・柱穴ー検出できなかった。

床面ー遺存はよくない。特に重複する部分では張り床がなされており軟弱となっている。レベルは82号住居跡より高くなっている。

カマド（第107図）

他のカマド構築と同様に壁を切り込んでいるものと思われるが明確に検出することはできなかった。所々に粘土ブロックは存在するも、残存不良である。ただ、火床から煙道部への立ちあがりはなだらかになっておりまた煙道部にも粘土が張りつけられた痕跡が認められる。

遺物（第215・255図・図版132・150）

出土遺物は、土器と砥石であり、図示しえた土器は、土師器甕形土器2点、坏形土器2点、須恵器坏形土器2点である。図1、2、5はカマドより出土している。

1は、口縁部が「コ」の字形を呈し、肩部の張る薄手の甕形土器である。底部近くの状態より台部が付くものと考えられる。2は口縁が「く」の字に外反する大形の甕形土器であり、1と同様薄手に調整されている。

3、4は、ロクロ使用の坏形土器であり、3は糸切り、4は糸切り後、体部下端を手もちでヘラケズリ調整している。5、6は、小形な須恵器坏形土器であり、5は肩部および体部下半を手もちヘラケズリ調整である。

砥石は、比較的大形の半欠品である。使用痕が著しく、磨耗した結果、断面は弓状を呈する。材質は砂岩である。（図11）

84号住居跡と出土遺物

住居跡（第108図・図版62）

平面形ー東西4.15m、南北3.23mの長方形を呈する。カマドは北壁中央やや東壁沿いに偏在している。

壁ー床面よりほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高30～35cmを測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー良存しているも多少の凹凸が認められる。

カマド（第109図）

壁を約50cm程度掘り込み、火床よりなだらかな傾斜をもたせて立ちあがり、煙道部を形成している。構築はしっかりしていたことが残存する粘土より推察できるが、検出されたのは袖部、天井部ともつぶれた状態であった。焼土はあまり認められなかった。

遺物（第215図・図版132）

図示しえた遺物は、土師器坏形土器２点であり、共に床面より出土している。

２点とも体部外面に稜を有する比較的大形の坏形土器であり、図２は内面に段を呈する。

85号住居跡と出土遺物

住居跡（第110図・図版64）

落ち込みを確認した段階で３軒の住居跡が重複していることがわかった。このため、土層観察用のベルトを東西に残し、精査した結果、はっきりと新旧関係を認めることができた。重複は85号と86号住居跡、86号と87号住居跡であり、85号と87号住居跡は直接切り合わず隣接している。

85号と86号住居跡の新旧関係は、新が85号、旧が86号住居跡である。

平面形ー東西 4.5m 以上、南北 3.9m のほぼ方形を呈し、北壁にカマドが構築されている。西壁は１基の土壙とイモ穴により切られている。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高20cmを測る。

周溝ー幅15cm、深さ10cmのものが壁下を全周していたと考えられる

床面ー重複する部分は貼り床がなされ、軟弱であるが、他の部分はよく踏み固められていた。

柱穴ー検出できなかった。

カマド（第111図・図版65）

86号住居跡の北西コーナーを煙道の一部として利用し、壁を切り込んで構築している。火床は浅く掘られ、火床、煙道を含めた形状は卵形を呈している。遺存はよくないが、右袖には河原石を立て、その内側（火床側）には女瓦を立て、二重の補強がなされていた。

遺物（第215図、第250図・図版132・133）

遺物は土師器と瓦であるが、比較的床面、カマドより多量に出土している。図示しえた土師器は、甕形土器２点、坏形土器７点であり、図１、７、８はカマドより、２、３、４、５は床面より出土している。

１は、口縁が短く外湾し、端部が直立する薄手の甕形土器であり、２は、台部のみの残存である。

３～９は、坏形土器であり、５以外はすべて内面は黒色処理されている。４は、大形な土器であり、底部に糸切りを残し、９はヘラ切り後、体部下端を手もちヘラケズリ調整している。

瓦は、２点出土しており、図１は床面より出土している。１は、裏面に４×４の比較的格子の大きい型押文が不定方向に認められる女瓦である。型押のテクニックや表面に模骨痕が認められないことより一枚造りの可能性を有する瓦である。

２は、裏面に格子目大きい６×７の型押文が認められる女瓦である。表面には模骨痕が認められる。

86号住居跡と出土遺物

住居跡（第110図・図版63）

85号、87号と新旧関係にある。新旧は、三軒の住居跡の中では一番古く、新が85号、87号住居跡、旧が86号住居跡である。

平面形ー東西 4.9m、南北5.45mのほぼ方形を呈し、カマドは北壁中央に構築されている。

壁ーほぼ垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高40cmを測る。

周溝ー検出できず。

床面ー凹凸少なく、よく踏み固められている。特にプラン中央部でその傾向が強い。

柱穴ー住居跡の対角線に位置して掘り込まれている。深さ60～70cm前後である。

カマド（第112図）

壁を切り込んで構築しているが、遺存はよくなく、火床から煙道にかけて、少量の焼土を検出できたにすぎなかった。しかし、左袖には河原石を立て、袖部の補強がなされていた。火床

は楕円形に浅く掘られている。

遺物（第216図・図版133）

図示しえたのは、土師器坏形土器３点のみであり、図３は床面より出土している。

１は、体部外面に稜を有する器高のある坏形土器であり、２、３は、半球形状を呈し、端部が垂直に立つ坏形土器である。

87号住居跡と出土遺物

住居跡（第110図・図版63）

86号住居跡と新旧関係にある。新は87号住居跡、旧は86号住居跡である。

平面形ー東西３ｍ、南北 2.4ｍのほぼ方形を呈している。カマドについては構築されていなかった。

壁ー垂直に立ちあがり、壁高70㎝と高い。

周溝ー検出できず。

床面ーよく踏み固められ良存していた。

柱穴ー東壁、西壁を切って、壁中央に掘り込まれている２個が柱穴と考えられる。

遺物

86号住居跡と重複しており、図示可能は遺物は認められない。

88号住居跡と出土遺物

住居跡（第113図・図版67）

平面形ー東西 3.9ｍ、南北2.85ｍのほぼ方形を呈し、北壁中央にカマドが構築されている。

壁ー床面より垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高　㎝を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー遺存よく、凹凸も少ない。

カマド（第114図）

壁を切り込み煙道を作り出し構築されている。遺存はよく。天井部、袖部とも明瞭に残存しており、中間に焼土が充満して検出された。火床にあたる部分は若干掘り凹められて浅く埋め戻されていることが判明している。

遺物（第216・255図・図版133・150）

出土遺物は、土師器と砥石であり、図示しえた土器は、甕形土器１点、坏形土器２点であり、

図1はカマドより、2は床面より出土している。

1は、胴下半のみの残存であり、縦位にヘラミガキされ、底部に木葉痕を残す甕形土器であり、2は半球形状を呈し、3は体部外面に稜を持つ坏形土器である。

砥石は、小形な破損品である。材質は砂岩。（図13）

89号住居跡と出土遺物

住居跡（第115図・図版67）

柱穴のみが残存しているだけであり、あるいは掘立柱建物跡の可能性も考えられたが、調査段階において、柱穴に囲まれた中央部が硬くしまった状態が認められており、このことより住居跡の可能性が高いものと考えられる。柱穴は4本確認でき、各々円形の掘り込みであり、深さ60cm前後である。その他については不明であった。遺物は全く、認められない。

90号住居跡と出土遺物

住居跡（第116図・図版68）

89号住居跡と同様に柱穴のみが残存しているだけであったため、掘立柱建物跡としての可能性も考えられたが、柱穴によって囲まれた中央部が硬くしまった状態で認められ、床面の一部が残存しているものと考えられ、住居跡として取り扱った。柱穴は4本分が確認でき、各々円形に深さは20～50cmに掘り込まれている。その他のことについては不明である。遺物は、全く認められない。

91号住居跡と出土遺物

住居跡（第117図・図版68）

平面形ー東西4.45m、南北3.8mの若干東西に長い方形を呈し、北壁中央より東壁によって構築されている。

壁ー垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高40cm前後を測る。

周溝ー幅15～25cm、深さ5cm前後のものが壁下を周回しているが北東、南東の各コーナーは不明瞭に掘り窪められている。

床面ー平担に遺存しているが、軟かである。

柱穴ー検出できず。

カマド（第119図）

壁を切り込み煙道を作り出し、なだらかな傾斜をもって立ちあがらせている。火床もいくぶん掘られており、焼土が検出された。天井部、袖部とも明瞭にはなし得なかった。

遺物（第216・251図・図版133）

出土遺物は、土器および瓦であり、図示しえた土器は、土師器甕形土器１点、須恵器坏形土器３点であり、図１はカマドより、２は床面より出土している。

図１は、口縁部は「コ」の字に近い形状を呈し、肩部のやや張る薄手の甕形土器である。２～４は坏形土器であり、２は回転ヘラケズリ調整、３は糸切り、４は底面および体部下端を手もちのヘラケズリ調整である。

瓦は、２点図示したが、図１はカマドより出土している。１は女瓦、２は男瓦である。

92号住居跡と出土遺物

住居跡（第118図・図版69）

平面形－東西4.83m、南北4.75m のほぼ方形を呈し、北壁中央やや東壁よりに位置して構築されている。

壁－良好な立ちあがりを示し、残存壁高60cm前後を測る。

周溝－幅10～20cm、深さ８cm前後のものが壁下を全周している。

床面－凹凸が少なく、平坦であり、遺存はよい。

柱穴－住居跡の対角線上に位置して掘り込まれており、深さ35～40cmを測る。

カマド（第120図）

壁を「冂」字状に30cmと浅く切り込み、垂直ぎみに立ちあがらせ、煙道を作り出している。焼土、粘土ともあまり認められなかったが、火床と考えられる位置より、草木灰がかなりの量検出されている。

遺物（第216図）

図示しえたのは、土師器盤形土器１点のみと微量である。

内外面ともヘラミガキおよび赤彩された盤形土器であり、体部外面に軽い稜を有し、外傾して端部がたちあがる。

93号住居跡と出土遺物

住居跡（第121図・図版69）

96号住居跡と重複することが落ち込み確認の段階で認められた。新旧関係は遺物のうえからも明瞭であり、96号住居跡からは古式土師器が、93号住居跡からはより新しい様相の土器が出土している。

平面形－東西 4.9m、南北 4.6m のほぼ方形プランを呈し、カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。

壁－床面より良好な立ちあがりを示し、残存壁高65cmを測る。

周溝－北壁の一部を除いて、幅10～25cm、深さ10cmのものが壁下を周回している。

床面－凹凸も少なく、遺存はよく、硬く踏み固められている。

柱穴－住居跡の対角線上に位置して掘り込まれている。掘り方はしっかりしたものである。

カマド（第122図）

壁を60cm程度掘り込み構築されている。粘土、焼土は単一層では検出されず、茶褐色土、黒褐色土混入という様相で検出されており、遺存がよくないものと考える。火床は一度掘り凹められてから再度埋め戻され構築がおこなわれている。

遺物（第216図・図版133）

図示しえたのは、土師器甕形土器１点、坏形土器２点、須恵器蓋形土器２点であり、蓋形土器２点は、床面より出土している。

１は、肩部の張る厚手の小形甕形土器であり、２、３は体部外面に僅かに稜を持つ坏形土器である。

４、５は蓋形土器であり、４は宝球形ツマミを有し、口縁端部が垂直を呈し、５は、内面に「カエリ」を有する土器である。５は。器形的に注目したい。

94号住居跡と出土遺物

住居跡（第123図・図版70）

平面形－東西4.32m、南北 4.2m の方形を呈し、北壁中央にカマドが構築されている。

壁－ほぼ垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高40～45cmを測る。

周溝－西壁と南壁の一部にかけて、幅15cm、深さ５cmのものが認められる。

床面－凹凸少なく、遺存はよい。

柱穴－検出できなかった。

カマド（第124図）

壁を80cm程度掘り込んで、また火床も凹められて構築されている。残存はよくなく、両袖の粘土が若干残っているのみである。焼土が火床から煙道にかけて多量に検出されている。

遺物（第217図）

図示しえた遺物は、土師器盤形土器１点、坏形土器１点である。

図１は、偏平な半球形状を呈し、内外面ともナデ調整による盤形土器である。２は半球形状を呈する小形の坏形土器である。

95号住居跡と出土遺物

住居跡（125図）

平面形ー全体にゆがんだ形状となっている。落ち込み確認の段階でもプランは明瞭でなかった。プラン中央から北壁によった位置で炉跡が検出された。

壁ー立ちあがりもしっかりせず、だらだらと立ちあがっている。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー軟弱で凹凸も著しい。遺存不良。

炉跡ー床面を径40cm程の円形で、深さ10cm前後に掘り凹めている。焼土は少量残存しているのみである。

遺物（第217図・図版70・71）

図示しえたのは、土師器甕形土器１点、埦形土器１点と少量であるが、２点とも多くの問題を内包する土器である。

図１は、胴部やや上位に最大径を有し、球形な胴部より口縁部断面が、「S」字状を呈する小形な甕形土器である。台部は破損しているが台付甕であり、胴部外面は、丁寧なハケ調整、焼成も良好である。

２は、円形の窪みをもつ底部より緩やかなカーブでたちあがり、口縁部が屈曲して独特な断面形（S字状に類似）を呈する埦形土器である。内外面とも丹念にヘラミガキされ、精選された胎土を有し、焼成も良好である。バランスの良い優品であり、搬入品の可能性もある。

96号住居跡と出土遺物

住居跡（第121図・図版71・72）

93号住居跡と新旧関係にある。新が93号住居跡、旧が96号住居跡である。

平面形ー東西5.05m、南北 3.8m の長方形を呈する。カマドは構築されず、炉跡が存在したものと考えられる。

壁ー残存壁高20～25cmを測り、立ちあがりもしっかりしている。

周溝・柱穴ー検出できなかった。

床面ー多少の凹凸が認められるもよく踏み固められている。

炉跡ー93号住居跡構築の時点で削平されたものと思われ、検出できなかった。

遺物（第217図・図版133・134）

住居跡北東部は、93号住居跡より破壊されているが、住居北西、南西コーナーより出土している。図示しえたのは、土師器壺形土器1点、甕形土器1点、坩形土器1点、埦形土器3点と比較的多量に出土している。図3、4は床面より出土している。

1は胴部上位のみ残存する大形な壺形土器である。外面は赤彩されており、球形を呈する胴部と頸部に断面三角形を呈する隆帯を貼り付けている。

2は、木葉痕を残す底部のみの小形な甕形土器であり、3は小さな胴部に大きく外反する口縁部を有する坩形土器である。

4、5、6は埦形土器であり、4は球形を呈する胴部より、口縁部が外反し、5、6は平底気味の底部より直線的に体部がたちあがる。

97号住居跡と出土遺物

住居跡（第126図・図版73）

99号住居跡と重複することが落ち込みを検出した時点で認められた。新旧関係は精査するも、明確にすることはできなかった。

平面形ー東西4m、南北4.2mのほぼ方形を呈し、カマドは北壁中央に構築されている。

壁ー床面より垂直に立ちあがり、残存壁高55～60cmを測る。

周溝ー幅15cm、深さ5～10cmのものが北壁を除く、南、東、西壁下を周回している。

床面ー凹凸も少なく、よく踏み固められ、良好な遺存を示して いる。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して掘り込まれている。掘り方はしっかりしており、深さ80cm前後を測る。

カマド（第127図）

壁を「V」字状に約50cm切り込み、火床より垂直ぎみに立ちあがらせ煙道部を形成している。残存はよくなく、焼土、粘土がブロック状に構築場所に検出されるにすぎなかった。

遺物（第218図・図版134）

本住居跡よりは、甕形土器の好資料が出土している。図示しえたのは、土師器のみであり、甕形土器4点、坏形土器1点である。図1はカマドより、2、5は床面よりの出土である。

1、2は、口縁部が大きく「く」の字に外反し、頸部に軽い稜を有する甕形土器であり、2は

底部に木葉痕を残す。

3、4は、口縁部が外傾してたちあがり、胴部が珠形を呈する甕形土器である。5は体部外面に軽い稜を残す坏形土器である。

98号住居跡と出土遺物

住居跡（第126図・図版74）

落ち込みを確認した段階で、99号住居跡と重複することが判明したが、精査するも新旧関係については明確にすることはできなかった。

平面形ー東西3.3m以上、南北3.5mのほぼ正方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央から東壁よりに位置し、構築されている。

壁ー緩傾斜をもって立ちあがり、残存壁高30cmを測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー遺存よく、硬く踏み固められている。

カマド（第128図）

壁を「U」字状に掘り込み、構築しているも、残存が悪く、わずかに火床と考えられる位置より、若干の焼土の検出が認められたにとどまっている。

遺物（第218図）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点のみである。

口縁部が「コ」の字形を呈し、端部がつまみ出された感じのする薄手の甕形土器である。肩部は張りを有し、横位にヘラケズリ調整されている。

99号住居跡と出土遺物

住居跡（第126図・図版74）

97号住居跡、98号住居跡と重複するも前述した様に、新旧関係については明確にすることはできなかった。

平面形ー東西3.85m、南北2.85m長方形を呈し、カマドは北東コーナーに隣接して構築されている。

壁ーなだらかな傾斜をもって立ちあがり、残存壁高25cm前後を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー遺存よく、よく踏み固められ、平担となっている。

カマド（第129図）

約80㎝程度に壁を「U」字状に掘り込み構築されているも、若干の焼土、草木灰を検出したのみである。煙道は火床より、ゆるやかな傾斜をもたせて立ちあがっている。

遺物（第218図）

図示しえたのは、土師器甕形土器2点のみであり、図1はカマドより出土している。

1、2とも、口縁部が「コ」の字形を呈し、肩部に張りを有する薄手の甕形土器である。

101号住居跡と出土遺物

住居跡（第130図・図版74）

102号住居跡と重複することが、落ち込み確認の段階で認められた。新旧関係は、新が102号住居跡、旧は101号住居跡であることが、カマドの削平によって認められた。

平面形ー東西5m、南北3.2mの長方形を呈する。カマドは北壁中央に構築されているが、102号構築の時点で、¼弱が切られてしまっている。

壁ーほぼ垂直ぎみに立ちあがるも、残存壁高35～40㎝を測るのみである。

周溝ー南壁から西壁、北壁にかけて検出されたのみである。

床面ー平担で良存している。

柱穴ー検出できなかった。

カマド（第131図）

102号住居跡構築の時点でカマドの¼が削平されている。壁を切り込んでいるが、明確ではない。しかし、火床から煙道にかけては多量の焼土が検出されている。火床は細長く、浅く掘り込まれ、構築時に埋め戻されていることが判明した。

遺物（第220・258図・図版134・149）

図示しえた遺物は、土師器坏形土器2点、須恵器坏形土器3点と鉄鏃である。第220図1、2は床面より、4はカマドより出土している。

1は、内面を黒色処理された坏形土器であり、底部および体部下端は手もちヘラケズリ調整されている。2は大形の坏形土器で、底面に糸切り痕を残す。

3～5は、比較的器高のある坏形土器であり、4は糸切り、5は糸切り後、底部および体部下端を手もちによるヘラケズリ調整している。

鉄製品は、比較的大形の平根式鉄鏃1点が出土している。鏃身の断面は両丸を呈し、逆刺が大きいのが特徴的である。篦被と茎で断面の大きさが異なるが、共に方形を呈す。

102号住居跡と出土遺物

住居跡（第130図・図版75）

101号住居跡と新旧関係にある。新が102号住居跡、旧が101号住居跡である。

平面形ー東西5.4m、南北3.8mの長方形を呈し、カマドは北壁中央より東壁よりに構築されている。

壁ー緩傾斜をもって立ちあがり、残存壁高35cm前後を測る。

周溝ー南壁沿いに一部検出できただけであった。

床面ー軟弱であり、遺存はよくない。

柱穴ー検出できなかった。

カマド（第132図）

壁を30cmと浅く切り込み構築されている。火床は一度掘り込まれてから平担に埋め戻されている。つぶれた状態で検出されており遺存はよくない。天井部、袖部は認められるも、火床から煙道にかけては少量の焼土が検出されたのみである。

遺物（第219図・図版134）

図示しえたのは、土師器のみであり、甕形土器1点、坏形土器3点である。図3はカマドより出土している。

1は、口縁部が直立気味に外湾する薄手の甕形土器であり、2、3は、体部外面に稜を残す比較的大形の坏形土器である。

4は、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキされた比較的器高のある坏形土器であり、内外面とも赤彩されている。

105号住居跡と出土遺物

住居跡（第133図・図版76）

全体プランの⅓が調査区外となってしまっている。また4号円形遺構と重複関係にあるが、新旧については明瞭にすることはできなかった。

平面形ー東西3m以上、南北3.1mを測り、北壁にカマドが構築されている。

壁ー東壁中央が外に張り出し、彎曲している。

同溝・柱穴ー検出できず。

床面ー遺存はよく、凹凸も少ない。

カマド（図版77）

壁を切り込み構築しているも残存はあまりよくないが、焼土、炭化物は検出されるも、構築材として使用されたと考えられる粘土の検出は少ない。煙道はなだらかな傾斜もって立ちあがっている。

遺物（第219・257図・図版134・135・149）

本住居跡よりは、土器、鉄製品とが出土しており、多様な遺物が認められる。図示しえた土器は、土師器甕形土器4点、坏形土器1点、須恵器甕形土器1点、鉢形土器1点と大形な土器が多い。図1はカマドより出土している。

1～4は、口縁部が「コ」の字形を呈し、肩部に張りを有する薄手の甕形土器である。3は口縁部が、やや短かめであり、胴部が大きく膨み球形を呈する。5は半球形状を呈し、口縁が鋭く立つ坏形土器である。

5は口縁部が大きく外反し、端部に凸帯をめぐらした甕形土器である。胴部は球形を呈し、外目に叩目、内面には指頭で押えた凹凸が認められる。6は口縁部が短く外反し、端部に凸帯のめぐる鉢形土器であり、胴部は直線的に下り、大きな底部にいたる。胴部外面は叩目、下半は横位にヘラケズリ調整されている。

鉄製品は、2点出土しており、図4は鎌、5は紡錘具である。鎌は全長10.2㎝、刃幅(最大)は2.5㎝と小形なものであり、鋒は中ほどまで直線的にのび、先端は彎曲する。刃幅は先端でやや細くなる。紡錘具は、紡輪、軸とが残存しており、紡輪径は、3.4㎝、軸は細片となり全長は不明であるが、屈曲する端部が残存しており、繊維を固定した部位と考えられる。

106号住居跡と出土遺物

住居跡（第134図・図版77）

108号住居跡、4号土坑、P－1と重複関係にあるが、いずれの遺構ともその新旧関係については明確にすることはできなかった。

平面形－東西5.6m、南北6mのほぼ方形を呈し、北壁中央にカマドが構築されている。

壁－ほぼ垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高は西壁で80㎝、東壁で25㎝と低くなる。

周溝－幅15～25㎝、深さ10㎝のものが、西壁から南壁にかけて検出されている。

床面－よく踏みかためられており遺存はよい。

柱穴－住居跡の対角線上に位置して掘り込まれたものが6本、と南壁に掘られた2本の都合8本が検出されている。床面に掘り込まれたもののうち2本については掘り変えがなされている。いずれもしっかりした掘り方である。

カマド（第135図）

壁を「V」字状に80㎝に切り込み煙道部を形成し、なだらかな傾斜をもたせて立ちあがらせているも、全体の遺存はよくない。火床は一度掘り込まれてから埋め戻されており、焼土、粘土などの検出も少量であった。

遺物（第220図・図版135）

図示しえたのは、土師器坏形土器2点、須恵器高台付坏形土器1点であり、図1、3は床面より出土している。

1、2は体部外面に稜を有する小形の坏形土器である。3は底部が大きく、比較的低い高台が付された高台付坏形土器であり、底面は回転ヘラケズリ調整である。

107号住居跡と出土遺物

住居跡（第136図・図版78）

平面形一東西4m、南北3.3mのほぼ方形を呈し、カマドが北壁中央に構築されている。

壁一緩傾斜をもって立ちあがり、残存壁高50㎝前後を測る。

周溝一検出できず。

床面一軟弱で遺存はよくないが、西壁沿いが高く、東に傾斜している。

柱穴一東、西壁を2等分した位置に掘り込まれたもの2本分が検出されている。掘り方はしっかりしている。

カマド

壁を「∩」字状に掘り込み床面よりなだらかな傾斜をもって立ちあがっている。残存がわるく、煙道と、楕円形に浅く床面を掘り込んでいる火床内に焼土が認められたのみである。

遺物（第220・221・256図・図版135・151）

出土遺物は、比較的多量であり、図示しえた土器は、土師器甕形土器1点、坏形土器2点、須恵器高坏形土器1点、高台付坏形土器2点、坏形土器1点および瓦製紡錘車1点である。高坏形土器は、床面より出さしている。

1は、低い台部のつく甕形土器であり、2は、内面を黒色処理した坏形土器である。底部は僅かではあるが、糸切りが認められる。3は、底部に糸切りを残す小形な坏形土器である。

4は、脚部が直線的にさがり、裾部が開く高坏形土器であり、類例の少い器種である。5は、大形の高台付坏形土器。底面は回転ヘラケズリ調整。6は、小形の高台付坏形土器であり、底面に糸切りを残す。7は、器高のある坏形土器であり、底部は、ヘラ切り後、手もちのヘラケズリ調整である。

瓦製紡錘車は、半欠品である。瓦を再利用して紡錘車として使用したと想定したが、形状が大きく問題となろう。

108号住居跡と出土遺物

住居跡（第134図・図版77）

106号住居跡、P－1と重複関係にあるもその新旧関係については明確にすることはできなかった。

平面形－東西2.75m、南北3.4mのほぼ方形を呈する小型の住居跡で、東壁のほぼ中央にカマドが構築されている。

壁－ゆるやかな傾斜の立ちあがりで、あまりしっかりしていない。残存壁高25～30cmである。

周溝・柱穴－検出できず。

床面－凹凸はあるも、硬く踏み固められている。

カマド

壁を切り込んで構築してあるも、遺存はよくなく、焼土、粘土も少量検出したにとどまっている。

遺物（第221図）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点のみである。口縁部が内傾する「コ」の字を呈する薄手の甕形土器である。

110号住居跡と出土遺物

住居跡（第137図・図版79）

落ち込みを確認した段階では、二軒のプランが近接していると考えられたが、調査中に111号住居跡のカマド煙道の一部を切って、110号住居跡が構築されていることが判明した。新旧関係は、新が110号住居跡、旧が111号住居跡となる。

平面形－東西4.65m、南北4.35mのほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央より、北東コーナーに接する位置に構築されている。

壁－ほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高1m前後を測る。壁は非常に高く、遺存もよい。

周溝－幅20cm、深さ10cmのものが壁下を全周している。残りのよい周溝である。

床面－凹凸少なく、遺存よく、硬く踏み固められ、パリパリの状態を呈する。

柱穴－住居跡の対角線上に位置し、4本掘られている。掘り方はしっかりしており、深さ60

～70㎝を測る。

カマド（第138図）

壁を切り込み構築されているが、袖部の残存はよくない。煙道部は垂直ぎみに立ちあがり、底面、側壁には粘土が張られ構築時の状態が伺われた。しかし、かなり焼けており、焼土層と明確に区別するのは困難であった。火床は一度掘られ、再度埋め戻されてからカマドの構築がなされている。

遺物（第221・255・256図・図版135・136・150・151）

出土遺物は、土師器、須恵器、紡錘車、砥石と多様である。図示しえた土器は、土師器甕形土器2点、盤形土器1点、坏形土器3点、須恵器高台付坏形土器1点である。

図1は、口縁部が大きく外反する甕形土器であり、2は口縁部が外傾してたちあがる甕形土器である。3は、内外面とも赤彩され、外面はヘラケズリ後、上位をヘラミガキ、内面はヨコナデ後二段の螺線状の暗文を施す大形の盤形土器である。内面の暗文、器形のバランスの良さ等注目すべき土器である。

4～6は、坏形土器である。4は稜が退化して器高の浅い土器であり、5、6は体部に稜を有する器高のある土器である。7は高台が低く、体部が直線的にたちあがる高台付坏形土器である。底面は回転ヘラケズリ調整である。

砥石は細片であり、使用痕が著しい。材質は砂岩である。(図14) 紡錘車は器高のああある小形品である。材質は石製。

111号住居跡と出土遺物

住居跡（第137図・図版80）

110号住居跡と重複しており、110号構築の時点で、111号住居跡のカマドの煙道部が削平されている。新旧については、新が111号住居跡、旧が110号住居跡となる。南東コーナーが後世の土壙によって切られている。

平面形一東西4.5m、南北3.15mの、ほぼ長方形を呈し、カマドが北壁中央やや東に寄った位置に構築されている。古い時期の構築と考えられるカマドが、東壁ほぼ中央に認められた。残存は焼土と煙道の検出のみである。

壁一崩壊の著しく、なだらかに立ちあがるところと、ほぼ垂直に立ちあがる部分がある。残存壁高70㎝前後を測る。

周溝・柱穴一検出できず。

床面一平担であり、遺存はよい。かなり硬く踏み固められ、パリパリの状態を示している。

カマド（第139図）

壁を切り込んで構築しているものと考えられるが、煙道部は111号住居跡構築の時点で削平されており、詳細については不明である。残存はよくなく、焼土、粘土とも少量検出されたにすぎない。

遺物（第222図・図版136）

図示しえたのは、土師器甕形土器3点、坏形土器3点、須恵器蓋形土器1点であり、図1、6はカマドより出土している。

1は口縁部が短く外反し、胴部が直線的にさがる長胴な甕形土器であり、2は1に比しやや大形な甕形土器である。3は台部のみ残存の甕形土器であり、ハの字形を呈する台部に長方形の透し孔が4個ある特徴的なものである。

4～6は、体部に稜を有する比較的大形の坏形土器であり、7は内面にカエリを有する古手の蓋形土器である。

112号住居跡と出土遺物

住居跡（第140図・図版80）

平面形ー東西3.95m、南北3mの長方形を呈する。カマドは東壁中央より南東コーナーに偏在して構築されている。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、壁高40～45cmを測る。

周溝ー幅5～15cm、深さ3～5cmのものが壁下を全周している。

床面ー良存している。

柱穴ー検出できなかった。

カマド

壁を掘り込み、煙道部は作り出しているも、天井部、袖部の粘土、また火床の焼土等についても少量検出することができただけであった。残存不良。

遺物（第222図）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点のみと少量である。口縁部に最大径を有し、肥厚して外反する口縁部より胴部が直線的にさがる甕形土器である。

113号住居跡と出土遺物

住居跡（第141図・図版81）

落ち込み確認の段階で、二つの遺構が重複することが認められた。新旧関係については精査するも明確にできなかった。

平面形一東西４ｍ、南北3.3ｍのほぼ方形を呈し、カマドが東壁中央より南に位置して構築されている。

壁一ゆるやかな傾斜をもって立ちあがり、残存壁高15～35㎝を測る。

周溝・柱穴一検出できなかった。

床面一かなり凹凸があるも、よく踏み固められており、パリパリの状態である。

カマド（第142図）

壁を切り込み、構築しているも、遺存はよくなく、焼土が少量検出されたにすぎず、粘土等の構築材は少量検出されたにとどまっている。火床は一度掘られ、再度埋め戻されている。

遺物（第222図・図版136）

図示しえたのは、土師器埦形土器１点、須恵器坏形土器１点である。

図１は、口縁部がほとんど直立し、器高のある大形の埦形土器であり、体部外面はヘラケズリされている。２は底部が小さく、体部が直線的にたちあがる坏形土器であり、底部にヘラ切り痕を残す。

114号住居跡と出土遺物

住居跡（第141図・図版81）

113号住居跡と重複していることが落ち込み確認の段階で認められたが、新旧関係については明確にすることはできなかった。

平面形一東西4.3ｍ、南北3.1ｍのやや長方形に近いプランを呈し、カマドが北壁よりやや東に位置し、構築されている。

壁一崩壊が著しく、なだらかな傾斜をもち立ちあがっている。残存壁高20～40㎝を測る。

周溝一南壁沿いに幅10㎝、深さ５㎝のものが検出できたのみである。

床面一凹凸が顕著に認められるも、よく踏み固められ、パリパリの状態を示す。

柱穴一検出できず。

カマド（第143図）

壁を半卵形に切り込み、煙道部を作り出し、火床を若干掘り凹めて構築されている。遺存はよくなく、構築材の粘土は少量の検出であるが、焼土は火床から煙道にかけて、多量に検出されている。

遺物（第223図・図版136）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器２点、高台付坏形土器１点、坏形土器１点、須恵器蓋形土器１点であり、図１、４、５はカマドより出土している。

１は口縁部が「コ」の字形を呈し、胴部が球形を呈する甕形土器であり、胴部外面上位は横位、下位は縦位にヘラケズリ調整されている。２は台部がハの字に外反する甕形土器であり、３は内面が丹念にヘラミガキされ、赤彩された高台付坏形土器である。４は内面ヘラミガキされている坏形土器であり、底部を糸切り後、体部下端まで手もちのヘラケズリ調整されている。５はツマミを欠く、小形な蓋形土器である。

115号住居跡と出土遺物

住居跡（第144図・図版81）

落ち込みを確認した段階で、二軒の重複が考えられた。新旧関係は、116号住居跡のカマドが火床の半分を残し、115号構築の時点で、火床の一部、煙道が削平されたことが判明しており、新旧は、115号住居跡が新、116号住居跡が旧であることが確認された。

平面形－東西5.25m、南北４mの長方形のプランを呈する。カマドが北壁中央からやや東壁によって構築されている。

壁－傾斜面に構築されており、東壁25cm、西壁60cmと高低差がある。

周溝－幅15～20cm、深さ５～10cmのものが全体に全周している。

床面－よく踏み固められ、平担に良存している。

柱穴－検出できず。

カマド（第145図・図版82）

壁を「凸」状に切り込み煙道とし、床面を一度掘り凹め、再度埋め戻してからカマド構築がなされている。天井部は消失してしまったが、両袖は明瞭に検出でき、その中間には焼土がかなり検出できた。煙道はなだらかな傾斜をもって立ちあがっている。

遺物（第222図・図版136）

図示しえたのは、土師器盤形土器１点、坏形土器１点、須恵器蓋形土器１点である。

図１は、内外面とも赤彩された大形の盤形土器であり、内面は全体をナデ調整後、二段の螺線状暗文を配し、外面はヘラケズリ後粗くヘラミガキ調整されている。２は体部外面に稜を残す坏形土器である。３は宝珠形を呈するツマミを有する蓋形土器であり、口縁部は垂直に下がり、端部は鋭い。

116号住居跡と出土遺物

住居跡（第144図・図版83）

115号住居跡と重複関係にある。詳細は115号住居跡に記してある。新が115号住居跡、旧が116号住居跡でる。

平面形ー東西３ｍ以上、南北2.65ｍのほぼ方形を呈すると考えられる。カマドが東壁のほぼ中央に構築されている。

壁ーほぼ垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高50㎝を測る。

周溝・柱穴ー認められなかった。

床面ー平担で遺存はよい。

カマド（第146図）

残存はわるく、かつ削平されているため、火床と焼土が若干検出できたにとどまっている。

遺物（第223図）

図示しえたのは、土師器のみであり、甕形土器１点、坏形土器１点である。図１は底部のみ残存の甕形土器であり、２は半球形状を呈する小形の坏形土器である。外面はヘラケズリ、内面は放射状にヘラミガキされている。

117号住居跡と出土遺物

住居跡（第147図・図版84）

平面形ー東西5.3ｍ、南北3.9ｍの長方形のプランを呈し、北壁中央からやや東よりに位置し、カマドが構築されている。

壁ーゆるやかな傾斜をもって立ちあがり、残存壁高40㎝を測る。崩壊が著しい。

周溝ー幅20㎝、深さ5～10㎝のものが、壁下を全周しているも、各コーナとも遺存はよくない。

床面ープラン中央部が盛りあがり、壁にゆくにつれて低くなる。よく踏み固められている。

柱穴ー検出できず。

カマド（第149図）

壁を「Ｖ」字状に約55㎝程切り込み煙道部を作り出し、構築されている。火床は一度掘り込まれてから埋め戻され、その上にカマドが構築されている。遺存はよくなく、火床から煙道にかけて焼土が検出されているにとどまっている。

遺物（第223・258・259図）

出土遺物は、土師器坏形土器１点、鉄製品２点、青銅製品１点と土器は少量であるが、金属

製品には見るべきものがある。

図1は、底部のみの遺存であり、内面は黒色処理されている。底部には糸切痕を残す。

鉄製品は、鏃が2点出土しており、図2は平根式鉄鏃であり、身の断面は両丸を呈し、逆刺ほとんど持たない。篦被、茎の断面は方形を呈し、大きさに差異がある。4は茎が細身で鏃身の小さい尖根式鉄鏃である。さらに注目したいのは、第259図で示した青銅製銙帯の鉸具が出土している。軸の部が欠損しており、留金具が下にきているが、本来は復元図で示したようになると考えられる。

118号住居跡と出土遺物

住居跡（第148図・図版84）

全体プランの⅓近くが調査区域外となっている。また南壁は東西に貫通する溝により、切られている。古式土師器を出土する。

平面形ー東西4.2m以上、南北4m以上を測り、方形を呈すると考えられるが、壁の残存がよくないため、プランが不明瞭である。

壁ー立ちあがりもしっかりせず、残存壁高も5～10cmと低い。遺存は極めて悪い。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー軟弱であり、凹凸も著しい。

炉跡ープラン外に存在すると考えられ、検出した遺構内では認められなかった。

遺物（第223図・図版136・137）

図示しえたのは、土師器のみであり、坩形土器2点、壺形土器3点、埦形土器1点、甑形土器1点と多量に出土しており、見るべきものも多い。

図1は、小さく窪みをもつ底部とやや偏球形を呈する胴部より直線的に大きく外反する口縁部よりなる大形の注目すべき坩形土器である。口縁部は内外面とも、胴部の外面は丹念にヘラミガキされ、外面は赤彩され光沢をもつ。2、3は口縁部が外湾気味に開く壺形土器であり、5は口縁部が短く外反する小形の壺形土器である。4は1に比しやや小形であるが、器形的には類似する坩形土器である。口縁部を欠くが、胴部外面は丹念にヘラミガキされている。

6は坩形土器を偏平にしたような埦形土器である。7は比較的大きな底部より緩やかにたちあがり、体部が半球形を呈する甑形土器である。底部が完存していないが、多孔式の甑形土器であり、口縁部は折り返しており段を呈する。器高の浅い特徴的な土器である。

119号住居跡と出土遺物

住居跡（第151図・図版85）

落ち込みを確認した段階では、二軒の住居跡の重複と考えられたが、調査結果として、当該住居跡を中心として4軒の切り合うことが確認された。119号住居跡だけが全体プランを検出できたのみであり、120号、121号、122号住居跡については調査区域外となり、全体プランは検出できなかった。また、各住居跡の新旧関係についても明瞭にできなかった。

平面形ー東西4.1m、南北3.3mで、台形状のプランを呈し、西壁が長くなる。カマドは北壁に構築されている。

壁ー崩壊しており、ゆるやかな傾斜をもって立ちあがるも、残存壁高20cm前後と低い。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー凹凸もあり、かつ軟弱化しており、遺存はよくない。

カマド（第150図）

遺存はよくないが、左袖部は住居跡プラン構築時に作り出す形でロームを残存させている。壁は若干の切り込みがなされ、火床よりなだらかな傾斜をもって立ちあがらせている。

遺物（第224図）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点、坏形土器1点であり、図2はカマドより出土している。

1は口縁部が外反し、肩部にやや張りを有する薄手の甕形土器であり、2は底部に糸切り痕を残す比較的小形の坏形土器である。

120号住居跡と出土遺物

住居跡（第151図・図版85）

全体プランの½弱が調査区外となり、かつ119号、120号、121号、122号住居跡を重複しているも、新旧関係については明確にすることができなかった。

平面形ー東西3.2m以上、南北4.4mを測る。カマドは調査区域外に構築されているものと考えられる。

壁ー崩壊しており、残存壁高15～20cmと低い。

周溝ー幅15～20cm、深さ8～10cmのものが壁下を周回している。

床面ー平坦であり、よく踏み固められている。

柱穴ー住居跡の対角線上に位置して、4本分が掘り込まれていると考えられるが、検出でき

たのは２本分のみである。南壁に沿ってピットが掘られているが、性格は不明。

遺物（第120図）

図示しえたのは、土師器埦形土器１点のみである。内外面とも赤彩され、平底を呈する大形の埦形土器であり、体部外面は、ヘラケズリ後粗いヘラミガキが、内面にもヘラミガキが施されている。

121号住居跡と出土遺物

住居跡（第151図・図版85）

全体プランの½近くが調査区外となり、また119号、120号住居跡と新旧関係にあるが、新旧については明確にすることはできなかった。

平面形ー南壁長３ｍ、東壁長2.8ｍを検出したのみである。カマドの構築位置も明確でない。たぶん調査区外か、120号構築の時点での削平かのいずれかと考えられる。

壁ー若干残存しているのみであり、壁高15㎝である。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー凹凸が著しく、軟弱である。遺存はよくない。

遺物

重複関係にあり、さらに住居跡½が調査区外であるため、図示可能な遺物は認められない。

122号住居跡と出土遺物

住居跡（第151図・図版85）

東壁と南壁の一部を検出したにとどまっており、その他については調査区域外となっている。

平面形ー東壁2.7ｍ以上、南壁90㎝確認したにとどまっている。カマドの構築位置については不明。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高30㎝を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー一部のみであるが、平担であり遺存はよく、硬く踏み固められている。

遺物

住居跡⅕程度しか調査しておらず、図示可能な遺物は認められない。

124号住居跡と出土遺物

住居跡（第172図・図版５・85）

全体のプランは検出することができなかったと同時に、Ｇ号遺構と重複している。

平面形ー東西2.8ｍ、南北1.9ｍ以上のプランである。カマドについては未調査区に位置するものと思われる。

壁ーほぼ垂直ぎみに立ちあがるが、残存不良である。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー軟弱であり、遺存はよくない。

遺物（第224図）

図示しえたのは、土師器坏形土器１点のみであり、内面を黒色処理した土器である。

126号住居跡と出土遺物

住居跡（第152図・図版86）

落ち込みを確認した段階で、広範囲となり複数の遺構の存在が考えられた。精査の結果として126号、127号、130号住居跡と３号、４号井戸の各遺構を検出することができた。しかしこれらの遺構は複雑な切り合いを呈しているために、すべての遺構についてその新旧関係について明確にすることはできなかった。

平面形ー西壁長４ｍ、南壁長3.9ｍを検出できたのみであり、プランはさらに大きくなると考えられる。カマドの構築位置も不明であり、焼土等の検出もなかった。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高45㎝を測る。遺存はよい。

周溝ー全体に周回していたものと考えられる。遺存は西壁下ではよく、幅20㎝、深さ10㎝を測るが、南壁ではかなり乱れがある。

床面ー遺存はよく、平担となっており、硬く踏み固められている。

柱穴ー住居跡の対角線に位置して掘り込まれている。掘り込みはしっかりしたものであった。

カマド

構築位置は不明である。崩壊が著しかったのか、別遺構構築の時点で破壊されたのか、判断できなかった。

遺物（第224図・図版137）

図示しえたのは、土師器坏形土器６点、須恵器坏形土器１点と器種的には単純であるが、注目すべき内容を有する土器群である。

図１、２は内面黒色処理された大形の坏形土器であり、底部は糸切り後、手もちでヘラケズリ調整され、体部下端まで及ぶ。３は糸切り痕を底部に残す黒色処理された坏形土器であり、底部外面に「七□」と墨書されている。

４、５は体部外面に「福饒」と横位に墨書された坏形土器であり、内面は黒色処理されている。４は糸切り後、底部さらに体部下半まで手持ちヘラケズリ、５は糸切りを底部に残す。６は体部上位に稜を有し、球形を呈する坏形土器である。７は底部が小さく、体部が直線的にたちあがる坏形土器であり、底部にヘラ切り痕を残す。底部外面に「＃」のヘラ記号を有す。

127号住居跡と出土遺物

住居跡（第152図・図版86）

126号、130号住居跡と切り合うが、精査の結果、土層の観察からも新旧関係については明確にできなかった。またプラン⅔強については盛土下となり、未調査となっている。

平面形－西壁長4.2m、北壁長0.5m南壁長２mを検出したのみであり、全体のプランは明確になし得なかった。またカマドの位置も不明である。

壁－ほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高１m前後を測り、高く、遺存はよい。

周溝－幅15cm、深さ５cmの浅いものが壁下を周回しており、全周しているものと考える。

床面－平担ではあるが、軟弱であり、遺存はよくない。低湿地に近いため、湿気をおびている。

柱穴－たぶん住居跡の対角線上に位置して掘り込まれているものと考えられるが、１本分の掘り込みを検出したのみである。

カマド

盛土下となった未調査区に存在するかもしれないが、あるいは130号住居跡により削平された可能性もある。

遺物（第224図・図版137）

図示しえたのは、土師器坏形土器２点と須恵器１点であるが、須恵器は胴下半のみの残存のため器種は不明。

図１は、内面黒色処理された坏形土器であり、底部に糸切り痕を残す。２はやや大形の坏形土器であり、内面はヘラミガキ調整、底部に糸切り痕を残す。３は前記のとおり器種は不明であるが、削り出された高台を有する土器である。

130号住居跡と出土遺物

住居跡（第152図・図版86）

126号、127号住居跡、4号井戸跡と重複し、かつ盛土下に遺構が入り込むためにプラン等は明瞭にできなかったが、床面と考えられる平担で、硬く踏み固められた面が認められており、住居跡と考えるのが妥当ではとの判断を下した。壁、周溝、柱穴、カマドについては明確になし得なかった。

遺物（第131図・図版137）

図示しえたのは、土師器坏形土器3点のみである。

図1はやや偏平な半球形状を呈する坏形土器であり、底部より体部下半にかけてヘラケズリされている。2は内面黒色処理された坏形土器であり、底部はヘラケズリ調整。3は底部のみ残存の内面黒色処理された坏形土器であり、底部に糸切り痕を残す。

131号住居跡と出土遺物

住居跡（第153図・図版86）

落ち込みを確認した段階で、二軒のプランが重複しており、慎重に精査した結果、新旧関係は、新が131号、旧が132号住居跡であることが判明した。

平面形ー東西4.5m、南北3.85mのほぼ正方形を呈し、カマドが北壁中央よりやや東壁に近い位置に構築されている。

壁ー床面より垂直に近く立ちあがり、残存壁高20～25㎝を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー平担となっているが、軟弱である。

カマド

遺存は悪く、焼土、粘土のブロックを少量検出したにとどまっている。構築は壁を切り込んだ状態でなされている。

遺物（第225・252・257図・図版138）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点、坏形土器1点、須恵器壺形土器1点、蓋形土器1点、坏形土器3点と鉄製品、瓦である。図1、2、5はカマドより、3は床面よりの出土である。

1は口縁部が「コ」の字形を呈し、胴部が球形な薄手の小形な甕形土器であり、外面は胴下半まで横位にヘラケズリ調整されている。2は内面に黒色処理された坏形土器であり、底部全面が、手もちのヘラケズリ調整されている。

3は口頸部のみの残存であるが、長頸な壺形土器であり、4は宝珠形のツマミを有するバランスの良い蓋形土器である。5～7は体部が直線的にのびる坏形土器であり、底部は5が糸切り、6がヘラ切り後、底部から体部端部まで手もちのヘラケズリ調整、7がヘラ切りである。

鉄製品は木質の着柄部を有する類例の少い鉄器であり、形状等より鑿と考えている。身は断面方形を呈し、先端が尖る。茎は断面が中空を呈す。約9.4cmを測る木質の着柄部に茎がはめ込まれている。(第257図6)

瓦は2点図示しており、図1は床面より、2はカマドより出土している。1、2とも女瓦であり、1は裏面に8×9の型押文が認められ、2は表面に模骨痕が観察される。

132号住居跡と出土遺物

住居跡（第153図・図版86)

131号住居跡と新旧関係にあり、また、全体プランの½弱が、調査区域外となっている。

平面形ー東西4.2m以上、南北5.2mである。カマドは北壁に構築されている。

壁ーしっかりした立ちあがりであり、残存壁高は北壁が高く35cmを測るが、南壁では5～10cmと低くなっている。

周溝ー幅15～20cm、深さ15cm前後のものが、壁下を周回しているが、重複する部分は削平されてしまっている。

床面ー凹凸少なく、平担な状態であるが、軟弱となっている。遺存はよい方である。

柱穴ー住居跡の対角線に位置して掘り込まれていると考えられるが、検出できたのは2本分である。深さ60cm前後である。

カマド

左袖と煙道の半分は調査外となっている。壁を切り込んで構築しているが残存はよくなく、焼土、粘土が少量検出されたのみであった。火床は若干掘り凹められている。

遺物（第132図・図版138)

図示しえたのは、土師器甕形土器1点、坏形土器2点、須恵器坏形土器1点である。

図1は、口縁部が短かく外反し、端部が外傾してたつ大形の甕形土器であり、2、3は体部に僅かに稜を残す坏形土器である。4は体部が直線的にたちあがる坏形土器であり、底部全面は回転ヘラケズリ調整されている。

133号住居跡と出土遺物

住居跡（第154図・図版87）

落ち込みを確認した段階で134号住居跡と重複することが判明した。新旧関係については慎重に調査したが、明確にすることはできなかった。

平面形－東西4.3m、南北3.4mの長方形に近いプランを呈する。カマドは北壁中央より東壁沿いに構築されている。

壁－かなり不規則な立ちあがりであり、壁高20～35cm前後を測る。

周溝・柱穴－検出できなかった。

床面－東壁に向って若干傾斜しており、軟弱であり遺存はよくない。

カマド（第155図・図版88）

壁を「U」字状に約60cm掘り込み、火床より緩傾斜をもって立ちあがらせているが、遺存状態は不良である。火床は一度掘り凹めてから再度埋め戻され張り床となり、その上部に若干の焼土が認められると同時に、袖部に位置して粘土のブロックが多数検出できた。

遺物（第225・251図）

図示しえたのは、土師器坏形土器1点と瓦である。

底部が小さく、体部が直線的にたちあがる坏形土器であり、底部に糸切り痕を残す。

瓦は女瓦1点であり、裏面に13×？の型押文が認められる。

134号住居跡と出土遺物

住居跡（第154図・図版87）

133号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係については明確になし得なかった。プランの約½弱が調査区域外となっている。カマドは調査区域外に位置すると考えられる。

平面形－東西2.05m以上、南北3.7mの方形を呈するものと考えられる。

壁－残存壁高15～25cmを測る。立ちあがりは緩傾斜となっている。

周溝・柱穴－検出できなかった。

床面－平担に遺存しているも軟弱である。

遺物

図示可能な遺物は認められない。

135号住居跡と出土遺物

住居跡（第156図・図版88）

落ち込みを確認した段階で、複数の遺構が重複していることが認められた。最終的には135号、136号、137号、138号、139号、141号住居跡の6軒を検出できた。しかしこれらすべてが切り合うのではなく、多くても2～3軒の切り合いであり、結果として6軒が切り合うか、あるいは隣接するというものである。135号住居跡は137号住居跡と重複しており、新旧関係は、136号住居跡のカマドが137号住居跡内に構築されていることより、新が135号、旧が137号住居跡となる。

平面形－東西4.3m、南北3.8mのほぼ方形を呈し、カマドは北壁中央より東に位置して構築されている。

壁－崩壊が著しいのか、ゆるやかな傾斜をもって立ちあがり、残存壁高20～30cmを測る。

周溝・柱穴－検出できず。

床面－平担ではあるが、遺存はよくない。軟弱であった。

カマド

137号住居跡内に構築されていたが、残存があまりよくなく、焼土、粘土も少量検出できたのみである。また壁を切り込んで煙道部を形成していたのか否かも不明である。火床は若干掘り凹められている。

遺物（第226図・図版138）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点、坏形土器1点、須恵器坏形土器1点である。

図1は、口縁部が短く外反し、端部が外傾してたつ大形の甕形土器である。2は内外面ともヘラミガキされた特徴的な坏形土器であり、3は底部のみの残存であるが、底部にヘラ切り痕を残す坏形土器。

136号住居跡と出土遺物

住居跡（第156図・図版88・90）

138号、141号住居跡と重複している。新旧関係は、141号住居跡の方が新しいことが土層観察ベルトより伺われる。カマドは141号住居跡のものは136号住居跡と同位置に構築されており、新旧関係を列記してみると138号→136号→141号住居跡への構築順序となる。

平面形－推定東西3.6m、南北3.4mのほぼ方形を呈し、カマドは北壁中央より東側に位置して構築されている。

壁－崩壊が著しく、ゆるやかな傾斜をもって立ちあがる。残存壁高30cmを測る。

周溝－西壁にのみ削平されなかった幅15cm、深さ5～10cmのものが認められる。

床面－141号住居跡構築の時点でそのほとんどがレベルを下げられているために詳細については不明であるが、一部残存しているものからは、良好と認め得るものではない。

柱穴ー検出できず。

カマド

煙道の一部が検出されたのみであり、袖部等については141号住居跡構築の時点で削平されている。煙道部は壁を切り込み造り出されている。

遺物（第226図・図版138・139）

図示しえたのは、土師器坏形土器1点、須恵器坏形土器3点、壺形土器1点であり、図2、3は床面より出土している。

1は内面を黒色処理された坏形土器であり、底部は手もちのヘラケズリ調整。2、3は体部が僅かにたちあがる坏形土器であり、2、3とも底部から体部下端にかけて手もちのヘラケズリ調整。4は糸切り痕を底部に残す。5は口縁部が短く直立し、肩部に稜を有する小形の壺形土器である。底部は厚くなり、底部全面、体部下端まで手もちのヘラケズリ調整。

137号住居跡と出土遺物

住居跡（第156図・図版88）

135号、136号、138号住居跡と重複しており、各々との新旧関係は、136号、138号住居跡とは明確にできなかったが、135号住居跡とは、新が135号住居跡であることは確認できた。

平面形ー東西4.2m、南北3.2mのやや長方形を呈し、北壁中央にカマドが構築されている。

壁ー崩壊しており、ゆるやかな傾斜をもって立ちあがっている。残存壁高20cmを測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー軟弱でかなり凹凸も認められ、遺存はよくない。

カマド（図版89）

壁を切り込み、煙道をゆるやかな傾斜をもたせて立ちあがらせ構築しているが、遺存はよくなく、焼土、粘土を少量検出したにとどまっている。

遺物（第226図・図版139）

図示しえたのは土師器のみであり、甕形土器3点、盤形土器1点、坏形土器1点である。5点とも全てカマドより出土している。

図1は口縁部が外反し、胴部が直線的になる甕形土器であり、2、3は底部のみ残存の甕形土器である。4は体部外面に鋭い稜を持つ大形の盤形土器であり、内面は丹念にヘラミガキ、外面は粗いヘラミガキにより調整されている。5は体部外面下位に稜を有する器高のある大形の坏形土器である。

138号住居跡と出土遺物

住居跡（第156図・図版88）

136号、137号、139号、141号住居跡と切り合っている。新旧については136号、139号とは明確にできなかったが、136号、141号との新旧は、新が136号、141号で、旧が138号住居跡であることが、カマドの残存より明確にすることができた。

平面形ー東西4.5m、南北4.5mの正方形を呈し、カマドは北壁中央やや東よりに位置して構築されている。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高40cm前後を測る。

周溝ー幅25cm、深さ10～15cmのものが東壁から南壁にかけて検出された。

床面ー遺存よく、硬く踏み固められ、平担となっている。

柱穴ー検出できず。

カマド

遺存はよくない。壁を半径状に約60cm前後切り込み、煙道部を作り出している。焼土、粘土も煙道部を中心にして若干検出されたのみである。

遺物（第226・252図・図版139）

図示しえたのは、土師器坏形土器2点、須恵器坏形土器1点と瓦である。

図1、2は、体部外面の稜が退化した坏形土器であり、1は底面は球形を呈し、2は平底気味である。3は体部に火ダスキを有する坏形土器であり、底部は手もちのヘラケズリ調整。

瓦は1点であり、女瓦片である。表面に模骨痕が明瞭に認められる。(図3)

139号住居跡と出土遺物

住居跡（第156図・図版88）

138号住居跡と重複しており、精査の結果でも新旧を明確にすることはできなかった。

平面形ー東西4.1m、南北3.7mのほぼ方形を呈し、北壁中央にカマドが構築されている。

壁ーほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高30cmを測る。

周溝ー幅10cm、深さ5cmのものが壁下を全周している。

床面ー遺存よく、硬く踏み固められているが、平担ではない。

柱穴ー検出できず。

カマド

壁を切り込み煙道部を作り出し、なだらかな傾斜をもって立ちあがらせているが、遺存はよ

くなく、火床にあたる位置から焼土、粘土を少量検出したにすぎない。

遺物（第227図・図版139）

カマドより多量に甕形土器が出土しており、内容的にも興味ある土器群である。図示しえたのは、土師器甕形土器６点、坏形土器２点、高台付坏形土器１点、須恵器壺形土器１点である。図１～７はカマドより、10は床面よりの出土である。

１、２は口縁部の断面がＳ字状を呈し、胴部に張りを有する甕形土器であり、胴下半に特徴的なヘラミガキが認められ、胎土に多量の雲母長石を含む。３、４は、口縁部がコの字形を呈し、胴部外面に特有のヘラケズリが施された薄手の甕形土器である。５、６は甕形土器の台部であり、３、４のような土器に伴うものである。

７、８は底部の小さい、内面黒色処理された坏形土器であり、７は体部下端まで、８は糸切り後周縁部を手もちのヘラケズリで調整されている。９は高台部が垂直になる高台付坏形土器であり、土師器としては類例の少い器種である。10は球形を呈する胴部をもつ壺形土器であり、胴上半部のみ残存。

140号住居跡と出土遺物

住居跡（第157図）

プランの⅔近くが調査区外となっている。

平面形－東西1.9ｍ以上、南北3.35ｍ以上で、カマドの構築位置についても不明である。

壁－ほぼ垂直ぎみに立ちあがり、残存壁高45㎝を測る。

周溝・柱穴－検出できず。

床面－遺存は比較的良好である。

遺物（第227・228図・図版139）

調査区域が住居跡の⅓ほどであり、図示しえた遺物は、土師器坏形土器５点のみである。坏形土器は、全て内面黒色処理されており、図１～４は、底部に糸切りを残し、１～３には墨書痕が認められる等注目すべき内容を有する土器群である。

１は、体部外面および底部外面に「吉」の墨書が認められ、２、３は、底部外面に「吉」と墨書されている。４、５は、やや大形の坏形土器であり、５は、体部下端までにおよぶ手もちのヘラケズリ調整が認められる。

141号住居跡と出土遺物

住居跡（第156図・図版88）

136号、138号住居跡と新旧関係にある。新旧については、138号→136号→141号住居跡の順序に構築されている。全体プランが136号住居跡に包括されてしまう。

平面形ープランを明確に検出することはできないが東西約2.8mと推察できる。

壁ー西壁の一部が残存しているのみであり、良好な遺存とは言えないが、残存壁高5㎝を測る。

周溝・柱穴ー検出できず。

床面ー平坦であるが遺存はよくなく、軟弱となっている。

カマド

しっかりした壁に取りつく形で構築されておらず、遺存がわるく、明確なプランとならない。わずかに焼土、粘土を検出したにとどまっている。

遺物（第141図・図版139）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点、坏形土器1点、須恵器坏形器1点であり、全てカマドよりの出土である。

図1は、口縁部が「く」の字に外反し、肩部にやや張りをもつ薄手の甕形土器であり、胴部上位は横位に、以下は縦位にヘラケズリされている。2は僅かに体部外面に稜を有する坏形土器、3はやや大形の底部より体部が直線的にたちあがり、端部でやや外反する坏形土器である。底部にヘラ切り痕を残す。

142号住居跡と出土遺物

住居跡（第158図・図版90）

平面形ー東西4.05m、南北3.63mのほぼ方形を呈し、カマドが北壁中央から東壁側に位置して構築されている。

壁ー地形の傾斜する位置にあるため、西壁で50㎝、東壁で30㎝を測る。

周溝ー幅20㎝、深さ7～10㎝のものが壁下を周回する。

床面ー遺存良好であるが、西壁沿いが高く、東壁にゆくにつれて低くなり、若干傾斜する傾向にある。

柱穴ー検出できなかった。

カマド（第160図・図版91）

壁を約1.5m程、細長く掘り込み煙道部が作り出されている。残存はよくないが、両袖部が北壁と接する位置に女瓦を立て、袖部の補強をおこない構築されている。かなり長期間利用され

たものか、内部にはかなり多量の焼土が検出されるが、補強材をおおっていたところの粘土は少量検出されたにとどまっている。

遺物（第228・253・257図・図版140）

出土遺物は、土師器、鉄製器、瓦であり、多様な内容を持つ遺物である。図示しえた土器は、土師器甕形土器２点、坏形土器１点である。

図１は、口縁部が直立する「コ」の字形を呈する薄手の甕形土器であり、外面は横位のヘラケズリが、口縁部までおよぶ。２は口縁部が内傾する「コ」の字形を呈し、肩部に張りを有する甕形土器である。３はやや突出気味な底部より、口縁部が外反気味に立ちあがる内面黒色処理された坏形土器であり、底部にヘラ切り痕を残す。

瓦は、女瓦２点を図示したが、２点ともカマドの袖部に使用されたものである。図１は裏面に７×６の型押文が認められ、図２には表面に模骨痕が明瞭に認められる。１は全体の造りより一枚造の可能性を有する瓦である。

鉄製品は平棟造の刀子が１点出土しており、身は12㎝、茎は5.4㎝を測り、鋒は鋭角に尖る。

143号住居跡と出土遺物

住居跡（第159図・図版91・92）

古墳の周溝と切り合っているが、新旧関係については明確にすることはできなかった。

東西２ｍ、南北1.8ｍの不整形のプランを呈し、底面はなべ底状となっており、住居跡と断定する遺構とは積極的には考えられないが、平面形状を考えた場合、住居跡の範囲に含めてもよいのではと思われる。

遺物（第229・253図）

住居跡のプランは不明確であったが、遺物は土師器と瓦が出土しており、内容的にも見るべきものがある。図示しえた土器は、土師器甕形土器２点である。

図１は、口縁部が短かめであるが、大きく外反し、口唇部が直立する断面形であり、肩部にやや張りをもち、大きめな底部にいたる大形の甕形土器である。胎土に雲母、長石などを多量に含み、胴下半には特有のヘラミガキが施された土器。底部に木葉痕を残す。２は、口縁部が大きく外反し、胴部が直線的にさがる甕形土器であり、胴部外面は縦位、最下端のみ横位にヘラケズリ調整。

瓦は２点出土しており、図３はカマドよりの出土。３は男瓦であり、４は女瓦である。４の裏面には篦描きにより刻字されているが、破損しているため、判読不可能。

144号住居跡と出土遺物

住居跡（第159図・図版92）

古墳の周溝と切り合っているか新旧関係については明確にすることはできなかった。プランも不整形となり、壁などもしっかりした立ちあがりとは認められないが、床面と考えられる面は平担となっている。周溝、柱穴、カマドについても明確にすることはできなかった。

遺物（第229図・図版140）

図示しえたのは、土師器坏形土器１点、須恵器坏形１点である。

図１は、内湾気味に体部が立ちあがるやや小形の坏形土器であり、内面は黒色処理され、底部から体部下端まで手もちヘラケズリ調整。２は半球形を呈する小形の坏形土器。底部は手もちのヘラケズリ調整である。

146号住居跡と出土遺物

住居跡（第162図・図版92）

平面形一東西４ｍ、南北4.5ｍで、北壁の東西幅より、南壁の東西幅が長く、台形状を呈する。カマドは北壁中央に構築されていた。

壁一良好に立ちあがり、残存壁高40㎝前後を測る。東、西壁に半円形の掘り込みあるが性格については不明である。

周溝・柱穴一検出できない。

床面一西壁沿いにて凹凸あるが、全体的に遺存はよく、硬く踏み固められている。

カマド（第161図・図版93・94）

壁を「V」字状に60㎝程度切り込み煙道を作り出し構築されている。完形、破片を含めて多量の土器、土器片が出土しており、補強剤として利用されたものや、煮沸用に利用されたものと考えられるが、カマドの残存がよくないため、いずれも、火床、煙道などの底面からの出土である。

遺物（第230・231図・図版140）

出土遺物は、土師器のみであるが、カマドよりの出土が中心であり、甕形土器では本遺跡の中で最も良好な遺存状態であった。図示しえた土器は、甕形土器７点、埦形土器１点、坏形土器２点であり、図１～６、９はカマドより、８は床面よりの出土である。

１、２は、口縁部が強く外反し、端部が水平になり、胴部は直線的にさがり、やや小さめの底部にいたる甕形土器である。１の底部に木葉痕がある。３は口縁部が、ゆるく外反し、端部

が直立気味になり、やや肩部に張りを有する甕形土器である。4～6は、ほとんど口縁部が外反せず、直線的に底部にいたる厚手の甕形土器であり、全体的に粗い造りである。6は口縁部がやや外反気味になる。7は口縁部が「く」の字に外反するやや薄手の甕形土器である。以上甕形土器には器形、調整等多様な様相を示し、特に4～6の土器は独特なもので興味深い。

8は、胴部が球形を呈し、口縁が短く直立する椀形土器であり、器形的に類例の少い土器である。9、10は、体部外面に僅かに稜を残すやや大形の坏形土器である。

147号住居跡と出土遺物

住居跡（第163図・図版94）

全体プランの⅓ほどが調査区外となっている。北壁とカマドの一部、南壁が土拡によって切られている。

平面形一東西3.1m以上、南北2.6mの長方形に近いプランを呈す。カマドは北壁中央よりに構築されている。

壁一残存壁高25cm前後を測る。

周溝・柱穴一検出できず。

床面一凹凸少なく遺存はよい。

カマド（第164図）

土拡で切られており残存はよくない。壁を切り込み構築されているが、焼土、粘土とも少量検出されているにとどまる。

遺物（第231図・図版140）

図示しえたのは土師器のみであり、甕形土器2点、坏形土器2点である。図1はカマドよりの出土である。

1は、口縁部が短く外反し、肩部に強い張りを有する薄手の甕形土器であり、2は、口縁部が内傾する「コ」の字形を呈する。3、4は、体部が内湾気味に立ちあがる坏形土器であり、内面黒色処理され、底部に糸切り痕を残す。3は大形品である。

148号住居跡と出土遺物

住居跡（第165図・図版95）

平面形一東西3.3m前後、南北3m前後の不整形のプランで各コーナーが丸味を持つ。カマドは北壁中央より東壁沿いに構築されている。

壁一全体に立ちあがり、遺存も悪く、残存壁高５～25㎝と各壁によりバラツキがある。

周溝・柱穴一検出できず。

床面一遺存は不良で、軟弱である。

カマド

残存が不良で焼土が若干検出されたのみにとどまっている。煙道は壁を１ｍ程度掘り込んで作り出されている。

遺物（第229・254図）

図示しえたのは、須恵器高台付坏形土器１点丸瓦１点と出土遺物は少量である。

高台付坏形土器は底部のみの残存である。瓦は、男瓦であり、丁寧に面取りされている。

149号住居跡と出土遺物

住居跡（第166図・図版95）

平面形一東西４ｍ、南北3.7ｍのほぼ方形を呈し、カマドが北壁中央に構築されているものが新しく、東壁のものはこわされ、残存していない。

壁一良好な立ちあがりで、残存壁高15～20㎝を測る。

周溝・柱穴一検出できず。

床面一多少軟弱化しているが平担に遺存していた。

カマド（第167図）

壁を切り込み、火床を凹めてなだらかな傾斜をもって立ちあがらせて煙道を形成しているが、残存がよくなく、明確にすることはできなかった。

遺物（第229図・図版141）

出土遺物は微量であり、図示しえたのは、土師器坏形土器１点のみである。

回転ヘラケズリされた底部より体部が直線的に立ちあがる坏形土器である。

151号住居跡と出土遺物

住居跡（第168図）

平面形一東西2.55ｍ、南北3.4ｍの長方形プランを呈する。東壁中央より南壁沿いにカマドが構築されている。

壁一垂直ぎみに立ちあがり、壁高70～80㎝を測る。

周溝一幅15～25㎝、深さ５～８㎝のものが壁下を周回している。

床面一凹凸は少なく良存しているが、多数の小ピットが掘り込まれている。

柱穴一検出できず。あるいは小ピットが柱穴となるかもしれないが明確にできない。

カマド

右袖が南壁に接する状態を示す。壁を切り込んで構築されているものの、残存が悪く、粘土、焼土も少量検出したにすぎない。プラン確認の段階では、カマドの構築がなされていなかったのではないかと考えた程である。

遺物（第229図・図版141）

図示しえたのは、土師器坏形土器2点であり、図2はカマドよりの出土である。

1は、口縁部が玉状を呈する内面黒色処理された坏形土器であり、底部は糸切り後、体部下端まで手もちのヘラケズリ調整されている。2は、やや突出する底部より内湾気味に立ちあがる坏形土器であり、底部は全面手もちのヘラケズリ調整である。

A号遺構と出土遺物

遺構（第169図・図版96）

楕円形、隅丸形の2つの遺構が連結し、その連結部は2.8m前後の長さの溝状の様なものが掘られている。遺構そのものの掘り込みは浅いのであるが、この遺構内に4個の約1.5m以上の深さのピットが掘り込まれている。口径は広狭の差はあるが、深度が増すごとに狭まくなり、底面まで掘り出すことはできなかった。調査中においても道具の使用が意にかなわず、当時においても掘り込むのにかなりの難行であったと想像できる。これから記述するB～G号遺構と同様に、特別な用途のための遺構と考えられる。

遺物（第232図・図版141）

遺物はすべて、覆土上面よりの出土であり、遺構廃絶後、投棄されたと考えられる。図示しえた遺物は、土師器坏形土器3点、盤形土器1点、須恵器坏形土器3点、高台付坏形土器1点、蓋形土器1点、円面硯1点である。

図1～3は、体部外面に僅かな稜を有する坏形土器であるが、3などはほとんど稜が退化している。9は内外面とも赤彩され、内面はヘラミガキ、外面はヘラケズリ後、体部上位をヘラミガキされた盤形土器である。

4～6は、やや大きめな底部より体部が直線的に立ちあがる坏形土器である。4は胎土に雲母を含む特徴的な土器であり、底部より体部下端まで手もちのヘラケズリ調整。5はヘラ切り、6は手もちのヘラケズリ調整である。7はやや低い高台のつく大形の高台付坏形土器である。底部は、回転ヘラケズリ調整であり、胎土に雲母を含む。8はツマミを欠く蓋形土器である。

10は円面硯であり、細片であるが図上復元した。海の部分を二重の提が廻り、内側の提がや

や突出する。台部には台形状の透しが認められる。円面硯は、本遺跡では唯一の出土である。

B・C・D・E号遺構と出土遺物

遺構（第170図・図版97・98・99）

落ち込みを確認した段階では数軒の住居跡が複雑に切り合っているものと考えられていたが、調査が進行するにつれて、住居跡ではなく何か別な遺構であり、しかも単独で機能するものでなく、B・C号、D号、E号が同一機能を有し、同時に使用された遺構であると考えられた。

遺構は、西から東に傾斜する緩傾斜面に構築され、B・C号、D号・E号とゆくにつれレベルは低くなる。これら各々の遺構は溝によりつながっている。形状は不整形、半円形等のバラツキはあるが、掘り込みはしっかりしている。底面はなべ底状にゆるやかに湾曲し、この底面に、形状が円のピットが大小の差はあるものの、B・C号で5ヶ所、D号で6ヶ所、E号（検出できた部分のみで）3ヶ所の合計14の数にのぼるものが掘られている。これらはいずれもプラン中央部に掘られるのではなく、どちらかと言えば、同辺部に配置されている。また遺構底面には全体に鉄さびが付着したと思われる茶褐色の色彩が薄く認められた。掘り込まれているピットは、深さ1.5m前後を底となる。断面は円筒、ラッパ状、中膨れ等がある。

遺物の出土は主に遺構上面で多量に投げ込まれた様相を呈し、浮いた状態である。遺構廃絶後にある程度埋まりかけてから土器等が投げこまれている。また土器と同時に鉄滓がかなり多量に検出されている。

遺物（第232～238・249・254図）

特殊な遺構であり、出土遺物も多く、調査段階で明確な出土位置関係を把握できなかった遺物もある。以下、B号（B・C号のP2－P4より北。）・C号・C・D号（C・D号の覆土上面。C号かD号か明確に出土関係を把握できなかったもの。）・E号とに分けて説明したい。上記の区分は、あくまでも便宜的なものであり、本来一遺構として把握することが適切かと考える。しかし図示しえた遺物が約130点にも及び、調査段階での遺物の取りあげ方にも限界があり、あえて上記の方法により整理して記述していきたい。

また、遺物の出土状態であるが、明らかに遺構廃絶後、かなり埋没が進行した段階で投棄されたと考えられる。すなわち、遺物は覆土上面よりの出土が大部分であり、遺構底面よりの出土は全く認められない。

B号遺構遺物（第232図・図版141）

図示しえた遺物は土師器盤形土器1点、坏形土器4点、須恵器高台付坏形土器1点である。

図1は、内外面とも粗いヘラミガキされた器高の浅い盤形土器である。2～5はほとんど体

部の稜が消滅した坏形土器であり、3は沈線を持ち、4は体部が球形を呈す。6は体部が直線的にたちあがる高台付坏形土器であり、低い断面三角形を呈する高台が特徴的、底部は回転ヘラケズリ調整。

C号遺構遺物（第233・249図・図版141・142）

図示しえたのは、土師器甕形土器1点、盤形土器3点、坏形土器10点、須恵器坏形土器3点、高台付坏形土器1点と瓦2点である。

図1は、口縁部がくの字に外反する小形の甕形土器である。2、3、14は、盤形土器であり、2は内外面赤彩され、内面は丹念にヘラミガキ調整された大形な優品である。3は体部に稜を有し、内面はナデ調整され、14は内外面赤彩され、やや小形な土器である。4～13は、体部外面に稜を有する坏形土器であり、稜は退化しているものもある。全体的に口径の大きく、器高のあるものが多い。

15、17、18は、坏形土器であり、底部の大きい土器。15、17の底部は手もちヘラケズリ調整。18はヘラ切り。16は体部が外反気味に立ちあがる高台付坏形土器であり、高台は低く、断面三角形を呈す。

瓦は2点図示しており、共に女瓦片である。9は表面に模骨痕を残す。(249図9、10)

C・D号遺構遺物（第234図・図版142）

図示しえた遺物は、土師器盤形土器6点、坏形土器18点、須恵器蓋形土器1点、坏形土器2点である。

図1～6は、盤形土器である。1、2とも偏平かつ大形品であり、1は内面ナデ調整され、2は内外面とも丹念なヘラミガキである。3～6はやや器高のある土器であり、3は内面は放射状にヘラミガキされ、4～6は外面は粗く、内面は丹念にヘラミガキ調整されている。7～24は、体部外面に稜を有する坏形土器であり、大形品が多い。各個体の詳細な説明は省くが、体部外面の稜の退化傾向は看取される。24には内面に僅かにヘラミガキが認められる点特徴的である。

25は口縁部が屈曲して独特の断面形を呈する大形の蓋形土器であり、中央に偏平な宝珠形ツマミがつけられている。26、27は坏形土器であり、26は体部が直線的に立ちあがる土器で、底部および体部下端まで手もちのヘラケズリが施されている。

D号遺構遺物（第235・236図・図版142・143）

図示しえたのは、土師器椀形土器3点、盤形土器5点、坏形土器23点、須恵器高台付坏形土器2点、坏形土器3点である。

図1～3は、椀形土器である。1、2は、器高があり、体部はやや外反気味に立ちあがり外面に稜を有する。2の底部内面はヘラミガキ調整。3は底部より直線的に体部が立ちあがる厚

手の土器。4～8は盤形土器であり、4～6は大形品。5は内外面赤彩された優品である。8は内面黒色処理された土器で、器種的には坏形土器の方が妥当かも知れない。黒色処理された土器の祖形といった感のする注目すべき土器である。

9～28は、坏形土器であり、基本的には体部外面に稜を有する坏形土器のタイプの変化と考えている。器形的にもバラエティーに富み、体部が球形を呈するものや、内外面に段を有するもの、平底気味になるもの、等があるが詳細は一覧表を参照されたい。

29、30は高台付坏形土器であり、29は非常に薄手であり、体部が外反気味に立ちあがり、低い断面三角形を呈する高台の付された独特の土器。31～33は坏形土器。31、32はヘラ切り、33は底部全面を手もちのヘラケズリ調整である。

E号遺構遺物（第236・237・237・254図・図版143・144）

図示しえたのは、土師器椀形土器4点、坏形土器19点、盤形土器1点、須恵器甕形土器2点、高坏形土器1点、高台付盤形土器1点、蓋形土器1点、高台付坏形土器3点、坏形土器14点と瓦片3点である。A～G号とした特殊遺構の中で須恵器が最も多く出土しており、多様な内容をもつ土器群である。

図1～4は、比較的大形の椀形土器であり、平底な底部より体部が内湾気味に立ちあがる。1は紐積みでロクロ調整によるものか。内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。技法的にも注目したい土器である。8は内外面とも赤彩され、内面が丹念にヘラミガキされた盤形土器である。5～7、9～20は坏形土器である。5は、器高のある土器であり、ロクロ使用土器である。内面は黒色処理され、体部外面に「運」と墨書されている。底部および体部下端まで手もちヘラケズリ調整である。1と同じく技法的に古手のロクロ使用土器と考えられる。26はやや大きめの底部をもつ坏形土器であり、内面は黒色処理されている。底部は手もちヘラケズリ調整。他の土器よりは明らかに新しい時期の所産である。上記2点の土器以外は、ロクロ未使用の土器であり、6を除き、僅かではあるが体部外面に稜を有する坏形土器である。

21、22は、甕形土器であり、21は口縁部が外反する土器であり、22は大形の土器である。23は脚部のみ残存する高坏形土器であり、裾部が開く。24は器種的にも類例の少い高台付盤形土器であり、器高の浅い土器である。26～28は高台付坏形土器であり、垂直にさがる高台が特徴的である。27の高台の端部は尖り、28は高台を欠く。29～42は坏形土器であり、大きめの底部より体部が直線的に立ちあがるものが多い。33、35が底部回転ヘラケズリ調整、37、38が手もちのヘラケズリ調整、42が糸切りであるが、それ以外の9点全てヘラ切りである。瓦は細片のみ3点出土している。(図3～6)

以上、B～E号遺構に便宜的に分けて説明したが、遺物を概観すると、若干の例外はあるにしても、土器群に大きな時間差が指摘できず、遺構廃絶後、さほど時間が経過しない段階で一

括投棄されたと考えられる。また図示しなかったが、かなりの数の鉄滓が検出されていることも付記しておく。

F号遺構と出土遺物

遺構（第173図・図版100）

「P」字状に掘り込まれた遺構である。地形的に東へ傾斜する、最低面に近い位置に掘り込まれている。楕円形のプランより、幅1.7m前後の溝が東へ延びている。このプラン内に4個所の深いピットが掘られている。これらは、いずれも2m前後の深さで、中ふくらみとなる様に掘られている。井戸とするには口部径が小さすぎると考えられる。特別な用途のもとに使用されたものと考えられる。A～E、G号遺構と同様なものと考えられる。

遺物は、遺構が廃絶したのちにある程度に埋まりかけて凹地状を呈する内部に投げ込まれた感じで出土している。

遺物（第238図・図版144）

図示しえたのは、土師器盤形土器1点、坏形土器11点である。須恵器が全く出土していない点は注目したい。

図1は、内外面とも赤彩された盤形土器であり、偏平な半球形状の器形である。2～12は、体部外面に辛じて稜を残す坏形土器であり、大形品が多い。内面が段を呈するものが多いが、ロクロ未使用土器の最終段階に近い土器と考えられる。2、12などは体部外面に沈線を持つ。

本遺構の遺物出土状態も前述のB～E号と同様であり、遺構廃絶後の一括投棄と考えられる。

G号遺構と出土遺物

遺構（第172図・図版5・85）

東に傾斜する地形の傾斜面から最低面にかけて検出された。いくつかの遺構（同一の用途に利用）が複雑に重複しており、新旧等については明確になし得なかった。

西からの幅70cm、深さ30cm前後の溝が遺構に連結している。遺構は種々の形状を呈するが、その中に、形状、大きさ等のさまざまなピットが複数掘り込まれている。全体を見ると、あたかもハチの巣状に見える。

ピットの断面も、円筒状、ラッパ状、中膨れ等があるが、共通するものとしては、いずれも湧水があり、かつ掘り込みはピット底面にゆくにつれて狭くなることである。また遺構底面全体には鉄さびが付着したと思われる茶褐色の色彩が薄く認められている。遺構としては特殊な

用途に使用されたものと考えられる。確認されたピット数は28である。

遺物の出土は、B・C・D・E・F 号遺構と同様に、当該遺構が廃絶後にある程度埋まりかけた段階で、いっきに投げ込まれた状態で出土している。また同時に鉄滓がかなり多量出土している。

遺物（第239・240・241・242・261図・図版144・145・146）

出土遺物は、24号住居跡と共に最も多量であり、特に土師器坏形土器及び盤形土器は、きわめて多彩な内容を有する土器群である。図示しえたのは、土師器甕形土器６点、椀形土器５点、盤形土器９点、坏形土器37点、須恵器蓋形土器２点、坏形土器５点、横瓶形土器１点と貨幣が１点出土している。

図１～６は、甕形土器である。１は、口縁部が外湾する土器であり、２は、口縁部が強く外湾する土器で、４の胴下半部と同一個体と考えられる。胎土に多量の長石、雲母を含み、胴下半は縦位にヘラミガキされている。３は、口縁部が直立し、胴部が直線的にさがる土器であり、４、５は、口縁部が直立し、球形の胴部を呈する小形な土器である。

７～11は椀形土器であり、７は大形品である。７は体部が外湾気味に立ちあがり、外面に稜を有す。８は底部内面をヘラミガキ調整、９～11は、体部が半球形状を呈す。

12～21は、盤形土器である。13～17は内外面とも赤彩され、かつ内外面とも丹念にヘラミガキされている。14、15、17は特に優品であり、調整、焼成とも丹念かつ良好。12、18、19は、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ調整であり、18は暗文風に放射状ヘラミガキである。20、21は、内面はナデ調整であり、坏形土器と器種を厳密に分けることは難しいが、器高の浅いものを盤形土器とした。

22～58が坏形土器であり、総計37点になる。詳細は土器一覧表に譲るとして、特徴的な土器を説明する。22～29は、体部が半球形状を呈し、端部が尖り、内面に稜を持つものが多い。22～24は盤形土器の器形と類似する。30～54の坏形土器が最も主体的に見られる土器であり、基本的には体部外面に稜をもつタイプのバラエティーと考えられる。土器個々の特徴は省く。56、57は、大形の平底の底部より体部が短く直線的に立ちあがる土器であり、56はロクロ未使用、57は調整段階でロクロを使用している。58は内面黒色処理された土器で、底部にヘラ切り痕を残す。

59、60は、偏平なツマミを持つ蓋形土器であり、59は器高が深く、60は裾部が大きく広がる。61～65は坏形土器であり、大きめの底部より体部が短く直線的に立ちあがる。61、65は胎土に雲母末を含む特徴的な土器である。底部は、63が回転ヘラケズリであるが、それ以外は切り離し後、手持ちのヘラケズリにより調整されており、65は体部下端まで及ぶ。66は横瓶形土器であり、類例の少ない器種である。口縁部が強くくびれ、端部が三角形を呈す。胴部外面には平

行叩目が認められ、中軸に次線が認められる。

貨幣が1点出土しており、元豊通宝（北宋　1078）である。81号住居出土の皇宋通宝などと共に北宋の銅銭として数多く日本に輸入されたもので、中世末まで盛んに流通した貨幣である。

以上、G号遺構の図示しえた遺物の概略を記したが、これ以外に鉄滓が多量に出土している点を付記しておく。遺物の出土状態は、A～F号遺構と同様であり、遺構廃絶後、一括投棄されたものである。

1号井戸跡と出土遺物

井戸跡（第170図・図版97）

B～E号遺構に隣接して確認された。平面形が径約1.8mの円形を呈する素掘りの井戸で、深さ約3mである。掘り方は口径を広くなだらかな傾斜をもたせて80cm前後掘り込み、そこから垂直ぎみに掘り込み底面となる。断面形はラッパ状を呈する。井戸中位の直径で85cm、底面径60cmとせまくなる。底面は水平となっている。

遺物（第242・243・254図・図版147）

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦であるが、須恵器が大部分を占めている。図示しえた土器は、土師器坏形土器1点、須恵器甕形土器2点、壺形土器1点、高台付坏形土器1点、坏形土器3点である。

図3は、体部に僅かな稜を有する坏形土器で、底部はかなり平底気味となる。1、2は共に大形の甕形土器であり、1は球形の胴部より口縁部が外反し、端部が突帯を有する土器で、胴部外面に平行叩目が認められる。2は口縁部のみであるが、きわめて大形の土器であり、波状と平行のクシ描が認められる。4は口縁部が外傾して立ちあがる壺形土器。

5は底面が凸面を呈し、体部が直線的に立ちあがる高台付坏形土器であり、回転ヘラケズリ調整された底部外面に「×」のヘラ記号が認められる。6～8は、坏形土器であり、6、8はヘラ切り、7はヘラ切り後手もちヘラケズリ調整である。瓦は1点のみ、細片である。（図7）

2号井戸跡と出土遺物

井戸跡（第174図・図版104）

径約3m前後の楕円形のプランに、長形1.85m、短形1.1mの卵形の張り出しをもち、一度鍋底状に約40～55cm程掘り下げ、底面中央から多少側壁よりに口径95cmの掘り込みをほぼ垂直に掘り込んでいるが、掘り込みが深くなるにつれて径が狭くなり確認できた最深部2.5mでは、

径が約36cmとなっている。

遺物（第243図・図版147）

図示しえたのは、須恵器高台付坏形土器３点のみである。

図１は、底部が凸面を呈し、高い高台の付された大形の高台付坏形土器であり、底部外面は回転ヘラケズリ調整。２、３は小形の高台付坏形土器であり、底部外面は２は糸切り、３は回転ヘラケズリ調整である。

３号井戸跡と出土遺物

井戸跡（第152図・図版86）

４号井戸跡と一部が切り合う状態で検出された。素掘りであり、径約2.7m前後の楕円形に約40cm掘り下げ底面を平担にしたのちに、プラン中央部から径約1.3m前後の楕円形に湧水面まで円筒状に掘り込んでいる。調査は遺構確認面から約1.5mの深さで、湧水があり、また側壁がもろく、崩壊してくるため、掘り下げを中止した。

遺物（第243図）

図示しえたのは、土師器坏形土器１点である。内面黒色処理された坏形土器であり、体部外面に墨書されている。「福饒」か。126号住居、４号井戸出土の墨書に比し、稚拙な筆致である。

４号井戸跡と出土遺物

遺構（第152図・図版86）

３号井戸跡と一部が切り合う状態で検出された。素掘りであり、径1.6m前後の楕円形に湧水面まで掘りさげている。この井戸跡の施設として利用されたのか口径部に至るまでは、遺構確認面から２～３段に浅く、徐々に掘り下げ階段上になっている。このプランは不整形である。調査は遺構確認面から約1.5mの深さで湧水があり、また側壁の崩壊があるため掘り下げを中止した。

遺物（第243図・図版147）

図示しえたのは、土師器甕形土器１点、埦形土器１点、坏形土器３点、須恵器坏形土器１点である。

図１は、台部のみ残存の甕形土器であり、２は体部上位までヘラケズリが及ぶ、半球形状を呈する埦形土器である。３～５は、内面黒色処理された坏形土器であり、３、５は糸切り、４

は糸切り後、周縁部を手もちヘラケズリ調整。3の体部外面に「福饒」と墨書されており、筆致は126号住居跡の墨書と酷似する。5は底部および体部中位まで手もちのヘラケズリ調整された坏形土器である。

1号円形遺構と出土遺物

遺構（第22図・図版101）

20号住居跡と重複関係にあるが、前後関係については明確にする事はできなかった。

直径3.3m前後で円形よりもやや楕円形に近い平面形で、最深部までの深さは2mである。断面形状はあたかもぐい呑みを地中に埋め込んだ様相を呈し、口径が広く、底径がせまくなり、ラッパ状に開口している。底面中央が直径60cmの円形で、約40cm程度掘り凹められ二段となっている。壁の傾斜は約□度あり、急傾斜となっている。

遺構内の埋土は最下層の褐色土（7層）は自然的な埋土の状態ではなく、何か一度に上部より落ち込んだ感じがする。

遺物

図示可能な遺物は認められない。

2号円形遺構と出土遺物

遺構（第175図・図版102）

99号住居跡に隣接して確認された。プランは口径3.1mの円形を呈し、最深部まで1.65mを測る。他の円形遺構と同様に断面形状はぐい呑みをそのまま地中に埋め込んだ感じであり、掘り込みも一段目を大きく掘り、底面中央からさらに小さな掘り込みがなされ二段となっている。一段目の底径1.2mに、二段目の口径60cm、底径35～40cmに、一段目までの深さ1.35m、二段目の深さ30cmとなり、計1.65mの深さを測る。側壁は一段目の掘り込みの中位あたりで若干の屈曲が認められる。

遺物（第244図・図版147・148）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器2点、須恵器鉢形土器1点である。

図1、2は同一個体であり、口縁部が「く」の字に外反し、肩部の張る薄手の甕形土器であり、胴部外面はヘラケズリ調整。3は木葉痕を残す大形の底部が特徴的な甕形土器。4は厚手の鉢形土器であり、大形な底部より直線的に短く立ちあがり、口縁部が強く外反する。胴部下半は手もちのヘラケズリ調整。

以上の遺物は全て埋土中よりの出土であり、土拡底面には遺物は全く認められず、この傾向は以下記述する３～６号円形遺構にも共通しており、Ａ～Ｇ号遺構同様、遺構廃絶後、投棄されたもとの考えられる。

３号円形遺構と出土遺物

遺構（第176図・図版102）

118号住居跡の南に位置して確認された。長径3.85m、短径3.6mのほぼ円形のプランである。最深部までは1.7mを測る。円形遺構の中でも平面プランの大きいものであり、断面形状は他の遺構と同様にぐい呑みを地中に埋め込んだ感じであり、掘り込みも二段となっている。一段目の底径2.15m前後の底面のほぼ中央に口径75cm、底径35cm、深さ30cmものが掘り込まれている。当円形遺構の一段目の底面には他の遺構では認められなかった６条の溝が掘り込まれており、このうち４条の溝は各々対をなすものと考えられ、その場合、いずれもが二段目の掘り込みの上を通ることが知れる。あるいはこの溝に何か棒状のものを渡している可能性がある。また埋土の土層図から考えられることであるが、同一遺構が、二次的に利用されたことも看取することができる。遺構の機能を考える上で示唆に富むものと言える。

遺物（第244図・図版148）

図示しえたのは、土師器甕形土器２点、坏形土器１点、須恵器甕形土器１点、蓋形土器１点、坏形土器１点である。

図１は、口縁部が強く外反し、端部がつまみだされた形になる甕形土器であり、胎土に雲母等を多量に含む。２は、口縁部が外湾する甕形土器であり、１に比しやや小形であるが、胎土は酷似する。３は半球形を呈する坏形土器であり、体部上位までヘラケズリがおよぶ。

４は口縁部が外湾する甕形土器であり、５はきわめて偏平かつ大形のツマミが付された蓋形土器であり、口縁部が垂直にさがり、端部が尖る。６は胎土に雲母末を含む坏形土器であり、大きな底部より体部が直線的に立ちあがる。底部は手もちヘラケズリ調整。

４号円形遺構と出土遺物

遺構（第133図・図版103）

105号住居跡と重複関係にあるが、前後関係については明確にすることはできなかった。長径2.85m、短径2.4mで、円を若干おしつぶした不整円形となっている。最深部までは約1.65mである。断面形状は他の円形遺構と同様にぐい呑みを地中に埋め込んだ感じである。掘り込

みは二段になっており、一段目の底面中央にさらに径70㎝前後の不整円形が深さ40㎝程に掘られている。側壁は一段目の底面から位置によりばらつきはあるもののかなりの急傾斜をもって掘り込まれている。

遺物（第245図・図版148）

図示しえたのは、土師器坏形土器１点、須恵器鉢形土器１点、坏形土器１点である。

図１は、体部外面下位に稜を有する坏形土器であり、２は体部が直線的に立ちあがる厚手の鉢形土器である。内面に紐積み痕を明瞭に残す。摺鉢として利用したものか。類例の少い器種である。３は底部の大きな坏形土器であり、底部および体部下端を手もちヘラケズリ調整。

５号円形遺構と出土遺物

遺構（第177図・図版103）

148号住居跡の南に位置し確認されている。プランは径3.1ｍのほぼ円形で、最深部で１.７ｍを測る。断面形状はぐい呑みを地中に埋め込んだ感じで、口径が広く、底径がせまくなっている。側壁は、口部よりなだらかに傾斜し、中位から急激な角度をもって掘り込まれ、第一段目の底面となる。この底面は水平であり、第一段目の底面中央に再度径70㎝前後の円形のプランが深さ30㎝に掘り込まれている。最深部の底面も水平となっている。遺構の埋土はレンズ状の推積が看取でき、自然的な埋土と、より人為的に埋め戻された感じがする。

遺物（第245・254図・図版148）

円形遺構の中では、最も多様な様相を有する遺物群であり、坏形土器等興味深い問題を有する。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦であり、図示しえた土器は、土師器甕形土器１点、坏形土器５点、須恵器高台付皿形土器２点、坏形土器２点である。

図１は、球形の胴部より口縁部が外傾気味に立つ厚手の甕形土器である。２、３は、内面黒色処理されたロクロ使用の坏形土器である。２は器高のある土器で、底部は糸切り後手もちヘラケズリ調整。体部に墨書されているが、判読できない。３は大きめの底部より体部が湾曲して立ちあがる。体部外面に「王」と墨書されている。底部は糸切り後、周縁部を手もちヘラケズリ調整。２、３はロクロ使用土器としても、墨書土器としても古いグループのものと考えられる。

４は体部外面に稜を有する坏形土器であり、５、６は平底な底部より体部が直立する小形の坏形土器である。７、８は口縁部が短く直線的に立ちあがる高台付皿形土器であり、７は高台を欠き、８は高い高台がハの字状につけられている。９、10は坏形土器であり、９はヘラ切り後、手もちヘラケズリ調整、10は糸切り痕を底部に残す。

瓦は、女瓦１点であり、表面に明瞭な模骨痕が認められる。(図２)

６号円形遺構と出土遺物

遺構（第178図・図版104）

遺跡の北東端で確認され、151号住居跡と接する状態である。直径約3.7mのほぼ円形を呈し、最深部で2.5m である。断面形状はあたかも、ぐい呑みを地中に埋め込んだ感じで、口径が広く、底径がせまくなり、ラッパ状に開口している。底面中央が40cm前後の方形に掘り凹められ、出べそ状になっている。壁の傾斜は急角度の傾斜となっている。遺構の埋土は西側よりの埋土が多く、遺構が破棄され、壁から底面に黒色土が浅く推積し、その後、褐色土を主体する土層が入り込んでいる。遺物の出土は少ない。

遺物（第245図）

図示しえた遺物は、土師器甕形土器１点のみである。口縁部が強く外反し、胴部が直線的にさがる甕形土器である。

１号掘立柱建物跡

建物跡（第179図）

２号掘立柱建物跡に接して検出されている。南北２間（2.1m×2.1m）分を検出できたのみであり東西間は盛土下となったために確認することはできなかった。大きな建物跡になるとは考えられない。

２号掘立柱建物跡

建物跡（第179図・図版100）

41号住居跡と重複関係にあり、新旧関係については明確にできなかった。東西１間（2.8m）、南北２間（2.1m×2.1m）の南北に長い建物で、東に廂が付くものと考えられる。

３号掘立柱建物跡

建物跡（第180図・図版101）

70、71、78号住居跡に囲まれる位置で確認された。東西２間（1.85m×1.85m）、南北２間

(2.2m×2.2m）の束柱を持たない建物跡である。掘り方はいずれも円形であり、深さは60～80cm前後である。建物跡の東掘り方列に接して２個のピットが掘られており、これらは当該建物跡の廂に相当する掘り方となるかもしれない。いずれも円形で、径約30cm前後で深さ70cmである。

１号墓壙と出土遺物

墓壙（第181図・図版105・106）

79号住居跡の東壁に接して確認された。ピットと切り合うが前後関係については不明である。プランは長さ2.3m、幅80cmの長方形を呈する。底面はほぼ水平を保ち、壁は若干の傾斜を持つも、垂直に立ちあがってゆく。壙内の埋土はローム層に色調がよく近似した感じの黄褐色土を中心としており、意識的に埋め戻した感じである。壙内底面より、ガラス小玉がかなりの数量出土している。

遺物（第260図）

土壙底面よりガラス小玉が17点出土している。小玉の中央に全て円孔を有す。大きさより直径５mm前後と、３mm前後の２つのグループがある。埋葬時には、もっと多量のガラス小玉が副葬されたと考えられる。

古　墳

現状と形態（第156図・図版３・109）

墳丘がまったく失なわれており、調査前の段階でも古墳の存在など頭の中にも入っていなかったし、地元の方々もその存在も知ってはいなかった。周溝は幅1.5m、深さ40cmのものが検出できた。この周溝から古墳は、直径約16mの墳丘をもつ円墳であることが判明した。また、周溝を含めた直径は約19mとなる。

内部主体（第183図・図版109・110）

すでに盗掘をうけており、天井石、奥壁、側壁、閉塞石などすべて取り除かれており、一部石室内に石室構築材の河原石が認められたにすぎない。石室は河原石を積みあげたものと考えられる。

石室の平面形等については明瞭にできなかったが、ローム層を掘り込んで石室は構築されている。このため石室掘り方と墓道のみが検出されている。掘り方は全長５m、奥壁部幅2.7m、石室中央部幅2.7m、玄門部幅約２m、深さ50cmである。地下にもぐるタイプの石室と考えら

れる。墓道は幅約50cmのものが、玄門部にあたる位置から周溝まで浅いものが掘られている。

出土遺物

盗掘の段階ですべて持ちさられており、皆無である。

以上が古墳の概略であるが、主体部が撤底的に破壊されており、検出できたのは、主体部掘り方、墓道、周溝のみの検出であり、時期を決める手がかりすらないが、考えられるとすれば終末期古墳とすべきものと推定する。

1号土壙

土壙（第11図・図版107）

11号住居跡の北東コーナーにおいて重複する形で確認されたが、前後関係については明確にはなし得なかった。

プランは長径1.9m、短径1.25mの卵形をしており、若干口部がせまくなるが、それ程のオーバーハングとはならない。深さは2mまで掘り下げたが、危険防止のため、以下については未調査となってしまった。出土遺物は認められない。

2号土壙

土壙（第182図・図版107）

プランが長方形を呈し、長さ2.6m、幅1.2m、深さ85cm前後の土壙である。底面はほぼ水平に掘られ、壁はほぼ垂直に底面より立ちあがるが、一部では二段となる部分も認められる。出土遺物は、認められない。

3号土壙

土壙（第110図・図版108）

イモ穴より切られており、全体を知ることはできない。長辺1.2m以上、短辺90cmの長方形を呈している。底面はなべ底状になっており、かつ焼けた状態を示している。同時に遺構底面には木炭が厚い層をなしていることが認められた。内部より遺物等の出土はない。

4号土壙

土壙（第134図・図版106）

106号住居跡と重複するが新旧関係については明確になし得なかった。

東西2.2m、南北1.3m以上の長方形のプランであり、壁がほぼ垂直に立ちあがり、残存壁高55～70cmを測る。底面は平担であるがかなり軟らかく、この底面に炉跡状の焼土が経20cmの範囲で認められた。この焼土の堆積する底面は、かなり焼けた状態であった。また南壁には半円形の張り出しが認められている。出土遺物は認められない。

方形周溝墓と出土遺物

遺構（第184図・図版111）

6号、15号、11号住居跡に挟まれる位置において検出された。特に11号住居跡とは、方形周溝墓の北東コーナーと住居跡の南西コーナーは約数cmの差をもって切り合う状態がまぬがれている。地形的に西から東に向って傾斜しているために、方形周溝墓自体も傾斜する形で検出されている。

遺構は、南北に貫通する幅50cm、深さ40～45cmの溝により一部が切られている他は遺存状態は良好であった。プランは東西7.7m、南北7.2mのほぼ方形を呈する。主軸は北を指標とすれば、N－30°－Wである。溝は浅深の差はあるものの方台部を囲んで全周している。また幅は各コーナーで狭まくなり、中央附近では広くなり、外周は丸味をもっている。特に西溝については著しく中央が広くなっている。各々の北、西、南、東溝の最大幅は、1.05m、2m、1.26m、1.35mを測る。また全体的な最小幅は北東コーナーの54cmである。前述したが溝は全体的に浅深の差があり、主に北が深く、南で浅い。特に南溝がかなり浅くなっている。最深部で45cm、最浅部で15cmであった。溝の掘り込みはあまりしっかりしたものではなく、かなりゆるやかな傾斜をもって掘り込まれている。その傾向は溝の深度と関係している。

方台部は東西4.63m、南北5.1mで、やや南北に長い方形を呈する。上面は平担であるが、若干南東に向って傾斜ぎみである。主体部については精査したが検出することができなかった。またマランドの有無についても明確になしえなかった。

出土遺物は北東コーナーの溝内より、溝底面から浮いた状態で、土師器坩形土器が一個体分出土しているのみである。

遺物（第245図・図版149）

出土遺物は、周溝北東コーナーより土師器坩形土器が1点出土したのみであり、坩形土器は溝底面より僅かに浮いた感じで出土している。

偏球形状を呈する胴部より口縁が直線的に外反する坩形土器であり、最大径を口縁部に有す。

胴部下位から底部にかけて焼成後の穿孔があり、周溝墓の供献用土器らしき様相を示す。

縄文・弥生土器について（第246図）

本遺跡で出土した縄文土器、弥生土器は、細片のみで、全て表採ないしは古墳時代以後の遺構覆土中よりの出土である。

図示した土器片は、縄文土器片が3点のみで、他は弥生土器片である。

1～3は、縄文土器の口縁部片であり、1は諸磯b式、2は加曽利E式、3は大洞A式である。

4、5、6、8～10は、地文の縄文上に沈線を配するもので、野沢Ⅱ式の所産であろう。6、7は、野沢Ⅱ式直後のヘラ描きによる土器であり、今市市中小代遺跡出土土器に類似する。

11～17は、単節の縄文を指で2～3条横位にころがして施文している土器である。原体の折り返し部分が条の境となり、無文帯と縄文帯と順次繰り返して、文様が構成されている。井頭遺跡A－1号住居跡出土遺物と類似し、後期初頭に位置づけることができよう。埼玉県吉ガ谷式土器とも一部類似性が認められ、今後、興味深い検討課題であろう。

18～26は、弥生時代後期の二軒屋式の所産であろう。18は、器形が窺い知れる唯一のもので、壺形土器の頸部であろう。18～22は撚糸文を、26は櫛目文が認められる。

27は、古式土師器であろうか。口縁部に擬似縄文の押圧痕が綾杉状に認められる。

尚、弥生土器については、塙静夫先生に御教授を受けた点を銘記しておく。

出土石器について（第262図・図版151）

2点とも住居跡調査中に検出されたものであり、明確な出土層位は確認できないが、形状より歴史時代の所産のものとは考えられず、住居跡出土遺物と分離して説明する。

図1は、珪板岩製の尖頭器の半欠品である。表裏面とも押圧剝離を施し、さらに縁辺に細部の調整が認められる。

図2は、珪岩製の縦長剝片である。プラットホームには二次的調整が加えられ、両サイドの鋭利な縁辺には擦痕も認められる。形状は刃器に似る。表面は大きく三条の縦長の剝離が認められ、主要剝離面にバルブアスカー、プィシャーグ認められる。打角約110°を測る。

上記のように出土層位は不明瞭であるが、2点とも旧石器時代の所産と考えて大過あるまい。

土器一覧表について

本文で土器の詳細について記載することは、繁雑になるため、土器一覧表を作成した。

本表の作成にあたっては下記の点に留意した。以下、箇条書きにして示す。

1．土器番号は、前者が遺構番号を、後者が遺物番号を表わす。例えば、2－3とあるものは、2号住居跡3の土器を示す。

2．器種のところで（S）とあるものは、須恵器を表わす。尚、それが無いものは、全て土師器である。

3．法量は、上より口径、器高、座径とし、－は計測不可能を、⌒・は丸底を、( )は復元計を表わす。なお、高台あるいは台部（脚部）を有するものは、裾端部径をもって底径とした。また、蓋の場合は、口径と器高であるがさらにツマミ径、ツマミ高を加えた。単位は、全てcmである。

4．胎土は、特に須恵器の場合生産地との関連を考慮して詳細に記したつもりである。焼成は、特に良好か不良なものに関して記した。

5．備考の欄に、床面、カマドと記してあるのは出土位置を示し、それ以外に墨書、黒色処理、赤彩されたものに関しても記した。

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1－1	埦	(16.0) 7.2 12.1	器高が比較的高く体部と底部に明瞭な境を有す。底部はやや丸味を呈す。	体部内外面および底部外面全面に入念なヘラミガキ。	胎土は緻密でほとんど砂粒を含まない。焼成良好。色調は内外面とも一部黒色を呈す。	床面
2－1	甕	(20.0) — —	胴部はほとんどふくらみをもたずほぼ直線的に外反する口縁部を有す。	口縁部ヨコナデ後。胴部外面は縦方向のナデ　内面は横方向のナデ	胎土は砂粒，長石粒を多量に含む。赤褐色を呈す。	
2－2	埦	13.4 7.1 6.2	器高が比較的高く，平底の底部から内湾気味に外反する口縁部を有す。最大経は，口縁部にくる。	内面は，全面を放射状にヘラミガキ後，口縁部を，横方向にヘラミガキ。外面は，体部をヘラケズリ後，全体に横方向のヘラミガキ，底部外面にもヘラミガキがおよぶ。	胎土は，砂粒を若干含むが，よく精選されている。焼成は良好で暗褐色を呈す。	床面
2－3	坏	14.7 4.2 ・	半球形状を呈す。全体的にやや偏平。	内面は全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，ヘラケズリ。	胎土は，緻密であるが，赤色の粒子を多量に含む。焼成は良好で赤褐色を呈す。	床面
2－4	盤	(19.0) (4.0) ・	体部と底部の境に外に張り出す稜を有す。偏平な盤状を呈す。	内面は全体をヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。口縁部外面にも，ややヘラミガキがおよぶ。	胎土は，砂粒を少量含む。内面は赤褐色，外面は黄褐色を呈す。	内面赤彩
2－5	高台付坏 （S）	15.5 5.5 8.3	器高が高く大形。全体的に厚手のつくり。底部内面中央部に凹部を形成。器形のゆがみが目立つ	ロクロ水挽成形。 底部切り離し後，全面を回転ヘラケズリ。付高台。	胎土は，やや粒の粗い砂粒，長石粒を含む。青灰色を呈す	
3－1	坏	14.1 4.3 ・	体部に，ヘラケズリによってできた軽い稜を有する。底部は，平底に近い。	内面は全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量を含む。褐色を基調とするが，部分的に黒褐色を呈す。	床面
3－2	坏	12.0 4.2 ・	小形。体部，外面に軽い稜を有す。	内面は，全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。焼成はやや不良で，暗褐色を呈す。	床面
4－1	坏	12.0 4.1 ・	小形。体部外面にするどい稜を有す。また内面にも，軽い段を有す。	内面は，全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	床面
4－2	坏	(12.0) 4.1 ・	小形。体部外面には，外に張り出す稜を有す。全体に厚手のつくり。	内面は，全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。内外面とも剝落が著しい。	胎土は，緻密。焼成は，不良褐色を基調とし，部分的に，黒褐色を呈す。	
4－3	坏（S）	— — 5.4	底部のみ。やや突出気味の底部。	ロクロ水挽き成形。 回転糸切り。	胎土は，砂粒を若干含む。 暗灰色を呈す。	
5－1	坏	(13.5) (5.5)	体部外面に，稜を有す。	内面は，全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，緻密。焼成は良好で暗褐色を呈す。	
5－2	坏	(11.0) 3.7 ・	小形。体部外面に軽い稜を有す。	内面は，全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む黄褐色を呈す。	
6－1	甕	15.5 — —	小形。口縁部は，「く」の字状に外反する。胴部は，やや丸味をもち，最大径は，ほぼ口径と同じ。	口縁部ヨコナデの後，外面は縦方向のヘラケズリ，内面は横方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。焼成不良で，黄褐色を呈す。	カマド
7－1	盤	15.4 3.7 ・	半球形状を呈す。底部は，やや平底気味	内面は，底部を一方向にヘラミガキした後，口縁部を横方向（連孤状）にヘラミガキ。外面は口縁部横ナデの後，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
10－1	甑	(24.0) (5.0) (10.5)	体部が，大きく開き，器高が低く，浅鉢状を呈す。孔径は3.0cm。	内面は，全体をナデ，外面は口縁ヨコナデの後，ヘラケズリ。底部外面もヘラケズリ。	胎土には，砂粒を多量に含む暗褐色を呈す。	
11－1	壺	15.1 — —	折り返し口縁であり頸部よりほぼ直線的に外反する。口縁部のみ残存。	ヨコナデ後口縁内面はハケ状具による調整後ヘラミガキ。外面はハケ状具による調整後一部ヘラナデ。	小砂粒含有。 明褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
11－2	坩	9.5 15.2 4.0	ほぼ球形の胴部より口縁部が直線的に外反する。最大径は胴部中央に有し，底部は平底	口縁内面は，ハケ状具調整後タテ方向のヘラミガキ，外面はハケ→ヘラミガキ（タテ）一部にハケ目が残存。	小砂粒含有。一部器面に表出赤褐色を呈す。	
11－3	坩	10.2 12.2 3.1	やや偏平な球形の胴部より口縁部が外反する。口縁部最大径は胴部最大径と同じ。底部は平底。	口縁内面はヘラミガキ，外面はタテ方向のヘラミガキ胴部はヨコ方向のヘラミガキ。胴部上面にはハケ目痕残存。	白色小砂粒を含み一部器面表出。赤褐色を呈す。	
11－4	甑	16.0 6.7 —	小形な甑であり，鉢状の器形大きく開く口縁より弧状なカーブで底面小孔に達す。孔は1個（径 2.1cm）	内面はナデ外面はヨコ方向のハケ状具による調整。粘土ヒモ積み成形痕が明瞭に観察される。	多量に砂粒含有。 赤茶褐色を呈す。	
11－5	坩	7.8 6.9 1.5	口縁部に最大径をもつ小形な土器。底部は丸底やや窪みをもつ。	口縁部内面はヘラケズリ後ヘラミガキ胴部はヘラケズリ，外面はヘラケズリ後入念なヘラミガキ。	胎土に小砂粒含む。 色調は褐色一部は黒色を呈す	
11－6	埦	9.6 6.3 2.0	半球形の胴部にくの字に屈折する口縁を有す。底部はやや窪みをもつ丸底	内面はヘラケズリ後ナデによる調整。外面はヘラケズり後不定なハケ，胴下半はヘラミガキ。	胎土に，砂粒含有。 色調は赤褐色外面一部は黒色を呈す。	
11－7	埦	9.1 4.9 2.8	高台状を呈する底部より急なたちあがりを示す小形な土器	口縁はヨコナデ後外面胴下半はヘラケズリ。	比較的大きな砂粒が表出。 色調は茶褐色。	
11－8	埦	7.9 4.5 4.0	平滑に調整された比較的大きな底部より直線的にたちあがる小形な土器。	口縁はヨコナデ。内面ヘラケズリ外面はタテ方向のヘラミガミ。ヒモ積痕が口縁部にみられる。	小砂粒含有 色調は赤褐色を呈す。	
11－9	埦	9.0 5.5 2.8	高台を呈する特徴的な底部より直線的に外反する小形土器	口縁はヨコナデ，内外面ともヘラナデ	小砂粒を含む。焼成良好。 赤褐色を呈す。	
11－10	高坏	18.4 16.2 15.8	「エラ」状に突出した部分より垂直に立ちあがり大きく外反し,口唇部ではほぼ水平になる坏部と裾が大きく開く脚部を有する高坏。坏部に3個の台形状の円窓脚部には4個の小円孔を有す。	坏部は内外面とも不明瞭であるがヘラナデ。外面一部ハケ目残る。脚部内面ハケ。外面はヘラミガキ。	白色小砂粒を含む。 淡黄褐色を呈する。	
11－11	高坏	13.8 — —	平底状な底面より外反する口縁部を有する坏部と大きく開くと思われる裾部を欠く脚部とよりなる。脚部に3個の円孔有り。	坏部は内外ともヘラミガキ。脚部内面ハケ，外面入念なヘラミガキ。接合部にハケ目痕残る。	砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	
11－12	高坏	11.9 7.6 7.6	小さい脚部と緩やかに外反する坏部とからなる小形な高坏。脚部には3つの小円孔。	坏部口縁ヨコナデ，外面ヘラミガキ。脚部内面ハケ外面ヘラミガキ坏部と脚部と接合痕あり。	小白砂粒含有。 褐色を呈す。	
11－13	高坏	11.4 6.6 6.2	坏部に比して小形な脚部を有する高坏。口縁は直線的に外反する。脚部に3つの小円孔あり。	坏部ヨコナデ後ヘラミガキ。外面は横方向ヘラミガキ。脚部内面ハケ，外面不定方向のヘラミガキ。	砂粒含有，焼成良好。 茶褐色を呈す。	
11－14	器台	9.5 9.1 11.8	非常にバランスのよい土器である。口縁部が屈曲して稜となる器受部と直線的に開く脚部に3個の円孔あり。	器受部はヨコナデ外面は入念なミガキ。脚部は内面ハケ。外面は入念なミガキ。	砂粒をほとんど含まない精選された胎土。焼成良好。	
11－15	器台	7.8 8.5 12.4	小さな器受部と裾部が大きく開く脚部よりなる。 脚部に3個の円孔あり。	器受部内外面横方向のヘラミガキ。脚部内面ハケ外面タテ方向のヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 褐色を呈す。焼成不良	
11－16	器台	7.8 8.4 11.2	直線的に外反する器受部と直線的に開く脚部よりなる。3個の円孔が不等間隔に穿たれている。	器受部内外面とも横方向の粗いヘラミガキ。脚部内面一部ヘラナデ外面ヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。焼成不良 褐色を呈す。	
11－17	器台	7.1 8.2 10.6	直線的に外反する器受部と円筒形を呈する脚部よりなる。	器受部は内外面ともヘラミガキ。脚部外面はヘラミガキ。	砂粒を多量に含む。 暗褐色を呈す。焼成不良	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
11－18	器台	6.5 7.8 9.8	器受部と脚部の接合部は肥厚している。直線的に外反する器受部と中位がやや膨む脚部よりなる。	器受部は内外面とも入念なミガキ。脚部外面はヘラミガキ	砂量を多量に含む。 褐色を呈す。	
11－19	器台	— — 10.4	やや丸みを呈する器受部と裾が開く脚部よりなる。	脚部外面は三段にわけて入念なヘラミガキ。	ほとんど砂量を含まない。 赤褐色を呈す。焼成良好	
12－1	甕	21.5 32.4 6.5	胴部は，肩部に若干の張りをもって，直線的に底部に至る口縁部は，大きく外湾し，端部ではとんど水平になる。口縁部に最大径を有す。	口縁部ヨコナデの後，胴部内面は，斜め上方向のヘラナデ外面は，縦方向の鋭利なヘラケズリ。なお，胴最下部は，横位のヘラケズリ。底部外面は，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含み，特にヘラケズリによるその移動は著しい。内面は，淡黄褐色，外面は，暗茶褐色を呈する。	床面
12－2	坏	15.5 4.8 ・	体部外面に軽い稜を有し，内面にも軽い段を有す。	内面は，全体をナデ，外面は口縁部をヨコナデ後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 淡黄褐色を呈す。	床面
12－3	坏	16.1 4.5 ・	体部外面に軽い稜を有す。	内面は，全体をナデ,外面は口縁部をヨコナデ後，底部をヘラケズリ。	胎土は砂粒を若干含む。 淡黄褐色を呈す。	床面
13－1	甕	— — (7.0)	胴部下半のみ。胴部は，ほぼ直線的で長胴形を呈す。	内面はナデているが，紐積み痕を明瞭に残す。外面は縦方向のヘラケズリ。底部木葉痕	胎土は，砂粒（長石など）雲母を多量に含む。焼成不良。暗茶褐色を呈す。	床面 ・
13－2	坏	10.7 3.8 ・	短かめの口縁部が，ほぼ直立体部外面との境に稜を有す。	内面は全体ナデ。外面は口縁部をヨコナデ後，体部から底部を横方向を基調とした，ヘラケズリ。	胎土は緻密。焼成良好で堅緻暗褐色を呈す。	床面
13－3	坏	10.1 3.8 ・	小形。外面はほとんど変化ないが，内面は，口縁部と体部の境に稜を有す。口唇部は，尖り気味。	内面は全体をナデ。外面は，口縁部をヨコナデ後，体部から，底部をヘラケヅリ。	胎土は，緻密。焼成良好で堅緻。暗褐色を呈す。	
13－4	坏	10.9 3.8 ・	体部外面に，外に張り出す稜を有す。また内面にも段を有し，口縁部は，内湾気味に立ち上がる。	内面は全体をナデ。外面は口縁部をヨコナデ後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒少量含む。淡黄褐色を呈し，内面底部のみ黒色を呈す。	床面
13－5	坏	10.2 3.2 ・	小形。体部外面に稜を有す。口縁部は，内湾気味に立ち上がる。	内面は，全体をナデ。外面は口縁部をヨコナデ後，底部をヘラケヅリ。	胎土は，砂粒を含む。褐色を呈す。	
14－1	坏	15.4 5.0 6.1	ロクロ痕，明瞭。体部は，直線的に立ち上がる。	ロクロ水挽き成形。底部切り離し後，全面を，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒，および雲母を多量に含む。灰色を呈す。	
15－1	坏	— — 8.6	底部のみ残存。	ロクロ水挽き成形。回転ヘラ切り。	胎土は，長石を若干含む。青灰色を呈す。	
16－1	盤	14.4 3.2 ・	全体的に偏平で，底部も平担面を有す。	内面は底面が，一方向の，体部が横方向のヘラミガキ。外面は底部を不定方向にヘラケズリ後，体部を，横方向にヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む焼成は良好で，内外面とも暗赤褐色を呈す。	内外面赤彩
16－2	坏	14.7 3.5 8.9	底部が広く器高が小さい。体部は直線的。	ロクロ水挽き成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）をまばらに含む。淡赤褐色を呈す。	
17－1	甕	24.6 32.3 9.3	球形を呈する胴部とほぼ直立する口縁部を有する大形の土器。最大径を胴部中央に有し口縁部径が大きい点特徴的である。	口縁部内外面，ヨコ方向のハケの後タテ方向のハケ調整。胴部はタテ方向のハケ。胴部内面器壁のハク落著しい。	砂量を多く含む。 黒褐色を呈す。	
17－2	甕	18.4 — —	くの字に外反する口縁部とやや長胴最大径を胴部上位にもち台部の一部を欠く土器。口縁部上位に稜をもつ。	口縁部外面はヨコナデ後，タテ位のハケ。胴部は不定方向にハケ調整。	砂量を多く含む。 黒褐色を呈す。	
17－3	甕	9.2 11.0 5.6	口縁部がほぼ直線的にたちあがり，口縁部径と胴部径がほぼ同じくらいの偏球体の胴部を有する小形台付甕である。	口縁部外面はハケ，内面はヘラミガキとナデ調整。胴部外面は粗いハケ。	砂粒若干混入。 淡黄褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
17－4	甕 (台部のみ)	— — 8.5	直線的に裾部にいたる台部のみ遺存。	台部外面ハケ，内面ヘラケズリ。	白石砂粒含有。 茶褐色を呈す。	
17－5	壺	15.2 31.6 9	非常にバランスの良い土器である。ほぼ中央に最大径をもつ球形の胴部より口縁部が大きく「く」の字に外反する。底部の一部を欠く。	口縁部内外面ともヘラミガキ頸部外面にハケ調整痕。胴部外面にタテ位のヘラミガキ。胴部下位に粘土ヒモ積み痕あり。胴部の一部に赤色顔料塗布	精選された胎土で白色小砂粒含有。焼成良好。黄褐色を呈す。	
17－6	坩	11.6 — —	口縁部「く」の字状に外反し球形の胴部をもつ比較的大形の土器。胴下半を欠くが最大径は胴部中央に持つと思われる。	口縁部外面はハケ内面はヘラミガキ。胴部外面は不定方向のヘラミガキ。口頸部下に粘土ヒモ積み痕あり。	小砂粒含有。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	
17－7	埦	9.2 6.5 3.2	口縁部が緩く外反しほとんどふくらみをもたない体部にいたる。最大径は口縁部。底部は平底。	口縁部ヨコナデ，体部外面ハケ調整。	小砂粒を多く含む。 淡褐色を呈す。	
17－8	埦	9.1 5.1 3.8	口唇部下に若干の屈曲をもちほぼ弧状に底部にいたる土器底部は平底。	口縁部ヨコナデ体部外面一部ハケ調整	砂粒および金雲母含む。 焼成不良。 茶褐色を呈す。	
17－9	埦	6.0 3.3 2.8	手づくねによるミニチュア土器。口縁部が屈曲してたち，厚い底部にいたる。	体部内面に手づくぬ整形による指圧痕あり。	微砂粒及び雲母を少々含む。 焼成不良。茶褐色を呈す。	
17－10	高坏	13.0 10.3 13.9	緩い弧状を呈してたちあがる坏部と裾部まで一様なカーブを呈する脚部とよりなる。比較的バランスの良い土器。脚部ほぼ中央に約1cmの円孔が3個あり。	坏部調整は器面が荒れており不明。脚部は内外面ともハケ。	砂粒を多く含む。 茶褐色を呈す。	
17－11	高坏	11.5 9.6 13.9	直線的なたちあがりを呈する坏部と棒状を呈し裾部が大きく開く脚部とよりなる。脚部に3個の円孔を有する。	坏部内外面ともヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ内面ハケ。	若干砂粒含有。焼成良好堅緻 赤褐色を呈す。	
17－12	器台	— — 10.6	器台の脚部のみの遺存。直線的に開く脚部であり，脚部上位に約 1.3cmの円孔がほぼ等間隔に3個あり。	脚部外面三段にヘラミガキ。内面はハケ。	微砂粒混入。焼成良好堅緻。 赤褐色を呈す。	
17－13	器台	— — —	器台の脚部一部の遺存。3個の円孔あり。	内面ヘラケズリ，外面ハケ。	微砂粒混入，褐色を呈す	
19－1	甕	19.5 — —	くの字に外反する口縁部と胴下半部に膨みをもつ大形な土器。胴部にススの付着。底部を欠く。	口縁部内外面とも丹念なハケ調整。胴部外面ハケ，内面ヘラナデ。	砂粒混入。 黒褐色を呈す。	
19－2	甕	15.3 21.5 4.8	口縁部がややたちぎみに外反し最大径をほぼ中央に有し球形を呈する胴部よりなる。底部はやや不整な丸底を呈す。一部ススト付着	口縁部内外面ともヨコナデ。胴上半部外面はハケ内面ヘラナデ。下半部外面ヘラナデ内面荒いハケ。胴下半部に粘土ヒモ積み痕あり。	砂粒多量に混入。 黒褐色を呈す。	
19－3	甕	15.5 19.5 —	口縁部がくの字に外反し，やや長胴で胴下半部に膨みをもつ土器であり19－1を小形にした感がある。底部を欠く。一部ススト付着。	口縁部外面タテ位にハケ内面ヨコ位にハケ。胴部外面ハケ下半部やや荒いハケ。内面ヘラナデ。	砂粒多量に混入。 黒褐色を呈す。	
19－4	甕	17.8 — —	口縁部が屈曲してわずかに稜をもってたちあがり球形を呈する胴部よりなる。器壁がうすく台付甕かと思われる。ススの付着	口縁部ヨコナデ 胴部外面粗いハケ内面ヘラナデ。	微砂粒混入。 茶褐色を呈す。	
19－5	甕	— — 12.6	台部と胴部の一部遺存。台端部に折り返し痕を有し，胴部は大きく開き球形を呈する胴部になると思われる。19－4とは別個体。	胴下半部外面丹念なハケ内面ナデ。台部外面タテ位のハケ。内面ヘラナデ後ヨコ位のハケ。	微砂粒混入。 焼成良好。茶褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
19－6	甕	14.8 25.0 7.8	口縁部がくの字に外反し長胴な胴部よりなる。最大径は胴部中位にもつ。比較的小形な台部であ　端部には折り返し痕を有する。	口縁部外面はハケ調整後ヨコナデ。内面はヨコ位のハケ。胴部外面は不規則なハケ内面ナデ台部外面タテ位のハケ内面ヨコ位のハケ。粘土ヒモ積み痕が胴部内面にみられる。	砂粒小礫を含む。黒褐色を呈するが台部は茶褐色。	
19－7	甑	14.6 16.9 5.7	直線的にくの字に外反する口縁部と球形を呈する胴部よりなる。底部は比較的大きく平底である。底部に上・下面よりあけた円孔あり。甕を転用して甑として使用したと思われる。ススの付着。	口縁部外面ヨコナデ後一部ハケ，内面ヨコナデ。胴部外面斜位のハケ，内面ヘラナデ。	砂粒を多量に含む。焼成不良黒褐色を呈す。	
19－8	坩	— — —	口縁部と底部を欠く小形な土器。胴部上位に最大径を有し器厚のある土器。	胴部外面ヘラナデ一部ハケを残す。内面ヘラナデ。粘土ヒモ積み痕あり。	大小砂粒および微量の雲母含む。焼成不良。茶褐色を呈す	床面
19－9	埦	10.2 6.2 4.1	器高があり，やや安定感を欠く平底より直線的にたちあがる口縁部を有する。器内面に墨跡(？)らしきものあり。	内外面ともヘラナデ。 底部はナデ調整。	砂粒多量に混入。 赤褐色を呈する。	
19－10	器台(?)	2.0 7.3 14.2	特異な器形である。径 2.0cm と小さい器受部より大きく直線的に開く脚部よりなる。器台と考えたが本遺跡では一例のみである。	脚部外面は荒いタテ位のヘラミガキ。内面は入念なハケ。	砂粒を多量に混入。 焼成不良。黄褐色を呈す。	
19－11	坏	13.4 3.0 ・	偏平な半球形を呈する。	外面ヘラケズリ内面ヘラミガキ。底部ヘラケズリ。	微砂粒混入。 茶褐色を呈す。	本遺構には伴なわないと思われる
20－1	坏	12.8 —	半球状を呈す。口縁部外面がわずかに直立し，口唇部は尖り気味。	内面は，体部を連弧状にヘラミガキ。外面は口縁部ヨコナデの後ヘラケズリ。	胎土は微砂粒を含む。焼成良好。内外面とも赤褐色を呈す	内外面赤彩
20－2	蓋(?)	14.0 5.3 3.8	体部の大きく開く坏形土器を逆にしたような器形で，高台状のツマミを有す。	内外面ともに，ナデ調整。	胎土は，砂粒を含む。焼成やや不良で暗褐色を呈す。	
20－3	坏	二 (5.5)	底部のみ残存。やや突出気味の底部。	ロクロ水挽き成形。回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
20－4	高台付坏	— — (9.5)	高台はやや外反気味。	ロクロ水挽き成形。回転糸切り。付高台。	胎土は砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
21－1	甕	17.5 — —	くの字に大きく外反する口縁部のみ遺存。	口縁部内外面ともハケ後ナデ肩部外面入念なハケ内面横位のヘラミガキ。	小石(2㎜角)砂粒混入。 焼成良好。淡褐色を呈す。	
21－2	甕	— — 4.2	口縁端部を欠くが，くの字に外反する小形甕である。	胴部内面下位，ヘラミガキ。 粘土ヒモ積み痕あり。	砂粒混入。 褐色を呈す。	
21－3	高坏 (坏部のみ)	12.1 — —	坏部のみの遺存であり弧状を呈して口唇部にいたる比較的深い坏部である。脚部との接合部に棒状の凸部あり。	坏部外面斜位のヘラミガキ。内両二段にタテ位のヘラミガキ。	微砂粒混入。焼成良好。 淡褐色を呈す。	
21－4	高坏 (脚部のみ)	— — 17.2	高坏脚部のみの遺存。若干棒状を呈し裾部が大きく開く。坏部との接合痕の凹部あり。	脚部外面ヘラミガキ内面ナデ一部ハケ目が残る。	微砂粒混入。 黄褐色を呈す。	
21－5	器台	7.3 7.9 12.4	器受部は直線的にたちあがるが口唇下に若干の稜をもつ。脚部はやや裾部が開く。円孔を3個有す。	器受部内外面ともヨコナデヘラミガキ。脚部外面ハケ後ヘラミガキ。内面ハケ(横位)	白色微砂粒混入。 焼成良好。赤褐色を呈す。	
21.6	器台 (脚部のみ)	— — 12.6	器受部を欠く。比較的器高があり直線的に開く。円孔を3個有す。	脚部外面ヘラミガキ。 内面ハケ。	白色微砂粒混入。 橙褐色を呈す。	
21－7	器台 (脚部のみ)	— — 10.6	器受部を欠く，直線的に裾部にいたる小形器台。3個の円孔を有す。	脚部外面ハケ後ヘラミガキ。 内面一部ハケ。	小砂粒混入。焼成不良。 褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
21－8	器台 (脚部のみ)	— — 11.0	器受部を欠く。比較的小形である。裾部まやや開く。3個の円孔あり。	脚部外面ハケ後ヘラミガキ。 内面ハケ。	小砂粒混入。 橙褐色を呈す。	
22－1	甕	(12.8) — —	小形。口縁部は「く」の字状に外反する。肩部に稜を有す	口縁部ヨコナデの後，胴部外面は，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。明褐色を呈す。	
22－2	坏	(14.7) (3.5) ・	体部外面に軽い稜を有す。	内面は全体をナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。内面黒褐色，外面，褐色を呈す	
22－3	坏	13.7 4.1 7.2	体部と底部の区別が明瞭で，平底を呈す。	内面は，全体をナデ。外面は口縁部ヨコナデの後に，体部から底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗灰褐色を呈す。	カマド
24－1	甕	17.0 — —	胴部は，球形を呈し，ゆるく外反する口縁部を有す。口唇部はおり返し気味になる。最大径は胴部にくる。	口縁部ヨコナデの後，内面は横方向のヘラナデ，外面は，縦方向を基調としたヘラケズリ。	胎土は，砂粒，雲母を少量含む。淡赤褐色を呈す。	
24－1	甕	(28.4) — —	口縁部は「く」の字状に外反比較的大形で，最大径は口縁部になると思われる。	口縁部ヨコナデの後，胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は巾4～5cmのヘラによるナデが施される。	胎土は，砂粒，雲母を含む。内面は茶褐色，外面は，暗褐色を呈す。	
24－3	甕	(18.9) — —	口縁部は「く」の字状に外反最大径は胴部にくる。	口縁部ヨコナデの後，外面は縦方向のヘラケズリ。頸部にヘラケズリによる稜が残る。口縁部外面には，紐積み痕が残る。	胎土は，微砂粒および雲母を少量含む。淡赤褐色を呈す。	
24－4	甕	(24.9) — —	口縁部は，直線的に外反し，胴部は，長胴を呈すと思われる。最大径は，口縁部にくる	口縁部ヨコナデの後，外面は縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を，比較的多量に含む。赤褐色を呈す。	
24－5	甕	(23.0) — —	口縁部のみの残存。直線的に外反するものである。	口縁部ヨコナデ。	胎土は，砂粒を含む。 茶褐色を呈す。	
24－6	甕	(19.9) — —	口縁部は，「く」の字状に外反。最大径は，胴部にくると思われる。	口縁部ヨコナデの後，肩部内面は，横位のヘラナデ，外面は，ヘラケズリ。	胎土は，緻密。焼成は，良好で赤褐色を呈す。	
24－7	甕	(20.0) — —	口縁部は「く」の字状に大きく外反する。胴部はやや長胴になると思われる。	口縁部ヨコナデの後，胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は，縦方向の指先によるナデ。	胎土は，粒子の粗い砂粒，長石粒，雲母などを多量に含む暗褐色を呈する。	
24－8	甕	(20.0) — —	口縁部のみの残存。口縁部は外湾気味で，口唇部外面に，二条の溝が走る。	口縁部ヨコナデ。	胎土は，微砂粒，および少量の雲母を含む。淡黄褐色を呈す。	
24－9	甕	(22.0) — —	口縁部は，ゆるやかに外反し口唇部外面が直立気味になるため断面が三角形を呈す。	口縁部ヨコナデの後，胴部外面は，ナデにより平滑に仕上げられる。内面は，剝落か著しく不明	胎土は砂粒，長石粒，雲母などを多量に含む。焼成は良好淡赤褐色を呈す。	
24－10	甕	(12.7) — —	小形。胴部は，球形を呈し，口縁部，ほぼ直立する。頸部には明瞭な稜を形成する。	口縁部ヨコナデの後，胴部内面は横位のヘラナデ，外面は斜方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面は，明褐色，外面は褐色を呈す。	
24－11	甕	(11.0) — —	小形。胴部は，球形を呈し，短かい口縁部が，わずかに外傾する。	口縁部ヨコナデの後，胴部外面は，縦方向のヘラケズリ。内面は剝落が著しく不明。	胎土は，砂粒および，若干の長石粒，雲母を含む。淡赤褐色を呈す。	
24－12	甕	— — 6.8	底部のみの残存。底部はやや突出気味で，ほぼ直線的に胴部に至ると思われる。	内面は，横方向を基調としたヘラナデ。外面は，縦方向の指先(?)によるナデ。底部には木葉痕。	胎土は，砂粒，雲母，長石粒を含む。内面は茶褐色，外面は暗褐色を呈す。	
24－13	甕	— — 6.2	底部のみの残存。底部は，わずかに突出する。	内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズり底部には，木葉痕。	胎土は，長石粒，雲母を多量に含む。内面は赤褐色，外面暗褐色を呈す。	
24－14	台付甕(?)	— — 12.7	脚部のみの残存。脚部は大きく広がるが，中程で，やや膨くらみをもつ。また，脚上部には，相対する二つの三日月状の穴が穿たれる。	裾部ヨコナデの後，内面は，ヘラナデ。外面は，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を比較的多量に含む。焼成は，やや不良，茶褐色を呈する。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
24－15	埦	(24.7) (9.6) ・	大形。半球形状を呈す。	内面は，低面が一方向の体部から口縁部が，横方向のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部から底部に横方向を基調としたヘラケズり。	胎土は緻密。焼成は良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
24－16	埦	(14.2) (7.5) ・	半球形状を呈す。器高が深く口縁部は，やや内湾気味となる。	口縁部ヨコナデの後，内面は，放射状の密なヘラミガキ，外面は，体部から底部にかけて，横方向を基調としたヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。明茶褐色を呈す。	
24－17	埦	13.7 9.5 ・	半球形状を呈す。器高がかなり深く，口縁部は，やや内湾気味となる。	口縁部ヨコナデの後，内面は，横方向を基調としたヘラミガキ。外面は，ヘラケズリの後，やや粗にヘラミガキ。	胎土は，緻密。焼成は，良好。淡赤褐を呈す。底部外面に黒斑有り。	
24－18	埦	(18.0) － －	体部外面に，明瞭な稜を有す。器形は，丸底の淡形を呈すと思われる。	口縁部ヨコナデの後，内面は，横方向のヘラナデ。外面は，ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	
24－19	盤	(16.0) (4.5) ・	半球形状を呈す。	口縁部ヨコナデの後，内面は，ヘラナデ。外面は，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。口縁部近くが，黒褐色，その他淡黄褐色を呈す。	
24－20	盤	(15.9) (4.1) ・	半球形状を呈す。	内面は，全体をナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。淡褐色を呈す。	
24－21	盤	15.6 4.0 ・	半球形状を呈し。器高は，やや浅い。	内面は，全体をナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。明褐色を呈す。	
24－22	盤	(18.0) (3.9) ・	半球形状を呈し，器高は，やや浅い。	内面は，放射状の密なヘラミガキ。外面は，体部が，横方向の底部が，一方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を若干含む。焼成良好。内外面とも赤褐色を呈す。	内外面赤彩
24－23	盤	14.9 4.4 ・	半球形状を呈す。	内面は，口縁部を横方向にヘラミガキした後に放射状のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリし，さらに全体を粗くヘラミガキ。	胎土は，微砂粒および若干の雲母を含む。焼成は，良好。内外面とも赤褐色を呈す。	内外面赤彩
24－22	盤	18.2 (3.7) ・	半球形状を呈し器高はやや浅い。	内面は口縁部横方向のヘラミガキをした後底面は不定方向のヘラミガキ。外面は口縁部横方向のヘラミガキ底部は，ヘラケズリ後全体に粗いヘラミガキ。	胎土は微砂粒。焼成良好。内外面とも黄褐色を呈す。	
24－25	盤	(13.6) (3.6) －	※ほぼフラットな底面より急角度で立ちあがり，口唇部はやや内湾する。	内面は横方向に丹念なヘラミガキ。外面の口縁部は横方向のヘラミガキ。底面はヘラケズリ後一部ヘラミガキ。	胎土は微砂粒を含む。焼成は良好であり内外面とも赤褐色を呈す。	内外面赤彩
24－26	盤	12.9 3.8 ・	半球形状を呈し口縁部はやや内湾する。	内面は全面ヨコナデ。外面底部はヘラケズリ。	胎土は砂粒を含む。内外面とも黒褐色を呈す。	
24－27	盤	(12.0) (3.8) ・	半球形状を呈す。	内面は全面ヨコナデ。外面は口縁部ヨコナデ底面はヘラケズリ。	胎土は砂粒を含み，内外面とも黒褐色を呈す。	
24－28	盤	12.5 3.5 ・	半球形状を呈し，器高はやや浅い。	内面は全面ヨコナデ，外面は口縁部ヨコナデ底面はヘラケズリ。	胎土は微砂粒を含み焼成良好。内外面とも明褐色を呈す。	
24－29	盤	(12.9) (4.4) ・	器高が比較的あり半球形状を呈する底部となる。	内面は全面ヨコナデ外面は口縁部横方向のヘラミガキ以下ヘラケズリの後粗いヘラミガキが一部認められる。	胎土はほとんど砂粒を含まない。内外面とも褐色を呈す。	
24－30	盤	10.0 3.3 ・	半球形状を呈する小形品。厚手である。	内面は全面ヨコナデ。外面は口縁部ヨコナデ。以下丹念なヘラケズリ。	胎土は砂粒を多量に含む。内外面とも褐色を呈す。	
24－31	盤	11.8 3.4 ・	半球形状を呈す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデ後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内外面とも，褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
24－32	盤	(12.0) (3.1) ・	半球形状を呈す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面褐色を呈す。	
24－33	盤	(11.7) 3.3 ・	半球形状を呈す。	内面は，全面ヘラミガキ。外面は，口縁部が横方向のヘラミガキ，底部がヘラケズリの後，粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を若干含み，緻密焼成良好。内外面とも淡茶褐色を呈す。	紐積み痕明瞭
24－34	盤	12.2 3.7 ・	半球形状を呈し，底部がやや厚手。	内面は，全面ヘラミガキで，口縁部は横方向となる。外面は，口縁部が横方向のヘラミガキ，底部がヘラケズリの後，粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒と若干の雲母を含む。内外面とも，黒褐色を呈す。	
24－35	盤	11.9 3.0 ・	半球形状を呈す。	内面は，全面ヘラミガキ。外面は，口縁部が横方向のヘラミガキ，底部が，ヘラケズリの後，粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面および口縁部，外面が赤褐色底部外面が明褐色を呈す。	内面および口縁部外面赤彩。
24－36	盤	(11.8) 3.0 ・	半球形状を呈す。底部がやや厚手。	内面は，全面ヨコナデの後，放射状のヘラミガキ。外面は全面横方向を基調とするヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内外面とも暗褐色を呈す。	
24－37	盤	(11.7) 3.9 ・	器高が，比較的あり半球形状を呈す。	内面は，口縁部ヨコナデの後放射状の密なヘラミガキ。外面は，ヘラケズリの後，口縁から体部を，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内外面とも，赤褐色を呈する。	内外面赤彩
24－38	坏	14.9 4.3 ・	体部外面に軽い稜を有す。底部はかなり偏平。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む，内外面とも，淡褐色を呈す。	
24－39	坏	(15.9) 5.0 ・	体部外面に外に張り出す稜を有する。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を比較的多量に含む。内外面とも，明褐色を呈す。	
24－40	坏	(14.0) 4.9 ・	体部外面に外に張り出す稜を有する。口縁部はやや内湾気味。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面が黒褐色，底部外面，明褐色を呈す。	
24－41	坏	(14.0) (5.1) ・	体部外面に外に張り出す稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内外面とも，淡褐色を呈す。	
24－42	坏	(13.8) 4.5 ・	体部外面に稜を有し，内面にも，軽い段を有す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。口縁部内外面が，黒褐色，その他は，褐色を呈す。	
24－43	坏	(14.0) 4.9 ・	体部外面に稜を有し，内面にも，軽い段を有す。全体的に厚手。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。内面および口縁部外面が，黒褐色，底部外面が褐色を呈す。	
24－44	坏	(14.0) 4.9 ・	体部外面に外に張り出す稜を有し，内面にも軽い段を有する。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面が，褐色底部外面が，褐色を呈す。	
24－45	坏	(14.0) (4.7) ・	体部外面に稜を有す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を若干含み，緻密，良焼良好。内面，淡黄褐色，外面黒褐色を呈す。	
24－46	坏	(12.9) 4.5 ・	体部外面に，するどい稜を有す。口唇部が尖り気味。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。内外面とも，黒褐色を呈す。	
24－47	坏	(13.6) 4.6 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面が黒褐色，底部外面が，褐色を呈する。	
24－48	坏	(13.0) 4.0 ・	体部外面に，軽い稜を有し，内面にもやはり軽い段を有す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内外面とも，褐色を呈す。	
24－49	坏	(13.9) (3.8) ・	体部外面に，軽い稜を有す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を少量含む。内外面とも，明褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
24－50	坏	(12.0) (3.7) ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面および口縁部外面が，黒褐色，底部外面が，茶褐色を呈す。	
24－51	坏	(14.0) (3.6) ・	体部外面に，稜を有す。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内外面とも，暗褐色を呈す。	
24－52	坏	(12.0) (4.3) ・	体部外面に，外に張り出す稜を有する。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面が，黒褐色，底部外面が褐色を呈す。	
24－53	坏	(12.0) － ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。やや厚手。	内面は，全面ヨコナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内外面とも，淡褐色を呈す。	
24－54	蓋（S）	(15.8) (1.9)	口縁部のみの残存。内面に内傾する。カエリを有し，端部には，粘土紐がはりつけられる。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，緻密。焼成良好。淡赤褐色を呈す。	
24－55	蓋（S）	(15.9) －	口縁部は，やや外反し，端部は丸い。垂直に下るカエリを有し，端部は鋭どい。天井部はやや扁平。つまみは欠損。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒を少量含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－56	蓋（S）	(14.9) 3.2 ┆3.3 0.9	口縁部は，ほぼ垂直に下り，端部はやや鋭どい。天井部は，丸味があり，中央部に偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整。つまみは，ハリツケ。	胎土は，粗い砂粒を含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－57	蓋（S）	15.0 3.8 ┆2.6 0.9	口縁部は，外面に鋭どい稜を有して垂直に下り，端部はやや丸い。天井部はやや高く，丸味有り。中央部に擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／3），つまみはハリツケ。	胎土は，緻密。焼成良好。青灰色を呈す。	天井部外面にヘラ記号有り。
24－58	蓋（S）	17.3 3.5 ┆3.8 0.9	口縁部は，ほぼ垂直に下り，端部でやや外反する。天井部は，傾斜が有り，中央部に，やや偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／2）。つまみはハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。灰白色を呈す。	
24－59	蓋（S）	17.3 2.6 ┆3.7 1.0	口縁部は，ほぼ垂直に下り，端部でやや外反する。天井部は低く偏平。中央部にやや偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／2）。つまみはハリツケ。	胎土は，粗い砂粒（長石など）を含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－60	蓋（S）	16.1 3.5 ┆3.3 0.9	口縁部は，垂直に下り，端部は鋭どい。天井部は，丸味があり，中央部にやや偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／3）。つまみはハリツケ。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－61	蓋（S）	17.6 3.4 ┆4.0 0.9	口縁部は，ほぼ垂直に下り，端部はやや鋭どい。天井部は丸味が有り，中央部に偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／3）。つまみはハリツケ。	胎土は，緻密で，微砂粒を少量含む。焼成良好。灰色を呈す。	
24－62	蓋（S）	17.3 2.8 ┆3.7 0.8	口縁部は，垂直に下り，端部はやや鋭どい。天井部は，低く偏平。中央部に偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／3）。つまみはハリツケ。	胎土は，粗い砂粒（長石など）を含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－63	蓋（S）	－ － ┆3.4 0.9	口縁部欠損。天井部中央に，偏平な，擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整。つまみはハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－64	蓋（S）	17.1 2.8 ┆3.7 0.8	口縁部は，やや外傾して下がり端部は丸い。天井部はやや偏平で低い。中央部に偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（2／3）。つまみはハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。焼成良好。内面灰白色，外面灰褐色を呈す。	天井部外面にヘラ記号有り。
24－65	蓋（S）	(16.0) 2.6 ┆3.2 0.9	口縁部は，外面に稜をもってほぼ垂直に下がる。天井部は低く偏平。中央部にやや偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／2）。つまみはハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。青灰色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
24－66	蓋（S）	17.1 3.4 ┆ 3.8 0.9	口縁部は，やや外傾して下がり端部は丸味をもつ。天井部中央には偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（2／3）。つまみはハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。緻密。焼成良好。灰白色を呈す。	
24－67	蓋（S）	15.1 3.5 ┆ 3.2 0.7	口縁部は，ほぼ垂直に下がり端部はやや外反し丸い。天井部は丸くやや高い。中央部に偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。つまみはハリツケ。	胎土は，緻密。焼成良好。灰色を呈す。	外面に釉がかかる
24－68	蓋（S）	16.0 3.0 ┆ 3.3 0.7	口縁部は，ほぼ垂直に下がり，端部は，やや鋭どい。天井部はやや低く，中央に偏平な擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整（1／2）。つまみはハリツケ。	胎土は，粗い砂粒を少量含む。焼成良好。灰色を呈す。	
24－69	高台付坏（S）	15.4 4.9 10.8	口縁部は，外上方にのび，端部は丸い。底部はやや浅く平ら。高台は，ハの字形で端部は強く外反する。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒を含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－70	高台付坏（S）	(14.9) 4.9 10.1	口縁部は，外上方にのび，端部は鋭どい。底部はやや浅く平ら。ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－71	高台付坏（S）	(14.7) 5.1 9.6	口縁部は，外上方にのび，端部は丸い。底部はやや凸面を呈す。高台はハの字形で端部は外反する。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。灰白色を呈す。	
24－72	高台付坏（S）	15.7 5.3 10.1	口縁部は，外上方にのび，端部はやや鋭どい。底部はやや凸面を呈す。高台はハの字形で端部は外反する。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（長石など）を少量含む。焼成良好。灰白色を呈す。	
24－73	高台付坏（S）	(15.0) 4.8 9.8	口縁部は，外上方にのび，端部はやや鋭どい。底部は平ら。高台はハの字形で端部は外反する。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を若干含む。焼成良好。灰白色を呈す。	
24－74	高台付坏（S）	(15.8) 5.1 11.6	口縁部は，外上方にのび，端部はやや鋭どい。底部はやや浅く平ら。高台はハの字形で端部は強く外反する。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。灰白色を呈す。	
24－75	高台付坏（S）	(14.9) 3.9 10.4	口縁部は，外上方にのび，端部はやや鋭どい。底部はやや浅く平ら。高台はハの字形で端部はやや外反し丸い。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（長石など）を少量含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－76	高台付坏（S）	－ － 10.5	底部のみの残存。底部は，やや凸面を呈しハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（長石など）少量含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－77	高台付坏（S）	－ － 8.8	底部のみの残存。ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。灰褐色を呈す。	
24－78	高台付坏（S）	(14.0) (3.7) (8.5)	※口縁部は，外上方に大きく開く。底部はやや浅く平ら。高台はやや低く，端部は丸い。	ロクロ成形。	胎土は，緻密。焼成良好。灰褐色を呈す。	
24－79	高台付坏（S）	－ － 7.9	底部のみの残存。高台はハの字形で外面に鋭どい稜と凹面を有す。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を若干含む。焼成良好。茶褐色を呈す。	
24－80	高台付坏（S）	(14.9) (4.5) －	口縁部は，外上方にのび，端部でやや外反する。底部は，凸面を呈す。高台欠損。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒を含む。焼成良好。灰白色を呈す。	
24－81	高台付皿（S）	12.9 3.0 8.1	口縁部は，ほぼ垂直にのび，端部はやや鋭どい。高台は，ハの字形で端部が外反する。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒（長石など）を含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－82	坏（S）	(13.9) (4.9) －	体部は，ほぼ直線的に外上方にのびる。底部は，突出気味。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）を少量含む。焼成良好。青灰色を呈す。	
24－83	坏（S）	(13.9) (4.4) －	体部は，外上方にのび，口縁部で，わずかに外反する。底部はやや丸味を有す。	ロクロ成形。回転ヘラ切りの後，底部周縁を幅 1.5cmほど，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。淡赤褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
24－84	坏（S）	－ － 8.0	底部のみの残存。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。青灰色。	
24－85	坏（S）	－ － －	底部のみの残存。	ロクロ成形。手持ちヘラケズリ調整（一定方向）	胎土は砂粒雲母を含有。灰色を呈す。	故意に底部を打ちかいた感がある。
24－86	瓦					瓦片の再利用か？
25－1	甕	(22.7) － －	口縁部は，くの字形に外反し，端部で，わずかに内折れする。胴部以下欠損。薄手。	口縁部ヨコナデの後，肩部は内面が，横方向のヘラナデ，外面が横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量含む。淡赤褐色を呈す。	
25－2	坏（S）	－ － (6.5)	口縁部欠損。体部は，ほぼ直線的にのびる。	ロクロ成形。底部全面および体部下端を手持ちヘラケズリ。（不定方向）	胎土は，微砂粒を含む。灰色を呈す。	
26－1	台付甕 (台部のみ)	－ － 10.2	直線的な台部のみ遺存。	台部内外面ハケ，端部ヨコナデ。	微砂粒混入。褐色を呈す。	
26－2	高坏 (坏部のみ)	22.2 － －	坏部のみの遺存であるが，大形な高坏。僅かに稜をもち大きく直線的に開く坏部であり脚部との接合痕の棒状凸部を残す。	口縁部ヨコナデ，外面ハケ，下位はヘラミガキ。内面ヘラナデ。	精選された胎土。微砂粒混入。焼成良好。赤褐色を呈す。	
26－3	器台 (脚部のみ)	－ － 14.4	緩やかな弧状に開く脚部よりなる。端部におり返し痕あり。3円孔あり。	脚部外面ハケ，内面僅かにハケ。	砂粒混入。赤褐色を呈す。	
26－4	小形鉢	5.0 4.0 ・	小形な手づくねによるミニュチャ土器。底部は尖底を呈し鉢形の器形。	手づくねによる成形。	砂粒混入，褐色を呈す。	
27－1	甕	(21.6) － －	口縁部は，くの字形に大きく外反し胴上部の張りはない。以下欠損。最大径は口縁部。	口縁部ヨコナデ。胴部外面は縦方向の指先なで。	胎土は，粗い砂粒（雲母石英など）を多量含む。暗赤褐色を呈す。	
27－2	甕	(24.4) － －	口縁部は，くの字形に外反し端部は丸い。厚手。以下欠損。	口縁部ヨコナデ。	胎土は，砂粒（雲母など）を含む。暗赤褐色を呈す。	
27－3	甕	(21.5) － －	口縁部は，するどく，くの字形に外反する。厚手。肩部以下欠損。最大径は口縁部。	口縁部ヨコナデの後，肩部内面は横方向のヘラナデ，外面は縦方向のヘラケズリ。	胎土は，粗い砂粒（長石，石英，雲母など）を多量含む。赤褐色を呈す。	
27－4	甕	(20.6) － －	口縁部は，くの字形に外反する。肩部は，ややふくらむが最大径は口縁部。	口縁部ヨコナデの後，肩部内面は横方向のヘラナデ。外面は縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。暗赤褐色を呈す。	
27－5	甕	(21.4) － －	口縁部は，くの字形に大きく外反する。肩部は，ほとんど張りをもたない。最大径は口縁部。厚手。以下欠損。	口縁部ヨコナデの後，肩部内面は，横方向のヘラナデ，外面は縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を比較的多量に含む。淡褐色を呈す。	
27－6	甕	(21.9) － －	口縁部は，くの字形に外反し，端部は，やや鋭どい。最大径は口縁部。胴部以下欠損。	口縁部ヨコナデの後，肩部内面は不定方向のナデ。外面は縦方向のヘラケズリ。	胎土は，粗い砂粒を含む。淡赤褐色。	
27－7	甕	(20.6) － －	口縁部は，くの字形に外反する。肩部は，ほぼ直線的。頸部に軽い稜を有す。最大径は口縁部。	口縁部ヨコナデの後，肩部内面は，横方向のヘラナデ，外面は縦方向のヘラケズリ。	胎土は，粗い砂粒（雲母，長石など）を含む。暗茶褐色。	
27－8	甕	(18.0) － －	口縁部は，くの字形に外反し，端部は鋭どい。肩部は，ややふくらむ。	口縁部ヨコナデの後，内面はヘラミガキ。肩部外面は横方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。赤褐色を呈す。	
27－9	甕	(15.4) － －	口縁部は，くの字形に外反し胴部は，球形を呈すると思われる。	内面は，口縁部から肩部が縦方向の内面は横方向のハケ状具による。	胎土は，砂粒を少量含む。黒褐色を呈す。	
27－10	台付甕	－ － 10.0	台部は，ほぼ直線的にハの字形に広がる。	内外面とも全面ナデ。	胎土は，微砂粒を含む。赤褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
27－11	盤	21.7 3.3 ・	大形で，器高が浅い。底部は平担。	内面は，全面ナデ，外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面黒褐色，外面褐色を呈す。	
27－12	盤	19.2 3.3 ・	器高が浅く偏平な，半球形状を呈す。口縁端部が，わずかに外反する。	内面は，全面入念なヘラミガキ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリし，さらに全面に粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。緻密。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－13	盤	18.9 3.5 ・	大形で，器高が浅い。底部は平担。	内面は全面入寧なヘラミガキ（口縁部は横方向）。外面は口縁部が横方向のヘラミガキ，底部はヘラケズリの後，中央部を残して粗いヘラミガキ。	胎土は，緻密。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－14	盤	(17.9) (3.3) ・	器高が浅く偏平な半球形状を呈す。	内面は全面ナデ。外面は口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色を呈す。	
27－15	盤	(13.8) (3.8) ・	半球形状を呈し，口縁部が，わずかに直立する。	内面は放射状の密なヘラミガキ。外面は口縁部が横方向のヘラミガキ，底部がヘラケズリの後粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を若干含む。焼成良好。内面暗赤褐色，外面赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－16	盤	(18.8) (3.5) ・	大形で偏平な半球形状を呈す。器高が浅い。	内面は全面ナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を若干含む。焼成良好。明褐色を呈す。	
27－17	盤	(17.7) (4.3) ・	大形で半球形状を呈す。器高はやや深い。	内面は口縁部ヨコナデの後，底面をヘラミガキ。外面は，全面ヘラケズリ。（体部は横向を基調とす。）	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－18	盤	(14.9) (3.2) ・	器高が浅く，半球形状を呈す。	内面は全面ヘラミガキ（口縁部は横方向）外面は口縁部が横方向のヘラミガキ，底部がヘラケズリの後，粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－19	盤	(17.8) — ・	体部外面にするどい稜を有し内面にも軽い段を有す。偏平。	内面は，口縁部ヨコナデの後底面をヘラミガキ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。淡赤褐色を呈す。	
27－20	盤	(18.3) (3.5) ・	大型で半球形状を呈す。器高はやや浅い。	内面は全面ナデ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。淡褐色を呈す。	
27－21	盤	(16.0) (3.5) ・	偏平な半球形状を呈す。	内面はヘラミガキ。外面はヘラケズリの後粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－22	盤	(13.8) (3.9) ・	半球形状を呈し，口縁端部がわずかに直立する。	内面はヘラミガキ。外面はヘラケズリの後，横方向の粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
27－23	盤	(14.0) (4.8) ・	半球形状を呈し口縁端部が直立する。器高がやや深い。	内面は，全面ナデ。外面は，ヘラケズリ（口縁部は横方向）	胎土は，砂粒を少量含む。赤褐色を呈す。	
27－24	盤	12.5 3.8 ・	半球形状を呈し，口縁端部は，やや鋭どい。厚手，小形。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。焼成良好。褐色の呈し，口縁部内外面のみ黒褐色。	
27－25	盤	(11.9) (3.5) ・	半球形状を呈す。小形。	内面は，口縁部ヨコナデ後，全面放射状のヘラミガキ。外面は，ヘラケズリの後，粗いヘラミガキ。	胎土は，緻密。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－26	盤	12.8 3.2 ・	偏平な半球形状を呈す。	内面は，底部が，一方向，体部が横方向のヘラミガキ。　外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリしさらに，粗いヘラミガキを施こす。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内面，および口縁部外面赤彩
27－27	盤	(12.9) 3.4 ・	偏平な半球形状を呈す。	内面は，全面を放射状に，さらに口縁部を横方向にヘラミガキ。外面は，ヘラケズリの後，粗いヘラミガキ（口縁部は，横方向）	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。淡赤褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
27－28	盤	(11.8) 3.2 ・	半球形状を呈し，口縁端部は，やや鋭どい。小形。	内面は，全面，ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。さらに，粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－29	盤	10.9 4.0 ・	やや器高の深い，半球形状を呈す。口縁部は，やや内傾する。	内面は，口縁部を横方向に，全面を放射状にヘラミガキ。外面は，ヘラケズリの後，粗いヘラミガキ（体部は，横方向に4回）。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色の呈す。	内外面赤彩
27－30	盤	11.2 3.2 ・	半球形状を呈し，口縁部は，やや鋭どい。小形。	内面は，ヘラミガキ。外面は口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 褐色を呈し，内面一部黒褐色	
27－31	盤	11.2 2.8 ・	半球形状を呈す。小形。	内面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラミガキ。外面は，ヘラケズリの後，粗いヘラミガキ。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
27－32	盤	(12.0) (2.9) ・	半球形状を呈し，口縁端部は，やや鋭どい。小形。	内面は，全面ナデ。外面は，全面，ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 暗褐色を呈す。	
27－33	盤	(12.0) (3.3) ・	半球形状を呈す。小形。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部極までの後，全面ヘラケズリ	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 褐色で，内面一部黒褐色を呈す。	
27－34	埦	10.1 4.5 7.7	体部は，外上方へ直線的に，のび，口縁端部は，鋭どい。底部は，凸面を呈す。小形。	内面は，全面ヘラナデ後，粗いヘラミガキ。外面は，底部，体部ともヘラケズリの後，ヘラミガキ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 褐色を基調とし部分的に黒褐色を呈す。	
27－35	埦	9.7 4.4 6.5	体部は，外上方へ直線的に，のび，口縁端部は，鋭どい。底部は，凸面を呈す。小形。	内面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラナデ。外面は，口縁部，ヨコナデの後，底部・体部をヘラケズリし，さらに粗いヘラミガキ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 褐色を基調とし，部分的に黒褐色を呈す。	
27－36	坏	(15.0) (4.0) ・	体部外面に，外に張り出す，稜を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 茶褐色を呈す。	
27－37	坏	(14.9) (4.4) ・	体部外面に，外に張り出す稜，を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 褐色を基調とし，部分的に，黒褐色を呈す。	
27－38	坏	(13.0) (4.3) ・	体部外面に，外に張り出す稜を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡茶褐色で，口縁部内外面が，黒褐色を呈す。	
27－39	坏	(11.9) (3.5) ・	体部外面に，稜を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 淡茶褐色で，口縁部内外面が黒褐色を呈す。	
27－40	坏	(13.0) (4.3) ・	体部外面に，稜を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 褐色を呈す。	
27－41	坏	12.8 4.7 ・	体部外面に，外に張り出す稜を有し，口縁部外面にも一段を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 内面および口縁部外面暗褐色，その他褐色を呈す。	
27－42	坏	(15.9) (4.4) ・	体部外面に，軽い稜を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
27－43	坏	(14.0) (4.0) ・	体部外面に，ヘラケズリによってできた軽い稜を有す。口縁部は直線的にのびる。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，褐色，外面，暗褐色，口縁部内外面黒褐色を呈す。	
27－44	坏	13.3 4.7 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味で，端部は，鋭どい。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 口縁部内外面黒褐色，その他淡褐色を呈す。	
27－45	坏	(13.9) 4.7 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 淡褐色を基調とし，一部黒色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
27－46	坏	(14.4) (3.9) ・	体部外面に，稜を有す。口縁部の開きが，大きい。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
27－47	坏	13.9 3.9 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的に，大きく外方に開く。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡黄褐色を呈す。	
27－48	坏	－ － 6.4	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り後，底部周縁および体部下端を手持ちヘラケズリ。内面ヘラミガキ，黒色処理。	胎土は，やや粗い砂粒を含む。 内面黒色，外面淡褐色を呈す。	内面黒色処理
27－49	蓋（S）	17.8 －	口縁部は，やや外傾して下がり，端部は，鋭どい。 つまみは，欠損。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒(長石など)を含む。 青灰色を呈す。	
27－50	蓋（S）	－ － { 3.6 － { 0.9	口縁部欠損。丸味のある天井部中央に，扁平な，擬宝珠状つまみを有す。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。つまみは，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	
27－51	蓋（S）	13.7 －	口縁部は，ほぼ垂直に下がり，端部は，やや鋭どい。天井部は，山型。つまみ欠損。	ロクロ成形。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
27－52	高台付坏（S）	－ － (12.4)	口縁部欠損。底部は，やや凸面を呈す。ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整，高台は，ハリツケ	胎土は，砂粒（長石など）を含む。 灰白色を呈す。	
27－53	高台付坏（S）	(12.9) (4.3) (8.7)	口縁部は，外上方にのび，端部は丸い。底部は，やや凸面を呈す。高台は，端部が，するどく外反し，L字形を呈す。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整，高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。堅緻 青灰色を呈す。	底部外面にヘラ記号有り
27－54	高台付坏（S）	15.8 5.2 11.8	口縁部は，外上方にのび，端部は，やや鋭どい。底部は，やや凸面を呈し，ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整 高台は，ハリツケ。	胎土は，やや粗い砂粒を，まばらに含む。 灰白色を呈す。	
27－55	高台付坏（S）	(13.8) 4.5 8.9	口縁部は，外上方に，のび，端部は，鋭どい。底部は，やや凸面を呈す。ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好，堅緻 灰褐色を呈す。	
27－56	高台付坏（S）	－ － (12.0)	底部のみの残存。底部は，凸面を呈し，ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整，高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を含む。 灰白色を呈す。	
27－57	高台付坏（S）	－ － (10.7)	底部のみの残存。底部は，凸面を呈し，ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。，高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を含む。 灰白色を呈す。	
28－1	坏	(12.7) (5.0) ・	体部外面に，外に張り出す稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。 淡褐色で，口縁内外面が一部黒褐色を呈す。	
28－2	坏	(11.9) (4.5) ・	体部外面に，外に張り出す稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。 褐色で，口縁部内外面が黒褐色を呈す。	
28－3	坏（S）	(12.7) 4.5 6.5	体部は，直線的に外上方へのび，口縁部が，わずかに内湾する。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り後，底部全面（一定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ調整。	胎土は，緻密。 焼成良好。 青灰色を呈す。	
28－4	坏（S）	12.8 3.5 6.6	体部は，直線的に外上方へのび，口縁部が，わずかに外反し，端部は丸い。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，緻密。 灰色を呈す。	床面
28－5	蓋（S）	－ － { 1.4 { 1.0	口縁部欠損。天井部は，やや丸味をもち，中央に宝珠状のつまみを有す。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整，つまみは，ハリツケ	胎土は，微砂粒を含む 青灰色を呈す。	
29－1	鉢	(18.8) － －	体部は，丸味をもち，大きく外湾する口縁部を有する。体部と口縁部の境には，軽い稜を有す。厚手。	口縁部内外面ヨコナデの後，体部内面は，横位のヘラナデ，外面は，横位のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 淡褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
29－2	坏	(10.8) (3.7) －	体部外面に，外に張り出す稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，やや直立気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 褐色で，口縁部内外面黒褐色を呈す。	カマド
30－1	甕	(11.8) － －	口縁部は，わずかに外傾して立ちあがる。胴部は球形。 厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ， 外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を比較的多量に含む。 褐色を呈す。	
30－2	埦	9.7 6.4 7.3	口縁部は，外湾して直立し，端部は，鋭どい。胴部は，上位にふくらみをもち，底部は，やや丸味のある平底となる。	内面は，全面入念なヘラミガキ。外面は，口縁部ヘラミガキ，胴部および底部は，ヘラケズリの後ヘラミガキ。内面および外面一部が黒色処理。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面および外面一部黒色，その他茶褐色を呈す。	
30－3	坏	15.2 3.9 ・	体部外面に軽い稜を有し，口縁部は，ほぼ直線的に開く。底部は浅く，平底に近い。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を基調とし部分的に黒褐色を呈す。	床面
30－4	坏	14.0 3.2 7.7	体部は，大きく直線的に開き，口縁部が，わずかに直立する。底部は，やや丸味のある平底。	内面は，全面ナデの後，粗いヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部および体部をヘラケズリし，さらに体部には粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩 床面
30－5	坏	10.8 4.0 ・	体部外面に，外に張り出す稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 灰褐色を呈す。	
30－6	長頸壺 （S）	－ － －	丸底，胴下半のみの残存。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好 灰色を呈す。	外面に一部，釉付着
30－7	台付皿 （S）	13.9 2.7 6.4	口縁部は，直立し，端部は，鋭どい。底部は，浅く，やや凸面を呈す。ハの字形の高台を付す。	ロクロ成形。底部外面および体部下半を回転ヘラケズリ調整。 高台はハリツケ。	胎土は，緻密 青灰色を呈す	床面
30－8	坏（S）	12.9 3.3 7.8	体部は，外上方にのび，口縁部がわずかに外湾。底部は，やや浅く，比較的大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 暗灰色を呈す。	
30－9	坏（S）	(13.7) 4.3 8.3	体部は，外上方に，直線的にのびる。底部は，比較的大きく，丸味をもつ。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，底部全面（不定方向）および体部下端を手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。 灰色を呈す。	
30－10	坏（S）	13.1 3.9 8.3	体部は，外上方に，直線的にのび，口縁端部は，やや鋭どい。底部は，比較的大きい。	ロクロ成形。 底部全面，手もちヘラケズリ調整（不定方向）	胎土は，砂粒および雲母を※含む。焼成良好。 灰色を呈す。	床面
30－11	坏（S）	(10.8) (4.3) (6.4)	体部は，外上方に，直線的にのびる。薄手。底部欠損	ロクロ成形。	胎土は，微砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
31－1	埦	(14.8) － －	体部は，やや外湾気味に，外上方へのび，口縁部は，器厚する。 底部欠損	内面は，ナデの後，横方向のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部をヘラケズリし，さらに粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 褐色を呈す。	
31－2	坏	12.7 4.3 ・	体部外面に，外に張り出す稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡黄褐色を呈す。	
31－3	坏	12.1 3.9 ・	体部外面に，稜を有し，底部がやや浅く，偏平	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 茶褐色で，一部黒褐色を呈す。	
31－4	坏（S）	12.9 3.8 8.2	体部は，外上方に，直線的にのびる。底部は，比較的大きく，丸味をもつ。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，底部全面を，手もちヘラケズリ（不定方向）。	胎土は，砂粒を若干含む。 灰色を呈す。	
32－1	甕	13.3 － －	口縁部は，外湾気味に開き，肩部との境に軽い稜を有す。胴部は球形で，やや上位に最大径を有す。底部は，平らでハの字状に広く台を有すると思われる。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，上位が，横方向（2～3段）の下位が斜位のヘラケズリ。台は，ハリツケで，内外面ナデ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 赤褐色を呈す。	カマド

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
32－2	坏	13.4 3.4 8.1	体部は，やや丸味をもって外上方へのび，口縁端部が，わずかに直立する。底部は浅く，わずかに丸味をもつ。	内面は，口縁部ヨコナデの後，全面，ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部および体部を，ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面赤褐色，外面茶褐色を呈す。	内面赤彩 床面
32－3	坏	(13.8) (3.0) (8.8)	体部は，やや丸味をもって，外上方へのび，口縁端部が，わずかに直立する。底部は，浅く，平ら。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部横ナデの後，底部および体部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
32－4	坏（S）	13.4 4.7 8.4	体部は，外上方に，直線的にのび，口縁部は，やや外湾する。底部は，深く，比較的大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。 灰色を呈す。	
32－5	坏（S）	－ － (7.3)	体部は，外上方に，直線的にのびる。口縁部欠損。底部はやや大きめ。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，底部，周縁を，わずかに手もちヘラケズリ。	胎土は，粗い砂粒(長石など)を含む。 青灰色を呈す。	
32－6	坏（S）	(9.8) (3.7) (13.8)	体部は，外上方に，ほぼ直線的にのびる。底部は，やや大きめ。	ロクロ成形 回転糸切りの後，底部周縁を大きく手もちヘラケズリ。	胎土は，緻密。 灰褐色を呈す。	
32－7	坏（S）	－ － (7.7)	体部は，外上方に，直線的にのびる。口縁部欠損。底部は大きく，やや丸味を有す。	ロクロ成形 底部全面，手もちヘラケズリ調整（不定方向）。	胎土は，粗い砂粒(長石など)を多量に含む。 青灰色を呈す。	
33－1	甕	(29.0) － －	口縁部は，大きく外湾する。肩部は，わずかな張りを有して下方にのびる。頸部には，軽い稜を有す。以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，粗い砂粒を，多量に含む。 淡赤褐色を呈す。	
33－2	甕	(20.4) － －	口縁部は，大きく外反する。肩から胴上部は，わずかな張りを有す。頸部には，軽い稜を有す。以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，粗い砂粒を含む。 褐色を呈す。	北カマド
33－3	甕	(19.7) － －	口縁部は，大きく外反し，端部は，やや鋭どい。頸部外面に稜を有す。以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，粗い砂粒を含む。 褐色を呈す。	東カマド
33－4	甕	(24.6) － －	口縁部は，直線的に外反し，端部は，四角になる。胴上部は張りをもたず下方にのびる。以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，斜方向のハケ目。	胎土は，微砂粒を含む。 淡茶褐色を呈す。	
33－5	甕	(21.6) － －	口縁部は，大きく外湾する。胴部以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，やや粗い砂粒を含む。 暗赤褐色を呈す。	北カマド
33－6	甕	(21.8) － －	口縁部は，やや短か目で，するどく外湾する。口縁端部は，直立し，断面「S」字状を呈す。胴部以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土は，砂粒（長石など），雲母を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	
33－7	甕	－ － (9.3)	底部のみの残存。やや突出気味の底部。	内面ヘラナデ。外面，ヘラケズリの後，ナデ。底部外面に木葉痕有り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	東カマド
33－8	鉢	(23.8) － －	口縁部は，大きく外反し，内面にするどい稜を有す。胴部は，やや張りを有して，内下方にのびる。	外面は，全面ナデ。内面は，口縁部ヨコナデの後，横方向の粗いヘラミガキ，胴部は，放射状の入念なヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
33－9	盤	(18.8) (4.3) ・	体部外面に，稜を有し，内面にも，段を有す。口縁部は，大きく，やや内湾気味に開き，外面中程に，軽い段を有す。大型。	内面は，全面，丁寧なヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 淡赤褐色を基調とし，部分的に黒褐色を呈す。	（内外面赤彩か？）
33－10	坏	(12.8) (4.5) ・	半球形状を呈し，底部は，やや深い。口縁端部は，鋭どい。	口縁部内外面ヨコナデの後，内面は，横方向のヘラナデ，外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 暗褐色を呈す。	
33－11	坏	13.6 4.1 ・	体部外面に，稜を有し，口縁部は，ほぼ直線的に，のびる。底部は，やや偏平。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 茶褐色で，口縁部内外面黒褐色。	床面

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
33－12	高台付坏（S）	－ － 8.6	口縁部は，ほとんど上方にのびる。底部は，平ら。高台は，ハの字形で，端部は，鋭どい。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，緻密 青灰色を呈す。	
33－13	坏（S）	(12.6) 3.9 6.8	体部は，外上方に，ほぼ，直線的にのびる。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。 青灰色を呈す。	
33－14	甑（S）	26.1 29.9 16.1	深鉢状を呈し，胴部中程に，相対する，二個の把手を有す。底部は，中央に，円形の，それを囲んで7個の台形の孔が穿たれる。さらに，体部の最下端には，4方向から，横孔が，穿たれる。	紐積み－ロクロ整形。胴部外面には，口縁直下および体部中程に，横方向の，波状文（4条）と沈線が配される。下端は，ヘラケズリ調整。把手は，ハリツケで，ヘラケズリ調整。穿孔は，全て，外側からおこなわれ，特に，底部外面には，穿孔のための，ヘラ先による割付けの痕が残る。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	床面
34－1	坏（S）	－ － 8.1	体部は，外上方へのびる。口縁部欠損。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗灰色を呈す。	
35－1	甕	19.4 31.0 (6.0)	口縁部は，短かめで，口唇部が外面に稜を有して直立する。また内面にも段を有し，断面「S」の字状に近い。肩部にやや張りを有し，小さめの底部に向ってすぼまる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，ヘラケズリの後，上半は，ナデ調整。さらに，中程から，底部にかけて，縦方向のヘラミガキが，施こされる。	胎土は，微砂粒および雲母，長石を多量に含む。 暗茶褐色を呈す。	
35－2	坏	12.3 4.7 6.3	口縁部は，外上方に，ほぼ直線的にのびる。底部は，やや深い。	ロクロ成形。 底部外面（不定方向）および体部下端（横方向）手もちヘラケズリ。内面は，底部が，一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を少量含む。 焼成良好。 内面，黒色，外面，赤褐色を呈す。	内面黒色処理，墨書(底部外面および体部外面) 床面
35－3	坏	－ － 6.8	底部のみの残存。	ロクロ成形。 底部外面（不定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ調整。内面は，一定方向のヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面，赤褐色，外面，褐色を呈す。	内面赤彩
35－4	甕（S）	(15.0) (29.0) 17.4	口縁部は，くの字形に外反する。端部欠損。胴部やや上位に，強い張りを有し，大きな底部に至る。胴部やや下位に閃孔（径約1cm）を有す。	紐積み成形。外面は，全面，タタキ目。胴部下端は，横位のヘラケズリ。胴部の穿孔は焼成後。	胎土は，粗い砂粒を含む。 灰色を呈す。	床面
35－5	壺（S）	－ － －	胴部のみの残存。肩部が，強い張りを有す。	ロクロ成形。	胎土は，粗い砂粒を含む。 焼成良好。 青灰色を呈す。	肩部に自然釉がかかる。 床面
35－6	高台付坏（S）	(14.4) 6.9 8.2	口縁部は，外上方へ直線的に立ち上がる。底部は，平ら。口台は，ハの字形を呈し，やや高い。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒を若干含む。 灰色を呈す。	
35－7	坏（S）	(13.8) 4.5 (7.4)	口縁部は，外上方に，ほぼ直線的にのびる。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，やや粗い砂粒を少量含む。 暗灰色を呈す。	
35－8	坏（S）	13.4 4.6 6.4	口縁部は，外上方に，直線的にのびる。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，粗い砂粒(長石など)を若干含む。 青灰色を呈す。	床面
35－9	坏（S）	12.5 4.4 7.2	口縁部は，外上方に，直線的にのび，端部は，丸い。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，底部（一定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 青灰色を呈す。	床面
35－10	坏（S）	13.3 3.7 6.6	口縁部は，ほぼ直線的に，大きく開く。底部は，浅く，やや小さい。体部外面に，紐積み痕を残す。	紐積み(?)→ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，緻密 淡褐色を呈す。	床面
35－11	坏（S）	－ － 6.9	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡灰色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
35−12	坏（S）	− − 6.5	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 暗灰色を呈す。	
35−13	坏（S）	− − 7.4	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 灰褐色を呈す。	
36− 1	甕	21.2 − −	口縁部は，「く」の字形に強く外反し，端部は，四角。胴部は，ほとんど垂直にのびる。最大径は，口縁部にくる。頸部に軽い稜を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ，外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 淡褐色を呈す。	カマド
36− 2	甕	(21.4) − −	口縁部は，「く」の字形に，外反し，端部は丸い。胴部は，ほとんど垂直にのびる。最大径は，口縁部にくる。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 淡褐色を呈する。	
36− 3	甕	(15.2) − −	口縁部は，やや短か目で，「く」の字状に外反する。胴部は，球形を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部は，内面は，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 灰褐色を呈す。	
36− 4 36− 5	コシキ	(24.5) (28.0) (12.3)	口縁部は，「く」の字形に大きく外反し，端部は，丸い。胴部は，ほぼ直線的に，底部に至る。底部は，大型単孔。	口縁部内外面，ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデの後縦方向のヘラミガキ。外面は，縦方向のヘラケズリ。底部端部は，横位のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 焼成良好。 暗赤褐色を呈す。	カマド
36− 6	坏	(13.9) (4.0) ・	体部外面に，外に張り出す稜を有す。口縁は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	微砂粒少量混入 暗褐色を呈す。	
36− 7	壺（S）	− − (9.2)	底部のみ残存。高台は，「八」の字形を呈す。	ロクロ成形， 底部外面，回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ	砂粒少量混入 暗灰色を呈す。	
37− 1	甕	(24.0) − −	口縁部のみ残存。口縁は，大きく外反。	口縁内外面ヨコナデ。胴部外面，縦方向のヘラケズリ。	砂粒混入 淡褐色を呈す。	
37− 2	坏	(13.0) (4.5)	体部外面に，軽い稜を有す。口縁は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	微砂粒混入 褐色で，口縁部内面黒褐色を呈す。	
37− 3	壺（S）	− − 10.5	底部のみの残存，高台は，垂直にさがり，端部が，大きく，外反する。	ロクロ成形 底部外面，回軽ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ。	砂粒少量混入 暗灰色を呈す	
38− 1	甕	− − 9.8	底部のみの残存。	内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラミガキ。底部外面，木葉痕。	胎土は，長石，雲母などを多量に含む。 暗赤褐色。	
38− 2	盤	15.9 2.6 ・	偏平な半球形状を呈し，底部は，かなり浅く，ほとんど平坦。	内面は，全面ヘラミガキ（不定方向）。外面は，全面ヘラケズリで，体部は，横方向を基調とする。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好 赤褐色を呈す。	内外面，赤彩。
40− 1	甕	18.6 − −	口縁部は，短く「く」の字形に外反し，端部は丸い。頸部には，するどい稜を有し，胴部は，ほとんど垂直に下がる。最大径は口縁部にくる。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリで，底部近くでは，やや斜から横方向となる。	胎土は，粗い砂粒を多量に含む。 淡茶褐色を呈す。	カマド
40− 2	甕	24.0 − −	口縁部は，短かく外反し，口唇部が直立する。	口縁部内外面，ヨコナデ。 紐積み痕が，明瞭に残る。	胎土は，微砂粒および雲母を含む。 赤褐色を呈す。	
40− 3	坏（S）	(13.7) (4.5) (7.2)	体部は，外上方にのび，口縁部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。 青灰色を呈す。	
41− 1	甕	− − 5.5	底部のみの残存。 底部は，ドーナッツ状を呈す。	内面は，ハケ目とナデ。外面はハケ目，底部のドーナッツ状はハリツケ。	胎土は，砂粒を含む。 焼成良好。 暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
41－2	坏	13.4 3.9 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面黒褐色，外面暗褐色を呈す。	底部外面「墨書」有り
43－1	坏（S）	13.8 5.0 9.0	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，深く大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，体部下端を手もちヘラケズリ（横方向）	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
43－2	坏（S）	14.5 4.1 －	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや浅く，大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，全面手もちヘラケズリ（一定方向）	胎土は，砂粒（石英，長石など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	
44－1	甕	(12.0) － －	口縁部は，やや外傾気味に立ち上がり端部が，外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面横方向のヘラナデ。外面，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗赤褐色。	
44－2	坏	13.5 3.6 ・	体部外面の稜は，ほとんどない。口縁部は，内湾気味。底部は，かなり平坦。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好 暗褐色を呈す。	カマド
44－3	坏	14.3 4.6 10.5	体部は，外上方へのび，口縁部は，やや内湾気味，端部が鋭い。底部は，ほぼ平らで大きい。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁から体部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 茶褐色で，部分的に黒褐色を呈す。	床面
44－4	坏（S）	13.8 3.6 9.8	体部は，外上方へのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，浅く，大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）をまばらに含む。 青灰色を呈す。	床面
44－5	坏（S）	13.4 3.7 7.8	体部は，外上方へ，ほぼ直線的にのびる。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，微砂粒を含む。 暗灰色を呈す。	
46－1	甑	－ － 10.3	大型単孔の底部。	外面は，縦方向のヘラミガキ。内面は，横方向のヘラナデ。	胎土は，長石，雲母などを多量に含む。 淡赤褐色を呈す。	
47－1	甕	19.7 － －	口縁部は，短かく外反し，口唇部が，直立する。肩部に張りをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ。外面はナデ調整。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
47－2	坏	(13.8) 4.2) 7.1	体部は，外上方へほぼ直線的にのび，端部がわずかに外反する。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，底面が一定方向，体部が横方向を基調としたヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面，黒色，外面，淡褐色を呈す。	底部外面「墨書」有り
47－3	蓋（S）	16.1 (2.9)	口縁部は，反転気味に，広がる。スソ部から，わずかに，下がる。天井部は，やや高い。ツマミ欠損。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒を少量含む 青灰色を呈す。	床面
47－4	坏（S）	(13.5) 4.0 6.4	口縁部は，外上方に直線的にのびる。	ロクロ成形。 底部外面（一定方向）および，体部下端（横方向）手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒多量混入 暗灰色を呈す。	
48－1	甕	－ － 7.9	底部のみの残存。	内面は，横方向のヘラナデ。外面は，体部が，斜め方向のヘラケズリ，底部外面ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 淡褐色を呈す。	カマド
48－2	埦	(19.6) (6.4) ・	体部は，外上方にのび，口縁部は，内湾気味。	内面は，横方向のヘラミガキ，外面は，ヘラケズリの後，全面を，粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 淡褐色を呈する。	カマド
48－3	坏	(15.5) (3.9) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，体部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒褐色，外面褐色を呈す。	カマド
48－4	坏	(15.9) (3.2) ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡色を呈す。	カマド
49－1	甕	(21.9) － －	口縁部は，大きく外反し，口唇部が，直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土は，微砂粒および雲母を多量に含む。 暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
49－2	甕	(21.2) － －	口縁部は，短かく「く」の字形に外反し，口唇部は直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土は，長石や雲母を多量に含む。 淡赤褐色を呈す。	カマド
49－3	甕(台付)	(12.8) － －	口縁部は，外湾気味に，立ち上がり，端部は鋭い。頚部に稜を有す。薄手。	口縁部内外面，ヨコナデ。 内面，横方向のヘラナデ。外面横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	カマド
49－4	甕	－ － －	底部のみの残存。	外面は，全面ヘラケズリで，底部中央に，木葉痕を残す。 内面は，ヘラナデ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	カマド
49－5	坏	14.8 － －	体部は，外上方へ，内湾して立ち上がる。	ロクロ成形。 内面，横方向のヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 外面赤褐色，内面黒色を呈す。	内面黒色処理
49－6	坏	11.1 3.9 5.9	体部は，外上方へ，直線的にのびる。やや小型。	ロクロ成形。 底部は，全面手もちヘラケズリ調整。内面，ヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面黒色，外面褐色を呈す。	内面黒色処理
49－7	坏	－ － 7.0	体部は，外上方へ，直線的にのびる。	ロクロ成形。 底部は，全面，回転ヘラケズリ調整。内面は底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面黒色，外面茶褐色を呈す。	内面黒色処理
49－8	坏	－ － 8.0	底部のみの残存。	ロクロ成形。 底部は，回転糸切りの後，中央部をわずかに残して，回転ヘラケズリ調整。内面ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面黒色，外面褐色を呈す。	内面黒色処理
49－9	坏	(13.7) 4.0 (9.5)	体部は，外上方にのび，口縁は直立する。口縁端部は，鋭い。底部は，浅く大きい。	内面は，全面ヘラミガキ。(体部は横方向)。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部(横方向)および，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 暗赤褐色を呈す。	
49－10	坏	11.9 3.5 ・	偏平な半球形状を呈し，わずかに直立する口縁部は，端部が鋭い。	内面は，全面ヘラミガキ。(体部は横方向)。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部および底部をヘラケズリ。	胎土は砂粒を少量含む 焼成良好 赤褐色を呈す。	底部外面に墨書「運」有り
49－11	蓋（S）	(13.3) － －	口縁部は，ほぼ垂直に下がる。天井部は，やや偏平で，中央部にツマミ(欠損)を有す。	ロクロ成形。	胎土は，砂粒を若干含む。 青灰色を呈す。	
49－12	坏（S）	13.9 3.8 8.4	体部は，外上方に直線的にのびる。底部は，やや浅く大きい。	ロクロ成形。 底部は全面を一定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	
49－13	坏（S）	(13.9) 3.8 (7.9)	体部は，外上方に直線的にのびる。底部は，やや浅く大きい。	ロクロ成形。 底部は，全面を不定方向，体部下端を横方向に，手もちヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	
49－14	坏（S）	(13.9) 3.6 (7.7)	体部は，外上方に直線的にのびる。底部は，やや浅く大きい。	ロクロ成形。 底部は，全面を一定方向，体部下端を横方向に，手もちヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	
49－15	坏（S）	(14.8) 4.3 (7.5)	体部下位に軽い稜を有す。口縁部は，外上方にのび，端部は，鋭い。	ロクロ成形。 回転糸切り	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 青灰色を呈す。	
49－16	坏（S）	－ － 6.0	底部のみ残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 青灰色を呈す	
51－1	坏（S）	(11.8) 3.8 5.3	体部は，外上方に，ほぼ直線的にのびる。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，砂粒を含む。 灰色を呈す。	
54－1	甕(台付)	13.8 － －	口縁部は，「く」の字状に外反する。胴部は球形で，やや上位に最大径を有す。台部欠損。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ。外面は，上位が横方向(1～2段)，以下が斜下方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
54－2	蓋（S）	(16.7) － －	口縁部は，垂直に下がり，端部は，鋭い。天井部は，やや低く，中央部にツマミを有す。ツマミは，欠損。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。 ツマミは，ハリツケ。	胎土は，砂粒を小量含む。 青灰色を呈す。	
54－3	坏（S）	13.7 4.7 8.5	体部は，外上方へ，直線的にのびる。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，緻密。 灰白色を呈す。	
54－4	坏（S）	(12.8) 4.1 (7.6)	体部は，外上方へ，直線的にのびる。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	体部外面に「火ダスキ」有り
54－5	杯（S）	(14.8) 4.5 7.1	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部，やや小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	カマド
54－6	杯（S）	(14.8) 4.2 7.3	体部は，外上方へ直線的にのびる。	ロクロ成形。 底部は，全面一定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	
55－1	坏（S）	(14.2) 5.0 (8.6)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや深く，大きい。	ロクロ成形。 底部は，回転ヘラ切り後，全面手もちヘラケズリ調整（一定方向）	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	
60－1	甕	21.2 － －	口縁部は，大きく，外反する。胴部は，ほとんど膨らみをもたずに下がる。頚部外面に軽い稜を有す。	口縁部内外面ヨコナデ。 内面は，横方向のヘラナデ。 外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 橙褐色を呈す。	
60－2	坏	13.5 4.7 ・	半球形状を呈し，口縁端部は，やや鋭い。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 口縁部黒褐色で，他は明褐色を呈す。	
60－3	坏	(12.7) 4.2 ・	体部外面に，外に張り出す稜を有し，内面にも稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
61－1	甕（口縁部のみ）	17.0 － －	小さく外反する口縁部。胴部は球形を呈すると考えられる。	口縁部内外面ともハケ。 口ケイ部ヘラナデ。	砂粒および微量の雲母を含む。 淡褐色を呈す。	
61－2	甕（胴下半部のみ）	－ － 7.0	比較的大形な土器。胴中央部に最大径を有し球形を呈す。	胴部内外面ともハケ（ヨコ位） 底部はヘラケズリ。	砂粒混入。 赤褐色を呈す。	
61－3	甑	13.5 19.6 3.5	くの字に反ぎみにたつ口縁部を有し胴中央部に最大径をもつ球形の胴部よりなる。底部は小さく，焼成後あけた円孔を有す。	口縁部内外面ともヨコ方向のハケ。胴部外面ヘラケズリ後ハケ。円孔は底部下面より穿孔。	小砂粒，小石を含む。 焼成良好。黒褐色を呈す。	
61－4	壺	11.2 13.5 2.2	最大径胴部央に有し口縁がくの字に屈曲し口唇部はやや内湾ぎみにたつ。胴部に比し口縁部がやや短い。内面頚部に稜を有す。	口唇下内外面ともヨコ方向のヘラミガキ。口縁部外面ハケ内面ヘラミガキ。胴部外面ハケ下位ヘラミガキ。内面一部ヘラミガキ。	砂粒を少量含む。 赤褐色を呈す。	外面にススの付着
61－5	坩	11.5 5.5 －	口縁部に最大径を有す。偏球形を呈する胴部より，口縁が外反し端部はやや内湾ぎみにたつ。口縁部は鋭くたち内面に稜をもつ。	全体に粗雑な感じ。 口縁部内外面ともヘラナデ。 胴部外面上位ハケ，内面放射状にヘラケズリ。	礫，砂粒，雲母を含む。 黄褐色を呈す。	床面出土
61－6	坩	9.0 6.8 3.0	口縁部に最大径を有す。ほぼ球形を呈する胴部より口縁が直線的に外反する。口縁は鋭くたち内面に稜を有す。	口縁部内外面ともタテ方向のヘラミガキ。胴部内面ヘラナデ，外面上位ヨコ方向のヘラミガキ，下位はヘラ削り後粗いタテ方向のヘラミガキ。	小砂粒を含む。 黄褐色を呈す。	床面出土
61－7	器台	7.6 8.5 9.5	ほぼ球形を呈する器受部とラッパ状に開き裾部で大きく開く脚部よりなる。脚部中央に4個の円孔を有す。	器受部はヨコナデ後粗い不定方向のヘラミガキ。脚部外面はタテ位のミガキ，内面はハケ。	小砂粒を含む。焼成良好。 褐色を呈す。	
61－8	器台	7.1 8.5 9.9	やや浅い器受部とラッパ状を呈し，裾部で大きく開く脚部よりなる。 脚部中央に4個の円孔を有す。	器受部はヨコナデ後粗いヘラミガキ，脚部内面はヘラナデ，外面はタテ位の入念なヘラミガキ。	小砂粒を含む。焼成良好。 褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
61－9	器台	7.1 8.0 9.9	ほぼ球形を呈する器受部とラッパ状を呈し裾部で大きく開く脚部よりなる。 脚部中央に円孔を有す。	器受部はヨコナデ後ヘラミガキ。脚部外面入念なタテ位のヘラミガキ，内面ハケ。	小砂粒を微量含む。焼成良好。 赤褐色を呈す。	床面
63－1	坏	－ － (7.3)	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，砂粒を少量含む。 内面黒色，外面暗褐色を呈す。	内面黒色処理
63－2	坏（S）	－ － (7.5)	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
64－1	坏	(15.7) 5.1 －	体部外面に，外に張り出す稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
64－2	坏	(13.7) (4.8) ・	体部外面に稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 口縁部，黒褐色で，他は淡褐色を呈す。	
64－3	蓋（S）	15.5 3.3 －{2.5 0.8	口縁部は，やや内傾して下がり，端部は丸い。天井部は，やや丸味をもち，中央部に宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラケズリ調整。 ツマミはハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
65－1	甕	(18.0) － －	口縁部は「く」の字状に外反する，最大径は，口縁部にくると思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面横方向のヘラナデ，外面縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 暗褐色を呈す。	カマド
65－2	蓋（S）	－ ・{3.2 0.8	口縁部欠損。 やや偏平な，宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラケズリ調整。 ツマミは，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。 淡青灰色を呈す。	
66－1	甕	16.4 － －	胴部やや下位に最大径を有する球形を呈する胴部と「く」の字状に外反する口縁部よりなる。	口縁部内外面ともヨコ位のハケ。胴部内面ナデツケ，外面は斜位のハケ，下位はケズリ。	砂粒，雲母を含む。 黄褐色を呈す。	スス付着。
66－2	甕（？）	－ － －	胴部のみ残存。	外面ハケ下位はケズリ。内面はヘラナデ。	砂粒を含む。褐色を呈す。	
66－3	甕	11.8 16.9 3.7	最大径を胴部央に有する球形の胴部とやや肥厚し「く」の字に外反する口縁部よりなる。 外反は鋭く内面は稜をなす。	口縁部ヨコナデ。 胴部内面ヘラナデ，外面上位はタテ方向のハケ，下位はヘラケズリ。	砂粒を多量に含む。 黄褐色を呈す。	床面
66－4	甕	12.4 12.5 4.1	小形の甕であり胴部央に最大径を有し急なカーブで底部にいたる。口縁は「く」の字に外反し，内面に稜を形成する。	口縁部ヨコナデ。 胴部内面ヘラナデ，外面タテ位のハケ。	砂粒を多量に含む。焼成不良。 茶褐色を呈す。	
66－5	埦	16.0 5.4 3.5	小さな底部よりやや内湾気味にたちあがり体部上位で屈曲して端部はほぼ垂直にたつ。 口縁部は折り返しており内外面とも稜をなす。	内外面とも丁寧にヨコ位のヘラミガキ。底部はヘラケズリ。	小砂粒を多量に含む。 茶褐色を呈す。	口縁部の一部が赤彩
66－6	器台	8.1 7.8 11.8	やや偏平な器受部と緩やかなカーブで開く脚部よりなる。 脚部央に3個の円孔を有す。	器受部外面はヨコ位，内面はタテ方向のヘラミガキ。 脚部外面はヘラミガキ，内面はハケ。	砂粒および微量の雲母を含む。 茶褐色を呈す。	
66－7	器台	6.5 6.7 9.5	小形な器台であり，直線的にたちあがる器受部と緩やかに開く脚部よりなる。 脚部央に3個の円孔あり。	器受部内外面ともヘラミガキ。 脚部外面ヘラミガキ，裾部ハケ。	微砂粒を含む。 焼成良好。褐色を呈す。	
66－8	器台	5.0 5.2 8.4	小形な器台であり，外湾気味にたちあがる器受部と裾部がやや開く脚部よりなる。 脚部央に3個の円孔を有す。	器受部は内外面とも放射状にヘラミガキ。脚部外面はヘラミガキ，内面はハケ。	微砂粒を僅かに含む。 焼成良好。褐色を呈す。	
68－1	甕	13.3 － －	口縁部は，「く」の字状に短かく外反する。胴部は，やや球形を呈す。	内面は，口縁部ヨコナデ，胴部ハケ目。外面は，剝落が激しくて不明。	胎土は，粗い砂粒を含む。 焼成不良。 暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
68－2	盤	(18.0) (3.6) ・	口縁部は，外上方へ，ほぼ直線的にのびる。底部は，浅く，ゆるやかな凸面を呈す。	内面は，全面ヘラミガキ（体部は横方向）。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部および底部をヘラケズリ。さらに粗いヘラミガキを全面に施す。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
68－3	坏	(12.9) 3.7 6.0	体部は，外上方にのび，端部は鋭い。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，微砂粒を含む。 暗黒色を呈す。	
68－4	高台付坏（S）	(13.8) 4.2 9.0	体部は，外上方にのび，口縁部がわずかに外反する。高台は大きく外傾し，低く端部が鋭い。	ロクロ成形。 底部回転ヘラケズリ調整。 高台は，ケズリ出しか。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 灰色を呈す。	
68－5	高台付坏（S）	16.0 (5.7) －	体部は，外上方に直線的にのび，底部は大きく，凸面を呈す。高台部欠損。	ロクロ成形。 底部回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	
68－6	蓋（S）	－ － 3.8 0.8	口縁部欠損。天井部は，ゆるやかな山形を呈し，中央に偏平な，宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。ツマミは，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	
69－1	盤	(18.8) (2.5) ・	体部は，外上方に，直線的にのびる。底部は，かなり浅く，平坦になっている。	内面は，全面ナデの後に，体部に，ラセン状の暗文を施す。外面は，体部ヨコナデの後，底部をヘラケズリし，さらに全面に，粗いヘラミガキを施す。	胎土は；緻密。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
69－2	蓋（S）	(17.8) － －	口縁部は，ほぼ垂直に下がり，端部が，やや外反する。天井部は，偏平。ツマミ欠損。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を含む。 淡灰色を呈す。	
70－1	坏	15.0 4.4 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 明褐色を呈す。	
70－2	坏	14.3 4.4	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 明褐色で，一部黒色を呈す。	床面
71－1	坏	(13.8) － －	体部外面に，わずかな稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 明褐色を呈す。	カマド
71－2	坏（S）	13.7 4.2 5.7	体部は，外上方に，ほぼ直線的にのびる。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。 底部は，全面を一定方向，体部下端を横方向に，手もちヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を比較的多量に含む。 暗灰色を呈す。	体部外面に墨書「日」有り
72－1	甕	(22.5) － －	口縁部は，直線的に外反し，口唇部に，一条の凹線を配す。胴部は，ほぼ直線的に下がり，最大径は，口縁部にくる。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は横方向を基調としたヘラナデ，外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 暗茶褐色を呈す。	カマド
72－2	甕	－ － 6.0	胴下半から底部の残存で，72－1と同一個体と思われる。	内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向から，下端に至って斜めから横方向のヘラケズリ。底部外面，木葉痕。	胎土は，砂粒を多量に含む。 暗茶褐色を呈す。	カマド
72－3	甕	(19.5) － －	口縁部は，「く」の字状に外反し，端部は丸い。頚部に，稜を有す。最大径は口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
72－4	坏	(15.7) (5.8) ・	体部外面に稜を有し，内面にも軽い稜を有す。口縁は，内湾気味。底部は，やや深い。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	カマド
72－5	坏	(11.8) (3.2) ・	半球形状を呈す。小型。	内面は，全面ヘラミガキ。外面は，口縁部ヘラミガキ，その他ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 明褐色を呈す。	
72－6	壺（S）	－ － 10.8	胴部は，球形を呈し，底部は，丸い。「ハ」の字形の高台を有す。	ロクロ成形。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	カマド

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土　・焼成・色調	備　考
73－1	甕	19.3 (25.5) 4.0	口縁部は，やや内傾気味の「「コ」の字状を呈する。胴部は，肩部に張りをもち，小さい底部に向ってすぼまる。薄手。	口縁部は，内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，肩部が，横方向胴上位が斜め方向，以下縦方向のヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	カマド
73－2	甕	17.9 － －	口縁部は，「コ」の字状を呈す。胴部は，肩部に張りをもち，底部に向ってすぼまる。薄手。	口縁部は，内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，肩部が，横方向，胴上位が斜め方向，以下縦方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	カマド
73－3	壺（S）	－ － (13.2)	底部のみの残存。 高台は，「ハ」の字形。	ロクロ成形。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
73－4	円盤(S)	(6.0)	須恵器坏の底部を打ちぬいて，周囲を削ったもの。		胎土は，砂粒を含む。	
74－1	坏	(12.8) (3.3) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。底部は，浅い。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
75－1	坏	12.7 3.9 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，やや内湾気味で，端部は，鋭い。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 内部および口縁部外面黒褐色，その他褐色。	内面黒色処理(床面)
75－2	坏	14.2 4.0 9.5	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，浅く大き目で，やや凸面を呈する。	内面は，全面ナデの後，体部に斜格子状，底部にラセン状の暗文を施す。外面は，口縁ヨコナデの後，体部および底部をヘラケズリ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 淡黄褐色を呈す。	床面
75－3	蓋（S）	ニ ニ 3.8 0.8	口縁部欠損，天井部は，平で偏平な，宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部回転ヘラケズリ調整。 ツマミは，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
76－1	坏（S）	14.5 4.7 6.5	体部は，外上方へ直線的にのび，口縁が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 底部回転ヘラ切りの後，全面手もちヘラケズリ調整。	胎土は，微砂粒を含む。 青灰色を呈す。	火ダスキ有り
77－1	甕	19.4 － －	口縁部は，「く」の字状に外反し，端部は丸い。胴部は，ほぼ中程に，ゆるやかな膨らみを有す。最大径は，口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，頚部近くが，横方向の指ナデ。以下縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 淡褐色を呈す。	カマド
77－2	甕	(23.6) － －	口縁部は，大きく外湾する。	口縁部は，内外面ヨコナデ。胴部外面は，ハケ目。	胎土は，砂粒（雲母や石英など）を多量に含む。 暗褐色を呈す。	カマド
77－3	甕	(23.8) － －	口縁部は，大きく外湾する。胴部は，直線的に，底部に向ってすぼまる。	内面は，口縁部が，横方向のハケ目，胴部が，横方向のヘラナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，縦方向のハケ目。	胎土は，砂粒（雲母，石英など）を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	床面
77－4	盤	(14.8) － ・	半球形状を呈す。	内面は，ヨコナデの後，全面ヘラミガキ。外面は，口縁ヨコナデ後，体部ヘラケズリ。さらに全面を粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 外面赤褐色，内面橙褐色を呈す。	
78－1	甕	18.2 － －	口縁部は，直線的に外反する。胴部は，ほぼ垂直に下がる。最大径は，口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面縦方向のヘラケズリ。	胎土は砂粒（雲母，石英，長石など）を多量に含む。 暗茶褐色を呈す。	カマド
79－1	甕	(24.0) － －	口縁部は，大きく外湾し，端部が，わずかに直立する。胴部以下欠損するが，肩部が，張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面，全面，ナデ。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を，多量に含む。 暗褐色を呈す。	カマド
79－2	椀	(14.8) (6.7) (9.0)	体部は，外上方へ，内湾気味に立ち上がる。底部は，やや深く若干凸面を呈す。	内面は，全面，ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデ，体部横方向のヘラミガキ，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。	カマド
79－3	坏	(11.8) (3.2) ・	半球形状を呈す。小型。	内面は，全面ナデの後，底面を，ヘラミガキ。外面は，全面横方向のヘラミガキ（巾の広いヘラミガキ）。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
79－4	坏	13.9 3.9 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，暗褐色，外面，淡茶褐色を呈す。	
79－5	坏	(14.8) － －	体部外面に，沈線が，施される。体部は，やや内湾気味で，口縁部で，わずかに外反する。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
79－6	坏（S）	15.4 4.5 8.0	体部は，ほぼ直線的に，外上方へのびる。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。 底部全面および体部下端を回転ヘラケズリ調整。	胎土は，粗い砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	体部外面にヘラ記号「中」アリ
79－7	蓋（S）	－ － 4.3 6.0	口縁部欠損。天井部中央に，偏平な宝珠状ツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	床面
80－1	盤	13.8 3.3 ・	偏平な，半球形状を呈す。	内面は，全面ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 焼成良好。 暗赤褐色を呈す。	カマド 内面赤彩
80－2	坏	(13.8) (3.8) ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 淡茶褐色を呈す。	
80－3	坏（S）	13.1 3.7 －	体部は，外上方へ，直線的にのびる。底部は，やや浅く，大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，全面不定方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒（雲母，石英など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	カマド
81－1	甕	13.7 21.7 －	口縁部は，やや外傾して立ち上がる。胴部は，球形を呈し，ほぼ中程に最大径を有す。底部は，丸い。厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向を基調としたヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 暗赤褐色を呈す。	カマド
81－2	盤	1608 4.1 ・	半球形状を呈す。やや大型。	内面は，口縁部ヨコナデの後，全面に放射状のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩 床面
81－3	坏	11.3 3.8 ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，直線的に外上方へのびる。	内面は，全面，細かいヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面黒色，外面明褐色を呈す。	内面黒色処理
81－4	坏	11.1 4.0 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	カマド
81－5	坏	7.6 1.7 －	小形。	ロクロ成形。 底部外面，つくね。	胎土は，微砂粒を含む。 淡黄褐色を呈す。	
81－6	坏	8.2 1.6 5.3	小形。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡黄褐色を呈す。	
82－1	甕	－ － 7.9	底部のみの残存。	内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラミガキ。底部には，木葉痕。	胎土は，砂粒（長石，雲母など）を含む。 淡茶褐色を呈す。	
82－2	甕	－ － 10.2	台部のみの残存。台部は「ハ」の字状に開く。厚手。	胴部は，内面が，ヘラナデ，外面が，縦方向のヘラケズリ。台部は，裾部内外面ヨコナデの後内面，ヘラナデ，外面，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 焼成やや不良。 暗褐色を呈す。	
82－3	盤	(19.0) (3.1) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的に外上方へのびる。底部は，かなり浅く，大きい。	口縁部内外面ヨコナデの後，底部内面は，全面ヘラミガキ，外面はヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 淡赤褐色を呈す。	内外面赤彩
82－4	坏	13.7 4.5 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも，軽い段を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 明褐色を呈す。	床面
82－5	坏	(12.9) (3.5) ・	体部外面には，ヘラケズリによってできたかすかな稜を有す。口縁部は，直線的。底部は，浅く，かなり偏平。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
82－6	鉢（S）	(28.0) － －	口縁部は，わずかに，外反し，端部が，器厚する。胴部は，ほぼ直線的に内傾する。	口縁部内外面，ヨコナデ。胴部内面，指先ナデ。外面，タタキ目。	胎土は，砂粒を含む。 暗灰色を呈す。	カマド
82－7	蓋（S）	14.7 3.1 2.8 0.8	口縁部は，外傾して下がり，端部は，鋭い。天井部は，やや偏平で，中央部に，宝珠形のツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	床面 天井部外面にヘラ記号「A」有り。
82－8	高台付坏（S）	(12.9) 3.9 7.4	体部は，外上方へ直線的にのび口縁部でわずかに外反する。高台は，低く端部が鋭い。断面は，三角形に近い。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 淡青灰色を呈す。	床面
82－9	高台付坏（S）	－ － 8.0	口縁部欠損。高台は，低く端部が，鋭い。断面は，三角形に近い。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 淡灰色を呈す。	
83－1	甕	13.4 － －	口縁部は，やや内傾する「コ」の字形を呈す。肩部に張りを有し，台部に向って直線的にすぼまる。台部欠損。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面は，肩部が，横方向，以下が，斜めから縦方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を比較的多量に含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	カマド
83－2	甕	21.7 － －	口縁部は「く」の字形に外反する。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面は，肩部が，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を比較的多量に含む。 赤褐色を呈す。	カマド
83－3	坏	(13.3) 3.9 6.2	体部は，やや内湾気味に立ち上がる。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 赤褐色を呈す。	
83－4	坏	(13.3) 3.9 (6.7)	体部は，やや内湾気味に，外上方へのびる。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗褐色を呈す。	
83－5	坏（S）	(12.8) 4.5 (6.9)	体部は，ほぼ直線的に外上方へのびる。底部は，やや深い。	ロクロ成形。 底部は，全面を一定方向，体部下端を斜めから横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 青灰色を呈す。	カマド
83－6	坏（S）	12.2 3.9 5.9	体部は，やや内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。底部は，小さ目。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
84－1	坏	14.1 4.2 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面暗褐色，外面赤褐色を呈す。	床面
84－2	坏	14.4 4.2 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 暗褐色を呈す。	床面
85－1	甕	(19.2) － －	口縁部は，短く外湾し，口唇が直立する。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を含む。 淡赤褐色を呈す。	カマド
85－2	甕	二 (2.9) 9.8	台付甕の台部。台部は「ハ」の字状で，裾部が，大きく開く。端部外面に一条の沈線を配す。	内外面ともヨコナデ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色。	床面
85－3	坏	(13.8) 4.1 (7.4)	体部は，やや内湾気味に立ち上がる。底部欠損。	ロクロ成形。 体部下端を手もちヘラケズリ調整。内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面黒色，外面褐色を呈す。	床面 内面黒色処理
85－4	坏	－ － (8.1)	口縁部欠損。体部は，内湾気味に立ち上がる。大形。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，ヘラミガキ。	胎土は，砂粒を少量含む。 内面黒色，外面褐色を呈す。	床面 墨書 内面黒色処理
85－5	坏	(12.8) 3.9 (6.9)	体部は，やや内湾気味。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，体部下端を横方向に，手もちヘラケズリ調整。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	床面

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
85－6	坏	(12.8) 4.9 7.0	体部は，やや内湾気味に，立ち上がり，口縁端部が，わずかに外反する。底部は，やや大き目。	内面は，不定方向の指ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部下半および，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒色，外面明褐色を呈す。	内面黒色処理
85－7	坏	12.8 3.9 7.0	体部は，直線的に外上方へのびる。底部は，やや大き目。	ロクロ成形。底部は，剝落が著しく切り離し不明。内面は，底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。赤褐色を呈す。	カマド 内面黒色処理
85－8	坏	12.5 3.9 5.5	体部は，やや内湾気味，底部は，小さい。	ロクロ成形。底部は，剝落が著しく，切り離し不明。内面は，ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む 淡茶褐色を呈す。	カマド 内面黒色処理
85－9	坏	(13.8) (4.7) (7.2)	体部は，やや内湾気味。底部は，やや凸面を呈す。	ロクロ成形。回転ヘラ切りの後，体部下半を斜から横方向に，手もちヘラケズリ調整。内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒色，外面赤褐色を呈す。	内面黒色処理
86－1	坏	13.4 5.2 ・	体部外面に稜を有す。口縁部は，内湾気味。底部は，やや深い。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面，暗褐色，底部外面明褐色を呈す。	
86－2	坏	12.4 4.5 ・	半球形状を呈す。口唇部が，尖り，内面に稜を有す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
86－3	坏	12.4 4.7 ・	半球形状を呈す。口縁部が，直端し，口唇部面に凹線を配す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。暗褐色を呈す。	床面
88－1	甕	－ － 8.0	底部のみの残存。	内面は，指ナデ。外面は，縦方向のヘラミガキ。底部木葉痕。	胎土は，砂粒（雲母，石英など）比較的多量に含む。暗赤褐色を呈す。	カマド
88－2	坏	(14.3) 4.8 ・	半球形状を呈す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	床面
88－3	坏	13.0 4.6 ・	体部外面に，外に張り出す稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	
91－1	甕	(18.0) － －	口縁部は，「コ」の字状に近い。頸部は，直立する。肩部は，やや張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，肩部が横方向，以下縦方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。暗赤褐色を呈す。	カマド
91－2	坏（S）	－ － 6.1	底部のみの残存。	ロクロ成形。底部，全面回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒（長石など）を多量に含む。青灰色を呈す。	床面
91－3	坏（S）	(14.9) 3.6 (8.0)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，浅く大きい。	ロクロ成形。回転糸切り。	胎土は，砂粒を若干含む。青灰色	
91－4	坏（S）	(13.8) 4.3 (7.4)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。底部は全面を不定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒（長石など）を多量に含む。青灰色を呈す。	
92－1	盤	(17.8) － ・	体部外面に，軽い稜を有し，口縁部は，やや外傾して立ち上がる。底部は，浅く偏平。	内外面とも，全面ヘラミガキ。(体部は横方向)	胎土は，緻密。焼成良好 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
93－1	甕	(11.5) － －	口縁部は，短く，外反し，端部は，鋭い。頚部には，鋭い稜を有し，胴部は，球形。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡褐色を呈す。	
93－2	坏	(10.8) 3.8 ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的で，端部は，丸い。	内面は全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。焼成良好。暗赤褐色を呈す。	
93－3	坏	12.9 4.3 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面明褐色を呈ず。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
93－4	蓋（S）	(16.1) 3.3 3.1 1.2	口縁部は，垂直に下がり，端部は，鋭い。天井部は，丸くやや低い。中央部に宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。 ツマミは，ハリツケ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面灰色，外面宇治茶色	床面 外面自然 軸付着
93－5	蓋（S）	(14.7) －	口縁部は，外下方に直線的にのび，端部は丸い。口縁部内面に「カエリ」を有す。天井部はやや高く偏平。ツマミ欠損。	ロクロ成形。胎土は，砂粒を天井部外面。回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好。 青灰色を呈す。	床面
94－1	盤	(17.7) 3.0 ・	偏平な，半球形状を呈す。底部は，かなり浅く，大きい。	内面は全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 明褐色を呈す。	
94－2	坏	(11.8) 3.7 ・	半球形状を呈す。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 暗赤褐色を呈す。	
95－1	甕	10.9 － －	胴部やや上位に最大径を有し球形を呈する胴部と屈曲して断面S字を呈する口縁部よりなる台付甕であり，台部は破損している。	口縁部はヨコナデ。 胴部外面は斜位に丁寧なハケ調整。ハケは三段に調整。内面はヘラナデ。内面にヒモ積み痕を残す。	微砂粒を含む精選された胎土。 焼成良好。褐色を呈す。	
95－2	埦	16.7 6.3 ・	円形の窪みをもつ底部より緩やかなカーブでたちあがり口縁上位で屈曲して独特の断面を形成する。屈曲部内面に稜を形成。きわめてバランスの良い優品である。	内外面とも丁寧なヘラミガキ調整。	きわめて精選された胎土。 焼成良好，淡茶褐色を呈す。	
96－1	壺	－ － －	胴部上位のみの残存。頚部に断面三角の隆帯を貼付けており，胴部は球形を呈すると思われる，大形の壺である。	胴部はタテ方向のヘラミガキ，内面はヘラナデ。外面はミガキで光沢をもつ。	精選された胎土。焼成良好。 内面茶褐色，外面赤褐色。	外面赤彩
96－2	甕	－ － 6.0	底部のみの残存。底部に木葉痕あり。	不明	砂粒を含む。 黄褐色を呈す。	
96－3	坩	12.6 9.0 3.4	比較的小形な胴部より口縁部が大きく直線的に外反する。最大径は口縁部になる。	口縁部は内外面とも入念なヘラミガキ。胴部外面は頚部をハケ，下位はケズリ。内面は指によるナデ。	砂粒を多量に含む。 黄褐色を呈す。	床面
96－4	埦	13.2 7.6 －	球形を呈する体部と僅かに外反してたちあがる口縁部を形成する。底面が不安定でバランスが悪い。	口縁部ヨコナデ，体部内面粗いヘラミガキ，外面ハケ後粗いミガキ。器面が剝落。	砂粒を多量に含む。焼成不良。 褐色を呈す。	床面
96－5	埦	15.2 6.5 3.9	小形な底面より緩やかなカーブでたちあがり口縁部上位は肥厚する。肥厚した口縁内面は僅かに稜をもつ。	口縁部はヨコナデ体部外面はヘラケズリ，上部一部ハケ，内面ヘラナデ。	砂粒，雲母を僅かに含む。 焼成不良。 黄褐色を呈す。	
96－6	埦	15.7 5.6 4.3	小形な底面よりやや外湾気味に緩かにたちあがり口縁上位は肥厚し，内面は稜をなす。	口縁部はヨコナデ，体部外面はハケ，下位はヘラケズリ。内面ヘラナデ。	砂粒を多量に含む。焼成不良。 黄褐色を呈す。	
97－1	甕	21.6 － －	口縁部は「く」の字状に強く外反する。肩部に，軽い張りを有し底部に向ってすぼまる。最大径は，口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向の指先ナデ。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	カマド
97－2	甕	19.8 － 6.8	口縁部は「く」の字状に強く外反する。肩部に，軽い張りを有し，底部に向ってすぼまる。底部はやや突出気味。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリで，最下端は指の圧痕。底部木葉痕。	胎土は，砂粒（雲母，長石など）を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	床面
97－3	甕	(12.4) － －	口縁部は，外傾して立ち上がる。胴部は，球形を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，斜め方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
77－4	甕	(12.6) － －	口縁部は，外傾して立ち上がる。胴部は，球形を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，斜め方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
97－5	甕	12.8 4.3 －	体部外面に，稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	床面
98－1	甕	18.7 － －	口縁部は，「コ」の字状を呈し，口唇部が，ツマミ出される。胴部は，肩部に張りを有す。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズり。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 淡赤褐色を呈す。	
99－1	甕	20.1 － －	口縁部は，やや外傾する「コ」の字状を呈す。胴部は，肩部に張りを有し，底部に向ってすぼまる。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，上半が，横方向の，以下が縦方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 赤褐色を呈す。	カマド
99－2	甕	19.9 － －	口縁部は，やや内傾する「コ」の字状を呈す。口唇部が，ツマミ出される。胴部は，肩部に張りを出す。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 赤褐色を呈す。	
101－1	坏	16.5 4.2 6.0	口縁部は，外上方へ直線的にのびる。口縁端部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 底部は，全面を不定方向，体部下端を，横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面黒色，外面赤褐色を呈す。	床面 内面黒色処理
101－2	坏	－ － 7.2	体部は，内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損。底部は，やや上げ底気味。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	床面
101－3	坏（S）	13.1 4.1 6.4	体部は，直線的に外上方へのび，端部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 底部は，全面が，一定方向，体部下端が横方向。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗灰色を呈す。	
101－4	坏（S）	13.1 3.8 6.5	体部は，外上法へ直線的にのびる。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡灰色を呈す。	カマド
101－5	坏	12.5 5.0 5.9	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや深い。	ロクロ成形。 回転糸切りの後，全面を不定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 暗灰褐色を呈す。	
102－1	甕	(14.2) － －	口縁部は，直立気味に外湾する。胴部は，球形を呈すと思われる。薄手。	口縁部ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	
102－2	坏	(13.8) (3.8) ・	体部外面に稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 褐色を呈す。	
102－3	坏	14.3 4.1 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
102－4	坏	(13.8) 5.0 5.5	体部は，内湾気味に立ち上がる。底部は，やや深く，小さい。	内面は，底部が一定方向。体部が横方向のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部を横方向のヘラケズリ。底部はヘラケズリ。	胎土は，緻密。 焼成良好。	内外面赤彩
105－1	甕	(18.1) － －	口縁部は，内傾する「コ」の字状を呈し，口唇部が，わずかに直立する。肩部が張りを有す。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面横方向のヘラナデ。外面，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	カマド
105－2	甕	(19.4) － －	口縁部は，直立する「コ」の字状を呈す。肩部が張りを有す。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面横方向のヘラケズリ。外面は，上位が横方向，下位が斜下方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗褐色を呈し，外面には，炭化物の付着が，著しい。	
105－3	甕	(17.9) － －	口縁部は，やや短かめで「コ」の字状を呈す。口唇部外面に一条の沈線を配す。肩部が，大きく張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面横方向のヘラナデ。外面は，上位が横方向，下位が斜下方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 赤褐色を呈す。	
105－4	甕	(15.8) － －	口縁部は，内傾する「コ」の字状を呈し，頚部外面には，鋭い稜を有す。肩部が張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	
105－5	坏	(11.6) (3.3) ・	半球形状を呈し，口縁部は，短かく直立する。端部は，鋭い。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	粘土・焼成・色調	備　考
105－6	甕（S）	22.5 － －	口縁部は，大きく外反し端部に凸帯がめぐる。胴部は，球形を呈す。	内面は，指頭による押えのため凹凸が，著しい。外面は，平行タタキ目。口縁部内外面ともロクロナデ。	胎土は，砂粒を若干含む。 青灰色を呈す。	
105－7	深鉢 （S）	28.0 29.5 (11.7)	口縁部は，短かく，外反し，端部に凸帯が，めぐる。胴部は肩部にやや張りを有し，大きい底部に直線的にのびる。	胴部外面は，平行タタキ目で下半部を横方向にヘラケズリ内面は，ナデ調整。口縁部内外面ロクロナデ。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
106－1	坏	10.5 3.7 ・	体部外面に外に張り出す稜を有す。口縁部は，直立気味に立ちあがり，口唇部内面に，軽い段を有す。	内面は，全面ナデ，外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好。 淡茶褐色を呈す。	床面
106－2	坏	11.0 — ・	体部外面に，外に張り出す稜を有す。口唇部内面に，軽い段を有す。底部欠損。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好。 暗褐色を呈す。	
106－3	高台付坏 (S)	— — (9.8)	底部のみの残存。底部は，大きく，平ら。「ハ」の字状の高台を有す。	ロクロ成形。 底部外面回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒，雲母末を含む 淡灰色を呈す。	床面
107－1	甕	— — 7.8	台部のみの残存。台部は，「ハ」の字状を呈し，暗部は丸い。厚手。	台部内面ヘラナデ，外面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗褐色を呈す。	
107－2	坏	13.7 4.8 6.4	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部は，直線的にのびる。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。回転糸切り。 内面は，底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。内面黒色，外面，淡褐色を呈す。	内面黒色処理。
107－3	坏	12.2 4.0 5.1	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部は，直線的にのびる。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
107－4	高坏(S)	— — 8.6	脚部のみの残存。円錐状の脚部。裾部は，ラッパ状に開き端部が，ほぼ垂直に下がる。	ロクロ成形。 脚部と，坏部は，接合。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
107－5	高台付坏 (S)	17.6 8.0 11.5	体部は，外上方へ，直線的にのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，大きく，平ら，高台は，「ハ」の字状で端部は，四角。	ロクロ成形。 底部外面回転ヘラケズリ調整 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。焼成良好。 青灰色を呈す。	床面
107－6	高台付坏 (S)	— — 6.8	体部は，外上方へ，直線的にのびる。底部は，小さく平ら高台は，ほぼ垂直に下がる。	ロクロ成形。 回転糸切り。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。 青灰色を呈す。	
107－7	坏(S)	13.5 5.1 7.0	体部は，外上方へ，直線的にのびる。底部は，やや深い。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，全面を一定方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。 青灰色を呈す。	
108－1	甕	18.9 — —	口縁部は，内傾する「コ」の状を呈す。肩部が，張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズリ	胎土は，微砂粒を含む。 暗茶褐色を呈す。	
109－1	坏	12.6 3.7 5.5	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部は，直線的。底部は，小さい。	紐積み→ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，砂粒を若干含む。 淡褐色を呈す。	
110－1	甕	(21.8) — —	口縁部は，大きく外反する。最大径は，口縁部にくると思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，斜下方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 淡赤褐色を呈す。	
110－2	甕	(16.7) — —	口縁部は，軽く外反する。胴部は，ほとんど張りをもたずに，すぼまる。小型。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面は，不明。	胎土は，砂粒（石英，長石など）を多量に含む。淡赤褐色を呈す。	
110－3	盤	(20.9) 3.0 ・	口縁部は，やや内湾気味に，立ち上がる。底部は，非常に浅く，大きい。底部中央が，肉厚になる。	内面は，全面をナデた後，底部から体部にかけて，2段のラセン状の暗文を施こす。外面は，底部，体部をヘラケズリした後体部から口縁部をヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
110－4	坏	14.9 3.8 ・	体部外面に軽い稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。底部は	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調　の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
110－5	坏	13.8 4.3 ・	体部外面に稜を有て，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
110－6	坏	(14.8) 4.7 ・	体部外面に稜を有し，内面にも，軽い段を有す。口縁部は内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 灰褐色を呈す。	
110－7	高台付坏(S)	(16.7) 4.9 9.0	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きく，やや凸面を呈す。高台は，低く「ハ」の字状。	ロクロ成形。 底部外面回転ヘラケズリ調整 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 青灰色を呈す。	
111－1	甕	(21.0) — —	口縁部は，短か目で，強く外反する。胴部は，ほとんど張りをもたずに下がり，最大径は，口縁部にくる。底部欠損	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は，縦方向のヘラケズリと，ナデ調整。	胎土は，砂粒を多量に含む。 暗赤褐色を呈す。	カマド
111－2	甕	(23.5) — —	口縁部は，大きく外反し，端部は，丸い。以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ	胎土は，砂粒を少量含む。 褐色を呈す。	
111－3	甕	— — (11.6)	脚部は「ハ」の字状に開き，長方形のスカシを，千個有す胴部は，下半のみ残存し，球形を呈す。	脚部は，裾部内外面ヨコナデ上部は，内面がヘラナデ，外面が，縦方向のヘラケズリ（面取り状）胴部は，内面がヘラナデ，外面が縦方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を比較的多量に含む。暗褐色を呈す。	
111－4	坏	(14.3) (3.8) ・	体部外面に，かすかな稜を残す。口縁部は，直線的。	内面は全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，暗褐色，外面褐色を呈す。	
111－5	坏	(14.8) (4.7) ・	体部外面に，するどい稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 内面および口縁部は，黒褐色 その他褐色を呈す。	
111－6	坏	13.2 4.0 ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，内面に軽い段を有して，内湾気味に立ち上がる。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む 淡褐色を呈す。	
111－7	蓋(S)	11.3 (2.8)	口縁部内面に，短かい「カエリ」を有す。天井部は，丸く中央部にツマミを有す。ツマミ欠損。小形。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラケズリ。 ツマミは，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
112－1	甕	(23.8) — —	口縁部は，大きく外反する。胴部は，ほぼ垂直に下がる。最大径は，口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部は，内面ヘラナデ，外面，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 暗茶褐色	
113－1	埦	(18.8) (5.5) ・	大形。口縁部はほとんど直立す。底部は深い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面および，口縁部外面，黒褐色，外面，褐色を呈す。	
113－2	坏(S)	14.0 4.3 6.0	体部は，直線的に外上方へのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	
114－1	甕	(19.2) — —	口縁部は，直立する「コ」の字状を呈し，口唇部外面が，わずかにつまみ出される。頸部に軽い稜を有す。肩部に張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は上位が，横方向，下位が，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	カマド
114－2	甕	— — (8.2)	台部のみの残存。台部は「ハ」の字状に外反する。	内外面ヨコナデ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗赤褐色を呈す。	
114－3	高台付坏	— — 8.5	口縁部欠損。体部は，内湾気味。高台は「ハ」の字状を呈し，やや高い。	ロクロ成形。 坏部内面は，全面丁寧なヘラミガキ。高台は，ハリツケ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，坏部内面赤褐色，その他，褐色を呈す。	内面赤彩
114－4	坏	(12.8) 4.1 (6.5)	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 内面は，全面ヘラミガキ。回転糸切りの後，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 明褐色を呈す。	カマド
114－5	蓋(S)	9.5 —	口縁部は，やや外傾して下がる。天井部は，低く，小形。ツマミ欠損。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	カマド

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
115－1	盤	(19.8) (2.8) ・	体部は，内湾気味に立ち上がる。底部は，かなり浅く，偏平。大形。	内面は，全体をナデた後に，底部から体部にかけて，2段のラセン状暗文を配す。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面をヘラケズリし，さらに粗いヘラミガキを施こす。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
115－2	坏	(13.9) (3.9) ・	体部外面に，後を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
115－3	蓋(S)	15.7 4.0 3.3 1.0	口縁部は，垂直に下がり，端部は，鋭どい。天井部は，山形を呈し，中央部に宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，微砂粒を含む。 暗灰色を呈す。	
116－1	甕	— — 6.4	底部のみの残存。	内面は，ヘラナデ。外面は，ヘラケズリ。底部外面，木葉痕。	胎土は，砂粒および雲母を多量に含む。 赤褐色を呈す。	カマド
116－2	坏	(10.8) 3.3 ・	半球形状を呈す。小形。	内面は，全体ナデの後，放射状のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後に底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
117－1	坏	— — 5.5	底部のみの残存。	ロクロ成形。回転糸切り。 内面は，底面が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好。内面，黒色，外面茶褐色を呈す。	内面黒色処理。墨書アリ。
118－1	坩	15.3 (18.4) 3.0	頸部を欠き図上で1個体とした。小形で若干窪みをもつ底部とやや偏球形を呈する胴部から直線的に大きく外反する口縁部よりなる。口縁部が大きく外反する点が特徴的であり最大径を口縁部にもつ。	口縁部は内外面とも入念なヘラミガキ。上位はヨコ方向。下位はタテ方向のヘラミガキ胴部外面は上位タテ方向，下位ヨコ方向の入念なヘラミガキ。内面ヘラナデ。	緻密で精選された胎土。 焼成良好。堅緻。 赤褐色を呈す。	外面赤彩。
118－2	壺	11.9 — —	胴下半を欠く。球形の胴部より口縁部が屈曲して外湾気味に開く。内面にヒモ積み痕を残す。	外面ヨコナデ，下位はハケ。 内面ヘラミガキ。	微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	
118－3	壺	9.3 — —	口縁部のみの残存。「く」の字に外反する短かい口縁部である。	内外面ともハケ調整。	微砂粒を含む。焼成良好。 赤褐色を呈す。	
118－4	壺	— — 2.4	胴部のみの残存。小さな底部より緩かなカーブで球形を呈する胴部である。	胴部外面は三段にタテ位の入念なヘラミガキ。内面は粗い放射状のミガキ。	微砂粒を多量に含む。焼成良良好。 赤褐色を呈す。	
118－5	坩	7.3 — —	小形の壺であり胴下半を欠く短かく「く」の字に外反する口縁が特徴的。	胴部外面，口縁内面，ハケ調整。	砂粒を多量に含む。焼成不良 黄褐色を呈す。	
118－6	埦	14.9 5.5 —	壺を偏平にした器形である。偏平な胴部より「く」の字に外反する。	口縁部ヨコナデ，体部外面一部ハケ，内面ヘラナデ。	大粒の砂粒を多量に含む。 黄褐色を呈す。	
118－7	甑	19.6 11.1 6.0	多孔式の甑であるが，底部が完存してない。比較的大きな底部より緩やかなカーブでたちあがる。口縁部はおり返しており段を呈す。器高の浅い特徴的な甑である。	体部外面はハケ下位ヘラケズリ。内面は口縁部ハケ下位はヘラケズリとヘラナデ。 口縁外面に指の圧痕あり。	砂粒多量混入，内面に砂粒表出。黄褐色を呈す。	
119－1	甕	(18.8) — —	口縁部は，ゆるく「く」の字状に外反する。肩部に張りを有す。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部は，内面，横方向のヘラナデ外面横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む 暗赤褐色を呈す。	
119－2	坏	(11.8) 3.5 (5.0)	体部は，外上方へのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡赤褐色を呈す。	カマド
120 －1	埦	(17.8) (6.8) —	体部は，内湾しながら，ゆるやかに立ち上がり，口縁端部は，鋭どい。底部は，やや深く，平底を呈すと思われる。	内面は，全体を丁寧にヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部および底部をヘラケズリし，さらに，全体を粗くヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
124－1	坏	(12.8) 4.2 (6.5)	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 体部内面，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒色，外面，暗褐色を呈す。	内面黒色処理。
126－1	坏	(15.4) 5.5 6.8	体部は，内湾気味に立ち上がり口縁部が，わずかに外反する。端部は，丸い。大形で，底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転糸切りの後，底部全面（不定方向）および，体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を少量含む。 焼成良好。 内面，黒褐色，外面，淡茶褐色を呈す。	内面黒色処理。
126－2	坏	— — 9.0	体部は，内湾気味に立ち上がる。口縁部欠損。大形で，底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転糸切りの後，底部全面（不定方向）および，体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面黒色，外面，明褐色を呈す。	内面黒色処理。
126－3	坏	12.3 4.0 5.8	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。底部は小さい。	ロクロ成形。回転糸切り。 内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面，黒色，外面，赤褐色を呈す。	内面黒色処理。底部外面墨書有り。
126－4	坏	14.0 3.9 7.0	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 回転糸切りの後，底部全面（不定方向）および，体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒色，外面，褐色を呈す。	内面黒色処理体部外面に墨書有り。
126－5	坏	11.7 4.1 5.9	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。端部は，器厚して丸くなる。	ロクロ成形。回転糸切り。 内面は，底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を少量含む。 内面，黒色，外面，褐色を呈す。	内面黒色処理。体部外面墨書有り
126－6	坏	(10.6) 3.7 —	体部外面に，外に張り出す稜を有し，口縁部は，直立する口唇部内面に，一段を有す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデ，以下ヘラケズリ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 暗茶褐色を呈す。	
126－7	坏(S)	(11.8) 4.2 (5.0)	体部は，外上方へ直線的にのび，端部が，わずかに外反する。底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。 青灰色を呈す。	底部外面ヘラ記号「井」有り。
127－1	坏	13.2 4.1 6.9	体部は　内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。回転糸切り。 内面は，定部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒色，外面，褐色を呈す。	内面黒色処理。
127－1	坏	— — 7.0	底部のみの残存。	ロクロ成形。回転糸切り。 内面は，ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
127－3	不明	— — 6.4	体部は，上方へのびる。削り出された，非常に低い高台を有す。	ロクロ成形。回転糸切り後，周縁および，体部下端ヘラケズリ調整。その後高台を削り出す。	胎土は，砂粒（長石など）を少量含む。 青灰色を呈す。	
130－1	坏	13.5 (4.7) ・	やや偏平な，半球形状を呈し口縁部は，やや内傾する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
130－2	坏	(12.8) 4.0 6.8	体部は，外上方へ，直線的にのび，口縁端部が，器厚する	ロクロ成形。底部は，全面，不定方向の手もちヘラケズリ 内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を少量含む。 内面および口縁部外面，黒色 その他，赤褐色を呈す。	
130－3	坏	— — 6.9	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り後，周縁手もちヘラケズリ。内面は，ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を少量含む。 内面，黒色，外面，赤褐色を呈す。	
131－1	甕	11.1 — —	口縁部は，直立する「コ」の字状を呈す。胴部は，球形を呈すと，思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む 赤褐色を呈す。	カマド
131－2	坏	12.7 4.5 6.7	体部は，外上方へ直線的に，のびる。	ロクロ成形。回転切りの後，全面を不定方向に手もちヘラケズリ。内面は底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を若干含む。 内面，黒色，外面，赤褐色 を呈す。	カマド

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
131－3	壺	8.4 — —	頸部のみの残存。	ロクロ成形。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。 青灰色を呈す。	床面
131－4	蓋	14.2 3.2｛2.2 0.9	口縁部は，反転気味に広がり端部は，やや外傾して下がる天井部中央に，宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラケズリ調整。ツマミは，ハリツケ。	胎土は，微砂粒を含む。 灰色を呈す。	
131－5	坏	14.4 4.3 6.5	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を少量含む。 淡褐色を呈す。	口縁部タール付，カマド
131－6	坏(S)	12.3 4.4 6.5	体部は，外上方へ直線的にのびる。	ロクロ成形。 回転ヘラ切りの後，底部全面（一定方向）および体部下端（横方向）に手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 灰色を呈す。	体部外面，墨書有り。
131－7	坏(S)	(13.5) 4.3 6.3	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は小さい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，微砂粒を少呈含む。 暗灰色を呈す。	
132－1	甕	(22.0) — —	口縁部は，短かく，外反する口唇部は，外傾気味に立つ。肩部は，張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，　方向のヘラナデ。外面は，ヘラケズリの後，ナデ調整。	胎土は，雲母，長石などを含む。淡褐色を呈す。	
132－2	坏	(13.9) (4.1) ・	体部外面に稜を有す。口縁部は内湾気味。底部は，やや浅い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を，含む。 内面，暗褐色，外面，褐色を呈す。	
132－3	坏	(13.4) (3.7) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデ，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	
132－4	坏(S)	12.4 3.8 5.7	体部は外上方へ直線的に立ち上がる。	ロクロ成形。 底部全面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，長石粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
133－1	坏(S)	13.9 4.0 6.4	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡青灰色を呈す。	
135－1	甕	(22.0) — —	口縁部は，短かく，外反する。口唇部は，外傾して立つ。肩部は，張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，ナデ調整。	胎土は，長石，雲母などを含む。褐色を呈す。	
135－2	坏	(13.4) 3.9 —	体部は，外湾気味に，立ち上がる。底部は，やや凸面を呈する平底。	内面は，全面ヘラミガキ。外面は，全面ヘラケズリした後やや粗いヘラミガキ。	胎土は，緻密。焼成良好。 内面および，口縁部外面黒色その他褐色を呈す。	
135－3	坏(S)	— — 7.5	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，微砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
136－1	坏	12.8 4.5 7.0	体部は，外上方へ直線的にのびる。	ロクロ成形。底部は，全面不定方向の手もちヘラケズリ。内面は，底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒色，外面，赤褐色を呈す。	
136－2	坏(S)	12.9 4.3 5.9	体部は，直線的に外上方へのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。底部は，全面不定方向，体部下端，横方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	床面
136－3	坏(S)	(12.9) 4.1 5.9	体部は，直線的に外上方へのび口縁部が，わずかに外反する。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。回転糸切りの後底部全面を不定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	床面
136－4	坏(S)	— — 6.5	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
136－5	小型壺(S)	6.1 8.0 4.7	口縁部は，直立し，肩部に，鋭どい稜を有す。体部は，直線的にすぼまる。底部が，厚手。	ロクロ成形。底部全面および，体部下端を手もちヘラケズリ。肩部に数条の沈線が配される。	胎土は，砂粒（長石など）を多量に含む。 青灰色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
137－1	甕	(24.5) — —	口縁部は，強く外反する。胴部は，肩部にわずかな，膨らみをもって下がる。最大径は口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向の指先ナデ。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗褐色を呈す。	カマド
137－2	甕	— — 4.1	底部のみの残存。	内面は，ヘラナデ。外面は，ヘラケズリ。底部外面は，木葉痕の上をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	カマド
173－3	甕	— — 6.3	底部のみの残存。	内面は，ヘラナデ。外面は，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	カマド
137－4	盤	18.2 3.5 ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，直線的。底部は，かなり浅く，偏平。	内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。 外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。さらに，口縁部外面は，粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	カマド
137－5	坏	(15.4) 4.9 ・	体部外面に，鋭どい稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒褐色，外面，褐色を呈す。	カマド
138－1	坏	14.8 4.5 ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
138－2	坏	14.1 4.7 ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
138－3	坏(S)	— — 9.2	底部のみの残存。	ロクロ成形。 底部外面，不定方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒（石英など）を含む。 青灰色を呈す。	火ダスキ有り。
139－1	甕	(20.7) — —	口縁部は，短かく外反し，端部が，ツマミ出される。断面「S」字状を呈す。胴部は，強い張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ　胴部内面は，横方向のヘラナデ。 外面はナデ調整の後，肩部以下を，縦方向のヘラミガキ。	胎土は，雲母，長石を多量に含む。 暗褐色を呈す。	カマド
139－2	甕	(19.9) — —	口縁部は，短かく外反し，端部が，直立する。胴部は，張りを有す。	口縁内部面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外一面は，ナデ調整の後，肩部以下を，縦方向のヘラミガキ。	胎土は，雲母，長石を，多量に含む。 暗褐色を呈す。	カマド
139－3	甕	(20.8) — —	口縁部は，直立する「コ」の字状を呈す。肩部に張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ，外面，最上位横方向のヘラナデ以下タテ方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 暗褐色を呈す。	カマド
139－4	甕	(13.3) — —	口縁部は，内傾する「コ」の字状を呈す。頭部に稜を有し，肩部に至る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面横方向のヘラナデ。外面，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	カマド
139－5	台付甕	— — 9.8	台部のみの残存。台部は，「ハ」の字状を呈し，裾部は，大きく，広がる。端部に，段を有す。	内外面ともヨコナデ。	胎土は，微砂粒を少量含む。 暗褐色を呈す。	カマド
139－6	甕	— — 10.3	台部のみの残存。台部は，「ハ」の字状を呈し，端部が，折り反る。	内外面ともヨコナデ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	カマド
139－7	坏	12.8 4.0 5.4	体部は，直線的に外上方へのびる。底部は，小さい。	ロクロ成形。 底部全面，不定方向，体部下端横方向の手もちヘラケズリ。 内面は，底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面，黒色，外面，淡茶褐色を呈す。	内面黒色処理 カマド
139－8	坏	11.7 4.6 5.0	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部は，わずかに外反する。底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り後，周縁を手もちヘラケズリ。内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面，黒色，外面，褐色を呈す。	内面黒色処理
139－9	高台付坏	— — (7.5)	高台は，ほぼ垂直に，下がり，端部が，やや外反する。	ロクロ成形 回転糸切り。 高台は，ハリツケ。	胎土は，微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
139－10	壺（S）	－ － －	胴部上半のみの残存。 球形	ロクロ成形。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗灰色を呈す。	
140－1	坏	13.2 4.0 6.3	体部は，やや内湾気味に立ち上がる。底部は，小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，底部が，一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 内面，黒色，外面，明褐色を呈す。	内面黒色処理，底部および体部の外面に「吉」の墨書有り。
140－2	坏	－ － （6.5）	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，ヘラミガキ。	胎土は，緻密。 内面，黒色，外面，明褐色を呈す。	内面黒色処理，底部外面に「吉」？の墨書有り
140－3	坏	11.5 4.2 6.0	体部は，やや内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。口縁端部は，玉状を呈す。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，底部が，一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，緻密。 内面，黒色，外面，暗褐色を呈す。	内面黒色処理，底部外面に「吉」？の墨書有り。
140－4	坏	－ － 6.7	口縁部欠損。体部は，やや内湾気味に立ち上がる。やや大形。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，底部が，一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，緻密。 内面，黒色，外面，明褐色を呈す。	内面黒色処理
140－5	坏	－ － 7.3	底部のみの残存。やや大形。	ロクロ成形。 底部外面（不定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。内面は，ヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面，黒色，外面，暗褐色を呈す。	内面黒色処理，底部外面，墨書有り。
141－1	甕	(21.8) － －	口縁部は，大きく「く」の字状に外反し，端部が，わずかに外におれる。肩部に稜を有し，胴部は，ゆるい膨らみをもって，底部に至る。器肉は，薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は，最上段が，縦方向の，以下は，横方向のヘラケズリ。内面は，横方向のヘラナデ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 赤褐色を呈す。	カマド
141－2	坏	(12.8) （3.7） ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，内湾気味。底部は，浅く，やや偏平。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	カマド
141－3	坏（S）	14.3 4.6 8.0	体部は，外上方へのび，口縁部が，短かく外反する。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）を少量含む。 灰茶褐色を呈す。	カマド
142－1	甕	(19.5) － －	口縁部は，ほぼ直立する「コ」の字状を呈し，さらに端部が，短かく立つ。口縁部外面中程に稜を有す。胴部以下欠損。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズリで，口縁部中程までおよぶ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 赤褐色を呈す。	
142－2	甕	(20.4) － －	口縁部は，やや内傾する「コ」の字状を呈す。肩部に張りを有す。以下欠損。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。 淡茶褐色。	
142－3	坏	14.8 5.2 7.0	体部は，内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。端部は，玉状を呈す。底部は，やや突出気味。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，底部が，一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 内面，黒色，外面，暗褐色を呈す。	内面黒色処理
143－1	甕	22.8 (35.1) 9.0	口縁部は，短かめで，大きく外反する。口唇部は直立し，端部が，わずかにつまみ出される。胴部やや上位に張りを有す。底部は，大きい。	口縁部内外面，ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は，ヘラケズリの後，上半はナデ，下半は，縦方向のヘラミガキ。底部木葉痕有り。	胎土は，雲母，長石などを多量に含む。 褐色を呈す。	
143－2	甕	21.2 (32.0) 5.8	口縁部は，大きく外反し，端部は，丸い。胴部は，ほぼ直線的にさがる。最大径は口縁部。比較的厚手。（頸部に軽い稜を有す。）	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向で，最下端のみ横方向のヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 焼成良好。 褐色を呈す。	紐積み痕明瞭
144－1	坏	(11.9) 3.1 （5.7）	体部は，内湾気味に立ち上がり，端部は，やや玉状を呈す。底部は，やや小さい。	ロクロ成形。 回転糸切り後，底部全面（不定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。内面は，底部を一定方向，体部を横方向にヘラミガキ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 暗赤褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
144－2	坏（S）	9.3 3.7 ・	半球形状を呈す。小形	ロクロ成形。 底部全面手もちヘラケズリ	胎土は，緻密， 灰色を呈す。	
146－1	甕	22.7 32.5 5.2	口縁部は，強く外反し，端部が水平になる。胴部は，ほぼ直線的に下がり，やや小さい底部に至る。最大径は，口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，やや斜め方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリで，最下端のみ横方向。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 淡褐色を呈す。	カマド
146－2	甕	20.8 32.1 5.0	口縁部は，強く外反し，端部が水平に近い。胴部は，ほぼ直線的に下がり，やや小さい底部に至る。最大径は，口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，やや斜め方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 褐色を呈す。	カマド
146－3	甕	22.7 － －	口縁部は，ゆるく外反し，端部が，直立気味になる。肩部に若干の張りを有し，胴部は，ほぼ直線的に下がる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，上位が，横方向，下位が，縦方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 淡赤褐色を呈す。	カマド
146－4	甕	20.5 28.2 6.0	口縁部は，ほとんど外反せずに外上方へのびる。胴部は，ほぼ直線的に，すぼまり，底部に至る。器面，内外とも，ゆがみが著しく，厚手である。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 褐色を呈す。	カマド
146－5	甕	19.2 26.2 5.2	口縁部は，わずかに外反する。胴部は，直線的に下がり，中程から，すぼまり，底部に至る。厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 内面赤褐色，外面暗褐色を呈す。	カマド
146－6	甕	22.6 － －	口縁部は，軽く外反し，胴部は，直線的に下がる。厚手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ，外面は，口縁直下が，横方向の指ナデ，以下，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 褐色を呈す。	
146－7	甕	(22.5) － －	口縁部は，「く」の字状に外反する。肩部以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ，外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	
146－8	埦	10.0 11.0 ・	口縁部は，短かく直立する。胴部は，球形を呈し，丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は，横方向のヘラケズリ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 黄褐色を呈す。	床面
146－9	坏	14.4 4.2 ・	体部外面に稜を有し，内面にも軽い段をもつ。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	カマド
146－10	坏	15.1 4.0 ・	体部外面に軽い稜を有す。体部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	
147－1	甕	(20.1) － －	口縁部は，短かく「く」の字状に外反し，肩部が，強い張りを有す。胴下半以下欠損。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ，外面，上位が横方向，以下，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 赤褐色を呈す。	カマド
147－2	甕	(20.2) － －	口縁部は，内傾する「コ」の字状を呈す。口唇部が，若干つまみ出される。肩部に張りを有す。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面は，横方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	
147－3	坏	16.4 5.4 7.0	体部は，内湾気味に開き，口縁部が，わずかに外反する。底部は，小さい。大形。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，砂粒を少量含む。 赤褐色で，内面黒色を呈す。	内面黒色処理
147－4	坏	(13.7) 4.1 (7.0)	体部は，内湾気味に開き，口縁部が，わずかに外反する。やや上げ底気味。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面黒色，外面暗褐色を呈す。	内面黒色処理
148－1	高台付坏	－ － 6.2	口縁部欠損。底部は，平らで「ハ」の字状の高台を有す。	ロクロ成形。 高台をハリツケた後，周辺をナデ調整。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 黄褐色を呈す。	
149－1	坏	12.4 3.6 6.3	体部は，外上方へ直線的にのびる。体部下端は，やや丸みがある。	ロクロ成形。 底部全面回転ヘラケズリ。	胎土は，砂粒（雲母末）を比較的多量に含む。 赤褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
151－1	坏	(12.3) 4.2 (6.4)	体部は，外上方へ直線的にのび，口縁部は，わずかに外反する。端部は，玉状を呈す。	ロクロ成形。 回転糸切り後，全面（不定方向）および体部下端(横方向)を手もちヘラケズリ，内面は，底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，緻密 内面黒色，外面淡褐色を呈す。	内面黒色処理
151－2	坏	12.6 4.4 6.2	体部は，外上方へのび，口縁部が，外反する。底部は，小さめで，やや突出する。	ロクロ成形。 底部全面，不定方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 茶褐色を呈す。	カマド
A－1	坏	15.2 4.8 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，内湾気味。やや大形	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を基調とし，口縁部内外面が黒褐色を呈す。	
A－2	坏	13.9 4.9 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 外面，淡褐色，内面，黒褐色を呈す。	
A－3	坏	(13.0) (4.4) ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的に，のびる。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 外面，黒褐色，内面，茶褐色を呈す。	
A－4	坏（S）	14.6 4.5 8.8	体部は，外上方へ直線的にのび，口縁端部は，玉状を呈す。底部は，大きめ。	ロクロ成形。 底部全面（一定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒および雲母末を多量に含む。 淡灰色を呈す。	
A－5	坏（S）	(14.9) 4.2 (6.0)	体部は，外上方へ直線的にのび，口縁端部は，尖がる。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）をまばらに含む。 青灰色を呈す。	
A－6	坏（S）	(12.9) 3.9 (6.6)	やや腰が張り，体部は，直線的にのびる。	ロクロ成形。 底部全面，不定方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を若干含む。 淡青灰色を呈す。	
A－7	高台付坏（S）	－ － 11.8	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，ほぼ平らで，「ハ」の字状の低い高台を有す。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ	胎土は，微砂粒および雲母末を含む。 内面青灰色，外面淡褐色を呈す。	
A－8	蓋（S）	(14.9) －	口縁部は，外傾して下がり端部は，やや尖る。天井部は，比較的低い。ツマミ欠損。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，長石粒を含む。 青灰色を呈す。	
A－9	盤	15.8 3.3	偏平な，半球形状を呈す。	内面は，全面ヘラミガキ，外面は，体部および底部をヘラケズリした後，口縁部を横方向にヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
A－10	円面硯(S)					
B－1	盤	(16.4) (2.6) －	偏平で，底部が，非常に浅い。口縁部は，直立気味にのびる。	内面は，全体ナデの後，粗いヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後底部ヘラケズリ，その後，全面に粗いヘラミガキ	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	
B－2	坏	(15.9) (3.3)	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデ，沈線以下は，ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面暗褐色，外面茶褐色を呈す。	
B－3	坏	(13.8) － －	半球形状を呈すと思われる。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，以下ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 黒褐色を呈す。	
B－4	坏	(14.9) (3.8) ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 内面および口縁部外面，黒褐色その他黄褐色を呈す。	内面黒色処理？
B－5	坏	(14.4) (4.0) ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を若干含む。 底部外面黒褐色，その他，淡茶褐色を呈す。	
B－6	高台付坏（S）	14.0 4.1 8.0	体部は，外上方へ直線的にのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，平らで，断面三角形の低い高台を有す。薄手。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整 高台は，ハリツケ	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好 淡灰色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
C－1	甕	(12.6) － －	口縁部は，軽く「く」の字状に外反する。胴部は，球形を呈す。小形。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，ナデ，外面は，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。 焼成は，不良 黒褐色を呈す。	
C－2	盤	(21.7) 2.8 ・	偏平で大形。体部は，外上方へのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，浅く平ら。	内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
C－3	盤	(18.8) (3.9) －	体部外面に，稜を有す。口縁部は，大きく開くが，やや内湾気味。大形。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面および口縁部外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
C－4	坏	16.4 5.0 ・	体部外面に，一条の沈線を配し，内面に軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。やや大形。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデ。沈線は，ヘラナデ。底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 口縁部内外面黒褐色，その他淡褐色を呈す。	
C－5	坏	14.9 4.6 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，直線的。薄手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒褐色，外面，淡褐色を呈す。	
C－6	坏	(16.0) (3.5) ・	体部外面に，強い稜を有す。口縁部は内湾気味。底部は，浅い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡茶褐色を呈す。	
C－7	坏	(13.9) (4.7) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的。底部は，やや尖底気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面および口縁部外面，暗褐色，その他，淡茶褐色を呈す。	
C－8	坏	13.9 4.5 ・	体部外面に，一条の決線を配し，内面に軽い段を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を配し，以下をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡茶褐色を基調とし，部分的に黒褐色を呈す。	
C－9	坏	14.4 4.2 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面および口縁部外面黒褐色，その他，淡褐色を呈す。	
C－10	坏	(14.8) 4.5 ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，直線的。やや厚手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 底部外面，黒色，その他，暗褐色を呈す。	
C－11	坏	14.8 4.2 ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 口縁部内外面，黒褐色，その他淡褐色を呈す。	
C－12	坏	(12.9) 4.2 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面黒色，外面，淡褐色を呈す。	
C－13	坏	(14.0) 3.6 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 底部外面，黒褐色，その他，褐色を呈す。	
C－14	盤	(14.9) (4.1) ・	半球形状を呈し，口縁部が，わずかに，外反する。	内面は，全面，ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
C－15	坏（S）	15.7 4.8 8.4	体部は，腰部に丸みを有し，口縁部が，外反して開く。底部は，やや浅めで，大きい。薄手。	ロクロ成形 底部全面，一定方向の手もちヘラケズリ。	※胎土は，雲母末を多量に含む。 淡灰色を呈す。	
C－16	高台付坏（S）	15.1 4.1 9.1	体部は，外上方へのび，口縁部が，外反する。底部は，やや浅めで，平ら。断面三角で，稜あつく高台を有す。薄手。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。 焼成良好 青灰色を呈す。	
C－17	坏（S）	14.8 4.2 8.1	体部は，外上方へのび，口縁部が，外反する。底部は，大きい。	ロクロ成形。 底部全面，手もちヘラケズリ	胎土は，砂粒を含む 灰色を呈す。	
C－18	坏（S）	13.6 4.5 8.0	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
CD－1	盤	(20.1) (2.2) ・	体部外面に，稜を有し，口縁部は，大きく直線的に開く。底部は，非常に浅く，偏平。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好 淡褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
CD－2	盤	(19.0) (2.8) ・	体部外面に，強い稜を有し，口縁部は，内湾気味に大きく開く。底部は，浅く，偏平。	内面は，ヘラミガキ。外面は，口縁部ヘラミガキ，底部が，ヘラケズリの後ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好 内面，赤褐色，外面，黄褐色を呈す。	内面赤彩
CD－3	盤	(14.9) 4.4	半球形状を呈す。	内面は，全体ナデの後，放射状のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒褐色，外面褐色を呈す。	
CD－4	盤	(15.8) (3.1) ・	偏平な，半球形状を呈す。底部は，浅い。薄手。	内面は，全体，丁寧なヘラミガキ。外面は，全体ヘラケズリの後，横方向の粗いヘラミガキ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
CD－5	盤	(14.4) 3.6 ・	偏平な，半球形状を呈す。口縁部は，短かく直立する。	内面は，全体，丁寧なヘラミガキ。外面は，全体ヘラケズリの後，口縁部を横方向のヘラミガキ。	胎土は，緻密 焼成良好 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
CD－6	盤	15.6 4.0 ・	半球形状を呈す。薄手。	内面は，全体，丁寧なヘラミガキ。外面は，全体ヘラケズリの後，口縁から体部を，横方向の粗いヘラミガキ。	胎土は，緻密。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
CD－7	坏	(14.9) 4.3 ・	体部外面に稜を有す。口縁部は，やや内湾気味で，端部は，尖がる。やや厚手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む 内面，暗褐色，外面，明褐色を呈す。	
CD－8	坏	(15.4) 4.6 ・	体部外面に稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
CD－9	坏	(13.8) 3.7 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。底部が，やや浅い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 淡赤褐色を呈す。	
CD－10	坏	13.5 4.8 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも，段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡茶褐色を呈す。	
CD－11	坏	(16.8) 4.3 ・	体部外面に，一条の沈線を配し，内面にも，軽い段を有す。口縁部は，直線的。大形。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を配し，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
CD－12	坏	15.4 4.0 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面および口縁部外面，黒褐色，その他淡褐色を呈す。	
CD－13	坏	(16.0) (4.4) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を配し，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 淡茶褐色を呈す。	
CD－14	坏	(17.9) － ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，直線的であるが，外面に軽い稜を有す。大形。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を少量含む 内面，黒褐色，外面，淡褐色を呈す。	
CD－15	坏	(16.4) － ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒褐色，外面，褐色を呈す。	
CD－16	坏	14.4 4.3 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面，黒褐色，外面，淡褐色を呈す。	
CD－17	坏	15.2 3.7 ・	体部外面に，軽い稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。底部が，浅い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む 淡褐色で，一部黒褐色を呈す。	
CD－18	坏	(16.3) (4.0) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む 口縁部内外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
CD－19	坏	(14.0) (4.4) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む 内面および口縁部外面黒褐色，その他淡褐色を呈す。	
CD－20	坏	(15.0) (4.0) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む 内面黒褐色，外面淡黄褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
CD－21	坏	(15.6) (4.5) ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む 内面および口縁部外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
CD－22	坏	(14.4) (4.6) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を配し，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面および口縁部外面黒褐色，その他，褐色を呈す。	
CD－23	坏	(12.9) (4.5) ・	体部外面に，強い稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗褐色を呈す。	
CD－24	坏	(13.6) (3.5) ・	体部と底部の境に軽い稜を有す。口縁部は，やや内湾気味に開く。底部は，平底に近い。	内面は，全体ナデの後，体部を粗いヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む 内面黒褐色，外面，淡褐色を呈す。	
CD－25	蓋（S）	17.1 3.4 ｛ 3.5 ・ ｛ 0.6	口縁部は，内外面に段を有して断面「S」の字状を呈す。天井部は，やや高く，平坦で，中央に偏平な宝珠状ツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，雲母末を多量に含む。 淡灰色を呈す。	
CD－26	坏（S）	(13.6) 4.4 (8.2)	口縁部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。底部全面（不定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗灰色を呈す。	
CD－27	坏（S）	(11.8) － －	体部は，外上方へやや外湾気味に立ち上がる。薄手。	ロクロ成形。	胎土は，砂粒を若干含む。 灰白色を呈す。	
D－1	埦	(17.0) (9.2) ・	口縁部は，外傾して立ち上がり，体部との境に稜を有す。底部欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面は，ナデの後，底部近くをヘラナデ，外面は，ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む 内面，黒褐色，外面，黄褐色を呈す。	
D－2	埦	(16.7) (8.4) －	口縁部は，ほぼ直線的に外反し，体部との境に稜を有す。	内面は，全体ナデの後，底部をヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部から底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む，内面，黒褐色，外面，黄褐色を呈す。	内面黒色処理？
D－3	埦	(15.9) (6.6) －	体部は，外上方へほぼ直線的にのびる。底部は，平底に近い。	内面は，全体ナデ。外面は，全面ヘラケズリで，体部は，横方向。	胎土は，微砂粒を含む。淡褐色を呈す。	
D－4	盤	(18.0) (3.6) ・	体部は外面に，稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的に開く。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面，茶褐色を呈す。	
D－5	盤	18.8 3.1 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。底部は，非常に浅く偏平。	内面は，全面ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
D－6	盤	(16.0) 3.4 ・	偏平な半球形状を呈す。	内面は，全面丁寧なヘラミガキ。外面は，全面ヘラケズリで，体部は，横方向。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
D－7	盤	13.6 3.3 ・	偏平な半球形状を呈す。口縁部は，短かく直立する。	内面は，全面丁寧なヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 焼成良好。 赤褐色を呈す。	内外面赤彩
D－8	盤	(14.0) 4.0 ・	体部と底部の境に，かすかな稜を有す。口縁部は，内湾気味に開く。底部は平底に近い。	内面は，全面ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部および底部のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 焼成良好。 内面黒色，外面淡褐色を呈す。	内面黒色処理。
D－9	坏	(18.0) (3.8) ・	体部外面に，強い稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡茶褐色を呈す。	
D－10	坏	(17.9) (4.6) ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。やや薄手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面明褐色を呈す。	
D－11	坏	(18.0) (4.5) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。やや薄手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面，黒褐色，外面，褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
D－12	坏	(15.9) 4.3 ・	体部と底部の境に，軽い稜を有す。口縁部は，やや内湾気味に開く。底部は，平底に近い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。底部外面，黒褐色，その他淡褐色を呈す。	
D－13	坏	15.0 5.0 ・	体部外面に一条の沈線を配し，内面に段を有す。口縁部は，ほとんど直立し，端部は鋭い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施こし，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色を呈す。	
D－14	坏	(15.8) (4.5) ・	体部外面に一条の沈線を配す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施こし，底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。淡茶褐色を呈す。	
D－15	坏	14.8 4.0 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。淡赤褐色を呈す。	
D－16	坏	(14.8) 4.5 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面は，灰褐色，外面は，褐色を呈す。	
D－17	坏	(15.0) 4.5 ・	体部と底部の境に，かすかな稜を有す。口縁部は，やや内湾気味に開く。底部は平底に近い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
D－18	坏	(14.9) (4.7) ・	体部外面に一条の沈線を配し，内面に段を有す。口縁部は，やや内湾気味で，端部は，鋭どい。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施こし，底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗茶褐色を呈す。	
D－19	坏	(13.9) 4.6 ・	体部外面に稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面，淡褐色を呈す。	
D－20	坏	(14.9) 5.3 ・	ほぼ半球形状を呈し，体部外面に一条の沈線を配す。口唇部が尖る。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施こし，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面，暗茶褐色を呈す。	内面黒色処理？
D－21	坏	15.0 4.1 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，やや内湾気味で端部が尖る。口縁部は，器厚する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および，口縁部外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
D－22	坏	(13.9) (5.3) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，やや内湾気味，底部は深い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を配す。底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡黄褐色を呈す。	
D－23	坏	14.4 4.2 ・	体部外面に，一条の沈線を配し，内面に，段を有す。口縁部は，やや直立気味となる。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を配し，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡赤褐色を呈す。	
D－24	坏	(12.9) 3.6 ・	体部と底部の境に軽い稜を有す。口縁部は，外上方へやや内湾気味に開く。底部は平底に近い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面は，黒褐色，外面，淡茶褐色を呈す。	
D－25	坏	(13.0) (3.9) ・	半球形状を呈し，体部外面に，一条の沈線を配す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施し，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡赤褐色を呈す。	
D－26	坏	(12.0) 3.5 ・	半球形状を呈し，体部外面に，一条の沈線を配す。小形。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施し，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。漆褐色を呈す。	
D－27	坏	(14.0) (4.3) ・	体部外面に，一条の沈線を配し，内面に軽い段を有す。薄手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施こし，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面，淡茶褐色を呈す。	
D－28	坏	(14.0) (4.5) ・	半球形状を呈し，体部外面に，一条の沈線を配す。沈線は，接点部が，ズレている。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施し，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
D－29	高台付坏（S）	(14.9) 3.6 (8.8)	体部は，外上方へ，内湾気味にのび，口縁部が，外反する。底部は，浅く，平担で，断面三角形の稜をもつ，高台を有す。非常に薄手。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ整調。高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。淡灰色を呈す。	
D－30	高台付坏（S）	－ － 6.5	高台部のみの残存。高台は，わずかに外傾する「ハ」の字状を呈し，端部が尖る。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を若干含む。淡灰色を呈す。	
D－31	坏（S）	－ － 8.3	口縁部欠損。底部は大きい。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。青灰色を呈す。	
D－32	坏（S）	(12.0) (4.2) －	体部は，外上方へ直線的にのびる。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。青灰色を呈す。	
D－33	坏（S）	－ － 7.0	底部のみの残存。	ロクロ成形。回転ヘラ切りの後，底部全面を一定方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒（長石など）を，含む。青灰色を呈す。	
E－1	埦	(17.8) 6.9 ・	体部は，外上方へ内湾気味に立ち上がり，口縁部が，わずかに外反する。底部は，深めで，ほぼ平底。大形。	（紐積み）ロクロ調整か？内面は，全面ヘラミガキ。底部外面は，ヘラケズリの後に，ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面黒色，外面淡赤褐色を呈す。	内面黒色処理。
E－2	埦	(14.8) (6.2) ・	体部は，外上方へ内湾気味に立ち上がる。底部は，深く，やや凸面を呈す。	内面は，全体ナデの後，やや粗いヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部および底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。口縁部内外面黒褐色，その他，明褐色を呈す。	
E－3	埦	17.0 5.8 －	体部は，外上方へ内湾気味に立ち上がる。底部は，やや凸面を呈す。	口縁部内外面ヨコナデの後，内面は，全面ヘラミガキ。外面は，ヘラケズリの後，全面ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。暗茶褐色を呈す。	
E－4	埦	(16.7) (5.3) －	体部は，外上方へ内湾気味に立ち上がる。底部は，やや凸面を呈す。	内面は，全体ナデの後，全面ヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデ後，体部および底部をヘラケズリ。さらに全面をヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面は，暗褐色，外面明褐色を呈す。	
E－5	坏	(13.9) 6.2 (6.6)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや深い。	ロクロ成形。底部全面（不定方向）および体部下端（横方向）の手もちヘラケズリ。内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒色，外面褐色を呈す。	内面黒色処理。体部外面に「運」の墨書有り。
E－6	坏	(14.0) (5.0) ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全面ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。茶褐色を基調とし，部分的に，黒色を呈す。	
E－7	坏	15.0 5.2 7.0	体部は，外上方へ内湾気味に立ち上がる。厚手。	内面は，全体ナデ。外面は，不明。	胎土は，微砂粒を含む。灰褐色を呈す。	
E－8	盤	(14.0) (3.0) ・	偏平な，半球形状を呈す。やや薄手。	内面は，全面丁寧なヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
E－9	坏	(12.9) 3.7 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗茶褐色を呈す。	
E－10	坏	14.4 3.7 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも，軽い段を有す。口縁部は内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面明褐色を呈す。	
E－11	坏	(15.0) (4.2) ・	体部外面に，稜を有し，内面にも，軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗茶褐色を呈す。	
E－12	坏	(13.8) (4.4) ・	体部外面に，稜を有し，内面に段を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。灰褐色を呈す。	
E－13	坏	(14.0) (4.1) ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
E－14	坏	13.7 4.5 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面黒色，その他褐色を呈す。	
E－15	坏	(13.8) (4.4) ・	体部外面に，軽い稜を有し，内面にもわずかな段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面褐色を呈す。	
E－16	坏	(13.7) 4.2 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。灰褐色を呈す。	
E－17	坏	(14.8) (4.0) ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。茶褐色を呈す。	
E－18	坏	13.6 3.6 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。底部が，やや浅い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡褐色を呈す。	
E－19	坏	12.8 3.8 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面，暗褐色，その他褐色を呈す。	
E－20	坏	－ － 8.0	口縁部欠損。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。底部全面不定方向の手もちヘラケズリ。内面は，体部が横方向，底部が一定方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒色，外面淡黄褐色を呈す。	
E－21	甕（S）	(23.9) － －	口縁部は，大きく外反し，端部外面に，突帯が，めぐる。以下欠損。	紐積み－ロクロ調整。口縁部外面に，縦力向のハケメ。肩部は内面が，青海波文，外面が格子状タタキ目。	胎土は，粒子の粗い砂粒を含む。青灰色を呈す。	
E－22	甕（S）	－ － (16.0)	胴下半部のみの残存。	外面は，平行タタキ目，内面は，ナデ調整。	胎土は，粒子の粗い砂粒を含む。青灰色を呈す。	
E－23	高坏（S）	－ － (14.1)	脚部のみの残存。長くラッパ状に開く。裾部は端部が，短かくつまみ出される。四つのスカシを有すと思われる。	ロクロ成形。	胎土は，雲母末を多量に含む。淡青灰色を呈す。	
E－24	高台付盤（S）	(20.8) 2.8 (16.1)	口縁部は，外上方へ外湾気味にのびる。底部は，非常に浅く，平らで，やや内傾気味に下がる高台を有す。高台の端部は，尖る。	ロクロ成形。底部外面回転ヘラケズリ調整。高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。灰色を呈す。	底部外面に，自然釉が，かかる。
E－25	蓋（S）	16.1 2.7 ┤2.1 0.8	口縁部は，短かく，ほぼ垂直に下がる。天井部は，低く，ほぼ平らで，中央に宝珠状のツマミを有す。	ロクロ成形。天井部外面，回転ヘラケズリ調整。ツマミは，ハリツケ。	胎土は，砂粒を含む。青灰色を呈す。	
E－26	高台付坏（S）	15.6 5.2 9.1	体部は，外上方へ直線的にのび口縁部が，わずかに外反する。底部は，平らで，ほぼ垂直に下がる高台を有す。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。青灰色を呈す。	
E－27	高台付坏（S）	(13.4) 4.4 (10.0)	体部は，外上方へ直線的にのる。底部は，平らで，ほぼ垂直に下がる高台を有す。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整，高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。青灰色を呈す。	
E－28	高台付坏（S）	－ － －	口縁部および高台を欠損。	ロクロ成形。底部外面，回転ヘラケズリ調整。高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。青灰色を呈す。	
E－29	坏（S）	(15.1) 4.5 7.7	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。青灰色を呈す。	
E－30	坏（S）	(13.7) 4.7 7.8	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を少量含む。淡灰色を呈す。	底部外面ヘラ記号「ハ」有り。
E－31	坏（S）	(13.9) 3.9 8.6	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）を多量に含む。青灰色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
E－32	坏（S）	13.8 4.3 6.0	体部は，外上方へ内湾気味にのび，口縁部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を含む。青灰色を呈す。	
E－33	坏（S）	(13.0) 3.9 6.8)	体部は，外上方へ内湾気味にのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，やや大きい。	ロクロ成形。底部外面回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。淡灰色を呈す。	
E－34	坏（S）	(15.1) 3.7 (9.4)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を含む。灰色を呈す。	
E－35	坏（S）	(14.7) 3.5 9.7	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや浅く，大きい。	ロクロ成形。底部外面回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を若干含む。青灰色を呈す。	
E－36	坏（S）	13.3 3.7 5.5	体部は，外上方へ，ほぼ直線的にのびる。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。青灰色を呈す。	底部外面ヘラ記号「川」有り。
E－37	坏（S）	(14.0) 4.5 (7.0)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，厚手。	ロクロ成形。底部全面（一定方向）および体部下端（横方向）を手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。淡灰色を呈す。	
E－38	坏（S）	(12.7) 3.8 (9.0)	体部は，外上方へ，直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。底部全面，一定方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒（長石，石英，雲母など）を多量に含む。灰褐色を呈す。	
E－39	坏（S）	－ － 8.4	底部のみの残存。やや大きめ。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒を若干含む。青灰色を呈す。	
E－40	坏（S）	－ － (6.5)	底部のみの残存。底部は，やや丸底気味。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，砂粒（長石など）を少量含む。青灰色を呈す。	底部外面ヘラ記号「↑」有り。
E－41	坏（S）	－ － 8.7	口縁部欠損，体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	胎土は，微砂粒を含む。淡灰色を呈す。	
E－42	坏（S）	－ － 6.8	口縁部欠損。体部は，外上方へのびる。底部は，やや突出気味。	ロクロ成形。回転糸切り。	胎土は，砂粒を少量含む。淡褐色を呈す。	底部外面ヘラ記号「X」有り。
F－1	盤	(16.1) 4.4 ・	偏平な，半球形状を呈す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部から底部をヘラケズリ。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
F－2	坏	16.9 4.7 5.4	体部外面に，一条の沈線を配し内面に段を有す。口縁部は，直立気味となり，端部が，わずかに外反する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。口縁部内外面黒褐色，その他，淡茶褐色を呈す。	
F－3	坏	14.8 4.7 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。口縁部内外面黒褐色，その他，淡茶褐色を呈す。	
F－4	坏	(14.8) 3.7 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。底部は浅い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。底部外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
F－5	坏	15.0 4.4 ・	体部外面に，稜を有し，内面に段を有す。口縁部は，直立気味で，端部が，わずかに外反する。	内面は全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。口縁部内外面黒褐色，その他茶褐色を呈す。	
F－6	坏	15.4 4.7 ・	体部外面に，稜を有し，内面に段を有す。口縁部は，直立気味で，端部が外反する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。淡茶褐色を呈す。	
F－7	坏	16.2 5.0 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡褐色を呈す。	
F－8	坏	(12.9) 3.9 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。黄褐色を呈す。	
F－9	坏	(15.0) (4.3) ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
F－10	坏	(16.4) － ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，直線的で，端部が，わずかに外反する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。口縁部内外面黒色，その他，褐色を呈す。	
F－11	坏	(14.0) (5.2) ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，中途で，やや上方へ屈曲する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。暗褐色を呈す。	
F－12	坏	(17.0) (4.7) ・	体部外面に，一条の沈線を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部に沈線を施こし，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。暗茶褐色を呈す。	
G－1	甕	21.0 － －	口縁部は，外湾する。胴部は，球形を呈すと思われる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を多量に含む。黒褐色を呈す。	
G－2	甕	(23.3) － －	口縁部は，強く外湾し，端部に凹線が，施こされる。肩部は，張りを有す。以下欠損。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横位のヘラナデ，外面は，ナデ。	胎土は，長石粒と雲母末を多量に含む。淡赤褐色を呈す。	G－4と同一個体か。
G－3	甕	(17.4) － －	口縁部は，ゆるやかに外反し，端部は丸い。胴部は，やや膨らみをもつ。底部欠損。小形。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，斜方向のヘラナデ。外面は，縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒〔雲母，長石など〕を，多量に含む。暗茶褐色を呈す。	
G－4	甕	－ － 8.2	胴部下半のみの残存。	胴部外面は，縦方向のヘラミガキ。内面は，横方向のヘラナデ。	胎土は，長石粒と雲母末を多量に含む。淡茶褐色を呈す。	G－2と同一個体か。
G－5	甕	(12.7) － －	口縁部は，ほぼ直立し端部が，わずかに外反する。胴部は，球形を呈す。肩部に稜有り。小形。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面不明。	胎土は，微砂粒を含む。焼成不良。淡褐色を呈す。	
G－6	甕	(13.2) － －	口縁部は，やや外傾して立つ。胴部は，球形を呈す。肩部に稜有り。小形。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は，ヘラケズリか？	胎土は，微砂粒を含む。灰褐色を呈す。	
G－7	椀	(20.6) 9.5 －	体部と口縁部の境外面に稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，直線的に開く。底部は，深い。丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面は，ヘラナデ，外面は，ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡赤褐色を呈す。	
G－8	椀	14.7 7.7 ・	体部は，外上方へ内湾気味に，のび，口縁部は，ほぼ直立する。底部はやや凸面を呈するが，平底に近い。	内面は，全体ナデの後，底部近くをヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部および底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を基調とし一部黒色を呈す。	
G－9	椀	13.3 5.3 ・	半球形状を呈す。口縁部は，ほぼ直立する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	
G－10	椀	(14.8) － ・	半球形状を呈す。口縁部は，わずかに外反する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面黒褐色，外面褐色を呈す。	
G－11	椀	(13.8) (5.5) ・	半球形状を呈す。口縁部は，ほぼ直立し，端部が，わずかに外反する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。内面黒褐色，外面褐色を呈す。	
G－12	盤	(15.8) 2.8 ・	偏平な半球形状を呈す。底部は，非常に浅く平担。	内面は，全体ナデの後に，やや粗いヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，体部から底部をヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。褐色を呈す。	
G－13	盤	(15.8) 3.5 ・	半球形状を呈す。	内面は，全面丁寧なヘラミガキ。外面は，全面ヘラケズリの後，体部を横方向のやや粗いヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
G－14	盤	(21.3) 2.4 ・	底部が非常に浅く，平担。体部は，やや内湾気味に，外上方へのびる。大形。	内面は，底面が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。外面は体部が，横方向のヘラミガキ，底部がヘラケズリ。	胎土は，微密。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
G－15	盤	(21.7) (4.3) ・	体部外面に，軽い稜を有し，体部は，やや内湾気味に開く。大形で，底部は，やや深い。	内面は，底部が放射状，体部が横方向のヘラミガキ。外面は，全面ヘラケズリの後，体部を横方向のヘラミガキ。また底部にも粗いヘラミガキを施こす。	胎土は，微密。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
G－16	盤	16.8 4.1 ・	体部外面に，軽い稜を有す。体部は，内湾気味に開き，口縁部が直立する。	内面は，底部が一定方向，体部が，横方向のヘラミガキ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。さらに全面に粗いヘラミガキを施こす。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面暗茶褐色，外面茶褐色を呈す。	
G－17	盤	(18.8) (3.1) ・	底部は非常に浅く，偏平。体部は，外上方に，ほぼ直線的にのびる。なお，体部外面には，一条の沈線を配す。	内面は，全面丁寧なヘラミガキ。全面ヘラケズリの後，体部には，沈線を施こし，さらに横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
G－18	盤	15.8 3.1 ・	底部は，浅く，偏平。体部は，外上方へ，やや内湾気味にのびる。	内面は，全体ナデの後，放射状のヘラミガキ（暗文風）。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。褐色を呈す。	
G－19	盤	15.1 3.4 ・	偏平な，半球形状を呈す。	内面は，全面丁寧な，ヘラミガキ。　面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。赤褐色を呈す。	内外面赤彩
G－20	盤	(16.9) 3.1 ・	体部外面に，かすかな，稜を有す。口縁部は，やや内湾気味に開く，底部は，浅く，偏平。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	
G－21	盤	17.5 4.3 ・	半球形状を呈す。大形。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの底，全面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。褐色を呈す。	
G－22	盤(坩)	14.6 4.5 ・	半球形状を呈す。底部は，やや深い。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒　若干含む。内面および口縁部外黒褐色，その他褐色を呈す。	
G－23	坏	13.9 4.2 ・	半球形状を呈す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。褐色を呈す。	
G－24		(13.8) (4.0) ・	半球形状を呈す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。内面，黒褐色，外面，暗褐色を呈す。	
G－25	坏	(11 7) (4.4) ・	口縁部と体部の境に稜を有す。口縁部は，直立する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。焼成良好。底部内外面褐色，その他黒褐色を呈す。	
G－26	坏	(9.7) (3.8) ・	口縁部と体部の境に稜を有す。口縁部は，短かく直立する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面黒褐色その他褐色を呈す。	
G－27	坏	14.4 4.8 ・	半球形状を呈し，口縁部は，ほぼ直立する。口縁端部は，尖り内面に，一条の沈線を配す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面，ヘラナデ。	胎土は，微砂粒を含む。暗褐色を呈す。	
G－28	坏	10.4 3.6 ・	半球形状を呈し，口縁部は，やや内傾する。口縁部端部は，尖り，内面に稜を有す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，全面ヘラケズリ。口縁部外面には，粗いヘラミガキ。	胎土は，砂粒を少量含む。口縁部内外面黒褐色，その他暗赤褐色を呈す。	
G－29	坏	11.0 4.1 ・	半球形状を呈す。口縁端部は，尖がり，内面に軽い段を有す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。焼成良好。暗褐色を呈す。	
G－30	坏	(14.8) (4.9) ・	体部外面に稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
G－31	坏	15.2 4.8 ・	体部外面に，軽い稜を有す。口縁部は，直線的。底部は，非常に薄手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面黒褐色，その他褐色を呈す。	
G－32	坏	12.9 4.8 ・	体部外面に，張い稜を有し内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を少量含む。内面および口縁部外面黒褐色外面褐色。	
G－33	坏	(14.8) 4.5 ・	体部外面に，軽い稜を有し，内面にも，段を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面黒褐色，外面暗褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
G－34	坏	(13.8) (5.0) ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。口縁部内外面，黒褐色，その他褐色を呈す。	
G－35	坏	14.6 4.5 ・	体部外面に，かすかな稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面，黒褐色，外面淡褐色を呈す。	
G－36	坏	(14.8) (4.7) ・	体部外面に稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面黒褐色外面褐色を呈す。	
G－37	坏	(14.8) (4.5) ・	体部外面に稜を有し，内面にも軽い段を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。口縁部内外面，黒褐色，その他褐色を呈す。	
G－ 8	坏	14.1 3.9 ・	体部外面に，かすかな稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面暗褐色，外面淡褐色を呈す。	
G－39	坏	(12.3) 3.9 ・	体部外面に　稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および，口縁部外面黒褐色，外面褐色を呈す。	
G－40	坏	12.4 3.4 ・	体部外面稜を有す。口縁部は，やや内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。明褐色を呈す。	
G－41	坏	(10.9) 3.7 ・	体部外面に，かすかな稜を有し，口縁部は，直立気味，薄手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。内面および口縁部外面黒褐色，外面褐色を呈す。	
G－42	坏	10.8 3.9 ・	体部外面に，強い稜を有し，内面にも段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成やや良好。口縁部内外面黒褐色その他，褐色を呈す。	
G－43	坏	15.6 4.5 ・	体部外面に，沈線を配す。口縁部は，ほぼ直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡褐色を呈す。	
G－44	坏	15.8 4.5 ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。淡茶褐色を呈す。	
G－45	坏	15.3 4.3 ・	体部外面に，稜を有し，内面に，軽い段を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡赤褐色を呈す。	
G－46	坏	(15.8) (4.7) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。内面および口縁部外面黒褐色外面褐色を呈す。	
G－47	坏	(15.8) (4.7) ・	体部外面に，二条の沈線を配す。体部内面に，段を有し，口縁部は，内湾気味に開く。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を若干含む。内面および，口縁部外面，黒褐色，外面暗褐色を呈す。	
G－48	坏	(15.9) (4.3) ・	体部外面，二条の沈線を配す。体部内面に，段を有し，口縁部は，内湾気味に開く。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。内面および，口縁部外面，黒褐色，外面暗赤褐色を呈す。	
G－49	坏	15.0 4.3 ・	体部外面に，稜を有し，内面にも，軽い段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。口縁部内外面，黒褐色，その他淡褐色を呈す。	
G－50	坏	(13.8) 4.9 ・	体部外面に，一条の沈線を配し，内面に，段を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。暗褐色を呈す。	
G－51	坏	(13.4) 3.5 ・	体部外面に，稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。灰褐色を呈す。	底部内面に鉄分が，付着。
G－52	坏	(14.4) (4.7) ・	体部外面に稜を有す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部へラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。淡灰褐色を呈す。	
G－53	坏	(15.4) (4.2) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁端部が，尖がる。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部へラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。淡茶褐色を呈す。	

土器番号	器種	法量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
G－54	坏	(14.8) (4.6) ・	体部外面に，二条の沈線を配し，内面に，段を有す。口縁部は，内湾気味。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 暗灰色を呈す。	
G－55	坏	(10.8) (3.3) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直立気味。薄手。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面および，口縁部外面黒褐色，外面赤褐色を呈す。	
G－56	坏	13.9 3.2 12.2	体部は，ほぼ直立し，口縁部が，わずかに外反する。底部は，浅く大きい。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
G－57	坏	14.9 4.2 7.7	体部は，外上方へ，ほぼ直線的にのびる。底部は，大きい。	粘土紐積みロクロ調整。底部外面は，手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 褐色で，内面一部黒色を呈す。	
G－58	坏	14.1 4.0 6.9	体部は，外上方へ，直線的にのびる。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。内面は，底部が一定方向，体部が横方向のヘラミガキ。	胎土は，砂粒を若干含む。 内面，黒色，外面褐色を呈す。	内面黒色処理
G－59	蓋(S)	(15.4) 4.3 { 3.8 0.6	口縁部は，垂直に下がり，端部が尖がる。天井は，高く，中央に，偏平な宝珠状ツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。 暗灰色を呈す。	
G－60	蓋(S)	16.9 2.9 { 3.7 0.6	裾部が，反転気味に広がり，口縁部は，外反して下がる。天井は，やや底く，中央に偏平な宝珠状ツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す	天井部外面に「メ」のヘラ記号有り。
G－61	坏(S)	13.1 3.7 8.5	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。 底部は，回転ヘラ切り後，全面を不定方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒および，多量の雲母未を含む。灰色を呈す。	
G－62	坏(S)	13.3 4.1 8.0	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。 底部，外面，一定方向の指頭ナデ。	胎土は，砂粒を若干含む。 青灰色を呈す。	
G－63	坏(S)	12.8 4.0 7.6	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや大きめ。	ロクロ成形。 底部外面，回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を含む。 暗灰色を呈す。	
G－64	坏(S)	12.8 3.5 8.1	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。 底部は，ヘラ切りの後，不定方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
G－65	坏 (S)	(14.8) 3.8 (8.1)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや大きめ。	ロクロ成形。 底部は，全面を不定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，雲母末および長石粒を多量に含む。 灰褐色で，底部は茶褐色を呈す。	
G－66	横瓶(S)	11.4 28.0 ・	口縁部は，強くくびれ，端部に三角の稜がつく。胴部は，短径が，24,4cm，長径が，38.8cm。	胴部外面は，手行タタキ目。内面は，ナデ調整。	胎土は，砂粒を含む。 淡灰色を呈す。	
1号井戸－1	甕(S)	(30.0) — —	口縁部は，大きく外反し，端部に，突帯を有す。胴部は，球形を呈す。	胴部外面は，平行タタキ目。内面は，ナデ調整。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
1号井戸－2	甕(S)	— — —	口縁部のみの残存で，端部に突帯を有す。	外面には，波状と，平行の，くシ描文が，交互に横走する。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
1号井戸－3	坏	12.9 4.1 ・	体部にかすかな，稜を有し，口縁部が，わずかに外反する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面茶褐色，外面灰褐色を呈す。	
1号井戸－4	壺(S)	13.6 — —	口縁部は，外傾して立ち上がり，端部に，内傾する突帯を有す。	ロクロナデ。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
1号井戸－5	高台付坏(S)	15.1 5.1 9.9	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや凸面を呈し，八の字状の高台を有す。	ロクロ成形。 底部外面回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	底部外面ヘラ記号「メ」有り。
1号井戸－6	坏(S)	13.1 4.0 —	体部は，外上方へ直線的にのび，る。	ロクロ成形。 ヘラ切り。	胎土は，長石粒など含む。 口縁部内外面，青灰色，その他茶褐色を呈す。	底部外面ヘラ記号「メ」有り。

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1号井戸－7	坏(S)	(12.7) 4.2 (6.7)	体部は，外上方へ直線的にのびる。	ロクロ成形。底部は，ヘラ切りの後，全面を一定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
1号井戸－8	坏(S)	(12.9) 4.4 (8.0)	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，大きい。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	胎土は，長石粒を含む。 青灰色を呈す。	
2号井戸－1	高台付坏(S)	— — 10.7	口縁部欠損，底部は，凸面を呈し，高い「八」の字状の高台を有す。	ロクロ成形。底部外面回転ヘラケズリ調整。高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を含む。 灰色を呈し，部分的に茶褐色を呈す。	
2号井戸－2	高台付坏(S)	— — 8.2	高台は，八の字状を呈し，端部が，やや外反する。	ロクロ成形。 回転糸切り後，高台を付す。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
2号井戸－3	高台付坏(S)	— — 7.6	高台は，八の字状を呈す。	ロクロ成形。 底部回転ヘラケズリ調整。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒および雲母末を，含む。 淡灰色を呈す。	
3号井戸－1	坏	(12.8) (4.5) —	体部は，外上方へのび，口縁部が，わずかに外反する。	ロクロ成形。 内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面黒色，外面淡赤褐色を呈す。	内面黒色処理，体部外面に「福饒」？の墨書有り。
4号井戸－1	台付甕	— — 8.3	台部は，八の字状に外反する。	内外面ともヨコナデ。	胎土は，砂粒を少量含む。 内面赤褐色，外面暗褐色を呈す。	
4号井戸－2	埦	(12.1) (4.9) ・	半球形状を呈す。	内面は，ナデ，外面な，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成やや不良。淡褐色を呈す。	
4号井戸－3	坏	(11.9) 4.2 (5.5)	体部は，外上方へ直線的にのびる。	ロクロ成形。 回転糸切り。内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成やや良好。内面および口縁部外面黒色，外面褐色を呈す。	内面黒色処理。体部外面に「福饒」の墨書有り。
4号井戸－4	坏	(12.1) 3.5 4.3	体部は，外上方へ直線的にのび，口縁部は，わずかに外反する。	ロクロ成形。 底部は，回転糸切り後，周縁を手もちヘラケズリ。内面は，全面ヘラミガキ。	胎土は，砂粒を含む。 内面黒色，外面赤褐色を呈す。	内面黒色処理。
4号井戸－5	坏	— — 5.4	底部のみの残存。	ロクロ成形。 回転糸切り。 内面は，ヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面黒色，外面褐色を呈す。	内面黒色処理
4号井戸－6	坏(S)	(12.3) 4.2 (6.1)	体部は，外上方へ直線的にのびる。	ロクロ成形。ヘラ切りの後，底部全面を一定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を含む。 灰色を呈す。	
2号円形－1	甕	21.9 — —	口縁部は「く」の字状に外反する。肩部に張りを有す。最大径は，口縁部。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部は，内面が，横位のヘラナデ，外面が，上位が横方向，以下ナナメ方向のヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を多量に含む。赤褐色を呈し，胴部外面にスス状灰色物付着。	
2号円形－2	甕	— — (5.8)	2号円形－1の底部と思われる。	内面は，ヘラナデ，外面は，縦方向のヘラケズリ。	2号円形－1に同じ。	
2号円形－3	甕	— (17.0) 8.7	口縁部は「く」の字状に外反する。胴部は，球形で，中程に最大径，を有す。底部は，大きい。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部は，不明。底部に木葉痕。	胎土は，砂粒を多量に含む。焼成やや不良。暗褐色を呈す。	
2号円形－4	浅鉢(S)	21.8 8.1 14.0	口縁部が，強く外反し，端部に凹線を配す。底部は，浅く大きい。	ロクロ成形。 体部下半は，横方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
3号円形－1	甕	22.9 — —	口縁部は，強く，外反し，端部が，外上方へつまみ出される。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面，横方向のヘラナデ。外面は，ナデ調整。	胎土は，砂粒（長石，石英など）雲母末を含む。 暗茶褐色を呈す。	
3号円形。－2	甕	22.3 — —	口縁部は，強く外湾し，端部が，外上方へ，わずかにつまみ出される。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土は，砂粒（長石，石英など）雲母末を含む。 茶褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
3号円形－3	坏	13.9 3.9 ・	やや偏平な半球形状を呈す。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 褐色を呈す。	
3号円形－4	甕(S)	23.8 — —	口縁部は，大きく外湾し，端部に突帯を有す。	ロクロ成形。	胎土は，砂粒を多量含む。 青灰色を呈す。	
3号円形－5	蓋(S)	15.1 3.0｛3.9 0.5	口縁部は，垂直に下がり端部が尖がる。天井は，やや低く，中央に偏平な宝珠状ツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラケズリ調整。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
3号円形－6	坏(S)	13.8 4.0 8.9	体部は，外上方へ直線的にのび，口縁部が，わずかに外反する。底部は，大きい。	ロクロ成形。 底部は，全面，不定方向の手ちヘラケズリ。	胎土は，砂粒，雲母末を含む。 灰色を呈す。	
4号円形－1	坏	(12.9) 4.6 ・	体部外面に稜を有し，口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，底部ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	
4号円形－2	すり鉢(S)	11.3 — —	体部は，外上方へ，ほぼ直線的にのびる。厚手。	内外面とも，横方向のヘラナデ。内面には，細積み痕が，が，明瞭。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
4号円形－3	坏(S)	— — 8.3	底部のみの残存。	ロクロ成形。底部全面を不定方向，体部下端を横方向に，手もちヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 灰色を呈す。	
5号円形－1	甕	(14.0) 18.2 6.0	口縁部は，短かく，外傾する。胴部は，球形を呈し，肩部に張りを有す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ。外面は，上位が横方向，以下縦方向のヘラケズリ。	胎土は，砂粒を，多量に含む。 淡赤褐色を呈す。	
5号円形－2	坏	(14.0) 6.2 (7.8)	体部は，外上方へのび，中程で屈曲し，口縁部は，直線的。底部は，大きめ。	ロクロ成形。(?)底部全面を不定方向，体部下端を横方向に手もちヘラケズリ。内面は，体部が横方向，底部が一定方向のヘラミガキ。体部外面に，に粗い横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。焼成良好。内面および，口縁部外面黒色，外面褐色を呈す。 粗	内面黒色処理。体部外面に墨書有り。
5号円形－3	坏	12.4 4.6 7.5	体部は，外上方へ，湾曲して開く，底部は，大きめ。	ロクロ成形。底部は，回転糸切りの後，周縁を手もちヘラケズリ。内面は，体部が横方向，底部が一定方向のヘラミガキ。口縁部外面，横方向のヘラミガキ。	胎土は，微砂粒を含む。 内面および口縁部外面黒色，外面赤褐色を呈す。	内面黒色処理，体部外面に墨書「王」有り。
5号円形－4	坏	(13.9) (4.2) ・	体部外面に，一条の沈線を配す。口縁部は，直線的。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデの後，沈線を施こし，底部ヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 褐色を呈す。	
5号円形－5	坏	(9.9) 3.0 (6.0)	体部は，外上方へのび，口縁部が，直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	
5号円形－6	坏	(7.8) 2.6 (6.0)	体部は，外上方へのび，口縁部が，直立する。	内面は，全体ナデ。外面は，口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	胎土は，微砂粒を含む。 褐色を呈す。	
5号円形－7	高台付皿(S)	18.8 — —	腰部に稜を有し，口縁部が，外上方へ直線的にのびる。高台欠損。	ロクロ成形。	胎土は，砂粒（長石など）を含む。 青灰色を呈す。	
5号円形－8	高台付皿(S)	(14.8) 3.7 (8.7)	腰部に稜を有し，口縁部が，外上方へ直線的にのびる。高台は，八の字状を呈す。	ロクロ成形。 高台は，ハリツケ。	胎土は，砂粒を含む。 青灰色を呈す。	
5号円形－9	坏(S)	13.7 4.5 7.7	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや大きめ。	ロクロ成形。 底部は回転ヘラ切り。の後，不定方向の手もちヘラケズリ。	胎土は，砂粒を少量含む。 青灰色を呈す。	
5号円形－10	坏(S)	13.9 4.1 7.0	体部は，外上方へ直線的にのびる。底部は，やや上げ底気味。	ロクロ成形。 回転糸切り。	胎土は，砂粒を少量含む。 灰色を呈す。	
6号円形－1	甕	(22.0) — —	口縁部は，強く，外反し，胴部が，ほぼ垂直に下がる。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面は，横方向のヘラナデ，外面は，ナデ調整。	胎土は，砂粒を多量に含む。 青褐色を呈す。	

土器番号	器　種	法　量	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
方形周溝墓	坩	11.8 6.1 2.0	口縁部は，外上方に，大きく開く。胴部は，偏球形状を呈す。胴部下位から底部にかけて焼成後の穿孔あり。	口縁部内外面とも，タテ方向のヘラミガキ。胴部外面ヨコ方向のヘラミガキ，内面は，ヘラナデ。	胎土は，微砂粒を含む。 淡褐色を呈す。	

第Ⅲ章　問題点の整理と考察

遺構

1．住居跡について

薬師寺南遺跡での3次にわたる調査で検出された住居跡の総数は、全体で130余軒を数える。98号、99号住居跡を除くすべては竪穴住居跡である。98号、99号は柱穴のみの検出であるが、柱穴に囲まれる部分は硬く、踏み固められた感があり平地式住居跡の可能性も考えられる。

130余の住居跡は大略2期に分けられる。古墳時代前期と奈良・平安時代である。古墳時代前期の所産のものとしては、11号、17号、19号、21号、26号、61号、66号、95号、96号、118号の10軒である。当該期の一般的パターンとしての住居跡プランを保持しているものは21号住居跡である。当住居跡は、不整方形を呈し、プランの対角線上に4本の柱穴が掘られ、炉、貯蔵穴、周溝も認められる。

土器の出土する位置的傾向としては、11号住居跡ではプランの南西コーナーより一括遺物が、19号住居跡でもプランの南西コーナーから多量の遺物が出土しており、当遺跡の当該期の住居期の住居跡では、南西コーナーがプランの中で有意義な利用のなされ方をしていたのではないかと考えられる。それは21号住居跡の南西コーナーに貯蔵穴が掘られることとも合致するものと言える。

奈良・平安時代の住居跡は検出された住居跡の大多数を数えるが、中には住居跡とするには多少の異があるものも存在するものの、その検出軒数は多いと言える。

当該期の住居跡の一般的なものは、竪穴住居跡であり、壁下を周溝が全周し、柱穴が住居跡の対角線上に位置して床面に掘り込まれ、カマドが構築されることが通常のパターンである。当時に時期的に新しくなるにつれ、住居跡プランの小型化傾向があると指摘されている。

住居跡のカマドの位置についてみれば、東壁にカマドが構築されたものは、1号、5号、12号、20号、23号、24号、36号、51号、53号、55号、75号、83号、108号、112号、116号、151号の16軒であり、検出した住居跡総数の約1割にすぎない。東壁でもその位置は壁の中央から南壁にかけてがほとんどであり、北壁側によることはまず皆無であった。

西壁に構築されたものが29号住居跡で認められたが、それは煙道部の痕跡を認めたにすぎず、最終的には北壁に再構築がなされていた。

以上の他はすべて北壁に構築されており、その位置は壁のほぼ中央から東壁に片寄る位置が選定されており、西壁側に寄る構築は皆無であり、あるいは構築位置の選定に何んらかの意味を有するのかとも考えられるが、明確化することはできなかった。

1号住居跡の南壁に設けられている階段状の施設は、特異なものとしてその類例を見聞して

いない。南壁のやや西よりの部分が若干張り出し、この部分に段（２段）が設けられている。この段は平地面から住居跡プランを掘り込む時点で当該部分が掘り残されたものではなく、竪穴住居跡が掘りあがったのちに、この段を構築しているものである。このことは、段の下と周溝が掘り込まれていたことより明らかである。

この南壁の段はいかなるものかと考えるならば、南壁に存在することなどを考えてみると、住居への出入口としての施設と解するのが妥当と思われる。実際に調査終了の段階において、我々がこの段を踏んで住居跡内に入るのは、壁をひとまたぎで跡み込むよりも、よりスムーズに住居跡内に立ち入ることが容易であった。これと同様な施設としては階段ではないが壁が張り出し、出入口として利用されたと考えられるものが、益子町星の宮ケカチ遺跡[注1]で検出された住居跡に認められる。

柱穴についてみれば、数例に一般的パターンの範ちゅうに入らないものが見られると同時に、床面に掘られる柱穴の掘り方に異質なものも認められる。23号、24号住居跡はプランの対角線上に位置して柱穴が掘り込まれているが、23号住居跡では掘り方が方形であり、他の住居跡が全て円形ないし、楕円形のものであり掘り方に差異が認められる。

24号住居跡の柱穴の掘り方はその掘り込みが垂直に掘られるのでなく、一度鍋底状に掘り込み、次にその中心より垂直に掘り込み断面がラッパ状になる掘り込みがなされている。

壁に柱穴が掘り込まれている例もある。46号、49号、87号住居跡に認められるものであり、特に46号住居跡ではプランの対角線上に位置して４本分が床面に掘り込まれ、さらに南壁に２本分が掘られている。南壁のものは、壁の上端を多少切る形で斜位に角度を持つ様に掘られており上屋構造上特異なものとすることができる。

この46号住居跡と同様に壁に掘り込まれる柱穴については真岡市井頭跡[注2]、益子町星の宮ケカチ遺跡[注3]、宇都宮市さるやま遺跡[注4]、湯津上村小松原遺跡[注5]に良好な資料が認められている。時に同じ構築法と見られるものが井頭遺跡10区Ｅ－１号住居跡で検出されている。床面に掘り込まれている２本の柱穴の他に、南壁に斜位２本分掘り込まれている。とすれば薬師寺南遺跡の46号住居跡の上屋構造は、井頭遺跡の10区Ｅ－１号住居跡の上屋に似た、南面の軒を高くしたものか、庇を付設した感じの家屋の南面が大きく開く形のものであったとすることは可能である。

49号住居跡では西壁と東壁のほぼ中央に壁に接する感じで、87号住居跡では住居跡プラン中央部に１本の柱穴が掘られている。しかしこれらは一般的な上屋構造をもっていたものと解される。

平面プランの特異なものとしては39号住居跡がある。検出されたものはほとんど方形を呈しているが、39号住居跡ではプランが「⊓」字状を呈している。方形プランではなく、東壁長にくらべて西壁が異状に長く、南壁が「⌒」字状に屈曲している。精査の時点でもこの屈曲して

張り出す部分が別の遺構との重複することも認められず、住居跡プランそのものがカギ状を呈すると考えられる。この「⌐」字状プランの住居跡がいかなるもののもとにおいて、この様な掘り込み方をなされたかは現状では不明と言わざるを得ない。　　(川原由典)

注1　川原由典『星の宮ケカチ遺跡』　益子町教育委員会、昭和53年3月31日

注2　大金宣亮他『井頭』栃木県教育委員会、1973年

注3　注1に同じ

注4　新4号国道建設にともない記録保存が3次にわたっておこなわれ、昭和53年度の第3次調査で、住居跡の各コーナーに斜位に掘り込まれる柱穴を持つ住居跡が検出されている。

注5　栃木県教育委員会の調査によるもので、現在報告書作成中であり、昭和54年3月刊行である。

2．カマドについて

薬師寺南遺跡で検出された住居跡のうち、古式土師器を出土する住居跡跡を除く、すべての住居跡にカマドが構築（住居跡が未調査区に及び確認できなかったものを除く）されていた。そのうちでも北壁に構築されるものがもっとも多い。数例は東壁と西壁に構築されていたものもあった。西壁に構築された例は29号住居跡にのみ認められたが、最終的には北壁に変更されて構築されている。

当遺跡で検出されたカマドの基本的なものは、壁を切り込み、壁に取り付ける形で袖部、天井部が作られ、床面と同レベル、ないし若干の掘り凹みのもとに火床が形成されている。

カマド構築にあたっては、まず構築場所が選定される。つぎにその位置の壁を半円形、U字状、V字状、凸字状の種々の形状の変化はあるものの切り込みをなし、煙道部の祖型とし、次に火床にあたると思われる位置が鍋底状に一担掘り込まれ（住居跡床面を火床のレベルとする場合もある。）たのち、適度の浅さまで埋め戻され、おおむね浅い凹地となる。この次の時点から構築資材としての粘土が使用され、煙道部、天井部、袖部を構築している。この粘土を使用して構築される時点で、土器、瓦、河原石、ギョウカイ岩などを煙道部、天井部、袖部に補強のため使用されることがある。しかしこれらはあくまでもカマドに顕著に認められるものではなく、あくまでも粘土による構築が多数を占める。

当遺跡でも補強材を芯として構築されたカマドが数例認められる。まず23号住居跡では、カマドの両袖部にあたる位置から扁平な立方体に切り出したギョウカイ岩を床面に埋め込み、立石させ袖部の芯として利用している。36号住居跡では右袖部のみであるが、土師器の甕型土器

内に粘土をつめ込み、倒立させて使用している。また47号住居跡では両袖部に瓦を利用している。この利用された瓦は鐙瓦であるが、この鐙瓦を、瓦当面と男瓦の部分に2分し右袖部の芯に瓦当面を、左袖部の芯に男瓦の部分を使用していた。

85住居跡では右袖部のみの補強であるが、床面に埋め込んで河原石を立石させ、この河原石に接して囲む様に女瓦が立てられており、この上部を粘土がおおっていた。

142号住居跡の場合は、両袖部が壁に取り付く位置に女瓦を立てている。両袖部横断面が「U」字状をなす様に若干外傾ぎみに立てられていた。146号住居跡ではカマドの残存はよくなかったが、補強材として使用されたと考えられる土師器の甕型土器（完型品が複数存在する。）と多数の破片が出土している。

この様に種々の材料がカマドの補強材として芯に利用されているが、その主たるものはいずれも瓦、土器である。当遺跡の場合は主たる補強材として瓦の利用がなされているが、これは隣接する下野薬師寺跡との位置関係により理解されるものであり、一般には集落跡からの場合土器の利用がもっとも多い。そしてその場合でも土器としての利用価値が失せたものを使用するのがほとんどである。しかし、河原石、ギョウカイ岩の利用などは、当初からカマドの構築という目的をもった構築材としての利用がなされていることが考えられる。特にギョウカイ岩の場合は芯として利用しやすい様に扁平な立方体に面とりまでして切り出したものであると考えられる。つまり、当遺跡検出のギョウカイ岩は23号住居跡のカマド両袖の芯として使用されたもの以外にその破片すら検出されておらず、また比較的大型住居跡に使用されたことと相まって何んらかの特別な意図を考えることができるのではないかとも思える。

73号住居跡では上述した構築法と異なるものが認められた。住居跡平面形が決定し、プラン内部を掘り下げる時点で、カマドを構築する位置の袖部にあたる部分をあとから構築するのではなく、逆に掘り残しているのである。この掘り残しは両袖になされてはおらず、右袖にのみなされている。しかも壁高と同じ高さではなく、若干低くなっており、その上部には粘土がかなり張りつけてあった。

この住居跡の場合は既に住居プラン設計の段階でカマドの位置を決定されていることが伺われる。また袖部として掘り残した部分が壁よりも若干低くなるのは、天井部等の構築に都合がよかった結果ではないかと考えられるのである。今後類例の増加をまって検討してみたいと考えている。

（川原由典）

3．特殊遺構について

A・B・C・D・E・F・G号遺構がこれにあたるが、同一遺構に復数のアルファベットを付したものもあるので、整理すると、A号遺構。B・C・D・E号遺構。F号遺構。G号遺構

の４例に分けられる。このうちA号遺構を除く３例についてはその構築場所、形状等に共通する様相が認められる。

まず遺構の構築場所であるが、田川と姿川によって開析された洪積台地上に遺跡が立地し、この台地上の東傾斜面に立地している。

Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ号、Ｆ号、Ｇ号はいずれも平坦面ではなく、台地でもその高さがかなり低くなる位置に構築されるのが常であった。

次に形状であるが、いずれの遺構も全体を検出したものでないため詳細については言明できないが、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ号遺構では不整形、楕円形の平面プランを有し、鍋底状に掘り込まれ、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ号遺構が溝により連結している。この鍋底状に掘り込まれた底面に多数のピットが掘り込まれる。Ｆ号遺構も平面楕円形で鍋底状に掘られ、底面にピットが掘り込まれている。Ｇ号遺構は同一場所に同じ遺構の作り変えがあるため全体としてはハチの巣状となっているが、個々の遺構を見ると平面楕円形で鍋底状に掘られ、底面にピットが掘り込まれることが知れる。おそらく溝により連結していたものと思われる。この遺構の上部、平担面より低地面に走る溝が、Ｇ号遺構に連結することよりも想定できる。

このように平面形が不整形ないし楕円形で鍋底状に掘り込まれ、底面に複数のピットが掘り込まれる。これらが同遺構の立地する場所とおおまかな形状であるが、特に遺構全体に近い姿で検出することのできたＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅ号を中心としてその性格等について考えてみたい。細かい点についてみると、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ号はおのおの溝によって連絡しており、Ｂ・ＣＤ・Ｅ号と順次レベルが低くなる様に配置されている。あたかも数珠をつなぐためにヒモを通した感じである。その数珠にあたる３つの掘り込みは鍋底状を呈し、その底面に、どちらかと言えば底面中央よりも周囲に口径の小さなピットが数ケ所いずれのものにも掘り込まれている。Ｆ号、Ｇ号も同様な形態をとってゆくものと思われる。

埋土と出土遺物について見ると、埋土は単一の様相を呈し自然の埋まり方ではなく、人為的に埋め戻した感じを呈する。これらはすべての遺構に共通することであるが、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ号遺構では埋め土といっしょに多量の土器を投げ込んでいる。この量は他の特殊遺構に比してもかなり多い。これらの他にいずれの遺構もそうであったが、遺構底面にうすい膜状の鉄分の錆びた色調のものが認められた。この鉄分の錆びた色調のものは全体に認められるのではなく、底面に掘られた口径の小さなピットに囲まれる範囲にその傾向が強く、顕著であった。この鉄分の錆びた色調のものの存在が、あるいはＡ・Ｂ・ＣＤ・Ｅ、Ｆ、Ｇ号遺構の性格、使用のされかたを解明する手がかりとなるかもしれない。また出土遺物は人為的投げ込みであると考えられ、また遺物の時期も時間差のある継続的な投げ込みがなされたのではなく、ある一定の時期に限定できる。

以上がこの遺構にみられた特徴的な事項であるが、現在ではその性格等判明することは皆無であり、今後同様な類例の増加をまって、詳細な検討をおこないたいと考えている。

(川原由典)

4．円形遺構について

当遺跡から円形遺構とも呼称すべき特殊な遺構が検出されている。全体で6基を数える。これらすべての遺構は規模、形状、付属施設等については多少の差異は認められるものの、大略的には同一遺構としてさしつかえないものとすることができる。伴出遺物についても大きな時間差は見い出せない。

平面形はすべて円形ないし楕円形を呈し、掘り込みは二段に掘り込まれている。一段目の掘り込みは断面が逆台形になされ、一担底面が水平となり、この底面中央が再度、ほぼ垂直に掘り込まれる。最底面も水平となる。

この二段目の掘り込みの平面形に若干の差異があり、1～5号までは円形ないし楕円形に、6号のみが不整方形となっている。

遺構にともなう施設としては、3号遺構の一段目の掘り込み底面に認められる数条の溝の様な切り込みがそれにあたると考えられる。この溝は6条検出されており、各々3条づつで対をなし、いずれもが2段目の掘り込みの上部を通過する形となっており、何か棒状のものをこのの上面に通し、二段目の掘り込みは空間として利用されたのではと考えられる。以上、当遺跡から検出された円形遺構の特徴的なものを記述したが、同遺構の類例については県外のものについては詳細は知り得ないが、県内では、矢板市後岡遺跡[注1]で1例、宇都宮市瑞穂野団地遺跡[注2]で4例の合計5例が検出されているのみであり、当遺跡の検出の6例を加えても11例を数えるにすぎない。

後岡遺跡の場合は、不整円形遺構と呼称されており、断面形状が逆台形を呈し、底面中央にさらにピットが穿たれ、さらに施設構築のための3個のピットが、側壁に垂直に掘られている。また埋まり土中には細かな木炭が散在していることが報告されている。時期については国分期に比定されている。

瑞穂野団地遺跡の場合は、円形有段遺構と呼称され4例の報告がなされている。いずれも平面形は円形ないし楕円形で、逆台形状に一段目の掘り込みがなされ、底面中央がさらに掘り込まれている。施設については2号で側壁を横位に掘られたピットが、3号でも同様な例が認められている。埋土については木炭化物、焼土等の混入があることが報告されている。時期については国分期に比定されている。

以上の様に県内の他の遺跡検出の遺構をみても当遺跡検出の円形遺構とその規模、形状等に

ついてもそれ程の差異は認められず、また時期についても国分期の所産の範囲とするかぎられた期間に使用されたものと限定できる。それと同時に遺跡の調査面積の大小があるため明確にはできないが、群在して検出される傾向が知れる。瑞穂野団地遺跡では4例全てが近接して、薬師寺南遺跡では地点が離れるものの1例、2例、3例と各遺構が近接して検出されている。これはその使用目的が遺構の群在化する傾向からみて、特に考慮する必要性があると思われる。

これらの遺構の使用目的については現状では皆目検討がつかないのが実状であるが、考えられる範囲での使用方法としては、掘り込まれた遺構内の空間を利用することであり、その場合には「室(むろ)」的な利用とすることが推測されるのではないか。上面に棒状のものを並らべその上部にカヤないし草木で覆うか、さらに土をかぶせれば、遺構内を一定に保つことは可能である。また一段目の掘り込みの側壁に掘り込まれるピットは垂直のものと横位のものの2例が認められるが、垂直に掘られたものはそのまま柱穴として柱を建てることは可能であり、上屋の存在を考えられる。横位に掘り込まれるピットは比較的下位に位置する。横木でも渡された可能性が指摘できる。このピットは、薬師寺南遺跡で一段目の低面に掘り込まれた溝と相通ずる役目をになっていたとは考えられないだろうか。とすれば横木などが渡される以下の空間、主に二段目の掘り込みが主体的に空間となる。この部分はそのまま空間としての利用がなされ、この上部から、上端までの空間が上述した「室」として利用される空間であるものと言える。以上が当遺構に対する見解であるが現状では用途については不明と言わざるを得ない。

最後に薬師寺南遺跡の3号円形遺構は2次利用がなされていたことが調査結果から認められた。これらの遺構については今後類例の増加をまって再検討したいと考えている。

(川原由典)

注1　山野井清人「後岡遺跡」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書その2』　栃木県教育委員会　昭和50年3月

注2　岩上照朗他『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』宇都宮市教育委員会　昭和53年3月

遺物

1．古墳時代前期の土器について

薬師寺南遺跡の主体となる時期は、8～9世紀であるが、この時期に先行する古墳時代前期の住居跡が10軒、方形周溝墓1基が検出されており、出土土器を概観して若干の問題を提示しておきたい。

本県の古墳時代前期（五領期）の研究は、著しく立遅れており、例えば土師式土器集成では、

小川町駒形大塚古墳出土の土器が掲載されているのみであることより判断しても理解できよう。[注(1)] しかし、佐野工業団地内遺跡、さらには、真岡市井頭遺跡で三軒の住居跡が検出された時期と相前後して、芳賀町谷近台遺跡、益子町向北原遺跡、矢板市後岡遺跡、同石関遺跡、小山市乙女不動原遺跡、真岡市稲荷山遺跡等で五領期の住居跡、あるいは方形周溝墓が検出され、該期の様相が徐々にではあるが、判明しつつある。[注(2)]

本遺跡で検出された古墳時代前期の住居跡出土遺物を概観すると、95号住居跡は先行する可能性を有する以外、9軒の住居跡（11号、17号、19号、21号、26号、61号、66号、96号、118号)住居跡は、土器様相よりほぼ同一時期の所産と考えている。出土遺物は、歴史時代の住居跡に比して、一般に多量であり、17号、61号住居跡は、焼失家屋である。

先行する95号住居跡は、S字状口縁の小形台付甕形土器及び口縁部が屈曲する焼成堅緻な椀形土器2点のみであるが、石田川遺跡第1種土器との共通性が認められる。[注(3)] 椀形土器は、焼成、胎土より判断して搬入品の可能性が強い。S字状口縁の甕形土器は、荒賀町谷近台遺跡より良好な資料が出土しているが、時間的にはかなり限定できるものである。本遺跡でも95号住居跡以外では、19号住居跡より1点（19－3）のみであることよりも窺えよう。

S字状口縁の甕形土器について、梅沢氏はこの種の土器を「限定された短かい時期に異色の普及を示しながら、次代には引きつかれることなく消滅した土器であったし、その時期が古墳文化の東国への伝播の時期に一致するものとすれば、まさにフロンティアの土器であり、五世紀畿内政権の東国支配が確立する時期に「く字形」直状口縁甕形土器の発展の過程で同化消滅したもの」と考えられている。[注(4)]

本県においても、S字状口縁の甕形土器は、限定された時期の所産である可能性は強いが、地域的なあり方、特に前期古墳の発生する地域で必ずしも確認されておらず、古墳文化の伝播との関連で認識でき得るかは、今後の検討課題である。

次に、本遺跡で主体時期となる9軒の住居跡出土土器の様相について、器種ごとに特徴的な点を指摘しておきたい。

(1) 甕形工器　煮沸具として該期に盛行する台付甕形土器は、減少化傾向が看取され、17－1、19－2など「く」の字に外反する比較的大形な甕形土器が一般化するようである。さらに台付甕形土器は、19－6に代表されるような長胴を呈し、外面のハケ調整も粗雑になる。上記の事実は、五領期での甕形土器の転換期、換言すれば、台付甕形土器より「く」の字に外反する甕形土器への移行期の様相の反映であろう。

(2) 甑形土器　甑形土器は、4点と少量である。11－4は、口縁部より直線的に単孔の底部にいたるもの、19－7、61－3は、小形の甕形土器底部を、焼成後穿孔したもの、118－7は、折り返し口縁の多孔式甑形土器である。甑形土器は、器形的に多様であり、定型化は認められ

ない。

(3) 埦形土器　埦形土器は、比較的多量に出土しており、器形的にもバラエティーに富み、手づくね土器の多いことも特徴的である。概して焼成不良なものが多い。安定した土器様相を示さず、坩形土器と類別し難いものもある。

(4) 高坏形土器　11号、17号住居跡に多量に出土しており、11号は、脚部に比し坏部が大きく、17号は、脚部が大きく開く点が、特徴的である。坏部は、11－10のように透しを有する特異なものもあるが、一般的には、大形かつ深く、26－2のように和泉期と類似するものもある。脚部には、例外なく円孔を有する。

(5) 坩形土器　胴部と口縁部径に大差なく、器形的には、後出的様相を示す。しかし、118－1のように口縁部が大きく外反し、焼成も良好なものもある。

(6) 器台形土器　器台形土器が多量に出土していることは、本遺跡の大きな特徴点の一つである。11－14は、口縁が段を呈する以外、口縁部が直状に開き、器受部は、脚部に比して小形なものである。該土器は、東日本において、最も一般的にみられるもので、全国的にも規格化、斉一化されて分布すると指摘されている[注(5)]。本遺跡では、例外なく脚部に3個の円孔を有し、ヘラミガキにより調整され、焼成も良好である。器台形土器は、小形丸底坩形土器とセットとして注目されていたが、本遺跡のあり方より考えると21号、66号住居跡などは器台形土器のみの出土例であり、必らずしもセットとは把えられないようである。

以上、古墳時代前期の土器を概観してみたが、最後にその編年的位置づけについて、簡単に記述しておきたい。

古墳時代前期の土器組成構造を南関東を中心に分析した結果、加藤氏は、①在地性土器群（南関東の後期弥生土器の伝統的作風をもつもの。）、②、外来性土器群（南関東地方以外の弥生土器の系譜をもつもの。）、③、新出性土器群（新しい要素として全国的に斉一性が強く、広汎に分布するもの。）の3つをあげている[注(6)]。上記の見解を本県に即して云えば、本県弥生時代後期二軒屋文化より五領期に継承しうる可能性については否定的に考えている。②の外来性土器群中にS字状口縁の甕形土器も包含されるものであり、五領土器たらしめるものは③の新出性土器群との関連で考えるべきであろう。

要約すれば、本県五領土器の成立は弥生後期文化を否定し、古墳文化の伝播に伴い東海系土器群を媒介に成立したと考えられよう。

以上の基本認識より、本遺跡の五領期土器を考えるとき、ほぼ95号住居跡が先行する以外、五領期後半と考えられる。ただ器台形土器等非実用土器群の性格づけは、古式古墳との関連では議論されているものの、集落レベルでの出土例も多くみれば、このようなあり方をいかに認識するかが今後の課題であろう。　（橋本澄朗）

注(1)　杉原荘介他、『土師式土器集成１』東京堂出版　昭和49年

注(2)　前記遺跡の中で報告書が公刊されているのは下記のとおりである。

大金宣亮他、『井頭』栃木県教育委員会　昭和49年

山ノ井清人他、「後岡遺跡」、『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書－その２－』栃木県教育委員会　昭和50年

三沢正善他、『小山乙女不動原遺跡発掘調査報告』、小山市教育委員会、昭和52年

塙静夫他、『稲荷山遺跡発掘調査概報』、真岡市教育委員会、昭和51年

なお、石関遺跡については昭和54年３月栃木県教育委員会より公刊予定である。

注(3)　尾崎喜左雄、今井新次、松岡米治、『石田川』、「石田川」刊行会、昭和43年

注(4)　梅沢重昭他、『太田市米沢二ツ山古墳』、群馬県文化財保護協会、昭和46年

注(5)　加藤修司、「小形器台・小形丸底坩の出現をめぐる諸問題」、『物質文化29』、昭和53年

注(6)　注(5)前掲書

２．歴史時代土器の編年

Ⅰ　序論

(1)　研究史

(2)　編年の方法

Ⅱ　編年試論

(1)　土器の分類

(2)　編年軸の設定

(3)　時期区分

(4)　実年代の考察

Ⅲ　問題点の整理

(1)　土師器坏形土器Ⅰ～Ⅲ群について

(2)　ロクロ使用坏形土器について

(3)　土師器甕形土器について

Ⅰ　序論

はじめに

薬師寺南遺跡で検出された遺物・遺構の大部分は歴史時代（８世紀～９世紀）の所産であり、本論では遺物の中で最も普偏的に出土している歴史時代の土器に関してその時間的位置づけ(編年）を本遺跡出土の遺物の分析を通して考えてみたい。

編年を考えるにあたり、近年活況の感を呈している歴史時代土器研究の動向の中で、特に注目されると思われる点を指摘し、本遺跡における編年作業の視点も明示しておきたい。

(1) 研究史

詳細な研究史の紹介は他書に譲るとして、本論では歴史時代土器（真間・国分期）研究動向の中で近年特に注目される年代観および地域性の問題を中心として概観していきたい。

歴史時代土器研究の出発点を考えるとき、やはり杉原荘介氏の業績を看過することはできない。氏は、南関東を中心とする土師器編年として、昭和18年和泉・鬼高・真間・国分の四期区分を提唱された。[1] ただ各期の具体的内容は必ずしも明確には示されず型式名の提示が先行したため、新たに「松岸式」[2]「落合式」[3]といった型式名の提唱を誘発し、一時混乱を生じた。

しかし昭和30年、杉原氏は中山淳子氏とともに五領・和泉・鬼高・真間・国分という五期編年を示すとともに、各型式の器形、製作技法などの具体的内容を明らかにされ、[4] その後の土師器研究の方向づけをした点、高く評価すべきものである。本論で関連する真間・国分期の年代をみると、真間式土器は、法隆寺、藤原京などで同種のものが出土していることより７世紀に、国分式土器は、国分寺瓦との伴出や国分寺跡からの出土より８世紀を中心とした時期に推定され、さらに該期の土器には全国的斉一性が認められることを指摘されており、その後の研究に大きな影響を与えた。

上記杉原編年は、土師器研究の一つの方向づけをなしえた点で画期的なものであったが、その後、この編年を無批判に受け入れたため、編年研究が一時停滞したことは否めない。

しかし、昭和39年に発表された田中琢氏の論稿[5]により、国分期の年代観に対し大きな疑問が投げかけられた。すなわち、糸切り痕をもつ須恵器の出土が、平城京発掘の結果より９世紀を遡りえないことが指摘された。田中氏の指摘は大きな影響を有し、糸切りの坏形土器を表徴としていた国分期の年代観を再検討せざるを得なくなった。

一方真間式土器についても昭和42年、岩崎卓也氏[6]が各遺跡における土器組成の比較検討により、その具体的内容を明示するとともに年代観についても、須恵器蓋坏の消滅以後、糸切り底の須恵器坏の盛行以前と限定し、７世紀後葉から９世紀に入るころまでの約一世紀間とされた。また真間式土器の広がりについては、不明な点が多いとしながらも「南関東それに北関東の一部を含めた地域を中心とする。」とされ、比較的限定された分布地域を指摘された。

さらに昭和43年に発表された「八王子市中田遺跡」[7]では、大規模な集落調査の結果として、従来異る地域の遺物を比較検討することによっておこなわれた編年と代って、同一遺跡内の土器変遷をセットとして把握されるに至り、編年研究上大きな説得力を持ちえたと考えられる。

中田編年において、真間式土器は土師器坏形土器の異なる二群によりⅠ類とⅡ類に、また国

分式土器も須恵器坏形土器におけるヘラ削り調整の有無によりⅠ類とⅡ類に細分された。中田遺跡は、一遺跡における徹底した土器分析の有効性を示したばかりか、従来土師器編年の枠組で議論されてきた国分式土器に関して須恵器坏が細分の鍵になることが明らかにされ、従来の杉原編年の枠組から大きく逸脱した点、重要な意味をもつと思われる。

一方杉原氏自身も再検討をなされ、歴史時代の土器を晩期Ⅰ（真間期）、晩期Ⅱ（国分期）と呼称することを提唱し、[8]年代としては前者を８世紀、後者を９世紀から10世紀におよぶ時期とされ、該期の年代観は、研究者でほぼ一致をみるに至った。さらに、国分式土器の全国的斉一性に関してその分布を「関東一円」と限定された点は、注意しておきたい。

この間、国分式土器を須恵器と土師器坏の量的な優位関係の変化から三時期に細分する試みもなされ、[9]該時期編年（細分）の視点として興味ある見解を呈示したが、扱った土器群が広い範囲に渡ったものであり、すでに国分式土器における地域差が指摘されつつあった[10]ことから考えると、編年研究の流れに逆行するものであったと言えよう。

以後、歴史時代土器の編年は、地域性の摘出と細分をおもな研究視点とし、より限定された地域での系統的な研究活動が進められるようになり現在に至っている。とりわけ、ここ４・５年の間における歴史時代土器研究は発掘資料の激増も手伝ってか、著しい進展をみせており、関東各地で精力的に編年研究が行なわれている。[11]なかでも神奈川県厚木市鳶尾遺跡[12]において歴史時代土器を８期に細分された河野喜映氏は、土師器坏および甕形土器に現われた地域差を相模型、武蔵型、中部型といった具体的呼称で示しており、該時期土器研究の新しい側面として、高く評価できる。また、千葉県東金市山田水呑遺跡[13]においても河野氏の指摘をさらに発展させる形で、新たに下総型、下野型といったものを提唱されており、本県との関連もある点、看過できない。

編年研究の進展に伴ない、その方法論自体も、より厳密なもの、より客観的なものが要求されるようになり、特に共伴関係の摘出作業に関して、先述した山田水呑遺跡でとられた方法は、画期的なものと言える。

以上は、南関東を中心とした研究動向であるが、東北地方南部においても、多賀城跡発掘調査を中心とする一連の編年研究[14]があり、かなりの成果を上げている。その詳細については後に触れるが、官衙跡などの資料を基礎とした須恵器坏形土器の変遷を編年の主軸としている点などは注目できる。また内面黒色処理という大きな共通要素に支えられた土師器坏形土器変遷の大略もとられており、本県における該土器編年上、看過することのできないものである。

最後に本県における歴史時代土器研究の業績として「井頭」[15]を挙げることができる。「井頭」における土器分析は、その編年的位置づけ、須恵器坏形土器の技法的分類など評価すべき点が多いが、とりわけ土師器甕形土器の分類に際し、器形の他に胎土や調整技法の相違に着目され

た点は大きく、後の該土器研究における地域性の摘出を引き出す結果ともなっている。

関東および東北南部の近年における編年研究を概観しても明らかなように、限定された地域における土器分析から得る成果は多く、また徐々に明確化されつつある地域性の検証という視点からも、一遺跡の徹底的分析も幾許かの意味を有すると考える。

(2) 編年の方法

本遺跡歴史時代の土器は、土師器と須恵器とに大別できるが、双方とも各器種が存在しており、そのなかから編年の軸となる器種を摘出し編年作業を実施することが有効である。

一般に編年の軸として用いられる器種は、土師器、須恵器の坏形土器であり、当時の土器様相の中で最も普遍的に認められることの必然的帰結とも言えよう。坏形土器の場合、上記のように各遺構から普遍的に認められるばかりか、完形品の出土例が多く形態や技法の変化を把握しやすいことより、先学の研究業績が最も進んでいることも編年の軸に用いられる理由と考えられる。

最近発表された主要な編年論をみても坏形土器を中心に編年されていることが多く、例えば神奈川県鳶尾遺跡[16]では須恵器坏形土器と土師器坏形土器を、埼玉県の該期の土器を高橋氏は須恵器坏形土器と土師器坏形土器を、[17]千葉県山田水呑遺跡[18]では土師器坏形土器を、宮城県多賀城跡[19]では須恵器坏形土器を、また本県「井頭」[20]では須恵器坏形土器と土師器甕形土器をそれぞれ編年の軸としている。

以上五例は、編年対象とした年代はほぼ同一時期であり、坏形土器を編年の軸としている点は共通しているが、細部の相違は、土器様相の地域的差異や遺跡の性格さらには研究者の方法論に起因するものであろう。ともかく歴史時代の土器編年のメルクマールとしての坏形土器の有効性を再確認するとともに、編年の対象となる土器群の分析を通して編年の軸となる器種を決定すべきであり、従来の編年型式に無理にはめ込む事は遺跡の個性（地域性）さらには複雑な展開を示す歴史時代の土器群の姿相を明確に把握することは不可能になることを指摘しておきたい。

さて、本遺跡の編年の軸となる器種であるが、出土土器の分析結果、最も普遍的に出土しているのは土師器坏形土器であり、編年の軸としては土師器坏形土器を中心に分析することが有効であると思われる。

すなわち須恵器坏形土器の場合、出土しない遺構が相当数認められることより（須恵器一般化以前に集落の展開がみられることより）編年軸の器種としては有効ではないと考えられる。次に土師器甕形土器もかなり普遍的に認められるが、全体の器形が判明しているものが少なく、器形にバラエティーがあることより類型化が困難であり編年の軸としては使いにくい。次に本

遺跡の特徴的なあり方として土師器盤形土器であるが、出土遺構がやや偏在しているが、補足的にはかなり有効性を持つと思われる。

以上の点より土師器坏形土器を編年の軸（時間軸）として設定し、そこに土師器盤形土器および須恵器坏形土器の組合せにより編年していくこととする。なお甕形土器は日常什器の中で中心を占めるものであり、その重要性は看過しえないが、上記のとおり出土状態により編年の軸としては使いにくいことより土師器坏形土器との共伴関係よりその流れを追求することとしたい。

次に編年の軸となる土師器坏形土器の前後関係をいかに求めるかであるが、これは集落における重複関係において求めることが第一義であろう。しかし集落において適当な重複関係が認められない場合、土器を型式学的に処理すること（製作技法と器形の変遷の把握）により類型することが次善であろう。本遺跡の土師器坏形土器の場合、ロクロ使用の有無により少くとも二段階には分けられるであろうが、さらに技法的、器形的にロクロ未使用の土師器坏形土器を３群、ロクロ使用を３群に分けて編年の軸としている。

もちろん、６群設定に際しては、本遺跡の重複関係を尊重して設定したつもりであるが、実際には技法・器形による類型的把握により設定せざるを得ず、編年として一つの限界を有することも事実である。

そこで編年に少しでも客観性を符与するため山田水呑遺跡でおこなわれた共伴関係を統計学的に処理する方法（類型化された土器の共存関係を頻度表をもって表わす。）をとることとした。

Ⅱ　編年試論

(1)　土器の分類

土師器坏形土器

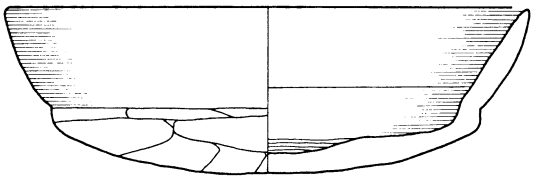
土師器坏形土器は、本遺跡で各遺構より最も普遍的に認められた器種であり、編年の時間軸とすべき重要な器種である。以下土師器坏形土器をロクロ使用の有無で二分するとともに、器形、技法の観察を通して、ロクロ未使用坏形土器を３群、ロクロ使用坏形土器を３群の計６群に類型化した。

ロクロ未使用坏形土器

（第Ⅰ群）粘土紐積みによって成形された土器で、体部と底部の境に稜を有し、対応するように内面にも段を有するものであり、丸底の底部と大きく外に開く口縁部を器形の特徴としている。

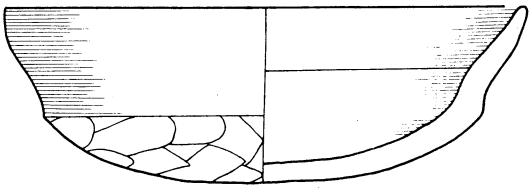
調整技法は口縁部および内面は「ナデ」によって底部外面は「ヘラ削り」によるもので、これは第Ⅰ群、第Ⅱ群坏形土器に共通したものである。色調は内面が暗褐色ないしは黒褐色、外面は淡黄褐色を呈するのが一般的である。以下第Ⅰ群土器をA、B、C三タイプに類型化する。

Ⅰ－A類　体部外面の稜と内面の段により丸底の底部より僅かに直立する体部を形成し、口縁部は直線的に開く器形である。底部外面のヘラ削りは体部近くでは横位となるのが一般的であるが、中央部では一方向ないしは不定方向のヘラ削りとなる。口縁部および内面のナデは明瞭な筋を残していることが特徴的である。口径13～15cm、器高4.5cm前後のものが多い。

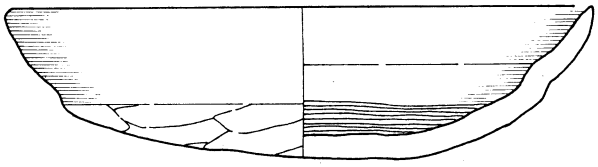


Ⅰ群A類　E号遺構出土

Ⅰ－B類　底部から体部にかけてはⅠ－A類とほぼ同じであるが、口縁部が内湾気味に開くことで分類した。これは口縁部横ナデの際、指先で強く押えることによって生じたものかと思われる。調整技法はⅠ－A類との差異は認められない。Ⅰ－B類は法量の差により二つに分類できる。



Ⅰ群B類(a)　27号住居跡出土

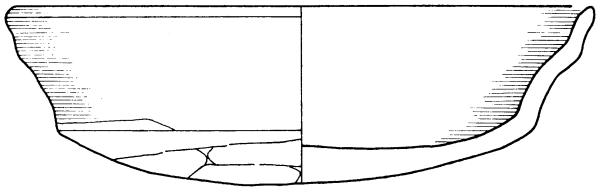


Ⅰ群B類(b)　C・D号遺構出土

Ⅰ－B類(a)　口径は13～15cm、器高が5cm前後とやや深くなる。

Ⅰ－B類(b)　口径は14～16cm、器高が4cm前後とやや浅いもので、(a)がつぶれたような器形を呈する。

Ⅰ－C類　Ⅰ－B類の特徴であった口縁部の内湾がさらに意識的に形成されたものであり、口縁部が階段状に段を呈するものである。口唇部はやや尖り気味ものと、丸みを呈するものがあるが、前者には内面に稜を呈するほど著い段をもつものもある。口径は15～17cm、器高4～5cmを測り、比較的大形である。Ⅱ－C類は体部と底部の境に沈線を持つものがあり、その有無によって二つに分類できる。

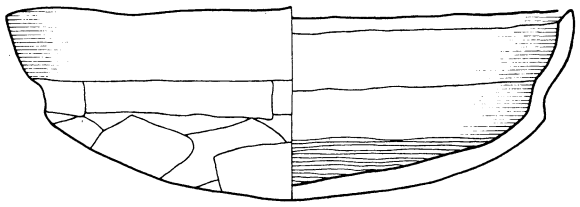


Ⅰ群C類(a)　F号遺構出土

Ⅰ－C類(a)　沈線を持たないもの

Ⅰ－C類(b)　幅5～7mmの沈線を持つもの。沈線はヘラ先か細い棒により施されたもので口

縁部横ナデ後、底部ヘラ削り前に施されたことが、いくつかの土器により観察される。なおⅠ－C類(b)は量的には少く、第Ⅱ群に盛行するものである。

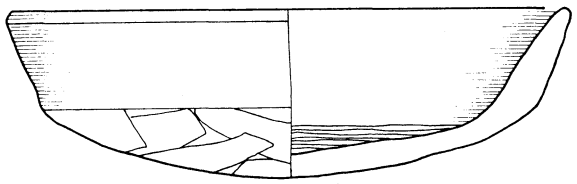


Ⅰ群C類(b)　D号遺構出土

第Ⅱ群　粘土紐積みによる成形、口縁部および内面のナデ、底部のヘラ削りといった調整技法も全く同じであるが、外に張り出す稜や内面にみられた段が明瞭ないしは消滅することによって第Ⅰ群と分離、類型化できる。なおⅠ－C類(b)にみられた体部に沈線を持つものが多くなるのも第Ⅱ群の特徴である。以下第Ⅱ群をA、B、二つに類型化する。

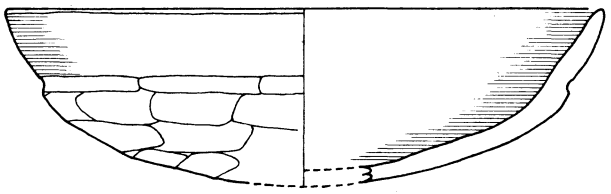
Ⅱ－A類　丸底の底部から口縁部がすなおに開き、第Ⅰ群にみられた内面の段がほとんどなくなり、底部から緩やかなカーブを描いて口縁部にいたる。口縁部はやや内湾気味に開くものと、直線的に開くものがある。口径14～15cm、器高4～5cmを測るものが一般的である。Ⅱ－A類は沈線の有無により二つに分けられる。

Ⅱ－A類(a)　体部に沈線を持たないもの。外面は横ナデ後のヘラ削りによって僅かな稜が形成されるが、第Ⅰ群のように外に張り出すことはない。



Ⅱ群A類(a)　C号遺構出土

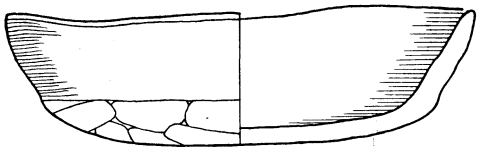
Ⅱ－A類(b)　体部に沈線を持つもの。沈線は体部中ほどか、それより上に位置する。沈線の幅はⅠ－C類(b)より相対的に細くなり、4～5mmほどであり、2～3mmのものもある。



Ⅱ群A類(b)　G号遺構出土

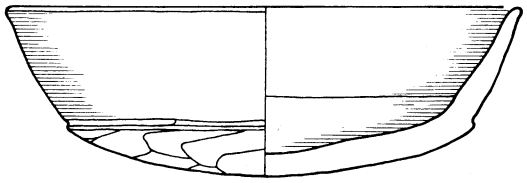
Ⅱ－B類　Ⅱ－A類に比して横ナデが体部の下の方までおよんでおりヘラ削りの範囲が狭く、底部がやや平底気味になり全体的に偏平な器形となる。口縁部は内湾気味に開くものと、直線的に開くものがある。口径13～15cm、器高はやや浅く3～4cmを測るものが多い。Ⅱ－B類も沈線の有無により二分できる。

Ⅱ－B類(a)　体部に沈線を持たないもの。底部は平底気味であり、外面の稜もほとんど消滅する。



Ⅱ群B類(a)　G号遺構出土

Ⅱ－B類（b）体部に沈線を持つもの。沈線は体部中ほどより下位に位置する。



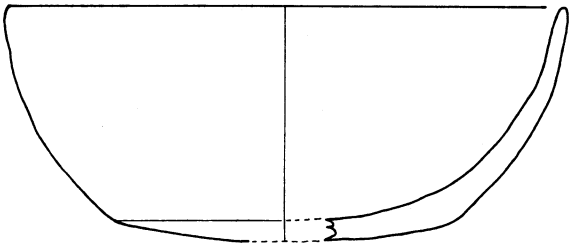
Ⅱ群B類(b)　82号住居跡出土

第Ⅲ群　第Ⅰ群、第Ⅱ群土器と同様粘土紐積みによって成形されるが、ヘラ削りによって平底の底部が造り出されるもの。坏形土器として定形化される以前のもので本遺跡では出土例が少く問題の土器群でもある。器形の特徴により二つに類型化できる。

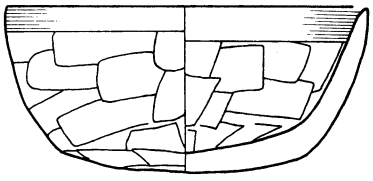
Ⅲ－A類　器高がやや深く、坏形土器というより椀形土器に近い器形である。底部はヘラ削りによって造り出されやや丸味をもつが、体部との境が明らかに意識されている。口縁部はやや内湾気味に立ちあがる。体部外面は横ナデ後横位のヘラ削りで調整され、内面は横ナデ後ヘラミガキがなされている。胎土が精選され、焼成も良好なものが多い。Ⅲ－A類は法量により二分される。

Ⅲ－A類（a）口径15cm前後、器高６cm前後の大形なもの。

Ⅲ－A類（b）口径10cm前後、器高 4.5cm の小形なもの。

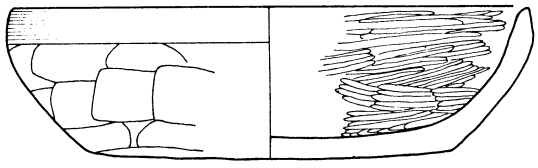


Ⅲ群A類(a)　E号遺構出土



Ⅲ群A類(b)　27号住居跡出土

Ⅲ－B類　A類とは逆に器高の浅いものであり、盤形土器に近い器形を呈する。ヘラ削りによって造り出された平底な底面より体部はやや内湾気味に立ちあがり、口唇部近くでほぼ直立する。内面は横ナデ後横位の丁寧なヘラミガキが施され、外面は横位のヘラ削りにより調整されており、ヘラ削りが口縁部ぎりぎりまでおよぶものもある。口径、14cm前後、底径８～10cm、器高３～４cmを測る。

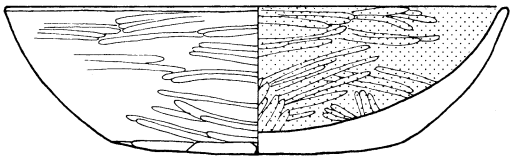


Ⅲ群B類　49号住居跡出土

ロクロ使用坏形土器

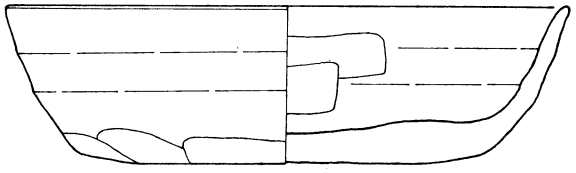
本遺跡のロクロ使用土師器坏形土器群の中には、水挽き技法により製作されたとは理解し難い土器群が存在する。すなわち粘土紐積みよりある程度成形し、調整の段階でロクロを使用したと考えられる土器群であり、製作技法より水挽き技法前段階の土器群として一時期を設定する。

第Ⅳ群　粘土紐積みにより成形し、調整の段階でロクロを使用したと考えられるもので、類例は少く、器形にバラエティーがあるので類型化は困難である。器形は概して底径が大きく口径との差が小さいものが多く、第Ⅲ群土器と類似するものがいくつかある。

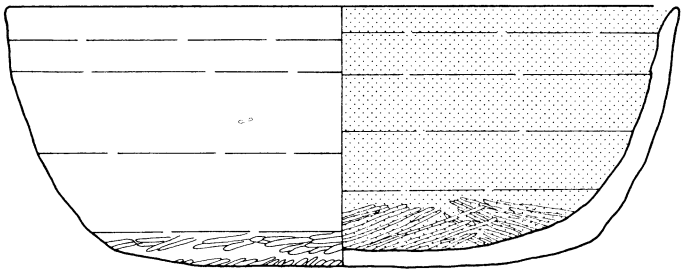


Ⅳ群　135号住居跡出土

底部はすべてヘラ削りによるもので、ヘラ削りは体部下端までおよんでいる。内面は入念なヘラ磨きが施されるものが一般的で、体部外面にも粗い磨きが施される場合もある。なお内面を黒色処理するものが一部にあり、その場合はヘラ磨きを必ず伴う。



Ⅳ群　G号遺構出土

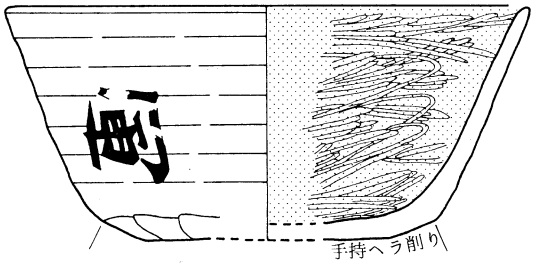


Ⅳ群　E号遺構出土

第Ⅴ群　ロクロにより成形されたもので、底径が大きく口径との差が小さく、全体に器高が深いものが多い。また内面をヘラ磨きによる黒色処理するものがほとんどであり、墨書土器も数例みられる。第Ⅴ群土器は器形により二類三タイプに類型化できる。

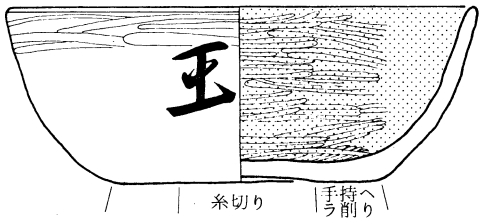
Ⅴ－A類　口径と底径の差が小さく（口径13cm前後、底径８cm前後）体部は70度前後の急傾で直線的ないしは内湾気味に立ちあがる。内面はすべて入念なヘラ磨きが施されており、ヘラ磨きは底面で一方向に磨いた後、体部を横方向に磨くのが一般的であり、これはロクロ使用坏形土器のヘラ磨き技法に共通している。また体部外面にまで粗いヘラ磨きがおよんでいるものもあり、ロクロ使用土器特有のロクロ目の凹凸は不明瞭である。Ⅴ－A類は器高の差により二分できる。

Ⅴ－A類（a）器高６cmあまりの深いもので碗形土器に近いもの。底部全面および体部下端まで手持ちヘラ削りされており、切り離し技法は不明である。



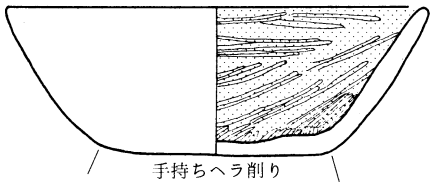
Ⅴ群Ａ類(a)　Ｅ号遺構出土

Ⅴ－A類（b）器高５cm前後とⅤ－A類（a）よりやや浅くなるもの。底部全面ないしは周縁部が手持ちヘラ削りされており中央部に切り離し痕を残すものや全面ヘラ削りされているが僅かに切り離し痕を観察できるものがあり、それらは全て回転糸切りによるものである。



Ⅴ群Ａ型(b)　５号円形土壙出土

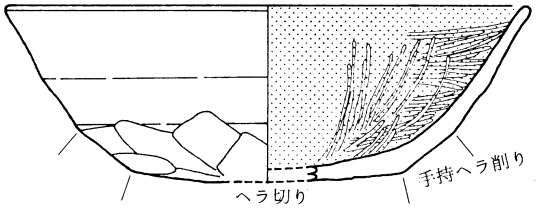
Ⅴ－Ｂ類　Ⅴ－A類よりやや口径と底径の差が大きくなるが、底径は口径の½より大きい。体部は60度前後の傾斜でほぼ直線的に立ちあがるのが一般的である。内面はヘラ磨きと黒色処理が施されており、底部は手持ちあるいは回転ヘラ削りされており、切り離し技法は不明である。



Ⅴ群Ｂ類　49号住居跡出土

第Ⅵ群　ロクロの成形による土器群であり、ロクロ技術の定着、法量の規格化が進んだ段階の所産のものである。底部切り離し技法は回転糸切りが主流であり、体部にロクロ使用坏形土器特有の明瞭なロクロ目を残し、内面はヘラ磨き黒色処理しているのが一般的であり、墨書土器の増加も特徴的である。前記のように製品の規格化が進んだ段階のもので、器形より類型化が困難であり、底部切り離し技法及び底部調整などの技法より三類五タイプに類型化する。

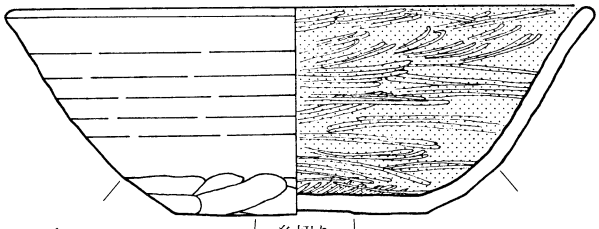
Ⅵ－A類　回転ヘラ切りにより底部が切り離されたもので、体部は55度前後の傾斜をもってやや内湾気味に立ちあがる。底径が口径のほぼ½（口径約14cm、底径約７cm）となり安定した器形を呈する。体部下端をヘラ削りするものが多く、結果として体部立ちあがり部がやや丸味をおびる。また立ちあがり部の器厚に比し底部中



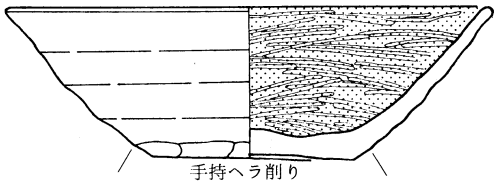
Ⅵ群Ａ類　85号住居跡出土

央部が肉薄になるものもみられる。内面の黒色処理されているものが半数ぐらいで、未処理のものはヘラ磨きも施されていない。本類は類例が少い。

Ⅵ－Ｂ類　回転糸切りにより底部が切り離されたもので、切り離し後手もちのヘラ削りによって底部が調整されている。底径が口径の½か、ややそれを下回り、体部は55度前後の傾斜をもって直線的かやや内湾気味に立ちあがる。後者の場合、口縁部が僅かに外反するのが特徴的である。ヘラ削りによる調整は底部全面および体部下端までと、周縁部のみに限定されるものがある。内面は全て入念なヘラ磨き黒色処理されている。Ⅵ－Ｂ類は法量により二分され、これはⅥ－Ｃ類でも同様な傾向を示し、用途により定形化したことが看取される。



Ⅵ群Ｂ類(a)　126号住居跡出土

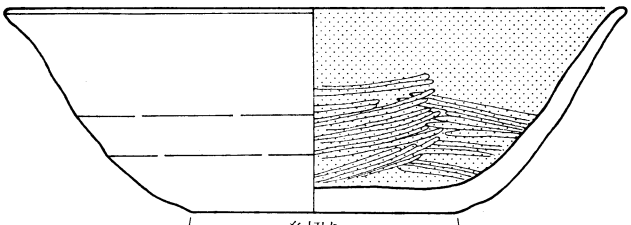


Ⅵ群Ｂ類(b)　139号住居跡出土

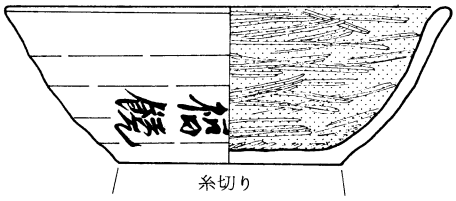
Ⅵ－Ｂ類(a)　口径約15.5cm、底径７cm前後、器高５～６cmを測る大形なもの。

Ⅵ－Ｂ類(b)　口径12～13cm、底径６cm前後、器高４cm前後を測る小形なもの。

Ⅵ－Ｃ類　回転糸切りにより底部が切り離されたもので、糸切り痕をそのまま残すもので、器形的にはⅥ－Ｂ類と類似するが、底径がさらに小さくなり口径の½以下となる。体部は内湾気味に立ちあがり口縁部が僅かに外反するものが多く、直線的に立ちあがるものは減少する。口唇部は尖り気味になるものと肥厚して断面が玉状を呈するものとがあり、上げ底状の底部も一部みられる。Ⅵ－Ｃ類も法量により二分される。



Ⅵ群Ｃ類(a)　147号住居跡出土



Ⅵ群Ｃ類(b)　126号住居跡出土

Ⅵ－Ｃ類(a)　口径15～16cm、底径6.5～７cm器高約5.5cmを測る大形なもの。

Ⅵ－Ｃ類(b)　口径12～14cm、底径5.5～ 6.5cm、器高４cm前後を測る小形なもの。

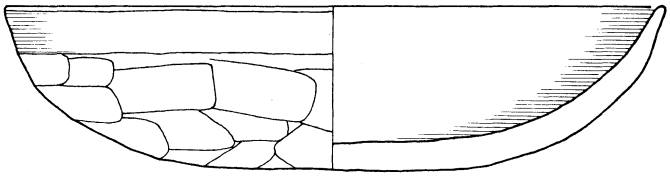
土師器盤形土器

本遺跡の特徴的な器種の一つであり、出土量も比較的多い。しかし各遺構から普遍的に出土するのではないことより時代的には限定された所産のものと考えられ、編年作業上一つの鍵として重要な器種である。

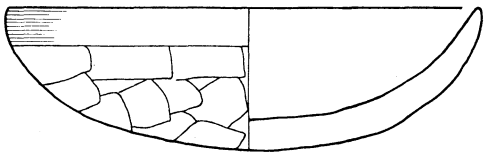
器形にバラエティーがあり、その段階的変化がとらえにくいことより、特徴的なヘラ磨き技法の変遷に着目し三群に分類する。なお小形な土器（口径11～13cm、器高3.5cm前後）は器種的には坏形土器とも考えられるが、器形、技法、用途より盤形土器として扱うこととする。

第Ⅰ群　ヘラ磨きを全く施さないもので、内面および口縁部はナデにより、底部から体部にかけてはヘラ削りにより調整されているもの。色調は褐色ないしは暗褐色を呈する。調整技法は土師器坏形土器第Ⅰ群、第Ⅱ群と共通する。器形より三類四タイプに類型化できる。

Ⅰ－A類　底部に平担面をもたずに緩やかな孤状を呈して口縁部にいたるもの。外面は横ナデ後ヘラ削りにより調整されており、体部では横位の削りが主体である。口唇部はすなおにおさまるものと強い押えによってつまみあげられるものとがある。法量により大小に二分できる。



Ⅰ群A類(a)　G号遺構出土

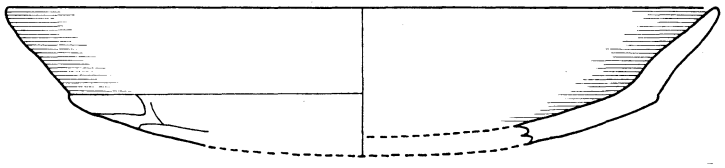


Ⅰ群A類(b)　27号住居跡出土

Ⅰ－A類(a)　口径17～18cm、器高4cm前後を測る大形なもの。

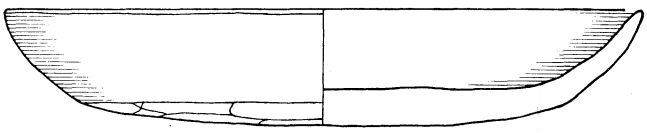
Ⅰ－A類(b)　口径11～13cm、器高3.5cm前後を測る小形なもの。

Ⅰ－B類　丸底の底部から大きく外反して口縁部にいたるもので、体部に稜を持ち内面にも対応して段を形成する。器形、調整技法など土師器坏形土器第Ⅰ群と共通する。口径18cm前後、器高4cm前後を測る。



Ⅰ群B類　C号遺構出土

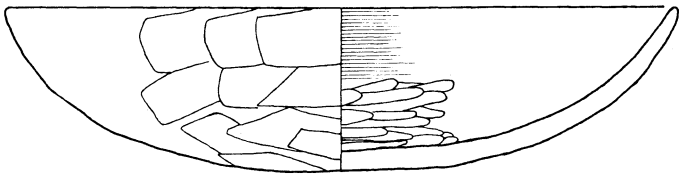
Ⅰ－C類　かなりの平担面をもつ底部より体部はやや内湾気味に立ちあがり、底部と体部の境も明瞭になっている。ヘラ削りは底部にとどまるものと体部上位にまでおよぶものとがある。口径は17～21cm、器高は3cm弱とかなり大形なものもある。



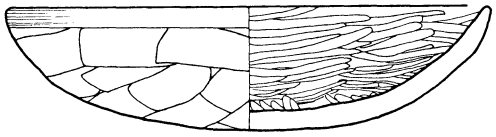
Ⅰ群C類　G号遺構出土

第Ⅱ群　外面はⅠ群同様にヘラ削りにより調整されているが、内面はナデの後ヘラ磨きにより調整されている点が特徴である。Ⅰ群に比し胎土が精選され焼成も堅緻であり、半数ほどの土器は赤彩されたものである。Ⅰ群同様器形により三類四タイプに分類できる。

Ⅱ－A類　器形的にはⅠ－A類の系統につながるものである。外面のヘラ削りは口唇部までおよび横なでを残さない場合が多く、内面は入念なヘラ磨きにより調整され、赤彩されたものは美しい光沢を帯びている。法量により二つに細分できる。



Ⅱ群A類(a)　27号住居跡出土

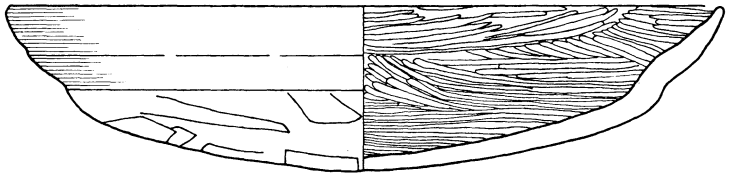


Ⅱ群A類(b)　27号住居跡出土

Ⅱ－A類(a)　口径15～18cm、器高3.5～4cmを測る大形なもの。

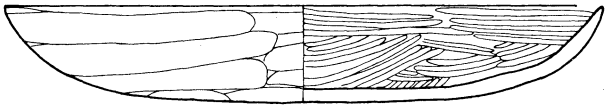
Ⅱ－A類(b)　口径11～13cm、器高3.5cm前後を測る小形なもの。

Ⅱ－B類　器形的にはⅠ－B類の系統につながるものであり、口縁部が内湾気味に立ちあがるものと直線的に開くものがある。内面は入念なヘラ磨き調整、赤彩の例が多くなる。口径19cm、器高３～４cmを測る。



Ⅱ群B類　33号住居跡出土

Ⅱ－C類　器形的にはⅠ－C類の系統につながる。外面のヘラ削りはほとんど全面におよび、内面はナデの後に放射状にヘラ磨きを施すものが多く、赤彩されている例はない。口径16cm前後、器高３cm前後を測る。

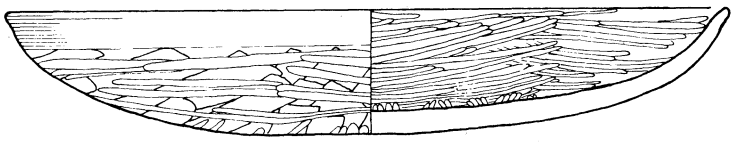


Ⅱ群C類　38号住居跡出土

第Ⅲ群　内外面とも最終的にヘラ磨きにより調整されたものであり、胎土焼成も良好であり、全て赤彩されており、本遺跡盤形土器の特徴的な光沢を帯びた美しい土器群である。器形により本群も三類四タイプに分類できる。

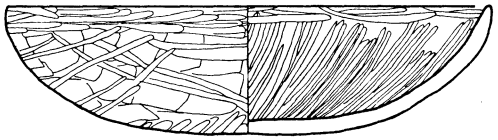
Ⅲ－A類　器形的にⅠ－A類の系統につながるものである。内面は入念なヘラ磨きにより調整され、体部外面はヘラ削り後内面に比してやや粗いヘラ磨きにより調整され、ヘラ磨きはし

ばしば底部外面にまでおよぶこともある。法量により二分できる。



Ⅲ群A類(a)　27号住居跡出土

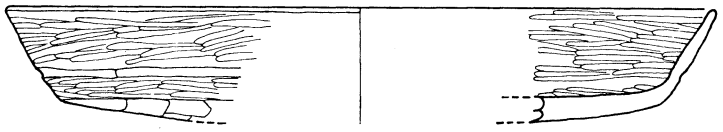
Ⅲ－A類（a）口径17～19cm、器高3～4cmを測る大形なもの。



Ⅲ群A類(b)　27号住居跡出土

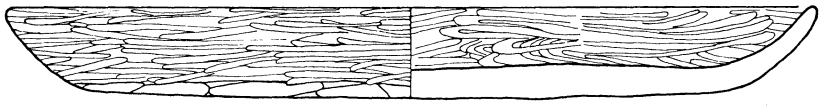
Ⅲ－A類（b）口径11～13cm、器高3cm弱を測る小形なもの。

Ⅲ－B類　器形的にはⅠ群B類につながるものであるが、体部の中ほどに沈線を持つものがあり、土師器坏形土器第Ⅱ群との共通性がうかがえる。ヘラ磨き調整についてはⅢ－A類と同様である。口径18～19cm、器高3cm弱を測る。



Ⅲ群B類　G号遺構出土

Ⅲ－C類　器形的にはⅠ－C類につながるものであるが、大形品が多く典型的な盤形土器の器形を示す。底部は完全に平担となり、内面中央部にかけて僅かにもりあがっていくものもある。ヘラ磨き調整についてはⅢ－A類と同様であるが、内面に螺線状の暗文を施すものが数例みられる。本類の土器は日常雑器とは思い難い優品が多い。口径21cm弱、器高3cm未満を測る。



Ⅲ群C類　G号遺構出土

土師器甕形土器

土師器甕形土器は日常什器の中で最も生活と関連を有しその変化は重要な意味を持つ器種である。しかし本遺跡の場合、比較的出土量が多いにもかかわらず残存状態は悪く全体の器形が窺えるものは少いうえに器形が多様であり、甕形土器の系統的変化を一律に把えることは難しい。従って多様なあり方を示す土器を群として類型化せず、器形（特に口縁部中心）、調整技法、胎土などによりA～E類に分類する。A－E類は必ずしも系統的時間的変遷を意味しない点を付記しておく。

A類　最大径を口縁部に有し、ほとんど胴部に膨みを持たず直線的に底部にいたる全体的に厚いつくりの土器である。口縁部は横ナデした後に外面は縦方向のシャープなヘラ削りにより

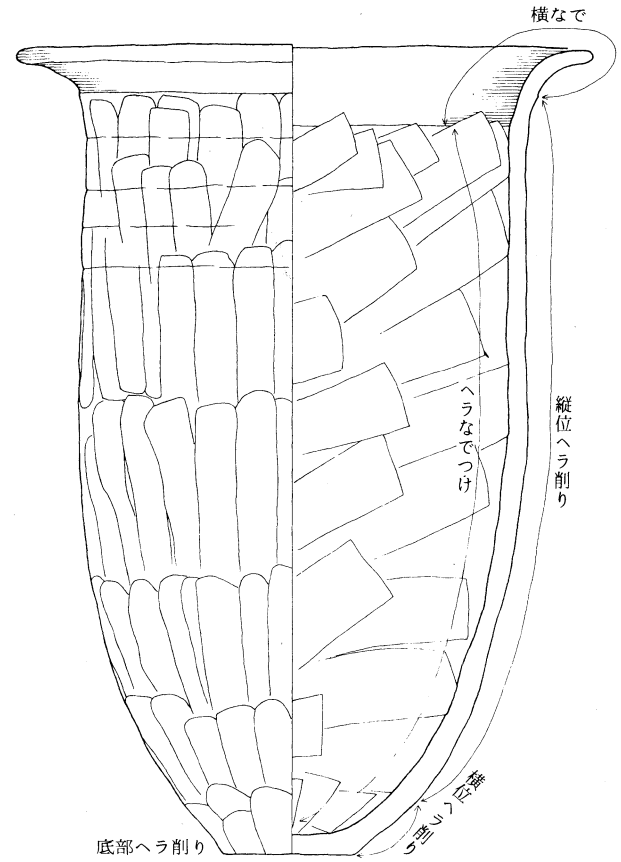
調整され、内面は横ないしは斜め方向のヘラナデにより調整されている。ヘラ削りによる砂粒の移動は著しい。胎土には比較的粒の粗い砂粒を多量に含んでおり、黄褐色を呈するものが多い。A類は口縁部の形態により三分できる。

A類(a) 口縁部が大きく外湾するもので、口縁端部がほとんど水平になるものもある。

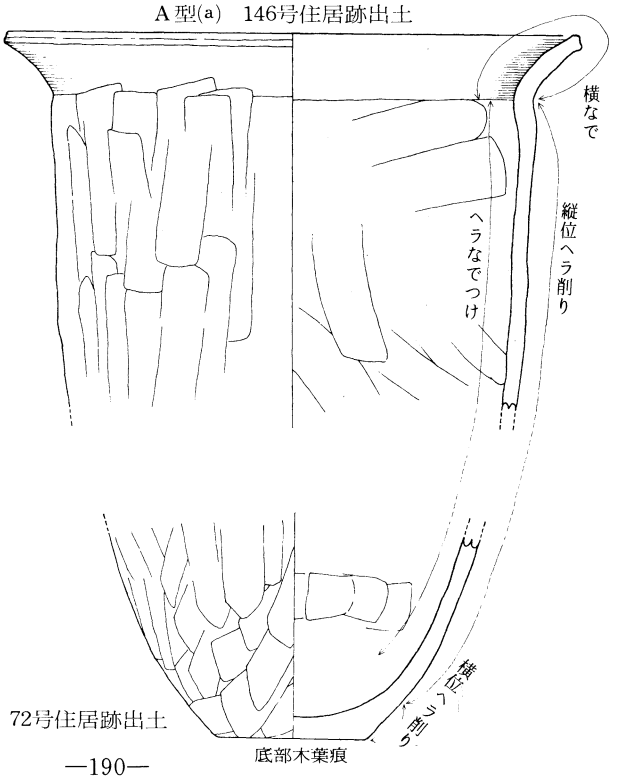
A類(b) 口縁部が直線的に外反するもので、口唇部断面が四角になるものが多い。

A類(c) 口縁部が外反し、口唇部が僅かに直立するもの。

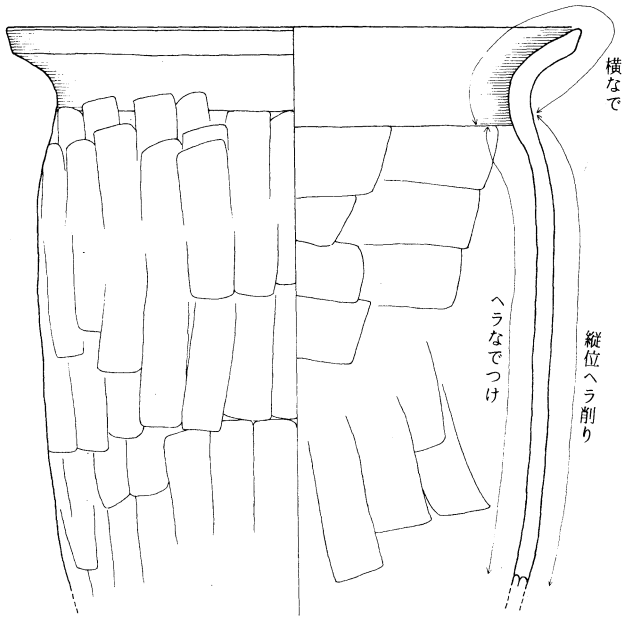
(a)、(b)ともに口縁部の横ナデにより軽い稜を形成する。(c)は類例も一例であり、器形的にはC類と類似するが、調整、胎土よりA類に細分したのはC類の祖形的な器形になる可能性を考慮したからである。



A型(a) 146号住居跡出土

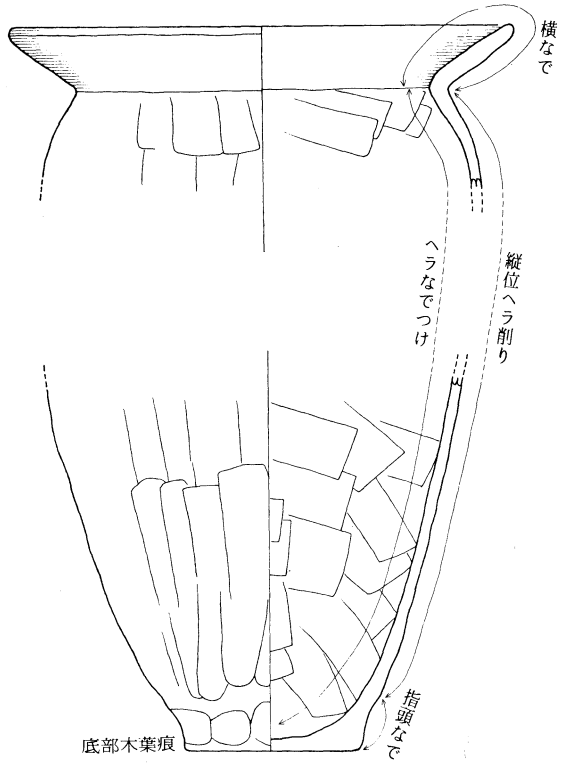


A類(b) 72号住居跡出土



A類(c)　146号住居跡出土

B類　A類同様口縁部に最大径を有するが、肩部に張りをもつのが特徴であり、肩部より直線的にすぼまりやや突出する底部を形成する。口縁部は大きく「く」の字に外反し、胴部に比して厚くなるのが特徴である。口縁部は横ナデ後内面はヘラナデ、外面はヘラ削りないしはクシ状具により調整されている。胎土はA類より混入物が多く、かなり粗雑であり、色調は赤褐色を基調としている。本類の出土例は少いが、器形などより相模地方に多く分布する土器群と類似している。



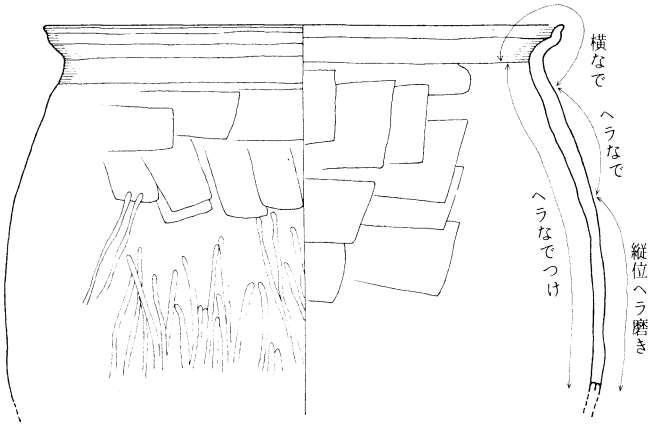
B類　97号住居跡出土

C類　胴部がふくらみ胴部上位に最大径を有し緩やかにすぼまりながら底部にいたる。頸部が強くくびれてやや短かめの特徴的な口縁部を形成する。口縁部は端部がつまみあげられ、その外面に凹面が形成され独特の断面形を呈する。口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラナデ、外面はヘラ削り後下半部を入念な縦方向のヘラ磨き、上半部はナデによりヘラ削りを消すという独特な調整技法が施されている。胎土もA、B類より精選されており、長石粒と雲母末を含み特徴的であり、細片でも他の土器片と容易に識別できる。色調は黄褐色を基調としている。C類は口縁部の器形により二分できる。

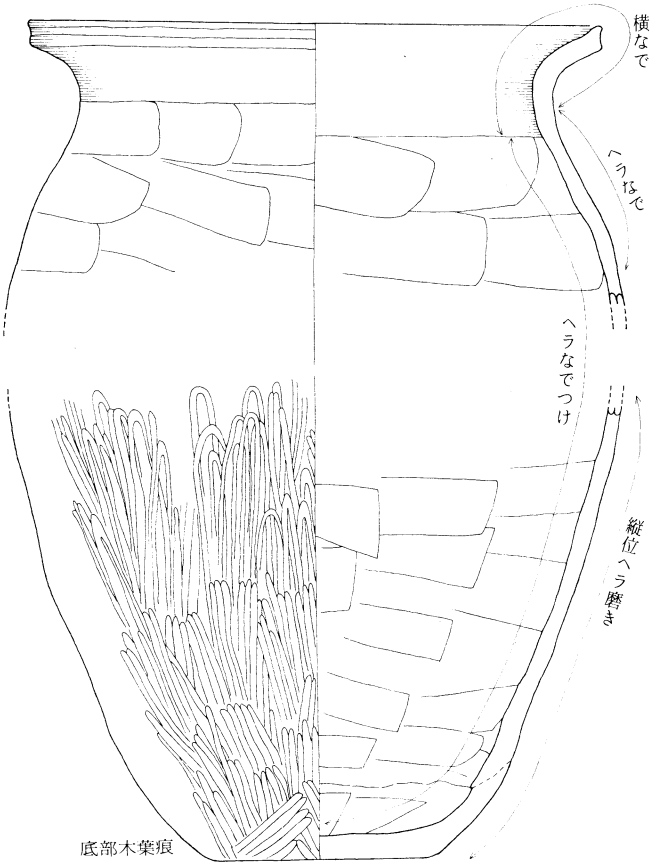
C類(a)　口縁部の器肉が厚くなっており端部のつまみ方がそれほど強くないので、内面はそれほど変化を持たずに外反するもの。

C類(b)　(a)に比して口縁部器肉が薄くなり、端部のつまみが強く内面にも明瞭な段をもつもので、断面が「S」字状を呈するもの。

本類の土器は下野・常陸地方に分布の中心を持つことから、最近「下野型」の甕と呼称されている。

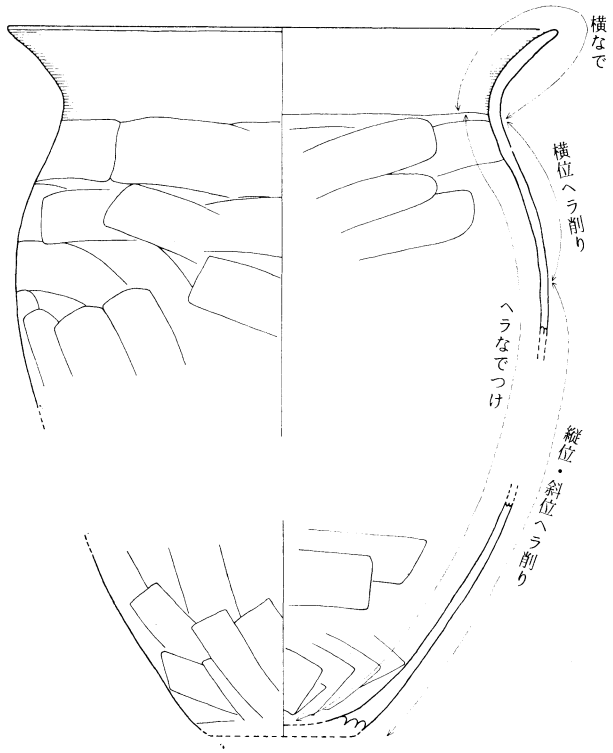


C類(b)　139号住居跡出土



C類(a)　143号住居跡出土

D類　「く」の字ないしは「コ」の字状を呈する口縁部より肩部に張りをもち急激にすぼまる胴部を有する。口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラナデ、外面は特徴的なヘラ削りにより調整されている。すなわち胴上位は二段から三段にわたって横方向のヘラ削り、それ以下は斜めないしは縦方向のヘラ削りにより調整されており、ヘラ削りはきわめて鋭利な工具で施されたと考えられ、非常に薄く仕上げられている。胎土は砂粒を含むが粒子が細かく精選された感じである。焼成は比較的良好であり赤褐色を基調としている。D類は口縁部の器形より二分できる。

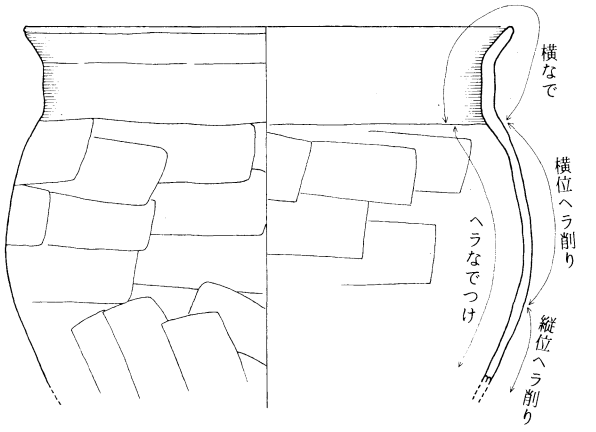


D類(a)　2号円形土壙出土

D類(a) 口縁部が「く」の字状を呈するもの。(a)の場合最大径を口縁部に有するものが多い。

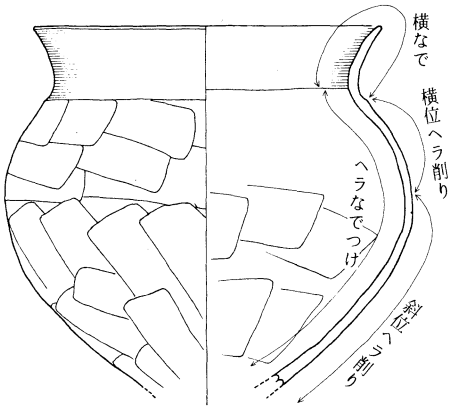
D類(b) 直上する頸部より短く外反し、いわゆる「コ」の字状を呈するもの。(b)の場合最大径は肩部にくる。D類(b)は頸部の立ちあがりより更に細分が可能かと思われるが、量的な問題があり、本論では「コ」の字状を呈するものとして一括しておく。

D類は次のE類とともに武蔵地方に分布の中心を持つものであり「武蔵型」と呼称されている。

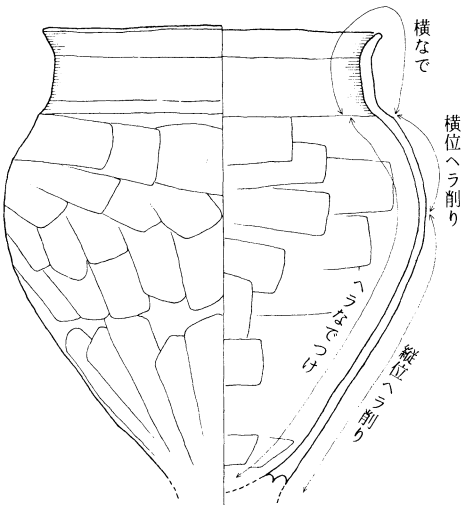


D類(b)　105号住居跡出土

E類　やや外湾気味か「コ」の字状に立ちあがる口縁部より肩部ないしは胴上位に最大径を有し、底部にむかって急激にすぼまる胴部をもつ土器である。残念ながら本遺跡では完全に復



E類(a)　54号住居跡出土



E類(b)　83号住居跡出土

元できるものは一例もないが、台部のみがかなり出土しており台付甕になると考えられる。台部はほとんどが外に大きく開くもので、全体をなでによって調整されるいる。口縁部が強い横ナデにより軽い段を有するものが多い以外、調整、胎土、焼成、色調ともD類と同様である。E類は口縁部の器形より二分できる。

E類(a) 口縁部がやや外湾気味に立ちあがるもの。

E類(b) 「コ」の字状を呈するもの。

須恵器坏形土器

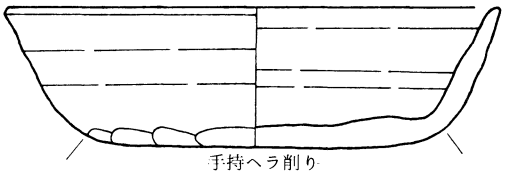
須恵器坏形土器は土師器盤形土器と同様に本遺跡では時代的には限定された所産のものであり、編年の鍵として重要な器種である。分類については先学の研究成果[21]を踏えて器形（口径に対する底径比）、底部切り離し技法、切り離し後の調整等を念頭において実施するが、さらに第Ⅰ群に設定したような胎土を重視したい。これはややもすれば須恵器製作技術にのみ終始しがちな研究傾向に対し生産地の比定という視点を考慮に入れてのことである。なお器形、技法的には須恵器とほとんど変わるところがないが、色調が黄褐色ないしは茶褐色を呈する須恵器とも土師器とも判然としない土器が僅かに出土しているが[22]、ここでは技法的な点を重視し須恵器として扱うこととする。以下須恵器坏形土器を四群に類型化する。

第Ⅰ群　口径に対して底径が大きいもので、法量比（底径÷口径）0.7～0.65であり、器高は4cm以下の浅いものが多い。底部は全て手もちヘラ削りにより全面ないしは体部下端まで調整されており、ヘラ削りは一方向に4、5回施すものと、不定方向に施すものとがある。底部切り離し技法はヘラ切り痕をかすかに残すものが何例か観察できることよりほとんどヘラ切りによるものと思われる。なお、紐積みの痕跡を残しているものが一例あることより本群は紐積み

で成形された可能性も強い。

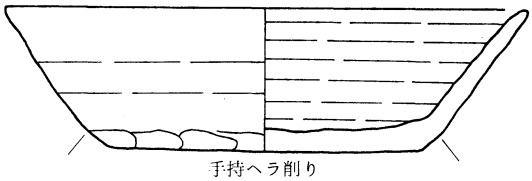
本群の最大の特徴は胎土であり、雲母末と長石粒を含むものであり、一見して他の須恵器とは識別できる。焼成はやや甘く、しまりに欠けており、色調は青灰色や灰色を基調としている。本群は体部の立ちあがり方により二分できる。

Ⅰ－A類　65～度70度の急傾斜で立ちあがるもので、体部内面の基部が凹面になるものが多い。口径13cm弱、底径９cm前後を測る。



Ⅰ群A類　80号住居跡出土

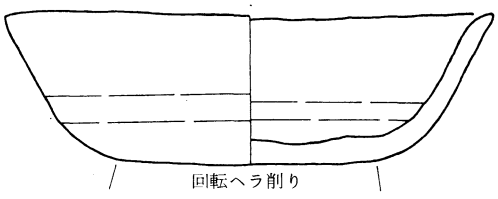
Ⅰ－B類　50度～60度の傾斜で立ちあがるもので、口縁部が直線的なものと僅かに外反するものとがある。口径13～14cm、底径８～９cmを測る。



Ⅰ群B類　49号住居跡出土

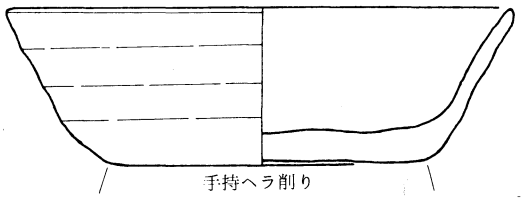
第Ⅱ群　口径に対して底径が比較的大きいものであり、法量比は0.6～0.53を示す。底部切り離し技法はほとんどがヘラ切りであろう。切り離し後の調整により四類に分けられる。

Ⅱ－A類　底部全面を回転ヘラ削りで調整したもの。回転ヘラ削りは体部下端までおよんでいるものもあり、結果として底部が丸味を呈するものもある。切り離し技法が確認できるものはない。全体的に厚手なものが多く、体部は55～60度で直線的に立ちあがる。胎土は若干長石を含むものが多く、全体的には精選されており、焼成も良好である。口径13cm前後、底径７～7.5cm、器高４cm前後を測る。



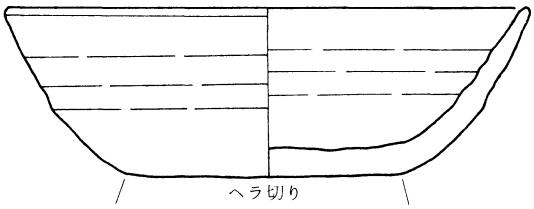
Ⅱ群A類　E号遺構出土

Ⅱ－B類　底部全面を手もちヘラ削り調整したもの。ヘラ削り調整は体部下端におよぶものもある。胎土、焼成はⅡ－A類と共通する。体部は55～60度で直線的に立ちあがり、かなり薄手なものもある。なお手持ちヘラ削り調整は回転ヘラ削り調整に比し類例は多い。口径13～14cm、底径７～8.5cm、器高４cm前後を測る。



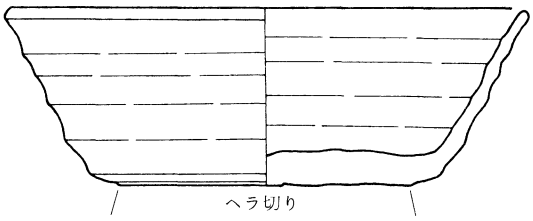
Ⅱ群B類　G号遺構出土

Ⅱ－C類　底部にヘラ切り痕をそのまま残し、全体的に厚手なもの。体部は50～60度で立ちあがり、口縁端部に近づくにつれて漸次器肉が薄くなるものが多い。胎土はⅡ－A類に共通するが、長石がやや多量に含むものが多い。口径13.5～14cm、底径7.5～8cm、器高4～4.5cmを測る。



Ⅱ群C類　35号住居跡出土

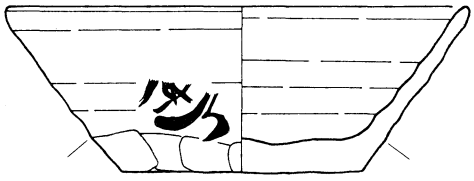
Ⅱ－D類　底部にヘラ切り痕をそのまま残し、体部には明瞭なロクロ痕を有し、かなり薄手に調整されたもの。体部は50～60度で直線的に立ちあがる。胎土は長石の他に小礫を僅かに含むものが多く、焼成は良好である。口径13～15cm、底径8～9cm、器高4.5cm前後を測り、やや大形品である。



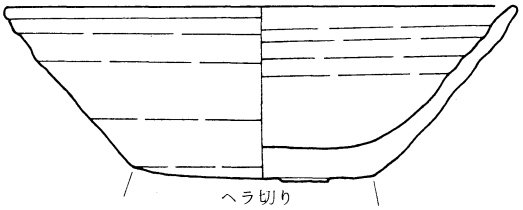
Ⅱ群D類　E号遺構出土

第Ⅲ群　底径が口径の½かそれ以下になるものであり、口径と底径の差が大きいものである。胎土は長石を比較的多量に含むものが多く、焼成は全体的には良好であり、色調はほぼ青灰色を基調としている。底部切り離し技法は全てヘラ切りであり、その後の調整の有無で二分できる。

Ⅲ－A類　体部下端および底部全面を手もちヘラ削りにより調整されているもの。体部は55度前後で直線的に立ちあがり、ロクロ痕を明瞭に残し、かなり薄手に調整されている。底部はやや厚手であり、内面には螺線状の凸凹が明瞭に残っている。口径13cm前後、底径6.5cm前後、器高4.5cm前後を測り、規格性を有している。


手持ヘラ削り
Ⅲ群A類　131号住居跡出土

Ⅲ－B類　底部にヘラ切り痕をそのまま残しているもの。ヘラ切り痕は粘土がはみ出ているものもあり、やや粗雑な感じを受ける。体部は50度前後で立ちあがるが、立ちあがりは直線的なものと、口縁端部が小さく外反するものとがある。ロクロ痕は明瞭であるが、幅が粗くなってい

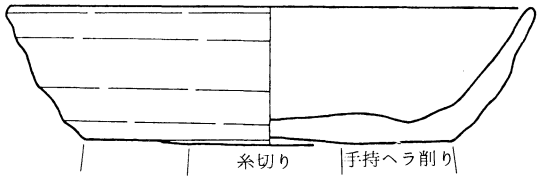


Ⅲ群B類　35号住居跡出土

るものが多い。口径12～14cm、底径５～6.5cm、器高4.5cm前後を測る。

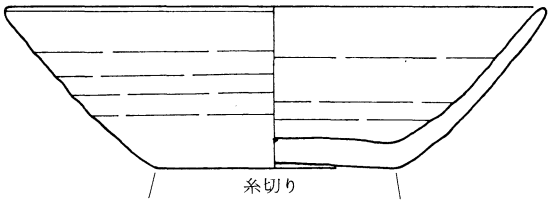
第Ⅳ群　糸切りにより底部が切り離されているものである。本遺跡においてはヘラ切りが大部分を占め、糸切りは全体の二割以下である。なお静止糸切りは全く認められない。底部切り離し後の調整の有無により二分できる。

Ⅳ－Ａ類　糸切りの後に周縁部あるいは体部下端を手持ちないしは回転ヘラ削りにより調整するもの。ヘラ削りは手持ちによるものが多い。底径が口径の½より大きく、体部は55度前後でやや内湾気味に立ちあがるものが多くロクロ痕も不明瞭なものが多い。胎土はかなり精選されており、焼成も良好であり、色調は青灰色を基調とする。口径14～15cm、底径８～９cm、器高４cm弱を測る。



Ⅳ群Ａ類　32号住居跡出土

Ⅳ－Ｂ類　底部に回転糸切り痕をそのまま残すもの。底径は口径のほぼ½となり、体部は45度前後で直線的に立ちあがり、比較的薄手に調整されている。胎土には小礫を若干含んでいるが、焼成は良好であり、灰白色を呈するものが多い。口径14cm～14.5cm、底径７cm前後、器高４cm弱を測りやや規格性を有する。



Ⅳ群Ｂ類　131号住居跡出土

なお、図示した土器は、甕形土器は⅓、他は½である。

(2) 編年軸の設定

以上、４器種について分類をおこなったわけであるが、この中で、編年の軸となりうるものは、先述したように、最も普遍的な存在を示している土師器坏形土器である。ここでは、この土師器坏形土器Ⅰ群～Ⅵ群が、はたして、そのまま時間軸として使用できるかどうかを、住居跡の重複関係と各群の共存関係との２点より、考えてみたい。

まず、住居跡の重複関係による時間差の摘出であるが、類型土器を伴なう切り合い関係を示すと次のとおりである。

31号住居跡（土師器坏形土器Ⅰ群Ａ類）→30号住居跡（土師器坏形土器Ⅱ群Ａ類、Ⅲ群Ｂ類）

82号住居跡（土師器坏形土器Ⅱ群Ｂ類(a)、Ⅱ群Ｃ類）→83号住居跡（土師器坏形土器Ⅵ群Ａ

類、Ⅵ群C類(a))

86号住居跡（土師器坏形土器Ⅰ群A類）→85号住居跡（土師器坏形土器Ⅴ群B類、Ⅵ群A類、Ⅵ群B類(b)、Ⅵ群C類(a))

102号住居跡(土師器坏形土器Ⅱ群A類、Ⅱ群B類(b)) →101号住居跡（土師器坏形土器Ⅵ群B類(b)、Ⅵ群C類(a)）

111号住居跡（土師器坏形土器Ⅰ群B類(a)) →110号住居跡（土師器坏形土器Ⅰ群B類(a)、Ⅱ群A類、Ⅱ群B類(b)）

132号住居跡(土師器坏形土器Ⅱ群A類、Ⅱ群B類) →131号住居跡(土師器坏形土器Ⅵ群B類(b)）

137号住居跡（土師器坏形土器Ⅱ群B類(b)) →135号住居跡（土師器坏形土器Ⅳ群)

138号住居跡（土師器坏形土器Ⅱ群A類、Ⅱ群B類(b)) →139号住居跡（土師器坏形土器Ⅵ群B類(b))

なお、ここに示した以外にも何例か重複関係が認められるが、良好な資料を欠くものや遺構的に新旧関係の明確でないものは、割愛した。また、使用した土器には、覆土中のものも含まれている。

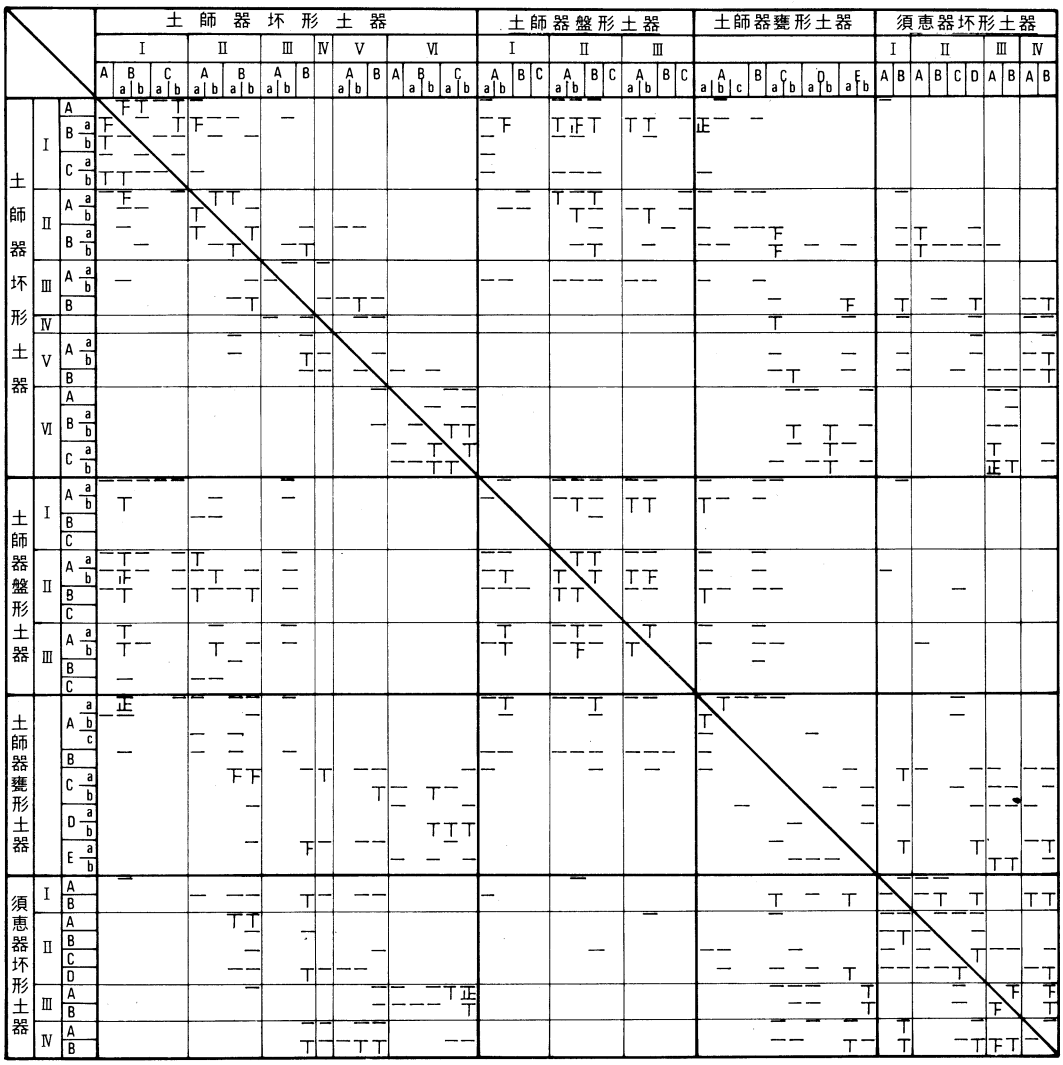
以上の重複関係を整理すると、土師器坏形土器にⅠ群→Ⅱ・Ⅲ群、Ⅰ群→Ⅴ・Ⅵ群、Ⅱ群→Ⅳ群、Ⅱ群→Ⅵ群、という先後関係が、認められる。しかし、これだけでは、断片的な先後関係を把握するに留まり、６群の密接なつながりは不明である。

そこで次に、類型化された土器の共存関係を頻度表に示し、そこから各群の先後関係を摘出する方法をとりたい。

この方法は、山田水呑遺跡で採用されているものであり、共存関係がより客観的にみられること、類型化された土器群の時間的なつながりが把握し易いことなどの利点がある。ことに、薬師寺南遺跡のように、遺物の量が厖大で、集落としてかなりの存続期間があるとみられる場合には有効な方法であろう。また、統計学的な処理を前提としているため、住居跡内から出土した残存率の高い遺物は、たとえ覆土中であっても、住居の廃絶時に近いものとして使用できないことが指摘されており、この点からも、住居跡内一括土器の抽出作業に限界があった薬師寺南遺跡の場合、有効と思われる。

ただ、薬師寺南遺跡では、先述したように重複関係よりある程度の先後関係は理解できるものの全体的な流れを把握するには限界がある。従って、それを補足検証する意味もあって、この方法をとることにした。

なお、頻度表の作成に関しては、全て山田水呑遺跡の方法[23]に従っているため、その詳細は省くが、ここでは作成した頻度表から読み取れることをまとめ、時間軸としての土師器坏形土器



薬師寺南遺跡における類型土器共存関係頻度表

の有効性を検証したい。

さて、土師器坏形土器の共存関係をみると、まず目につくのは、Ⅰ～Ⅱ群、Ⅲ～Ⅴ群およびⅥ群の３グループが、右下方に向って階段状に並んでいることである。結論から言えば、Ⅰ・Ⅱ群→Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群→Ⅵ群という先後関係がたどれることを意味している。つまり、Ⅰ群からⅥ群は、あらかじめ時間差を意図して設定したものであり、それが完璧なものであれば、各群は互いに他の群と共存することがないわけであるから、頻度表の上では、右下方へ整然とした６階段が形成されるわけである。従って、土師器坏形土器自体の共存関係より、少なくともⅠ・Ⅱ群→Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群→Ⅵ群という三段階の時間差をたどれることが、検証されたのである。

ところで、Ⅵ群の土師器坏形土器は、頻度表上、非常に強いまとまりを示しており、明らかに一時期を画するものとして大過ない。しかし、Ⅰ・Ⅱ群とⅢ・Ⅳ・Ⅴ群の場合、先述した重複関係の結果から考えても、まだ時間差を内在している可能性が強い。そこで次に、少し別な面から、これを検証してみたい。

まず、Ⅰ、Ⅱ群の土師器坏形土器についてであるが、Ⅰ群は、Ⅲ群と共存しているものの例外的であり、Ⅱ群との共存でほぼ消滅すると考えられる。これに対し、Ⅱ群は、Ⅲ群あるいはⅤ群との共存が認められ、Ⅰ群→Ⅱ群という漸移的な変化が想定できる。また他器種との共存関係を見た場合、盤形土器Ⅰ群との共伴がⅠ群では多いが、[3]Ⅱ群では少ないこと、さらに須恵器坏形土器は、Ⅰ群では共存していないが、Ⅱ群では確実に共存していることなどが、看取できる。

これらの所見は、土師器坏形土器自身の共存関係の所見と矛盾することがない。従ってⅠ・Ⅱ群は、互いに共存する時期があるものの、時間差をもって変化したものと考えてよかろう。

次に、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群については、どうであろうか。まず、Ⅵ群の場合、類例が少なく、一群としての設定には限界があり、その位置付けは、後に考えたい。

そこで、Ⅲ群とⅤ群についてであるが、両者は、互いに共存するところがあるものの、一つのまとまりを示している。さらにⅢ群はⅡ群との、また、Ⅴ群はⅥ群との共存が認められ、Ⅲ群→Ⅴ群という先後関係が、想定可能である。

また、他器種との共存関係を見た場合、盤形土器が、Ⅲ群とは共存するものの、Ⅴ群には共存が認められず、両者の時間差を立証する一因となっている。

ところでⅣ群についてであるが、本群は、Ⅲ・Ⅴの両群と同じような割合で共存しており、典型的な中間形態と言うことができる。しかし、先述したように、これを一時期として画するには、その絶対数が少なく、時期的には、Ⅲ群かⅤ群のどちらかに含まれるべきものであろう。ここでは、一応、型式学的な見地から判断して（詳細については、次章で説明する。）時期的にⅢ群に平行するものと考えておきたい。

以上をまとめると、土師器坏形土器には、Ⅰ群→Ⅱ群→Ⅲ群（Ⅳ群）→Ⅴ群→Ⅵ群という先後関係が認められることになる。もちろんこれは、重複関係よりみた先後関係とも矛盾するものではなく、土師器坏形土器が、編年軸として十分に使用できることを証明したものである。

次に、確立した土師器坏形土器の編年軸に類型化された他器種の土器を組み込んで、時期区分（編年）を行ってみたい。

(3) 時期区分

第Ⅰ期

伝統的な粘土紐積み成形による土師器坏形土器Ⅰ群に代表される時期であり、体部に鬼高的な強い稜あるいは段を有することを、最大の特徴としている。また、同群C類(b)にみられるように体部に沈線を配するものも一部伴出しているが、それらも体部内面には、明瞭な段を残している。

土師器盤形土器は、すでに共存しているが、なかでもⅠ群A類が比較的多いことは、特徴的である。この一群は、器形的に所謂盤形土器とは若干ニュアンスを異にし、技法的にも坏形土器Ⅰ群との共通性が認められ、本遺跡の典型的な盤形土器にみられるヘラ磨き、赤彩といった技法の定着以前と考えられる。つまり盤形土器としては、初現的な一群であると考えてよかろう。

土師器甕形土器は、A類が伴出する。口縁部に最大径を有し、胴部がほとんど張りをもたない長胴なものであり、所謂真間式土器の特徴を具備するものである。なお、B類は、器形、胎土ともに独特なもので、個体数も少ない。Ⅰ期からⅡ期にかけて伴出するが、搬入品の可能性が強い。

須恵器坏形土器は、伴出しないが、93号住居跡、111号住居跡より内面に「カエリ」を有する蓋形土器が伴出している点、注目しておきたい。

本期を代表する住居跡としては、12号住居跡、36号住居跡、60号住居跡、72号住居跡、81号住居跡、111号住居跡、146号住居跡などが挙げられ、住居跡総数は25軒前後である。

第Ⅱ期

土師器坏形土器Ⅱ群が中心となる時期である。本群は、Ⅰ群同様粘土紐積み成形によるものであり、器形的にも技法的にもⅠ群の系統につながるものである。特徴としては、体部に沈線を配するもの（Ⅱ群A類(b)、B類(b)）の盛行、平底化（Ⅱ群B類(b)）の進行などがあり、全体的には、Ⅰ群に比して体部の稜あるいは段が、かなり退化していることが指摘できる。

土師器盤形土器は、Ⅰ群が減少し、ほとんどのものにヘラ磨きや赤彩が施される典型的な盤形土器の盛行期である。なかでも内外面にヘラ磨き、赤彩を施し、器形的にも文字どおり盤状を呈するⅢ群C類などは、本期を最も特徴づける土器の一つと言える。

土師器甕形土器は、C類(b)、D類(b)、E類(b)を除いた全てが伴出していることから、かなり多様な様相を示す時期と言える。この中で主体となっているのは、第Ⅰ期からひきつづいて存在しているA類と本期より新出するC類(a)であり、特に後者は、以後本遺跡における土師器甕形土器の主流となって行くものである。土師器甕形土器における一つの転換期と言えよう。

須恵器が、本期より確実に伴出することが認められ、大きな特徴となっている。本期に伴出する須恵器坏形土器は、Ⅰ群およびⅡ群A・B類であり、底径が口径の½より大きく器高が比較的低いこと、底部全面をヘラ削り調整することなどを特徴としている。底部切り離し技法は不明なものが多いが、何例かにヘラ切りの痕跡が確認できるのに対し糸切りのものは、確認できない。なお、器種的には坏形土器ばかりか高台付のものや蓋が多い点も注目したい。

本期を代表する住居跡としては、24号住居跡、27号住居跡、30号住居跡、33号住居跡、79号住居跡、80号住居跡、82号住居跡、110号住居跡などが挙げられ、住居跡総数は25軒前後である。

第Ⅲ期

土師器坏形土器Ⅲ群が出現する時期である。やはり、粘土紐積みで成形されるが、完全な平底になっており、Ⅱ期にみられた平底化（Ⅱ群B類(a)）が、完成された段階と考えられる。調整技法をみると、ヘラ削りの後、内面あるいは、内外面にヘラ磨きを施すものがあり、土師器盤形土器との技法的な関連が、うかがえる。

ところで、調整の段階でロクロを使用しているⅣ群が出現するのも本期の特徴である。おそらく、本群もⅢ群同様粘土紐積みによって成形されたと思われ、器形的にもⅢ群に類似し、ロクロ土師器としては、最も古い一群と考えられる。

以上のことより本期は、土師器坏形土器の一部にロクロ技術が導入される段階であり、坏形土器の大きな転換期と考えられる。

土師器盤形土器は、例外的に伴出する程度であり、本期をもって完全に消滅する。

土師器甕形土器は、A類に代ってC類(a)が主体となり、これに加えて新たに薄手なD類(a)、E類(a)が伴出している。所謂真間式土器的な長胴を呈するものは、完全に姿を消しており坏形土器同様に新しい段階に入ったと言える。

須恵器坏形土器は、前期と同様Ⅰ・Ⅱ群が継続して伴出するが、ヘラ切りのままのもの（Ⅱ群C・D類）も認められる。また類例は少ないが、糸切りのもの（Ⅳ群A類）も出現しており、本遺跡における初現と考えてよい。ただし糸切りのものは、全て底部に回転か手持ちのヘラ削り調整が施されている。

本期を代表する住居跡としては、32号住居跡、44号住居跡、49号住居跡、102号住居跡、135号住居跡などが挙げられ、住居跡総数は15軒前後である。

第Ⅳ期

土師器坏形土器Ⅴ群に代表される時期であり、技法的に古いもの（Ⅰ～Ⅲ群）は姿を消し、ロクロ土師器が本格的に使用される段階である。ただし本群は内面にヘラ磨き・黒色処理を施すという共通した特徴があるものの、器形的にはばらつきがあり、まだロクロ技術の定着する前段階と考えられる。なお、ほとんどのものが底部全面を回転か手持ちでヘラ削りしているが、この中に数例糸切り痕を留めるものがあり切り離し技法の一端がうかがえる。

また、墨書土器が少数ではあるが認められ、本遺跡での墨書土器の初現として留意したい。

土師器甕形土器は、前期と基本的変化は認められないが、C類(a)の伴出が多く新たにC類(b)も出現してくることが特徴である。C類(b)は、C類(a)に代ってⅤ期に盛行するものであり、C類(a)→C類(b)という変化が、看取できる。

須恵器坏形土器は、Ⅰ群およびⅡ群A・B類の最終段階であり、Ⅱ群C・D類およびⅢ群などのヘラ切り痕をそのまま残すものが多くなる。なおⅣ群の糸切りのものは、依然として少量であり、ヘラ削り調整を加えないB類も僅かに認められる。

本期を代表する住居跡としては、35号住居跡、47号住居跡、54号住居跡、91号住居跡、101号住居跡、136号住居跡、141号住居跡などが挙げられ、住居跡総数は20軒前後である。

第Ⅴ期

土師器坏形土器Ⅵ群に代表される時期であり、ロクロ技術が定着し器形が規格化された点が最大の特徴である。また、使用途により分化したと推定される大形の坏（B類(a)、C類(a)）と小形の坏（B類(b)、C類(b)）が整然と区別されてくることも特徴的であり、ここにもロクロ技術の定着がうかがえる。技法的には、内面のヘラ磨き・黒色処理が例外なく施されており、切り離し技法は、ほとんどが糸切りである。

なお、墨書土器の盛行も、本期の大きな特色であり、同じ墨書が別の遺構から出土した例も認められる。(例えば、126号住居跡と4号井戸跡の『福饒』と墨書された土器。)

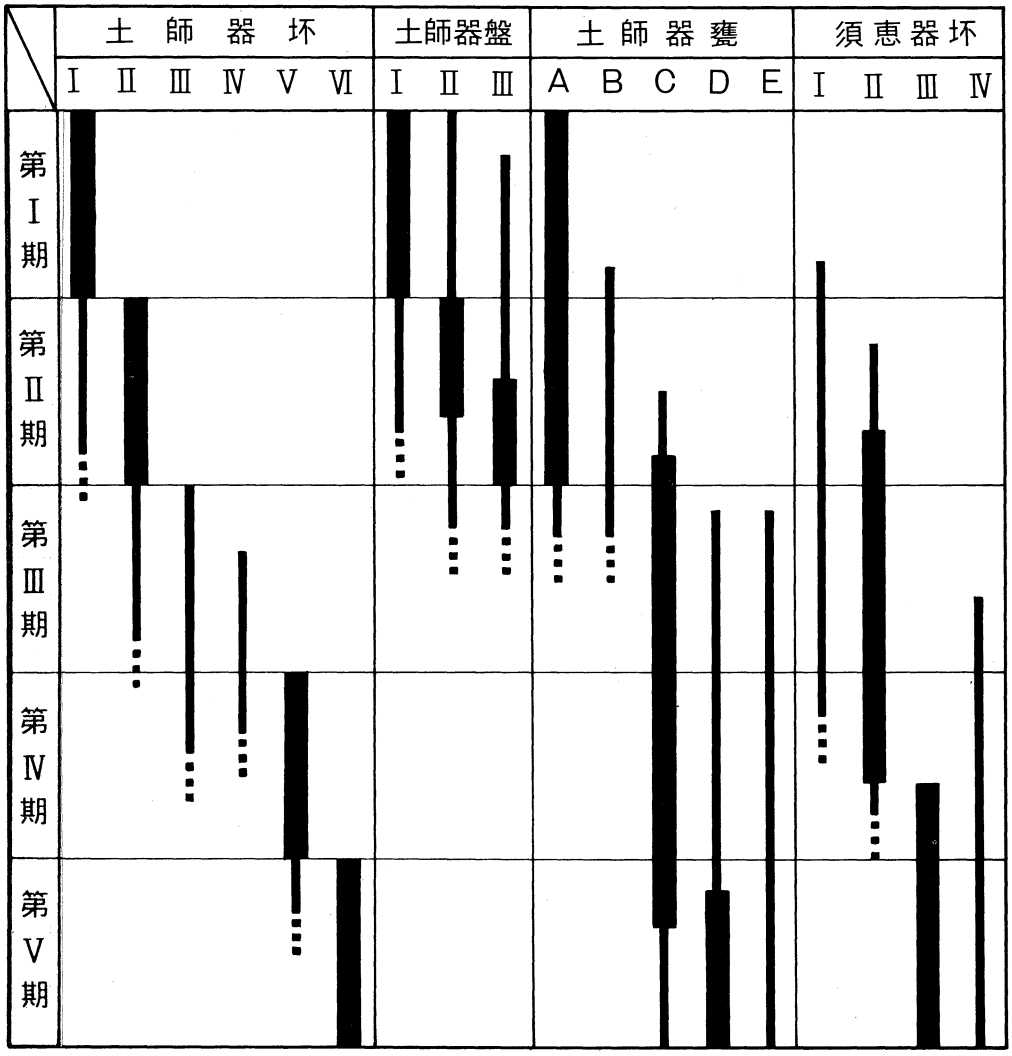
土師器甕形土器は、新たにD類(b)、E類(b)などが出現しバラエティーに富むが、主体的なものは、上記した新出の二つとC類(b)である。また、土師器坏形土器の共伴関係から、D類(b)は、D類(a)より、E類(b)はE類(a)より器形変化したことが看取され、D類・E類とも本期になると口縁部が「く」の字状から「コ」の字状に変化しているのが特徴的である。

須恵器坏形土器は、Ⅲ群が主体的であり、ヘラ切りで底径が口径の½かそれよりも小さくなるという特徴をもっている。また糸切りのもの（Ⅳ群B類）は少数であり、土師器坏形土器が糸切りの全盛であることと好対象を示し、興味深い。なお、本期では、須恵器坏形土器にも墨書例が認められ、墨書土器盛行の一端が伺い知れる。

本期を代表する住居跡としては、83号住居跡、85号住居跡、105号住居跡、107号住居跡、126

号住居跡、131号住居跡、140号住居跡、147号住居跡などが挙げられ、住居跡総数は20軒前後である。

以上、本遺跡の土器群をⅠ～Ⅴ期に区分したわけであるが、これに従って作成したものが、「薬師寺南遺跡出土土器編年表」である。なお、図には類型化された土器以外に、特徴的であると思われるものを類型土器との共伴関係から組み入れてある。また下表は、各類型土器の消長関係を模式的に示したものである。



薬師寺南遺跡における類型土器の消長関係

(4) 実年代の考察

さて、以上のようにして本遺跡の歴史時代土器を五期に区分した訳であるが、最後に各時期の実年代を考えてみたい。なお、残念ながら本遺跡には、直接実年代を考定できる資料がないため、これらの資料を伴出する他遺跡との比較および他地域における編年との対比を中心に考察を進めたい。

第Ⅰ期

最初に第Ⅰ期の年代であるが、本期を特徴づけているのは、土師器坏形土器Ⅰ群であり、まず、この土器群の時間的位置を考えて行きたい。ところで、南関東の土師器坏形土器にこの種の土器群はみられない。この点問題も多く本遺跡の一つの特徴であり、次章で詳述したい。

そこで、ここでは、坏形土器に類似するものがみられ、かつ多賀城跡あるいは陸奥国分寺跡などの資料を中心に年代的にも比較的固まりつつある東北地方南部の編年との対比を行ってみたい。

東北地方南部の土師器編年は、氏家和典氏によって大系づけられて以来[24]、各研究者によって器種の組合せおよび年代観をより詳細に検討する作業が進められてきた。なかでも岡田茂弘、桑原滋郎両氏[25]は、多賀城周辺の資料を中心として、須恵器坏形土器の変遷および瓦との共伴関係から栗囲式（７世紀～８世紀半）→国分寺下層式（８世紀半～９世紀中半）→表杉ノ入式(9世紀後～11世紀後）という年代観を発表され、これが現在東北地方南部の基準となっているようである。

ところで桑原氏は、その後、多賀城周辺の砂押川遺跡出土土器を器形・製作技法より細分され、土師器坏形土器における栗囲式と国分寺下層式の具体的内容を明らかにされている[26]。これをみると前者から後者への器形変化は、薬師寺南遺跡における土師器坏形土器ⅠからⅢ群のそれと非常に類似していることがわかる。ただ栗囲・国分寺下層両型式の場合、例外なく内面ヘラ磨き・黒色処理がなされるのに対し、薬師寺南遺跡のものは、内面を全てナデ調整するという技法面での相違がある。この点はかなり大きな問題を内包していると思われるが、ここでは一応器形的な関連が強いということを重視して、併行関係を推定してみると次のようになると思われる。

栗　囲　式		国分寺下層式
薬師寺南Ⅰ群	薬師寺南Ⅱ群	薬師寺南Ⅲ群

ところで栗囲式土器は、多賀城創建時の瓦に共伴する須恵器との共伴関係[27]や、陸奥国分寺跡で最も古い土器群にそれが認められないことなどより、８世紀中半頃が下限とされている。従って前紀の併行関係が許されるとすれば、土師器坏形土器Ⅰ群には、８世紀前葉もしくはそれ

以前という時間的位置が与えられよう。

次に前記した土師器坏形土器Ⅰ群の実年代を別の側面より検証してみたい。

第Ⅰ期の土師器盤形土器と甕形土器をみると、八王子市下寺田遺跡[28] SB03、SB05 住居跡出土のものに類似性が認められる。すなわちこの両住居跡の土師器坏形土器の主体となっているものは半球状を呈するものであるが、内面および口縁部外面をナデた後に外面をヘラ削りするものであり、ヘラ磨きは施されておらず、赤彩されたものも非常に少ない。これらの器形的、技法的特徴は、薬師寺南遺跡における土師器盤形土器Ⅰ群A類(b)に求めることができ、さらにSB05 住居跡から出土している唯一の盤状を呈するものも技法的に変るところはなく、同Ⅰ群C類に比定できる。このように下寺田遺跡の土師器坏形土器（盤形土器も含む）は、薬師寺南遺跡第Ⅱ期の盤形土器にみられるヘラ磨き・赤彩といった手法の盛行する前段階、すなわち第Ⅰ期に比定できるものと考えられる。そしてこれに共伴する甕形土器も、薬師寺南遺跡におけるA類のそれと器形的[29]に類似している。

下寺田遺跡 SB03・SB05 住居跡の土器群は、共伴している須恵器が和同年間の操業と推定される美濃国朝倉窯の製品であることより、8世紀前半代に位置づけられており、所謂真間期の実年代が判明する貴重な資料となっている。従って薬師寺南遺跡第Ⅰ期の盤形土器・甕形土器も、前記の坏形土器とほぼ同様な年代（8世紀前葉）が考えられる。

以上のように、第Ⅰ期の年代をそれぞれ別な器種をもって考えた訳であるが、ほぼ同じ年代を示したことは、第Ⅰ期の年代観にかなり蓋然性を有すると言えよう。

ところで第Ⅰ期の土器群は、土師器坏形土器や甕形土器の一部に所謂鬼高式土器の範疇も含められるべきものも認められ、7世紀代まで遡りうることは十分考えられる。これはまた、本集落の形成となんらかの有機的なつながりがあったとみられる下野薬師寺の創建が、7世紀末葉とされている[30]ことも考え併せて、第Ⅰ期の上限は7世紀後半まで含む可能性があることを指摘しておきたい。

第Ⅱ期

第Ⅱ期の年代は、前述した東北南部の編年からすれば、土師器坏形土器Ⅱ群の中に栗囲式から国分寺下層式への変換期が認められ、8世紀中葉を中心とした時期が考えられる。

この年代比定を補強するものとして、75号住居跡よりⅡ群の土師器坏形土器に伴って出土した暗文土器がある。これは、体部内面に斜格子状、底面にラセン状の暗文を配す平底の坏形土器であり、胎土・焼成の点からも搬入品の可能性が強いものである。

これと同じような暗文を有すものは、関東地方でもいくつか散見できるが、なかでも横浜市森戸原遺跡[31]より出土したものは、和同開珎と伴出しており、その上限が求められる点注目すべきものである。また山田水呑遺跡では、体部に斜格子状の暗文をもつ平底の坏形土器が出土し

ているが、これを上総国分寺の創建時に近い時期のものと考え、８世紀中葉に比定されている。これは、和同開珎を伴出した森戸原遺跡例とも矛盾する時間比定ではないと思われる。これらの平底の坏形土器には、体部内面に特徴的な斜格子状の暗文が共通して認められ、これを伴出する第Ⅱ期は、８世紀中葉に比定してよいものと考える。

ところで第Ⅱ期は、薬師寺南遺跡において須恵器が一般化する時期であり、見方を変えれば、地元における須恵器生産が開始された時期とも考えられる。従って、本県における須恵器生産の開始時期を生産遺跡の面より指摘することが可能であれば、第Ⅱ期の年代観も明確さを増すことになろう。

そこで、現在、県内で操業開始時期が最も早いと考えられるものを捜すと、佐野市三毛山麓古窯跡群が挙げられる。その理由としては、本古窯跡群中の北山３号・５号両窯跡[32]より内面に「カエリ」を有する蓋が出土していることであり、現在、他の古窯跡群で同種の蓋を見い出すことはできない。ところで本古窯跡群は、下野国分僧寺・尼寺の創建から終末までの瓦を供給していた窯として知られている。[33]すなわち、東国における須恵器生産がそれぞれ国分寺の創建に伴なう瓦生産と結びついておこなわれたという見解[34]を重視すれば、三毛山麓古窯跡群において国分寺の創建期である８世紀中葉に須恵器の生産も開始されたことが考えられ、また「カエリ」を有する蓋からすれば、それ以前に遡る可能性も考えられよう。

以上のことより、本県において須恵器生産が開始する時期としては、８世紀中葉ごろが考えられ、さきに考察した薬師寺南遺跡第Ⅱ期の年代と矛盾せず、年代観に関してはかなりの蓋然性を有すると考える。

薬師寺南遺跡第Ⅱ期の須恵器の多くは、三毛山麓古窯跡群からの供給を受けていたと考えているが、決定的な証拠はなく、今後、胎土分析等多方面より検証して行かなければならない。

第Ⅳ・Ⅴ期

次に、第Ⅲ期の時間を比定する前に第Ⅳ・Ⅴ期の時間的位置づけを、おこなってみたい。両時期は、前章でも述べたようにロクロ使用の土師器坏形土器が本格化する時期であり、また須恵器坏形土器も多くなる時期である。県内でこのような時期の集落としては、現在真岡市井頭遺跡[35]や益子町ケカチ遺跡[36]等を挙げることができるが、特にケカチ遺跡においては、この時期の土器に伴って石帯が出土しており、実年代を考察する上で貴重な資料となっている。そこで、ここではケカチ遺跡の土器との比較検討を通して、第Ⅳ・Ⅴ期の年代を考察してみたい。

さて、ケカチ遺跡の土器をみると、量的に多い須恵器坏形土器は、全てがヘラ切りのままのものであり、器形的には口径が底径の½かそれ以下で、体部の立ちあがりが直線的であるという特徴を有している。これらは薬師寺南遺跡におけるⅢ群の須恵器坏形土器の中に共通性が認められる。一方、土師器坏形土器は、量的に少なく、ほとんどが底部全面を回転ヘラ削り調整

しており、技法的には薬師寺南遺跡におけるⅤ群の土師器坏形土器に類似するが、器形的には定形化した段階に入ったと思われるものがあり、同Ⅵ群との共通性もみられる。また、墨書土器が多いという点もケカチ遺跡の特徴であり、同Ⅵ群の様相と共通している。以上の所見より、ケカチ遺跡は、大略薬師寺南遺跡第Ⅳ～Ⅴの時期と併行する集落と考えて大過あるまい。

ところで、ケカチ遺跡でこれらの土器群に伴出する石帯は、裏面に三個の潜り孔[37]を有するものであり、報告書では810年（弘仁元年）に石帯の使用が復活してから以降の所産であることが指摘されている。さらに、これを出土した住居跡は、焼失家屋であるらしいことより、土器群との共伴関係もかなり確実性があると言える。つまりケカチ遺跡の年代としては、少なくともその上限が810年、すなわち9世紀初頭に求めることができる。

以上のことから、薬師寺南遺跡第Ⅳ～Ⅴ期の上限年代は、9世紀初頭と考えられる。

ところで、第Ⅳ期とⅤ期は、前章でも示したとおり、明らかに時間差をもつものであるが、ケカチ遺跡との比較では、この点が明確にし難く、特に第Ⅴ期の年代観は曖昧である。そこで、次に第Ⅴ期の年代に関して、別の側面から考察してみたい。

第Ⅴ期の須恵器坏形土器をみると、糸切りのものにヘラ削り調整を加えないものが多くなるという特徴がある。この点について武蔵地方では、新久窯跡[38]の調査結果から、須恵器坏形土器に糸切りのままのものが一般化するのは、9世紀中葉であることが指摘されている。また、器形的には、口径が底径の½以下になるという特徴があり、この点について神奈川県秦野下大槻遺跡[39]では、9世紀中頃以降の須恵器坏形土器にみられる傾向であることを指摘している。以上のことからすれば、第Ⅴ期には、9世紀中葉以降という年代が与えられよう。

ただし須恵器坏形土器の様相は、本遺跡でヘラ切りのものが終始使われているという状況からして、地域差があることが十分考えられ、武蔵や相模地方の様相をそのままあてはめるのは、慎しむべきかもしれない。従ってここでは、一つの目安として9世紀中葉以降という年代を符与しておきたい。

以上の考察をまとめると、第Ⅳ期の年代は9世紀前半、第Ⅴ期の年代は9世紀中ば以降となり、その下限に関しては、今後の課題としておきたい。

第Ⅲ期

さて、最後に残った第Ⅲ期の年代としては、第Ⅱ期が8世紀中葉、第Ⅳ期が9世紀前半ということより、8世紀後葉を中心とした時期が必然的に符与できる。

第Ⅲ期の年代比定は、前記したように前後の時期を比定してから機械的に考えたわけであるが、これは第Ⅲ期という時期の特性より起因している。つまり、本期の場合、あらゆる器種において技法的、器形的に転換する時期であり、器種構成はかなり不安定な様相を示している。従って、時期を特徴づけるというような明確な器種がなく、土器組成による他遺跡との対比を

困難にしている。

以上のことより第Ⅲ期は、薬師寺南遺跡全体の流れの中において、第Ⅰ・Ⅱ期に代表される８世紀型の土器から第Ⅳ・Ⅴ期に代表される９世紀型の土器への過渡的なニュアンスをもつ時期と考えられる。

最後に下野薬師寺の存在について若干ふれておくと、第Ⅲ期の年代として与えた８世紀後葉は、戒壇が設定されたと推定される時期であり、下野薬師寺が最もその栄華をきわめた時期でもある。この第Ⅲ期になると薬師寺南遺跡の住居跡から瓦片（恐らく下野薬師寺のものであろう）の出土がみられるようになり、前記した下野薬師寺の状況（例えば、改築）となんらかの関連があったことが推定される。

以上、第Ⅰ～Ⅴ期の実年代の考察をまとめると、第Ⅰ期、８世紀前葉（上限は７世紀代まで遡り得る可能性がある。）、第Ⅱ期、８世紀中葉、第Ⅲ期、８世紀後葉（９世紀初頭まで降る可能性がある。）、第Ⅳ期、９世紀前半、第Ⅴ期、９世紀半ば以降ということになる。

実年代の比定に関しては、絶対年代を示す決定的資料を欠き、他遺跡との対比により考えてきたわけであるが、資料操作も不十分であり、大きな誤謬を犯した可能性は否定できない。しかし、本県の研究状況を概観するとき、一遺跡の徹底的分析を通じての編年の集積の結果より、初めて複雑な様相を呈する歴史時代土器の具体相が明らかになるだろうことを考慮して、敢えて愚論を展開したわけである。

Ⅲ　問題点の整理

さて、薬師寺南遺跡の編年作業を通じて提起された問題点としては、(1)土師器坏形土器Ⅰ～Ⅲ群の問題、(2)土師器甕形土器の問題、(3)ロクロ使用坏形土器の問題、(4)墨書土器の問題等が挙げられるが、(4)に関しては、取り上げるべき問題点がかなり多いため、別章で扱うこととし、ここでは(1)から(3)の問題について若干触れておくことにしたい。

(1)　土師器坏形土器Ⅰ～Ⅲ群について

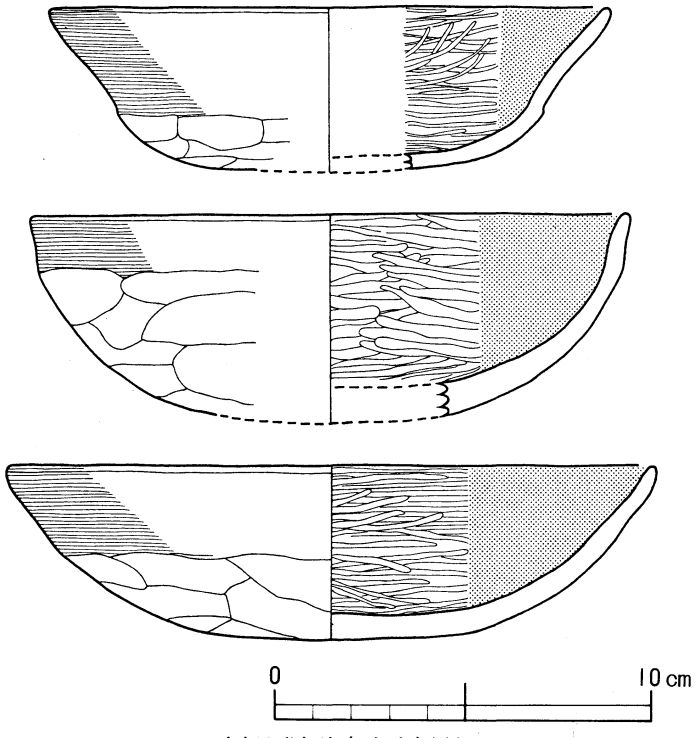
これらの土器群は、その上限が７世紀代にまた下限が９世紀初頭になる可能性を有するものの、ほぼ８世紀の所産と考えられる。ところでⅠ群からⅢ群へという器形的な変化は体部における鬼高的な稜あるいは段の退化という大きな流れの中で把握できる。さらに、Ⅲ群に至って明らかにされるように、平底化の進行という現象も認められ、第Ⅲ期に出現するロクロ使用坏形土器へのスムーズな移行を示すような感を与える。一方技法的には、Ⅲ群に至ってヘラ磨きが施されるようになるものの、基本的にはナデとヘラ削りによって調整されている。

さて、以上のような特徴を有する土師器坏形土器Ⅰ～Ⅲ群は、時間的には概略南関東における真間期に併行する。たしかに、本遺跡において坏形土器Ⅰ～Ⅲ群と共伴する土器を概観すると、土師器甕形土器A類や盤形土器であり、杉原氏が須和田遺跡の土器群をもって明らかにされた真間式土器の特徴を具備していると言えよう。[40] しかし、土師器坏形土器をみた場合、Ⅲ群については平底という点において南関東真間期後半の特徴に共通するものの、[41] Ⅰ・Ⅱ群については、ほとんど類似性をみい出すことができず、真間式土器の範疇からは明らかに逸脱すると思われる。すなわち薬師寺南遺跡は、甕形土器および盤形土器からみて明らかに真間式土器の分布範囲に編入されているものの、坏形土器は強い地域性を有すると考えられる。

この点、東京都下寺田遺跡[42]において服部敬史氏は、真間式土器には「……かなり広範な型式的特徴を有するものがある反面、その他本型式を構成する他の器種は、かなり限定された分布しか示さない……」と指摘されており、真間式土器の理解としてかなり説得力のあるものと考える。上記のように真間式土器を理解すれば、薬師寺南遺跡におけるⅠ～Ⅲ群の土師器坏形土器は、真間式土器において限定された分布を示す土器群の一つと言うことができよう。

さて、以上のように土師器坏形土器Ⅰ～Ⅲ群は、広義の真間式土器の範疇にありながら、それ自体では編年的位置づけをすることの困難な土器である。このため前章では、器形的特徴に類似性がみられることより、敢えて関東という枠を越え、東北地方南部を注目したわけである。その結果は、前章で示した通り、内面におけるヘラ磨き・黒色処理の欠如という点を除けば、その他の調整技法および器形には、強い関連が認められることが判明したのである。

ところで、坏形土器における本地方と東北地方南部の関連性に関して、これを決定づけるような資料が県北の那須郡湯津上村小松原遺跡[43]より出土している。(図参照) これは、器形的には薬師寺南



小松原遺跡出土土師器

遺跡における Ⅰ・Ⅱ群の坏形土器の範疇で処理できるものであるが、内面はヘラ磨き、黒色処理が施されており、まさに東北地方南部の土器[44]そのものと言えよう。視点を変えれば、本県においても該期の坏形土器には地域差を有するということである。

従来、本県の土師器研究は、関東地方という枠にとらわれ、あまりにも南関東の編年に拘泥していた感を免れ得ない。本県に隣接する東北地方南部との関連性をほとんど無視していたことは不自然であり、今回の編年にしても南関東の編年では処理しきれない土器群があったために東北地方に注目したに過ぎない。今後、東国の北辺に位置する地理的環境を考慮に入れ、律令体制の展開の中では東北南部との有機的関連を想定して、土師器研究を進展させることを痛感する結果となった。

(2) ロクロ使用坏形土器について

8～9世紀と言えば、土器の長い歴史の中でも大きな変革の時期と言うことができよう。それは、土師器坏形土器へのロクロ技術の導入や須恵器の一般化などにみられるロクロ使用土器の浸透である。なかでも坏形土器におけるそれは著しく、薬師寺南遺跡でも大量の須恵器坏形土器およびロクロ使用土師器坏形土器が出土している。ここでは、薬師寺南遺跡の編年をもと

	ロクロ使用土師器坏					須恵器坏				
	全面調整	ヘラ切り調整	ヘラ切り	糸切り調整	糸切り	全面調整	ヘラ切り調整	ヘラ切り	糸切り調整	糸切り
Ⅰ										
Ⅱ						正正	正下	一		
Ⅲ	正			一		正下	正下	正下	下	
Ⅳ	正			正	下	下	正	正正 一	一	正
Ⅴ	一	下		正下	正正 正	一	一	正		下
計	13	3	0	14	17	21	23	25	4	10
		3		31			48		14	
	47					83				

薬師寺南遺跡におけるロクロ使用坏形土器の様相

にして、これらロクロ使用坏形土器の特色および問題点をまとめ、あわせてほぼ同時代と考えられる周辺遺跡出土土器との比較検討を行ってみたい。なお、ロクロ使用坏形土器としてここで扱うものは、土師器と須恵器の二者[45]とする。

まず、ロクロ使用坏形土器の底部切り離し技法に着目して、本遺跡各時期における出土量の変化を示すと前表のとおりである。

前表をもとにして本遺跡のロクロ使用坏形土器の様相を簡単にまとめてみたい。

須恵器坏形土器は、第Ⅱ期（８世紀中葉）より伴出が本格化するが、ヘラ切り技法が第Ⅴ期（９世紀半ば以降）まで安定して持続しており、第Ⅲ期（８世紀後葉）に出現する糸切り技法が主体的となる時期を本遺跡中に求めることはできない。一方ロクロ使用土師器坏形土器は、第Ⅲ期にその初現的なものが出現するが、第Ⅳ期（９世紀前半）には、早くも糸切り技法が定着しており、ヘラ切り技法が明瞭な一時期を画することはなく、須恵器坏形土器の場合と好対照の様相を示している。また、両者の出土量の割合をみると、第Ⅲ・Ⅳ期において須恵器坏形土器はロクロ使用土師器坏形土器を量的に圧倒しているが、第Ⅴ期になるとこの関係が逆転している。これはロクロ使用土師器坏形土器が着実に増加する一方で須恵器生産自体が後退期に入ったためとも考えられる。なお、本遺跡のロクロ使用土師器坏形土器は、そのほとんどが内面黒色処理という強い特性を有しているが、少なくともこれは本遺跡におけるロクロ未使用土師器坏形土器には認められない技法であり[46]、ロクロ技術導入に伴ってこの技法ももたらされる可能性が指摘できよう。

以上のように本遺跡の須恵器坏形土器とロクロ使用土師器坏形土器をみると、底部切り離し技法およびその展開にはかなりの相違が認められる。もちろんロクロ使用土師器坏形土器が須恵器製作技術の影響下に発生したことに疑念の余地はないが、上記のようにその後の展開には、かなり独特なものがあり、ロクロ使用土師器坏形土器の生産が、須恵器の受容あるいは須恵器生産自体とどのような関連をもっていたかは興味深いところである。

次に本遺跡におけるロクロ使用坏形土器の様相が、県内でどれほどの普遍性を有しているかを検証してみたい。

まず須恵器坏形土器におけるヘラ切り技法の盛行についてであるが、この様相は特に県東部において著しく、薬師寺南遺跡第Ⅲ～Ⅳ期に比定できる真岡市井頭遺跡[47]では須恵器坏形土器の９割近くが、また薬師寺南遺跡第Ⅳ～Ⅴ期に比定できる益子町ケカチ遺跡[48]では須恵器坏形土器のほとんど全てがヘラ切り技法である。薬師寺南遺跡Ⅲ～Ⅴ期の須恵器坏形土器においてヘラ切り技法が主流を占めているものの糸切りのものがある程度の割合（２～３割）を持って存在している点を考えると上記両遺跡に代表される県東部のヘラ切り技法の盛行という様相は、かなり純粋なものと言えよう。ところが薬師寺南遺跡第Ⅲ～Ⅴ期に比定できる佐野市掘米遺跡[49]、

同工業団地遺跡[50]の須恵器坏形土器をみると糸切りのものが多い。もちろん限られた資料から速断するのは危険であるが、様相としては県南西部に行くに従ってヘラ切りのものが減少するようであり、ヘラ切り技法の盛行は、県内においても地域的に限定されるものと考えられる。

一方ロクロ土師器使用坏形土器における糸切り技法の早い定着と内面黒色処理の盛行についてであるが、後者については県内でかなり普遍的に認められる。例えば、薬師寺南遺跡第Ⅴ期に比定できる県北の小松原遺跡[51]のロクロ使用土師器坏形土器は大部分内面黒色処理であり、前章で触れた東北地方との関連がここでも強く指摘できる。しかし、糸切り技法の定着という様相については、例えばケカチ遺跡のロクロ使用土師器坏形土器が全て全面回転ヘラ削り調整という特徴を有している点、薬師寺南遺跡における糸切り技法の定着を普遍的なものとは理解し難く、現時点ではむしろ地域性ということも考えなくてはなるまい。

最後に須恵器生産遺跡と本遺跡の関係について若干触れておきたい。

まず、本遺跡において主流を占めているヘラ切りの須恵器坏形土器Ⅱ・Ⅲ群の供給源としては、その器形や胎土[52]の面からみても、ヘラ切りを主体とした須恵器坏形土器の生産が知られる益子古窯跡群[53]に求めるのが最も妥当であろう。一方少量ではあるが確実に存在している糸切りの須恵器坏形土器Ⅳ群の供給源としては、益子古窯跡群の供給を強く受けていたと思われる県東部、例えば上記した井頭遺跡やケカチ遺跡で糸切りのものが極端に少ない事実からして、益子古窯跡群に求めるのは困難であろう。従って現段階においては、先述した県西南部の集落における糸切りの須恵器坏形土器の優勢という様相から判断して、該地方にかなりの供給をおこなっていたと思われる佐野市三毛山麓古窯跡群[54]に求めるのが妥当かと考える。ただし三毛山麓古窯跡群の該期の実態が明確にされていない現在、推測の域を脱しきれない。

以上のように本遺跡は、多くの須恵器を益子古窯跡群から供給を受けていたが、県央部という地理的な条件もあり、県東部の井頭・ケカチ遺跡ほどではなく、おそらく一部三毛山麓古窯跡群からの供給も受けていたものと考えられる。なお以上は、須恵器生産が地元で定着したと思われる薬師寺南遺跡第Ⅲ期以降を中心とした様相であり、須恵器の出現期とした第Ⅱ期の様相としては、器形のみならず胎土にも多様性が認められ、産地同定を困難なものにしている。おそらく該時期においては、県外からの搬入品[55]があったことも否定できないであろう。

須恵器の受容とともに展開する8～9世紀の土師器生産、とりわけロクロ使用土師器坏形土器の生産は、いわば律令制社会の直接的な影響下で発達した須恵器生産と多くの点で関連性をもつものである。従ってこのロクロ土師器坏形土器の展開を明確にすることは、古代土師器生産全体のあり方を究明することとも係わり、この点からも須恵器とロクロ土師器の生産面での関連を究明するのが今後大きな課題と言えよう。

(3) 土師器甕形土器について

薬師寺南遺跡において甕形土器は、多種多様な変化を示しており、純粋な型式分類は、困難であった。そこで、器形の特徴に加え胎土や調整技法を観察することよりA類、B類、C類、D・E類の4グループに区別されることが確認できたわけである。

ところでA類の場合は、前段階（鬼高式土器）からの流れの中で把握できる甕形土器である。しかし、B類、C類、D・E類は、それぞれ独特な胎土、調整技法を有する点が特徴的であり、これらが全て地元で製作されたとは考え難い。むしろ、生産地など系統の違いを想定する方が自然であり、すでに南関東各地の甕形土器の研究が、この方向で進められていることは、研究史でも触れた通りである。これら三者の甕形土器を南関東で言われている各系統に当てはめるとすれば、次のようになろう。

薬師寺南遺跡B類＝相模型（昭和51年・河野）[56]

薬師寺南遺跡C類＝下野型（昭和52年・松村他）[57]

薬師寺南遺跡D・E類＝武蔵型（昭和51年・河野）[58]

これらの他にも下総型、中部型などの系統も提唱されているが、いずれにしてもその妥当性を確めるには、各土器群自体の特徴づけを明確にすることと、より正確な分布範囲を把握することが必要であろう。従ってここでは、特に本地方の特有とされている「下野型」(薬師寺南遺跡C類）の甕について、その特徴および現在知り得る分布範囲について明らかにしておきたい。

まず、薬師寺南遺跡のものを参考にしてその特徴を整理すると、次のようになる。

器形　最大の特徴は、短かく立ち上がる口唇部にある。これは、横なで（ロクロ使用か？）時のつまみによると思われるが、これが著しい場合には、断面が「S」字状となる。なお肩部に張りを有することも特徴の一つである。

調整技法　胴部外面は、ヘラ削りの後ナデ調整で平滑に仕上げられ、さらに下半部を幅4～5㎜のヘラで縦位に磨くという特徴を有している。また、口縁部の横なでには、かなり回転力のあるもの（ロクロか？）が使用されたと思われる。

胎土　本土器を特徴づける一つであり全体的に精選されているが、長石粒や雲母末を多量に含み、他の土器との識別が容易である。

この他に、底部には必ずと言ってよいほど木葉痕を残し、色調は黄褐色および赤褐色を基調としている。

次にその分布を調べてみたい。まず県内でこの種の甕形土器を出土した遺跡を挙げると矢板市後岡遺跡[59]、宇都宮市瑞穂野遺跡[60]、同市猿山遺跡[61]、上三川町西赤堀遺跡[62]、南河内町薬師寺南遺跡、真岡市井頭遺跡[63]、同市市中村遺跡[64]、益子町ケカチ遺跡[65]などであり、それが県央から東部に集中しているのが特徴的である。もちろん限られた資料から速断するのは危険であるが、県南部や

北部での該時期の調査例[66]よりは、この種の甕形土器がほとんど出土しておらず、下野型と呼称される甕の分布は、本県でも地域的に限定される可能性がある。

次に近県の分布状況をみると資料を実見していないため報文より判断するしかないが、千葉・茨城には分布が認められる。具体的に挙げると、千葉県では、柏市中馬場遺跡[67]、八千代市村上遺跡[68]、東金市山田水呑遺跡[69]、銚子市松岸町遺跡[70]などに認められるが、中馬場遺跡を除いては、他の系統の甕形土器に混在しているのが特徴的である。一方茨城県では、大洗町長峯遺跡[71]、同ひいがま遺跡[72]、日立市遠下遺跡[73]、西茨城郡岩瀬・間中遺跡[74]、笠間市石井台遺跡[75]などにみられるが、いずれの遺跡でも主体的に存在していること、また小形のものや鉢形のものなどもあり種類が多いことも特徴的である。

しかし、寡聞にして埼玉、群馬地方にはこの種の甕形土器の出土例を知らず[76]、また、東北地方南部においても前記した下野型の諸特徴を具備するものは認められない。

以上、ややおおまかではあるが、「下野型」の分布範囲として現在知り得るところでは、本県および千葉・茨城の3県に限定されるようであり、さらに本県の場合、県央から東部に限定できそうである。ところで、「下野型」と呼称される甕形土器をみると、茨城地方で豊富に認められるが、器形から見る限り本県の該土器とは若干様相を異にしているようであり、厳密な「下野型」土器の概念規定に立脚して、その分布範囲を追求する必要性を痛感する。

今後、相模型、武蔵型、下野型等、甕形土器ばかりか坏形土器などを含めて多様な地域性を示す該期の土器群について詳細な観察に基づく分布範囲を追求することにより、律令社会展開の中における土器生産のあり方を正当に位置づけることが、今日的課題と考えられる。

最後に本論をまとめるに当り、多くの方々の御教授を得た。文末に御芳名を記し、厚く謝意を表したい。

国士館大学教授大川清、宇都宮大学助教授久保哲三、東京歯科大学助教授小出義治、多賀城跡調査研究所桑原滋郎、同白鳥良一、東北歴史資料館工藤雅樹、同藤沼邦彦、福島県文化課高倉敏明、福島県遺跡調査課目黒吉明、同大越道正、同玉川一郎、ひいがま調査団井上義安、村田健二、県立埼玉資料館金子真士、静和小学校教諭石橋知明。

また、土器編年作業に関しては、私達の同学の志である県文化課大金宣亮、八巻一夫、田熊清彦、作新学院教諭山ノ井清人の御指導に負う面が多い。(敬称略)

(橋本澄朗・梁木　誠)

註

(1) 杉原荘介『原始学序論』昭和18年

(2) 荻原弘道「銚子市松岸町原史時代遺蹟に就いて」『上代文化第22輯』昭和27年

(3) 玉口時雄「落合遺跡出土の土師器について－後期土師器に対する一考察－」『落合』早稲田大学考古学研究室報告　昭和30年

(4) 杉原荘介、中山淳子「土師器」『日本考古学講座５』昭和30年

(5) 田中　琢「須恵器製作技術の再検討」『考古学研究42号』昭和39年

(6) 岩崎卓也「真間式土器小考」『大塚考古第８号」昭和42年

(7) 服部敬史、岡田淳子「土師器の編年に関する試論」『八王子市中田遺跡・資料篇Ⅲ』八王子文化協会、昭和43年

(8) 杉原荘介、小林三郎「古墳文化－土師時代－」『市川市史』昭和46年、杉原荘介、大塚初重「土師式土器集成・本論４』東京堂出版、昭和49年

(9) 西野　元「国分式土器について」『三浦古文化第14号』昭和48年

(10) 小出義治『鶴川遺跡群』東京都町田市鶴川遺跡群調査団、昭和47年など

(11) 高橋一夫「国分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古第13・14号』昭和50年、星野達男「いわゆる国分式土器について」『原始古代社会研究』校倉書房、昭和52年

井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』群馬県史編さん委員会、昭和53年、など

(12) 河野喜映「厚木市鳶尾遺跡出土の土器編年試論」『神奈川考古第１号』昭和51年

(13) 松村恵司、金子真士他『山田水呑遺跡』日本道路公団・山田遺跡調査会　昭和52年

(14) 桑原滋郎「多賀城廃寺（土器）」『多賀城調査報告Ⅰ』昭和45年

岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代土器生産の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所　昭和49年

阿部義平「東国の古代土師器と須恵器」『帝塚山考古学第１号』帝塚山大学考古学研究室　昭和43年、など

(15) 大金宣亮・橋本澄朗他『井頭』栃木県教育委員会　昭和49年

(16) 註(12)前掲書

(17) 註(11)前掲書

(18) 註(13)前掲書

(19) 註(14)前掲書

(20) 註(15)前掲書

(21) 田中琢氏の「須恵器製作技術の再検討」(前掲書）に端を発する一連の論争。例えば、阿

部義平「ロクロ技術の復元」『考古学研究第18巻２号』昭和46年。伊藤博幸「『ヘラ切り』と『ヘラ起し』と『糸切り』と」『古代学研究第66号』昭和48年。田辺昭三『須恵器』平凡社　昭和51年、など。

(22) 山田水呑遺跡（前掲書）で言う土師器質須恵あるいは東北地方で言う須恵系土器〔桑原滋郎「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東出版　昭和51年〕と関係あるか。

(23) 山田水呑遺跡第Ⅱ分冊「２・共伴関係の摘出作業と編年」より。

(24) 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史14』昭和32年

(25) 註(14)前掲書

(26) 桑原滋郎「東北地方北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について」『考古学雑誌61巻４号』昭和51年

(27) 『日の出山窯跡群－埋蔵文化財緊急調査概報－』宮城県教育委員会　昭和45年

(28) 加藤晋平・服部敬史『下寺田・要石遺跡』昭和50年

(29) 下寺田遺跡のものは、胴下半部に横位ヘラ削りが施され、やや差異がみられる。

(30) 斉藤忠・大金宣亮他『下野薬師寺跡発掘調査報告』栃木県教育委員会　昭和48年

(31) 榊原松司・石川和明「和同開珎を出土した住居跡」『考古学雑誌59巻１号』昭和48年

(32) 大川清「犬伏窯跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県教育委員会　昭和47年

(33) 大川清『下野古代窯業遺跡』栃木県教育委員会　昭和50年

(34) 倉田芳郎・坂詰秀一「古代中世窯業の地域的特質・関東・東北」『日本の考古学Ⅵ』河出書房新社　昭和42年

(35) 註(15)前掲書

(36) 川原由典『星の宮ケカチ遺跡』益子町教育委員会　昭和52年

(37) 奈良国立文化財研究所『平城京発掘調査報告Ⅵ』（奈良国立文化財研究所学報23冊　昭和50年）中において、田辺征夫氏は、潜り孔を有する石帯（石銙帯b）を810年に復活したものである可能性が強いことを指摘されている。

(38) 坂詰秀一（編）『武蔵新久窯跡』雄山閣出版　昭和46年

(39) 小出義治「集落址出土の土器について」『秦野下大槻』秦野市教育委員会　昭和49年

(40) 註(4)前掲書

(41) 例えば、中田編年（前掲書）の真間式土器Ⅱ類。

(42) 註(28)前掲書

(43) 昭和53年度、栃木県教育委員会より発刊の予定。

(44) 東北地方南部の編年で言う栗囲～国分寺下層式に比定されるものであり、例えば福島県

では、高倉敏明編年の第Ⅳ・Ⅴ群土器の坏形土器〔高倉敏明「古墳時代の土師器を中心として」『福島県における土師器編年－第18回福島県考古学大会シンポジウム資料』昭和51年〕。宮城県では、糖塚遺跡の土師器坏A・B類〔志間泰治・小井川和夫・加藤道男「糖塚遺跡」『（宮城県文化財調査報告書第53集）宮城県文化財発掘調査略報』宮城県教育委員会　昭和53年〕。

(45) この他には、注(22)で掲げた土師質須恵、須恵系土器などが考えられるが、本遺跡では明確でない。

(46) 本地方においても所謂鬼高期の土師器坏形土器には、散見できる。

小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土器(1)、(2)」『考古学研究第18巻２・３号』昭和46年、など。

(47) 註(15)前掲書

(48) 註(36)前掲書

(49) 矢島俊雄他『堀米遺跡発掘調査報告書』佐野市教育委員会　昭和51年

(50) 『佐野市工業住宅団地内遺跡発掘調査報告書』栃木県教育委員会　昭和45年

(51) 註(43)参照

(52) 器形の特徴としては体部が直線的であること、胎土の特徴としては長石粒を含むことなどが挙げられる。

(53) 調査されたものに倉見沢、滝ノ入両窯跡がある。

『益子の文化財』下野新聞社　昭和45年に収録。

(54) 註(32)(33)前掲書

(55) 例えば、本遺跡須恵器坏形土器Ⅰ群のものは、山田水呑遺跡の須恵器坏形土器第Ⅰ群や中馬場遺跡〔下津谷達男・高橋一夫『中馬場・妻子原遺跡』昭和47年〕の須恵器坏形土器に、胎土・技法面で共通性があるらしく、千葉県地方との関連が考えられる。

(56) 註(12)前掲書

(57) 註(13)前掲書

(58) 註(12)前掲書

(59) 山ノ井清人「後岡遺跡」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書－その２－』栃木県教育委員会　昭和50年

(60) 岩上照朗・石橋知明『瑞穂野団地遺跡発掘調査報告』宇都宮市教育委員会　昭和53年

(61) 常川秀夫・山ノ井清人『猿山A遺跡』栃木県教育委員会　昭和53年

(62) 前沢輝政『西赤堀遺跡』上三川町教育委員会　昭和51年

(63) 註(15)前掲書

(64) 昭和49～51年度、県教育委員会が調査した真岡市中所在の奈良・平安時代の官衙遺跡であるが、２次調査の際、住居跡が検出され、この種の甕が出土している。

(65) 註(36)前掲書

(66) 県南部では、佐野市工業団地遺跡（註(50)前掲書）、同市掘米遺跡（註(49)前掲書）、また県北では、湯津上村小松原遺跡（註(43)参照）など。

(67) 下津谷達男・高橋一夫『中馬場・妻子原遺跡』日本国有鉄道常磐線複々線工事関係遺跡調査団　昭和47年

(68) 天野努・中村恵次・栗本佳弘『八千代市村上遺跡群』房総資料刊行会　昭和49年

(69) 註(13)前掲書

(70) 註(2)前掲書

(71) 井上義安他『大洗町長峰遺跡』大洗町教育委員会　昭和48年

(72) 発掘担当者の井上義安氏および調査員の村田健二氏の御厚意により実見の機会を得た。謝意を表したい。

(73) 佐藤政則『日立市遠下遺跡調査報告』日立市教育委員会　昭和50年

(74) 寺門義範『岩瀬・間中』霞ケ浦文化教会　昭和51年

(75) 大川清『石井台遺跡』国士館大学文学部考古学研究室　昭和48年

(76) 両県とも薬師寺南遺跡Ｄ・Ｅ類の甕形土器が主体であるらしい。

高橋一夫・昭和50年　註(11)前掲書

井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究８』群馬県史編さん委員会　昭和53年、など。

３．墨書土器について

これまで、墨書土器については、大川清氏や岡田正彦氏等によっておおよその定義づけが試みられている。先学によれば、「墨書」という意味・内容の把え方が稍さか別れる様である。本項目では、その意味・内容を狭く限定して〝「文字・記号」が墨書き（若しくは朱書き）されている土器〟という範囲で用いることとし、并せてその限りにおいて資料の提示をもしたいと考える。

註(1) 大川清「墨書土器」(『新版考古学講座』７　昭和45年12月25日出版　雄山閣刊) 303頁参照。

岡田正彦「信濃の墨書・刻書土器」(『中部高地の考古学』昭和53年４月25日出版　長野県考古学会発行)

岡田正彦「墨書・刻書土器小考――長野県を中心として――」(『信濃』27－５　1973年出版

信濃史学会発行）参照。

本遺跡出土の墨書土器は、総数23点である。須恵器に３例、土師器に20例でいづれも坏形土器の体部及び底部外面におおよそ墨書される。これらの墨書土器のうち確実に判読できた文字は、「運」、「市木」、「正□」、「七□」、「吉」、「福饒」である。墨痕がうすく不鮮明ではあるが、71号住居址出土の須恵器体部内面に「□山」、体部外面には「□山」が認められる。109号住居址出土の土師器体部外面に「宅」字、また150号住居址から出土した須恵器外面に墨書された「寺」字は「寺」、土師器体部外面の「罡」字は「岡」と読み得るとするならば、10種類の文字が判読されたこととなる。

これらの墨書土器のまとめを試みるにあたって、栃木県内出土の墨書土器の諸例を既発表の報告例を参考として併せて概観しておくこととする。まず本遺跡の墨書土器を整理すると下記の通りである。

① 薬師寺南遺跡……本遺跡土器編年上の区分

「運」(2)　(49H、E号より各１例)…ⅢまたはⅣ期
「罡」(3)　(150Hより１例)……Ⅳ期
「寺」(4)　(150Hより１例)……Ⅳ期
「正□」(5)　(47Hより１例)……Ⅳ期
「市木」(6)　(35Hより１例)……Ⅳ期
「□山」(7)　(71Hより１例)……ⅣまたはⅤ期
「宅」(8)　(109Hより１例)……ⅣまたはⅤ期
「福饒」(9)　(117H、125H、126H、129H、130 Hより各１例と126Hより３例)……Ⅴ期
「七□」(10)　(126Hより１例)……Ⅴ期
「吉」(11)　(140Hより３例)……Ⅴ期

他、読解不能文字３例。(12)

次の別表は、県内出土墨書土器をまとめたものである。

遺跡名	文字	墨書位置	器種	成形・調整	備考
②下野国分尼寺	「国」	底部外面	高台付坏	ロクロ使用	「□」の中は、王 (土師器)
③白山遺跡	「井」	体部外面	坏	回転糸切り、内黒処理か？	住居跡 (土師器)
④下野薬師寺	「中」	体部外面	坏	回転糸切り	合口甕棺中より、行書体風 (土師器)
⑤後藤遺跡	「林」(２例)	体部外面	坏	ヘラ切り一体部下半ヘラ削り	住居跡 (土幅器)
	「干」	？	坏	回転糸切り、内黒処理	(土師器)
⑥堀米遺跡	「尊」か「壽」か？	体部外面	坏	ロクロ使用、内黒処理	住居跡埋土中 (土師器)
⑦後岡遺跡	「文」	底部外面	坏	回転糸切り、内黒処理	９グリットセクションベルト内 (土師器)
⑧那須官衛跡	「徳」	底部外面	坏	ヘラ切り一底部周縁ヘラ削りか？	W351住居跡 (須恵器)
⑨西赤堀遺跡	「東」か「京」か？	底部外面	高台付坏	ロクロ使用	住居跡
⑩山向遺跡	「大」	体部外面	坏	回転糸切り、内黒処理	住居跡 (土師器)
⑪猿山A遺跡	「大」	内面	蓋	ロクロ使用、天井部ヘラ削り	住居跡埋土 (須恵器)
⑫多功南原遺跡	「三川」	底部外面	坏		住居跡
	「立麻呂」	底部外面	坏		住居跡
⑬星の宮ケカチ遺跡	「高」(２例)	体部外面	坏	ヘラ切り一体部下半、底部周辺ヘラ削り、内黒処理	１号住居跡 (土師器)
	「高」「東方」	体部外面	坏	底部全面、体部下半ヘラ削り	２号住居跡、佐波理の匙出土 (土師器)
	「南」	体部外面	坏	ヘラ切り一体部下端ヘラ削り	４号住居跡、内面硯出土
	「大田」	体部外面	高台付皿	ロクロ使用、内黒処理	７号住居跡 (土師器)
	「南」	体部外面	坏	ロクロ使用一底部ヘラ削り、内黒処理	５号住居跡 (土師器)
	「南」	底部外面	高台付皿	ロクロ使用	５号住居跡 (須恵器)
	「冂家」	体部外面	坏	ヘラ切り一内黒処理	６号住居跡 (土師器)
	「南」	体部外面	坏	ヘラ切り	朱書 (須恵器)
	「南」	体部外面	坏	ヘラ切り	８号住居跡 (須恵器)
	「花冂」	体部外面	高台付皿	ロクロ使用、内黒処理	10号住居跡 (土師器)
	「南」(２例)	体部外面	坏	ヘラ切り	10号住居跡 (須恵器)
	「南」「寺」	体部外面	坏	ヘラ切り	11号住居跡、内面硯出土 (須恵器)
	「恵字」	体部外面	坏	ロクロ使用、内黒処理	15号住居跡 (土師器)
⑭小川町浄法寺	「伴」				
⑮端穂野団地遺跡	「統」か？	体部外面	坏	ロクロ使用一底部全面ヘラ削り、内黒処理	南－８号住居跡 (土師器)

以上、本遺跡出土例を含めて16遺跡の概観から注意されることをまとめて小項を結びたい。

栃木県における墨書土器の初現期は、本薬師寺南遺跡を軸として把えるならば「運」字例であり、他遺跡例を加えてもっとも出土量が増加するとみられる時期は「吉」「福饒」字が墨書される坏形土器の盛行期といえるようである。

丸印や三角形状の墨痕の認められる8世紀後半（本遺跡編年の第Ⅲ期頃）例は、「井頭遺跡」「山向遺跡」「端穂野団地遺跡」などにみられる訳であるが、これらは未だ文字が土器に記されるという時期の初現段階にあたる頃の所産になるものと思われる。

墨書土器の出土量がもっとも増加するとみられる「福饒」「吉」の時期の特徴は、墨書例の増加現象がみられることに対して、硯等の筆記に対応する用具の伴出例が集落址の場合今のところ見当らないということであろう。但し、「星の宮ケカチ遺跡」は、硯と墨書土器を伴出する例であり、検出遺構や出土遺物の上からも集落址と考えるよりも何らかの公的施設をもった遺跡であろうと推測されるものである。また、「芳賀郡衙跡」を「塔法田遺跡」に比定することができる地域芳賀郡をとりあげる時、今後注意深く検討されなければならない遺跡であろうと思う。

現在本県に於ても歴史時代の発掘調査が増加し、それにつれて幾例もの墨書土器の出土例が伝えられている。今後、報告を俟って前表を追補・訂正して再考を期したいと考える。

（田熊清彦）

参考文献

②『下野国分尼寺跡』（国分寺町教育委員会、昭和44年3月）

③「白山遺跡」『鳥山町、昭和53年3月）

④『下野薬師寺跡発掘調査報告書』（栃木県教育委員会、昭和48年3月）

⑤「後藤遺跡」『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』（栃木県教育委員会、昭和47年3月）

『井　頭』（栃木県教育委員会、昭和48年3月）

⑥『堀米遺跡発掘調査報告書』（佐野市教育員会、昭和51年3月）

⑦「後岡古墳」『東北新幹線埋蔵文化財調査報告書－その2－』昭和50年3月）

⑧『那須宮衛跡第四次緊急発掘調査報告書』（栃木県小川町教育委員会、昭和51年3月）

⑨『西赤堀遺跡』（栃木県上三川町教育委員会、昭和51年3月）

⑩『山向遺跡』（栃木県上河内町教育委員会、昭和52年3月）

⑪『猿山A遺跡』（栃木県教育委員会、昭和53年4月）

⑫『下野の古代史』（前沢輝政著179頁）

⑬『星の宮ケカチ遺跡』（栃木県益子町教育委員会、昭和53年3月）

⑭『考古学』第17号（佐藤次男、昭和31年1月）

⑮『宇都宮市端穂野団地遺跡』（宇都宮市教育委員会、昭和53年3月）

なお、橋本澄朗氏によって『石那田館跡』「土師質土器」(45～54頁参照、栃木県教育委員会、昭和53年３月）の項に墨書のある土器が報告されているが、今回は、奈良・平安時代にみられる墨書土器例と比較して、その意味・性格が異なっている様に思われるのでこれを含めないことにした。

註(2)　「運」字は階書体で書かれ、筆の運びはゆるやかであるが奈良時代末期頃の写経生の筆録した文字と類似し「二王」の書風の悌を伝えている。奈良時代に盛行した唐風の書体が幾分か感じとれる。『星の宮ケカチ遺跡』出土例の「恵」字が、空海『風信帖』中にみられる「恵」字と趣きを同じくする達筆であることを考えあわせると、地方にあっても習字の手本なりの根底に王羲之の書風の強い影響が感じられる。２例の「運」字は同筆人の手になるものであろう。

(3)　「罡」字は、「罡」＝岡である。運筆の為に上と書きとどめられたと思われる。

(4)　「寺」字は、寺の艸書体と考えたが、墨痕が不鮮明であるので確実とは言い難い。

(5)　「正」と行書体で書かれている。筆記される杯底面には、この字の下に少くとも一字遺存している。また、墨痕横線が数条みられることも判読を難かしくしている。

(6)　「市木」と明確に読み得る。意味については明らかにすることができなかった。

(7)　「山」字が杯体部の内外面に一字づつみられる。外面横位「山」字の上にさらに墨痕が残り、複数の文字が記されていたと思われる。

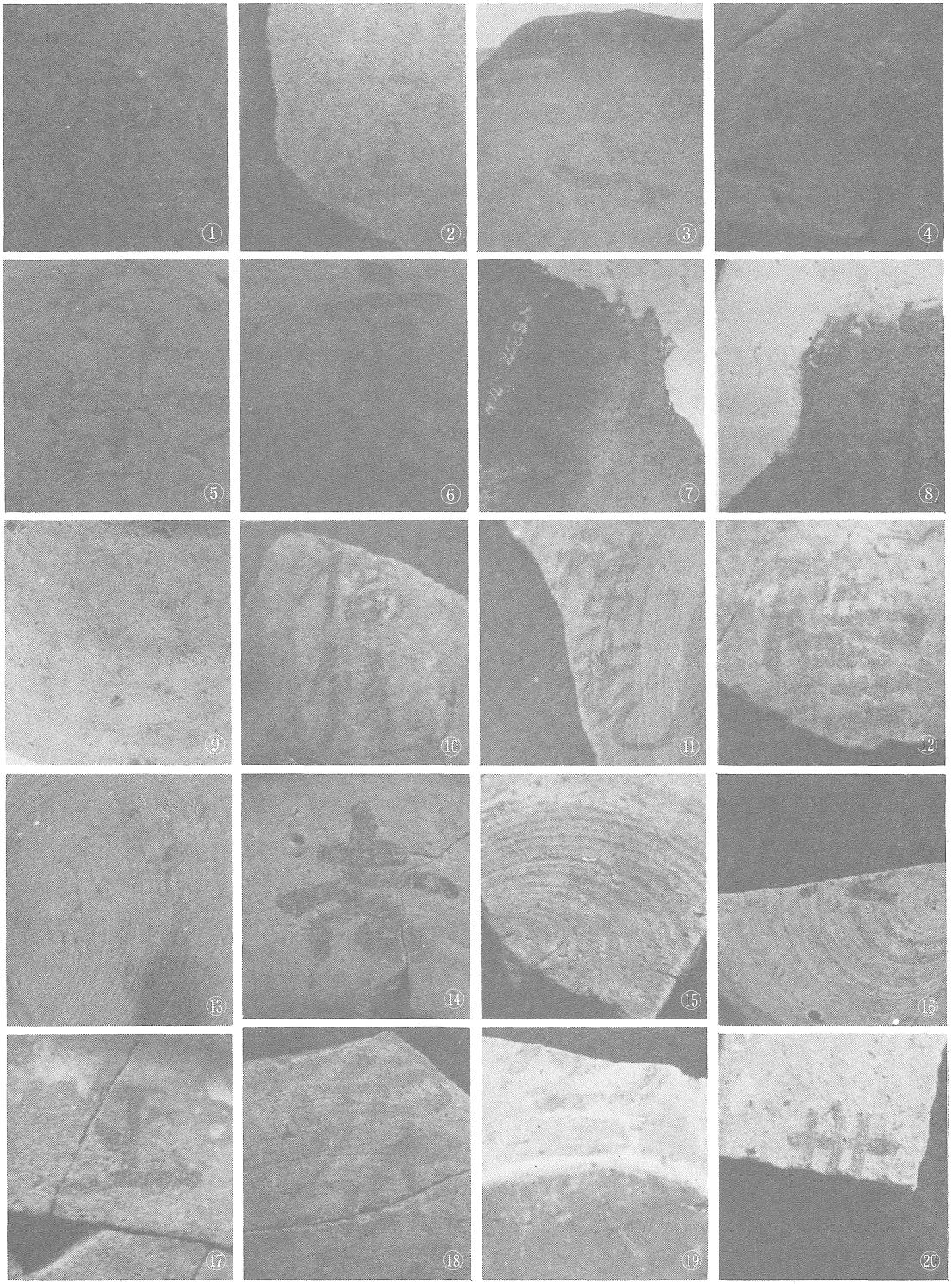
(8)　一応「宅」と読んでみたが、墨痕が不鮮明である。

(9)　「福饒」、本字は８例ある。125H 出土例は明らかに別人によって書かれたものである。他は同筆人によるものと思われる。〝福饒〟の熟語例を文献中に見い出すことはできなかった。但し、「伝　弘仁五年二荒山碑銘『沙門勝道歴山瑩玄珠碑并序』」中に「・・・当至山頂（まさに山頂に至りて、）、為供養、以崇神威、饒群生福（神供養を為し、以って神威を崇め、群生の福を饒ならんとすべし。）・・・」とみえることから、当代に通用された用語と思われる。

(10)　「七□」は、「七」字下に一字みとめられる。「日」または「月」と読める可能性もあるが、煤が付着して明確に判読できない。

(11)　「吉」字３例とも同筆である。

(12)　解読不明文字中「巫」字と書かれるものは「巫」字かとも思われるが、ここでは不明文字の中に含めておくことにした。



第　図　墨書土器文字部分拡大　（1・2運、3岡、4寺、5正匚、6市木、7・8山、9宅か、10・11・12福饒、13七匚 14・15・16占、17爪か、18・19・20不明）

第Ⅳ章　結語

―― 薬師寺南遺跡について ――

昭和49年１月の第一次調査より三次にわたる調査の結果、薬師寺南遺跡は、古墳時代前期、さらには奈良・平安時代にかけての遺跡であり、我々の予期以上の大遺跡の相貌の一端を窺い知ることができた。勿論、調査が道路敷内と言う限定された範囲であり、その歴史的性格まで論及することには、限界があることは承知しているが、調査・報文作成過程で判明した事実を踏えて、若干の特徴的事実を指摘し、結語としたい。

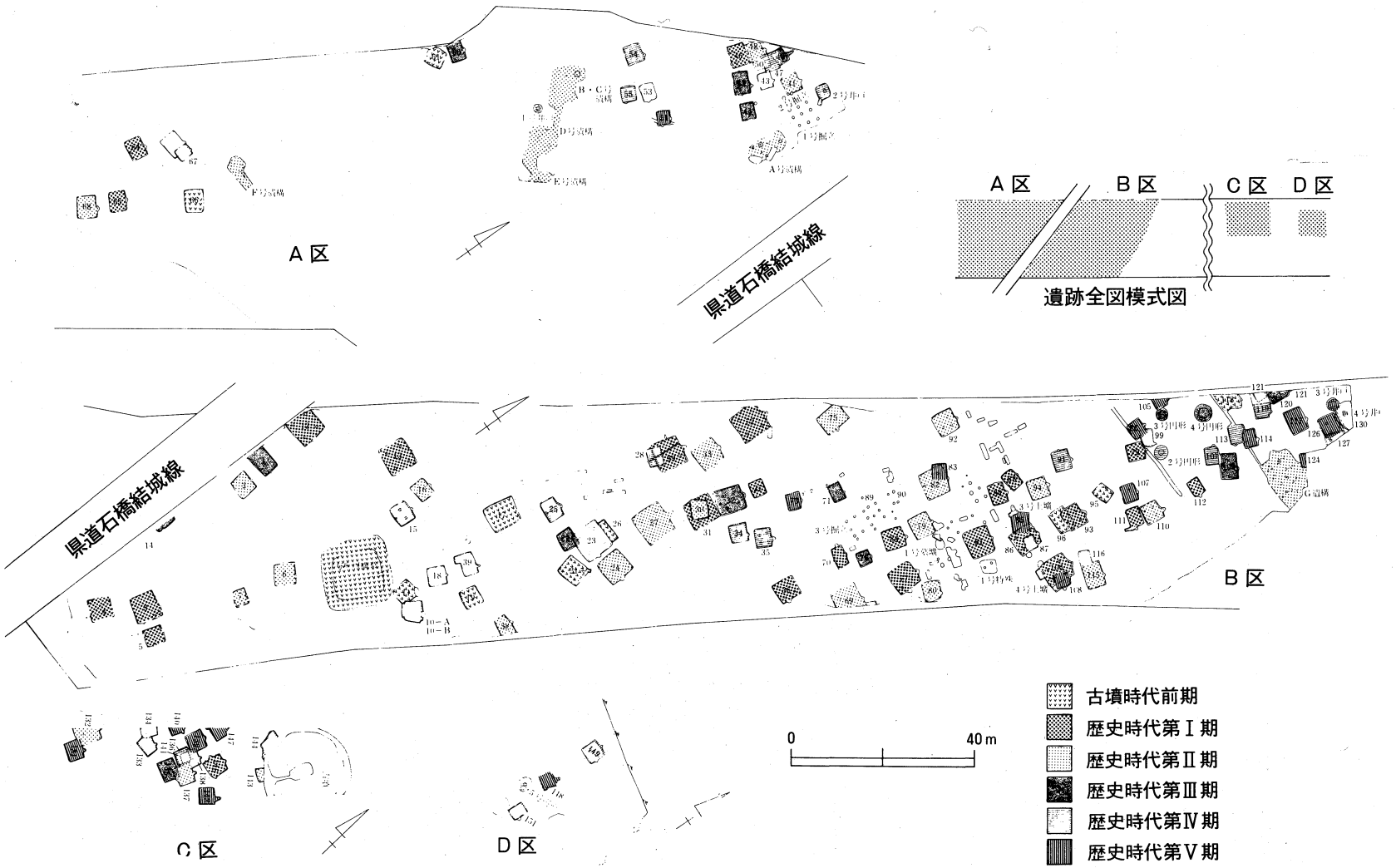
本遺跡が歴史の中心舞台に登場するのは、弥生土器片が調査区に散見するものの、古墳時代前期（五領期）に至ってからである。古墳時代前期の遺構は、住居跡10軒、方形周溝墓一基である。土器の様相より判断して、僅かに先行するものの、主体的には、五領期後半の所産と考えて大過あるまい。

本遺跡に本格的な足跡を印した人々は、いかなる性格を有する集団であったろうか。集落変遷図を見ても明瞭なように、Ａ区、Ｂ区に住居跡が散在して認められることより、調査区域外への集落の広がりが当然推測できる。かかる集団が忽然として本遺跡に占地した歴史的背景を考えるとき、検出され方形周溝墓を含めて、この地の古墳文化の展開と関連させて考えることから始めなければならないであろう。

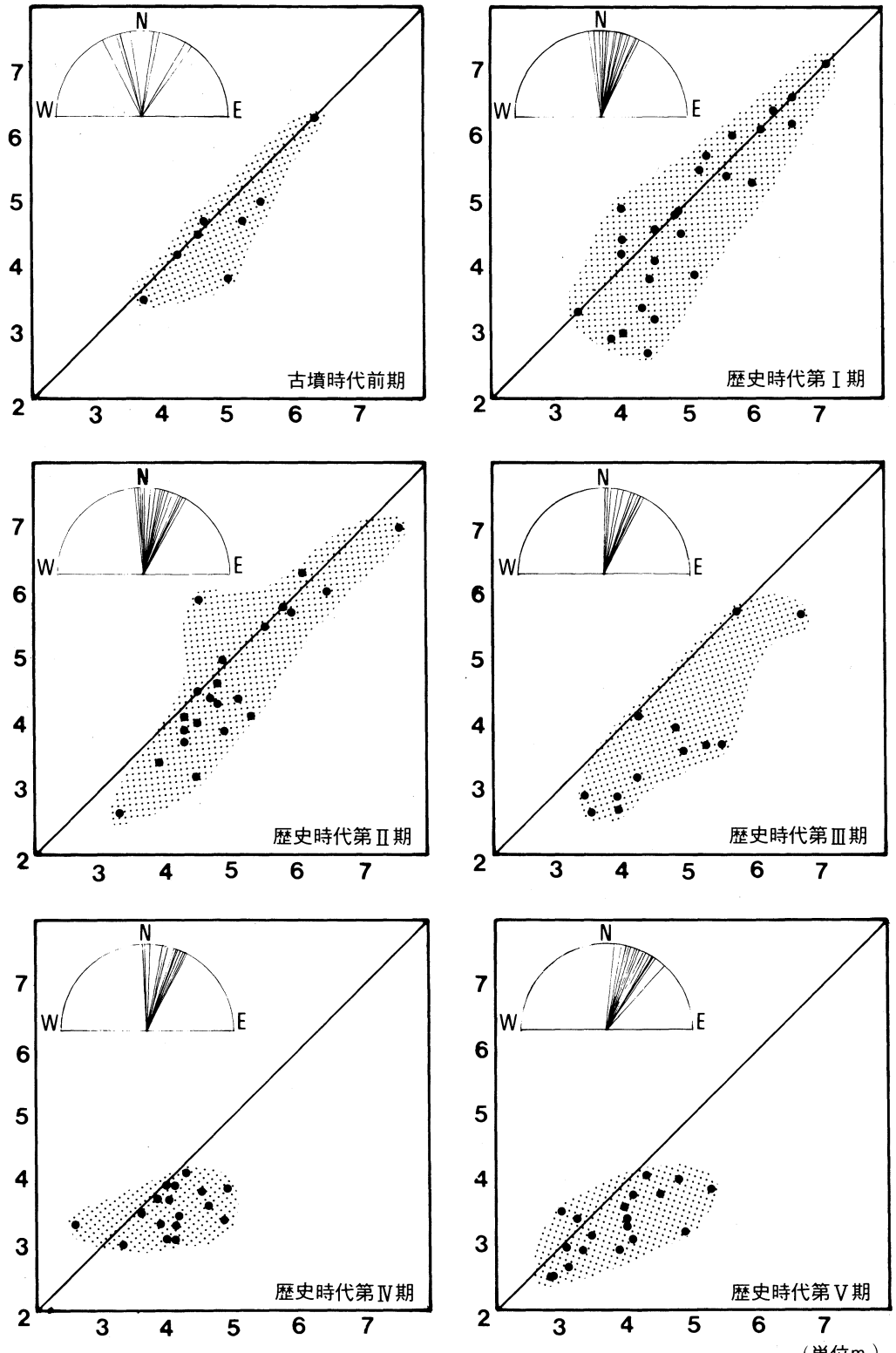
古墳時代前期から歴史時代第Ⅰ期（７世紀末より８世紀前半）までの約250年間、調査区域より全く遺構が検出されない空白の時間がある。限定された調査区域とは言え、この空白の持つ歴史的意味を重要視せざるを得ない。換言すれば、本遺跡に再び足跡を残した集団の背景を考えるとき、下野薬師寺の存在を無視しては説明できないであろう。

歴史時代の所産と考えられる約120軒の住居跡を前章の編年試論の分折結果に基き時期別に位置づけたのが、次図の集落変遷図である。一部の住居跡は、遺物がセットとしての出土が認められず、分折基軸である土師器坏形土器より、かなり恣意的に位置づけた住居跡があることは否めないが、概略の集落変遷状況は理解できよう。歴史時代第Ⅰ期より第Ⅴ期に位置づけた住居跡数を示すと、歴史時代第１期（７世紀末より８世紀前葉）、25軒、同第Ⅱ期（８世紀中葉）、25軒、第Ⅲ期（８世紀末葉より９世紀初頭）、15軒、第Ⅳ期（９世紀前半）、20軒、第Ⅴ期（９世紀後半）、20軒、時期不明なものが約15軒である。さらに特殊遺構が第Ⅱ期、円形遺構が第Ⅲ期から第Ⅳ期と限定された時期の所産であることは、遺構の性格を考える時、注目したい事実である。

本来、更に細かい住居跡のグルーピング化まで論及すべきであろうが、限定された調査区及び我々の調査方法論の欠陥より実施できなかった点を素直に認識し、今後の調査に期したい。



薬師寺南遺跡集落変遷図



（単位m）

住居跡規模および主軸方向の変遷

前述した本遺跡の歴史時代集落の変遷、さらには住居跡の規模等を概観して、二、三の特徴的事実を指摘しておきたい。

(1) 本遺跡が、古墳時代前期より長い空白の時間を経過して、集落が8世紀前後に再形成され、大きな変動をみせないままに、10世紀前後に終焉するようである。

(2) 集落が再形成された第Ⅰ期、第Ⅱ期の住居跡は、比較的大形のものと、4m前後の小形なものとに分離でき、第Ⅲ期を経て、3～4m前後の小形なものに定着する傾向が看取される。住居跡カマドは、北カマドが一般的であるが、第Ⅰ期、Ⅱ期には東カマドも比較的多く認められる。

(3) 第Ⅰ期、第Ⅱ期の土器は、県内該期の土器に比し、卓越しており、(例えば土師器盤形土器、須恵器等) 又、大形住居跡が多い事実と共に特徴的な様相を示す。これは遺跡の個性に起因するものであろう。かかる集落の様相こそ下野薬師寺の門前に形成された本遺跡の大きな特徴であり、9世紀を境に他の律令制下の集落と同様に、住居跡が小形化し、土器相にも精彩を欠くようになる。このような変化の中に、官寺としての下野薬師寺の衰微を読み取ろうとすることは、あまりにも唐突な想定であろうか。

次に、本調査の結果、判明した若干の問題点を記し、我々の今後の課題を明示することとする。

(1) 古墳時代前期の社会は、弥生時代後期社会との延長上で理解することは困難であり質的にも大きな変貌の時期と考えられる。本県の古墳文化の地域的展開と関連させて、初めて究明できるものであり、かかる視点より五領式土器の様相をも再考していきたい。

(2) 歴史時代の土器編年に関しては、第Ⅰ期～第Ⅴ期までの約200年間の土器変遷を考えたわけであるが、調査方法論的欠陥、我々の問題意識の欠除より完全なものとは考えていない。しかし、一遺跡の徹底的土器分析作業の集積こそが，複雑な展開を示す歴史時代の土器様相を理解する唯一の方法と考えたからに他ならない。今後、県内該期の土器と比較し、さらに従来までの南関東編年に偏しがちな方法論を排し、東北地方南部との関連を重視しつつより完璧なものへと志向していきたいと考えている。

最後に、調査中、あるいは報文作成過程で多くの方々から有益な御教授を受け、また報文中多くの先学の文献を参照させていただいた。しかし、我々の非力故に正確に理解できなかった点も多々あろうと思う。その非礼を深謝するとともに、今後とも御叱正を願ってやみません。

(橋本澄朗)

栃木県埋蔵文化財報告　第23集
薬師寺南遺跡発掘調査報告（本文編）
発行日　昭和54年３月
発行者　栃木県教育委員会
印　刷　㈱松井ピ・テ・オ印刷